高部遺跡

―― 静香苑進入道路建設に併なう
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ――

1983

茅野市教育委員会

高部遺跡

―― 静香苑進入道路建設に併なう
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ――

1983

茅野市教育委員会

第24号住居址　埋甕埋設状態

序　　文

今回の高部遺跡の発掘は、「静香苑」建設にともなう進入路開設により、茅野、富士見、原行政事務組合の委託を受けて茅野市教育委員会が実施したものである。

従来、茅野市においては八ヶ岳山麓にくらべて、西山と呼ばれる守屋山麓は、埋蔵文化財発掘調査の手の届かなかった区域である。多くの古墳が分布し、前宮をはじめとして諏訪神社信仰関係の史跡も多く、諏訪の歴史上重要な位置を占めていながら、いくつかの古墳の記録を除いては考古学的な究明がなされていなかった。高部遺跡一帯は特に古代史に関わる遺跡地として注目されていたが、今回はからずも緊急発掘により解明の機会が与えられた。発掘の成果については各調査員が詳細に記述されているところである。縄文時代早期からの遺物が出土し、中期の住居址、古墳時代から平安時代の住居址の発見により、複合遺跡としての重要性が改めて確認されて数々の貴重な資料を得ることができた。道路敷という限定された発掘のため、一帯には重要な遺構遺物の埋蔵が予測されて今後の発掘調査に期待されるところが大きい。

発掘は４月21日に開始され、種々の事情により当初の予定を大幅に延長して７月末にようやく終了した。幸い、行政事務組合や事業担当の茅野市清掃課のご理解により、遺漏のない調査を行うことができた。また、工事を担当された五味建設の五味国雄氏には終始発掘の進捗にご協力をいただいた。ともに心からお禮申し上げる。また、発掘から遺物整理、そして報告書の刊行までご尽力いただいた調査員をはじめ関係された方々に深く感謝申し上げる次第である。

昭和58年３月

茅野市教育委員会

教育長　小　島　与四男

例　　言

1　本書は茅野富士見原行政事務組合静香苑への進入道路建設に伴う長野県茅野市高部遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は高部遺跡調査委員会が茅野富士見原行政事務組合より委託を受けて行ったものであり、調査委員会組織等の名簿は発掘調査関係者名簿として別掲してある。

3　発掘調査は昭和56年４月21日から７月28日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は昭和56年８月から昭和57年４月、昭和58年４月から６月まで茅野市尖石考古館において行った。

4　発掘現場における記録は主として鵜飼幸雄・守矢昌文・関　嘉子・矢嶋恵美子が行った。遺構写真は鵜飼が担当し、一部を樋口公男が撮影した。また、巻首図版使用の写真は小松大吉氏の撮影によるものである。遺物整理は宮坂篤夫・柳平嘉彦・関・矢嶋が主として行い、遺構実測図の整理及び遺物の実測と図版の作成は鵜飼・守矢が行った。

5　本書の作成は鵜飼と守矢が担当し、山田真子がこれを補助し、全体を宮坂が統括した。原稿の執筆は宮坂・鵜飼・守矢・樋口の４名で分担し編集は鵜飼が行った。本文中の用語・表現方法は各分担者によって多少の相違がある点を了解されたい。文責については各文末に明記した。

6　発掘から報告書作成にいたる過程で、井上喜久男・坂本美夫・笹沢　浩・柴垣勇夫・小林正春・宮坂光昭の諸氏に御教示を賜った。ここに記して深く感謝の意を表したい。

7　石器の岩質については岩崎祐章氏（茅野市永明中学校長）に鑑定していただいた。

8　出土品・諸記録は茅野市尖石考古館で保管している。

9　題僉は永田稲園先生の揮毫である。

目　　次

序　文
例　言
第Ⅰ章　調査経緯……1
　第1節　調査にいたるまでの経過……1
　第2節　発掘調査の経過……1
第Ⅱ章　遺跡概観……5
　第1節　遺跡の地理的環境……5
　第2節　遺跡の歴史的環境……5
　第3節　遺跡の考古学的環境……7
第Ⅲ章　遺跡の地層……11
第Ⅳ章　遺構と遺物……12
　第1節　大石周辺……12
　第2節　縄文時代の遺構と遺物……13
　　1　竪穴住居址……13
　　2　屋外埋甕……35
　第3節　古墳時代の住居址と遺物……36
　第4節　平安時代の住居址と遺物……40
　第5節　その他の遺構と遺物……98
　　1　柱穴址……98
　　2　溝　址……98
　　3　焼土址……101
　　4　土　壙……102
　第6節　縄文土器……111
　第7節　網代底……123
　第8節　縄文時代の土製品……123
　第9節　弥生土器……124
　第10節　石　器……124

第11節　陶磁器……145
第12節　古代の石製品……146
第13節　鉄製品……146
第14節　古　銭……147
第Ⅴ章　調査の成果と課題……167
第１節　石鏃について……167
第２節　縄文時代中期の高部遺跡の様相……170
第３節　縄文時代後期の土壙について……174
第４節　高部遺跡出土の平安時代後期の土器様相……178
第５節　高部遺跡の古代の様相……190
第Ⅵ章　結　語……195

挿図目次

第１図　遺跡位置図(1/50,000)…… 4
第２図　遺跡周辺の地形の発掘区(1/2,500)…… 6
第３図　発掘区内遺構分布図……9・10
第４図　Ｉ区Ａ－５・６・７・８グリッド南壁層序(1/60)…… 11
第５図　大石・Ａトレンチ・Ｂトレンチクション(1/60)…… 12
第６図　第１号住居址(1/60)…… 13
第７図　第１号住居址出土土器(1/6)…… 14
第８図　第13・14号住居址(1/60)…… 15
第９図　第13号住居址出土土器(1/6)…… 16
第10図　第17・18・19号住居址・第２号屋外埋甕(1/60)……17・18
第11図　第19・20号住居址(1/60)…… 20
第12図　第21号住居址出土土器(1/6)…… 21
第13図　第21・22号住居址(1/60)…… 22
第14図　第24・26号住居址(1/60)……25・26
第15図　第24号住居址埋甕セクション(1/40)…… 27
第16図　第24号住居址出土土器(1/6)…… 28
第17図　第32号住居址(1/60)…… 29
第18図　第32号住居址出土土器(1/6)…… 30
第19図　第33号住居址(1/60)…… 32
第20図　第33号住居址出土土器(1/6)…… 32
第21図　第36号住居址(1/60)…… 33
第22図　第36号住居址出土土器(1/6)…… 34
第23図　第１号屋外埋甕(1/20)…… 35
第24図　第１・２号屋外埋甕(1/6)…… 36
第25図　第２号住居址カマド(1/20)…… 37
第26図　第２号住居址(1/60)…… 37
第27図　第２号住居址出土土器(1/4)…… 38
第28図　第９・11号住居址(1/60)…… 39
第29図　出土土器(1/4)…… 40
第30図　第11号住居址出土砥石(1/6)…… 40

第31図　第３号住居址(1/60)…… 41
第32図　第３号住居址カマド(1/30)…… 42
第33図　第３号住居址出土土器(1/4)…… 43
第34図　第３号住居址出土刀子(1/2)…… 44
第35図　第４・16号住居址(1/60)…… 45・46
第36図　第４号住居址土土器(1/4)…… 48
第37図　出土石器(1/3)…… 49
第38図　石製模造品・鉄鏃(1/2)…… 49
第39図　第５号住居址(1/60)…… 50
第40図　第５号住居址出土土器(1/4)…… 52
第41図　第６号住居址・第１号溝址(1/60)…… 54
第42図　第６号住居址出土土器(1/4)・紡錘車(1/2)…… 55
第43図　出土磨り石(1/6)…… 55
第44図　第７号住居址(1/60)…… 56
第45図　第７号住居址出土土器(1/4)…… 57
第46図　第８号住居址(1/60)…… 58
第47図　第８号住居址カマド(1/30)…… 59
第48図　第８号住居址出土土器(1/4)…… 60
第49図　出土土器(1/4)…… 61
第50図　第10号新住居址(1/60)…… 63
第51図　第10号旧住居址(1/60)…… 64
第52図　第10号住居址カマド(1/30)…… 65
第53図　第10号住居址出土土器(1/4)…… 66
第54図　第12・14号住居址(1/60)…… 68
第55図　第12号住居址出土土器(1/4)…… 69
第56図　第14号住居址出土土器(1/4)…… 70
第57図　第16号住居址カマド(1/30)…… 71
第58図　出土土器(1/4)…… 72
第59図　出土鉄鏃(1/2)…… 73
第60図　第19号住居址石組(1/30)…… 74
第61図　第19号住居址出土鎌(1/2)…… 74
第62図　第23号住居址(1/60)…… 75
第63図　第23号住居址カマド(1/30)…… 77
第64図　第23号住居址出土土器(1/4)…… 78

第65図　第25・30号住居址(1/60)…… 80
第66図　第25号住居址出土土器(1/4)…… 81
第67図　第26号住居址出土土器(1/4)…… 83
第68図　第27・28号住居址(1/60)…… 85
第69図　出土土器(1/4)…… 86
第70図　第29号住居址(1/60)…… 87
第71図　第29号住居址出土土器(1/4)…… 88
第72図　出土鉄鏃(1/2)…… 89
第73図　第30号住居址出土土器(1/4)・木製品(1/2)…… 90
第74図　第31号住居址(1/60)…… 91
第75図　第31号住居址出土土器(1/4)…… 92
第76図　土　錘(1/2)…… 92
第77図　第34号住居址(1/60)…… 93
第78図　出土土器(1/4)…… 94
第79図　第35号住居址(1/60)…… 95
第80図　第35号住居址出土土器(1/4)…… 96
第81図　第35号住居址出土鉄滓・土錘(1/2)…… 97
第82図　第35号住居址出土砥石(1/3)…… 98
第83図　第1号柱穴址(1/60)…… 99
第84図　第2号溝址(1/60)…… 100
第85図　第3号溝址(1/60)…… 101
第86図　土壙(1)(1/60)…… 102
第87図　土壙(2)(1/60)…… 103
第88図　土壙(3)(1/60)…… 103
第89図　第5・28号土壙出土土器(1/4)…… 105
第90図　土壙(4)(1/60)…… 105
第91図　土壙(5)(1/60)…… 106
第92図　土壙(6)(1/60)…… 107
第93図　土壙(7)(1/60)…… 108
第94図　第69号土壙出土土器(1/6)…… 109
第95図　出土土器(1)(1/3、19・20は1/6)…… 110
第96図　出土土器(2)(1/3)…… 112
第97図　出土土器(3)(1/3)…… 114
第98図　出土土器(4)(1/3)…… 116

第99図　出土土器(5)(⅓)……119
第100図　出土土器(6)(⅓)……210
第101図　出土土器(7)(⅓)……122
第102図　網代痕(⅓)……123
第103図　土製品(½)……123
第104図　出土石器(1)(⅓)……125
第105図　出土石器(2)(⅓)……126
第106図　出土石器(3)(⅓)……128
第107図　出土石器(4)(⅓)……130
第108図　出土石器(5)(⅓)……131
第109図　出土石器(6)(⅓)……132
第110図　出土石器(7)(⅓)……133
第111図　出土石器(8)(⅓)……134
第112図　出土石器(9)(⅓)……135
第113図　出土石器(10)(⅓)……136
第114図　出土石器(11)(⅓)……137
第115図　出土石器(12)(⅓)……138
第116図　出土石器(13)(1は1/12、2・4は⅙、3・5・6は⅓)……139
第117図　出土石器(14)(1/1.5)……141
第118図　出土石器(15)(1/1.5)……142
第119図　出土石器(16)(1/1.5)……144
第120図　出土陶磁器(¼)……146
第121図　古代の石製品(½)……146
第122図　出土鉄製品(½)……147
第123図　出土古銭(1/1.5)……147
第124図　平面形状と基部の関係……167
第125図　平面形状と抉り込みの関係……168
第126図　平面形状と着柄の関係……168
第127図　平面形状別による貫入孔の差……169
第128図　II区の住居址分布……171
第129図　土壙の分布……175
第130図　器種分類図……180
第131図　後期第I期の器種構成……182
第132図　後期第II期の器種構成……183

第 133 図　後期第Ⅲ期の器種構成……183
第 134 図　後期第Ⅳ期の器種構成……184
第 135 図　後期第Ⅲ期皿類底部(⅓)……185
第 136 図　板状圧痕(⅓)……185
第 137 図　擬似高台皿類編年図……187

表　目　次

第 1 表　土壙一覧表……149
第 2 表　古墳・平安時代土器法量一覧表……157
第 3 表　出土石器一覧表……160

写真図版目次

図版第１　１　遺跡遠景(北東方から)　２　遺跡遠景(東方から)

図版第２　１　大石周辺の調査　２　大石周辺

図版第３　１　Ⅰ区全景　２　第１号住居址

図版第４　１　第２号住居址　２　第３号住居址

図版第５　１　第４・16号住居址　２　第５号住居址

図版第６　１　第６号住居址　２　第７号住居址

図版第７　１　第８号住居址　２　第９号住居址

図版第８　１　第10号新住居址　２　第10号旧住居址

図版第９　１　第11号住居址　２　第12号住居址

図版第10　１　第13・14号住居址　２　第15号住居址

図版第11　１　第17号住居址　２　第18号住居址

図版第12　１　第19号住居址　２　第20号住居址

図版第13　１　第21号住居址　２　第22号住居址

図版第14　１　第23号住居址　２　第24号住居址

図版第15　１　第25号住居址　２　第27・28号住居址

図版第16　１　第29号住居址　２　第30・25号住居址

図版第17　１　第31号住居址　２　第32号住居址

図版第18　１　第33号住居址　２　第34号住居址

図版第19　１　第35号住居址　２　第36号住居址

図版第20　１　第１号溝址　２　第２・３号溝址・土壙群

図版第21　１　第２号溝址　２　第３号溝址

図版第22　１　第１号柱穴址　２　Ⅰ区全景

図版第23　１　第３・１・２号土壙　２　第５号土壙　３　第６号土壙　４　第13・15・７・11・23・18号土壙　５　第21号土壙　６　第36・24・27号土壙　７　第25・26号土壙　８　第35・37・34Ａ・Ｂ号土壙

図版第24　１　第43・42・44・45・46号土壙　２　第41Ｃ・Ａ・Ｂ号土壙　３　第50号土壙　４　第51・52Ａ・Ｂ号土壙　５　第62・56号土壙　６　第61・63号土壙　７　第66・67・68・71号土壙　８　第72・69号土壙

図版第25　１　第１号住居址　埋甕炉　２　第22号住居址　石壇と石棒　３　第24号住居址　炉址　４　第32号住居址　埋甕炉　５　第36号住居址　埋甕　６　第１

号屋外埋甕　7　第２号屋外埋甕　8　第67Ａ号土壙　石製品出土状態
図版第26　1　第２号住居址　カマド　2　第３号住居址　カマド　3　第５号住居址　カマドと周辺の遺物　4　第８号住居址　カマド　5　第８号住居址　カマド　左脇ピット内の遺物　6　第23号住居址　カマド　7　第25号住居址　床面の石組　8　第28号土壙　遺物出土状態
図版第27　出土土器(1)
図版第28　出土土器(2)
図版第29　出土土器(3)
図版第30　出土石器(1)
図版第31　出土石器(2)
図版第32　出土石製品・金銅製品・鉄製品・木製品・土錘

第Ⅰ章　調査経緯

第１節　調査にいたるまでの経過

茅野富士見原行政事務組合では茅野市宮川647番地の1に火葬場「静香苑」を建設することとなり、これに伴い新たに進入路が建設されることとなった。静香苑は高部扇状地の扇頂部付近に位置しており、これへの進入路は扇状地末端部を通る主要地方道岡谷茅野線(016号線)から扇状地内を数回蛇行して取り付けるよう計画された。

ところで、この進入路の建設が計画された高部の扇状地は古くから遺跡として知られている所である。なかでも扇状地の中央部一帯は遺物の散布がみられ、古墳も数基現存しており、古代東山道も通過している。また、かっての諏訪神社の神官の居住地でもあり、諏訪神社にゆかりのある史跡も存在する等、この地域は諏訪の歴史を解明して行く上に非常に重要な地域の一つと目されている。

このように、静香苑への進入路は諏訪の歴史を解明して行く上で重要な地域を通過することとなった。前記のとおり、扇状地中央部一帯は遺跡として知られており、遺跡台帳にもNo.123・高部遺跡として記載された周知の遺跡である。このため、この部分を通過する分については発掘調査の必要性がある点、主管課の清掃課へ解答した。

発掘事業については委託者として高部遺跡調査委員会を設置し、清掃課との協議の結果、発掘面積1,200㎡、発掘費600万円にて茅野富士見原行政事務組合と高部遺跡調査委員会との間に委託契約を結び事業を開始した。現場における作業は４月21日より開始された。途中５月31日までの工期が諸事情により７月31日までに変更され７月28日に終了した。　（樋口公男）

第２節　発掘調査の経過

進入路は扇状地内をＳ字状に数回蛇行する形に計画されている。この扇状地内で包蔵地としての遺跡の広がりが想定されるのは、そのほぼ中央部から現在の高部区にかけての一帯である。進入路はこの範囲内を北から南へ「く」の字状に屈折して貫いている。そのうち発掘予定域のⅠ区・Ⅱ区の総延長は約190ｍである。また、調査の予定されているルート部分のうちの南北両端間の距離は約200ｍ、その比高差は約27ｍほどある。このように調査範囲はかなりの比高差をもって広範囲にまたがっている。常時現場で指揮できる調査員が１名の体制では、広い範囲にまたがるルート内全体を統括的に扱って調査を進めることは不可能である。このため、旧道に接続する部分から南側と北側の発掘予定域をⅠ区・Ⅱ区とし、工事の進行に合わせてⅠ区から調査を進めること

とした。

ところで、後章でも記すとおり、発掘区の周辺には墳丘をもつ円墳が3基現存している。これらの古墳は、概に煙滅した古墳と共に一つの古墳群として認識されており、諏訪盆地内でも高部の扇状地には古墳が比較的多く造営されたことが理解される。I区公図454番の南隅には「大石」と呼ばれる古墳の天井石大以上の大きな礫岩の集中する個所があり、これが記録にない古墳であることが危惧された。また、狭いルート幅内での土捨場確保の必要上からも、I区の調査はまずこの大石とその周辺の公図454番の調査から始めることとした。

大石の地形測量を4月21日に行い、発掘は翌日から開始した。大石周辺の調査が終了したのは5月1日である。発掘調査の結果大石は古墳とは認められず、この扇状地内の地表にいくつか突出している巨大な礫岩と同様の自然石群であることが判明した。この大石周辺の調査では、縄文時代中期中葉の屋外埋甕の他、縄文時代の石器片や平安時代の土師器等が発見されたのみであり、遺構等は検出されなかった。

大石とその周辺の調査終了後は発掘区南端の公図476番に移り、1列からグリッド掘りを開始した。しかし桑株の存在と厚い表土のために作業がなかなか進展しない。このため小型のブルドーザーとバックホーを動入し、桑株と表土層を除去することとした。ルート幅が狭い上に排土量が多いため、ルート外への排土の許可を得、さらにルート内の公図480番の東隅から487－イ番にかけてを土捨場とした。したがってこの部分の12mほどは未調査となった。表土層除去後ジョレン掻きを行い、確認された遺構を南から北へ向って順次精査を進めた。そして作業の進行に従って遣り方を設定し、実測と掘り下げを併行して進め、排土部までの調査を5月30日に終了した。

公図487－ロ番・460番は桑株のない平坦な畑であり、表土も比較的薄い。その上発見された遺構も土壙群が主体となり、また連日の好天にも恵まれたため、この区域の作業は約一週間で完了した。住居址の発見が少なかったためか遺物もそれほど多くはなかったが、第7号住居址から出土した白磁皿は特筆される。

公図457－1番には入ると表土も厚く桑株も残っている。しかも小型ブルドーザーで除去してきた排土の山が残っているため、これをバックホーで再度除去することとした。やがて調査が進むにつれ、数基の住居址や溝址と共に、いくつかの土壙が密集して現われ始めた。このため遺構の重複関係の把握や土壙の性格を明らかにするための精査に努めた。殊に第3号溝址は、当初いくつかの土壙が連なりつつ重複したものとして調査したものが、後に溝として明らかになったため、再度調査をし直した。また、第10号住居址の調査後には下部の旧住居址の存在が明らかになる等の経緯もあった。

ところで、密集して発見された土壙の中には礫を多く包蔵するものがあり、中にはかなりまとまって、しかも比較的しっかりした骨片を出土するものがあった。このため作業員の方々の希望もあり、現場で供養を行って作業を進めた。

I区の調査が最後の段階に入った6月中旬には梅雨となり、7月初旬まではほとんど作業が進

展しなかった。この頃は4日振りに雨が上がり晴天となる天候状態であり、再三襲う驟雨を縫って小雨の中実測を重ねる日々が続いた。このように天候と人的条件に恵まれない中、Ⅰ区の調査が終了したのは7月10日であった。

Ⅱ区は、6月20日に下草刈りと試掘を行った後バックホーによる表土除去を行い、Ⅰ区の調査と併行し、7月6日から本格的調査に入った。

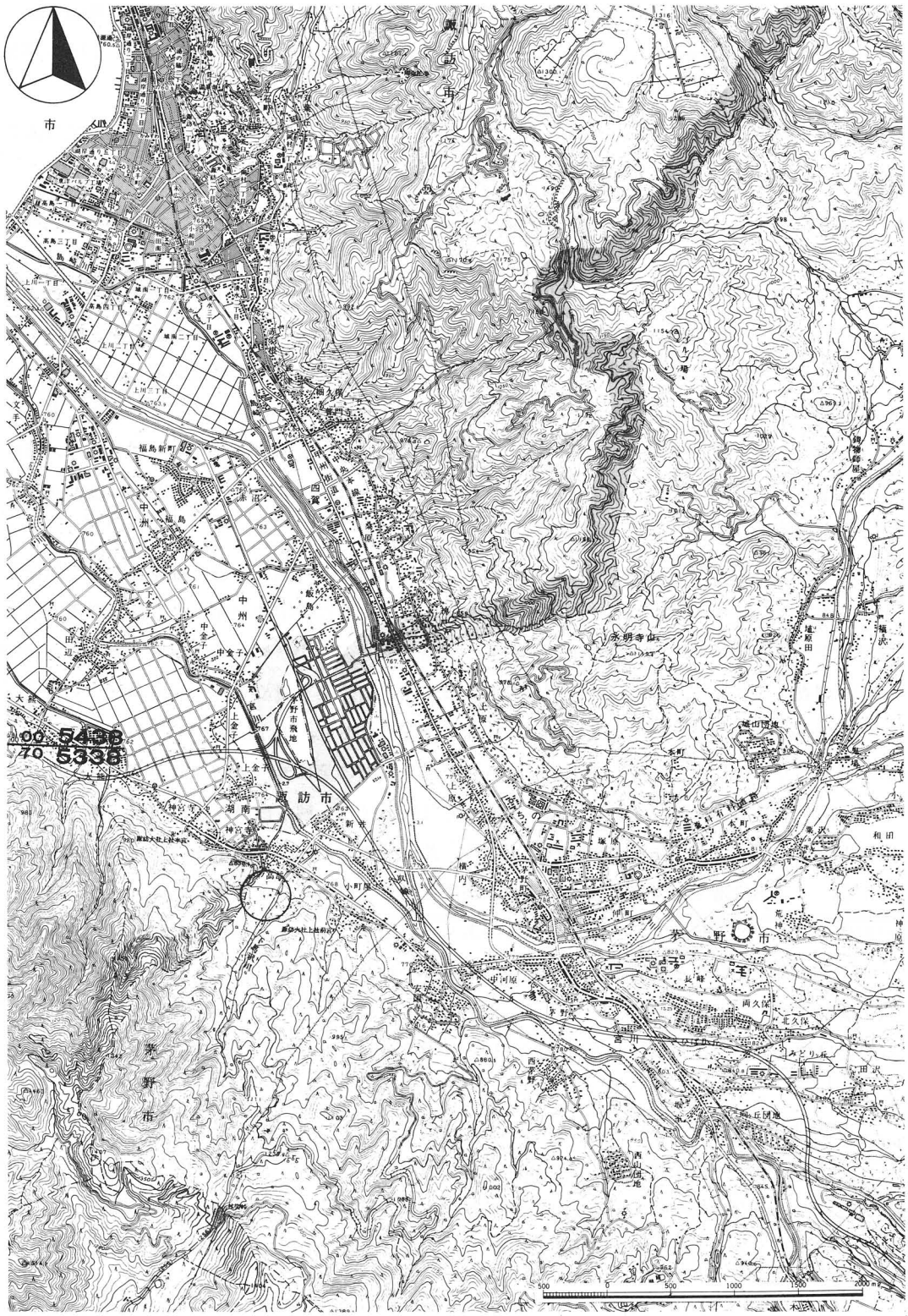
Ⅱ区の地形には、公図436－1番北側と433番東側を境に若干の変化がある。公図436－1番は一段高い平坦な位置にあり、433番東側から430番までは北へ向って緩く傾斜する平坦面となっている。公図430番北側は台地状地形の縁辺部であり、北側へ向って強く傾斜し、一段下の地形へと続いている。Ⅱ区はこの平坦部を南側から北側へ向って調査をし、ルート内の430番北側と台地下を土捨場とした。やがて調査が進むにつれ、この平坦部では遺構の密集と重複が著しいことが判明してきた。就中、縄文時代中期の住居址と平安時代の住居址の重複が激しい。このため、平安時代の住居址が縄文時代中期の住居址の覆土中に設けられていたものについては、プラン等の把握に的確さを欠く状況も生じてしまった。殊に第10号住居址はプランの把握ができず、ほとんどセクション観察のみに終る結果となってしまった。

7月11日には関東中部につゆ明け宣言があり、中旬からは連日30度を越える猛暑の中での作業となった。また午後になると、この地方では有数な守屋山からの雷雨が発生する。発掘現場は守屋山直下に位置しているため、雷雨はいち早く現場を襲う。このため午後になると空模様を気にしての調査となり、翌日にはシートからの水の汲み出しに時間を費やす日々が続いた。

公図436－1番は発掘区内では一段高い平坦面に位置しており、表土は薄い。この部分も下段の平坦部のあり方からみて遺構の密集が予想されたが、大型の第19号住居址1基が検出されたのみであった。7月24日には発見された遺構の調査もほぼ完了し、残るは第8号住居址と第20号住居址の埋甕の取り上げとその精査、それに実測の一部を残すのみとなった。第8号住居址の埋甕は、覆土掘り下げの段階で出入口部に1体埋設されていることが明らかとなっていた。しかし住居址の規模があまりに大きいこと、それに炉址のあり方も通常でないことから、主軸線に沿ってサブトレンチを設定した。その結果床下に新たに2体が発見されると共に、3体のうち2体から定角式の磨製石斧の出土を見るに及んでは、本址が増々通常の住居址ではないとの感を深めた。7月27日には第8号住居址の埋甕の写真撮影を行い、7月28日には残っていた実測等すべての作業を完了した。

発掘期間中は遺跡への来訪者も多く、殊に地元高部区の方々には熱心な来跡を受けた。5月31日には高部公民館・ＰＴＡ主催による現地遺跡説明会が催され、7月26日には茅野市郷土研究会による現地説明会も開かれた。また、調査終了後にも宮川地区公民館主催による遺跡説明会も行われ、地域の人々が遺跡と発掘調査に感心をもち、理解を深めてくれるなかで調査を終了しえたことは幸いであった。

（鵜飼幸雄）



第1図　遺跡位置図(1/50,000)

第II章　遺跡概観

第1節　遺跡の地理的環境

八ヶ岳・蓼科・霧ヶ峯を水源とする河川は合流して上川となり、霧ヶ峰山塊南西縁の永明寺山裾を西南から西北に迂回して諏訪湖に流入する。また、八ヶ岳山麓俎原や、入笠釜無山系の一部の水を集めた宮川がこれに平行し、永明寺山と西山山系の間に沖積地を形成する。この沖積地は諏訪盆地の南東部を占め茅野市における肥沃な水田地帯である。沖積地の西南側を画する西山山系は、赤石山脈の北端に位置し、標高1,650.3ｍの守屋山を狭んで南の入笠釜無山系へと続く。

西山は伊那谷側では比較的緩やかな山麓を形成するが、諏訪側の山麓は急峻な地形となり、諏訪盆地に向かって幾筋もの山脚が派出している。山脚の先端は、フォッサマグナの西縁を画する糸魚川－静岡構造線によって形成された釜無川断層崖となり、西から南へほぼ一直線の斜面となって盆地へ尽きている。この山脚の先端部周辺には断層運動による平坦な丘陵状の地形や傾斜地も残されており、また、山脚先端間には湖盆に向って広がる小規模の扇状地形が多数形成されている。遺跡はほとんどがこれらの扇状地形に立地している。

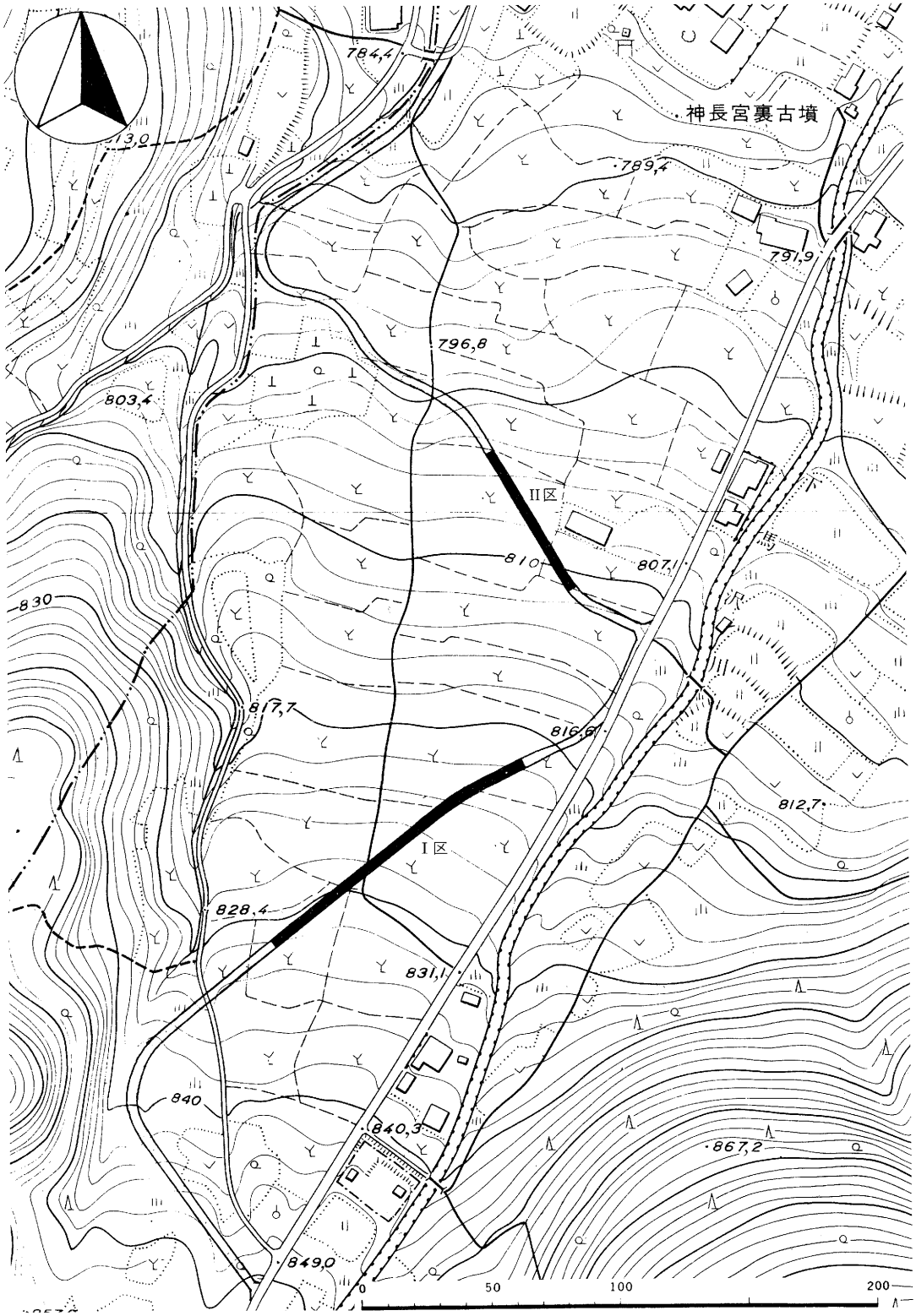
高部遺跡の占地する扇状地は守屋山直下に位置し、宮川に流入する下馬沢川により形成されたものである。下馬沢川は守屋山側の宮川支流では大きな方で、扇状地の長軸規模も比較的大きい。そして急流であるためにしばしば氾濫を繰り返しているようである。したがって扇状地内は一様の地形ではなく、部分的に小規模な台地形や丘状の地形が形成されており、ところどころには礫岩の巨岩が露頭している。北側の扇側部山裾にも小溪流があり宮川に流入している。

現在の高部区は扇状地末端が扇形に広がって湖盆沖積地と接する扇端部に位置しており、扇状地は下馬沢川を挟んで東側が水田として、西側が畑として利用されている。遺跡は高部区の南側上方、山脚先端部よりやや奥まった扇状地の中央部に位置するものと思われ、下馬沢川西側の高台の畑一帯には遺物が広く散布している。標高は795～835ｍである。　（宮坂虎次）

第2節　遺跡の歴史的環境

高部は、諏訪大社上社本宮と前宮が鎮座する地形に連なった、両者の中間の扇状地に位置し、上代から中世にかけての諏訪の歴史上枢要な地であった。このため、神長宮邸や擬祝邸の存在にも窺われるように諏訪大社とゆかりの深い場所であり、それに関わる数多くの史跡が残っている。

神長宮邸は現在の高部区の南側、高部扇状地入口部の中央に位置している。神長守矢氏は上社五官の主座で、諏訪明神の入諏以前からの土地神とされる洩矢神を遠祖とするとされており、諏



第2図　遺跡周辺の地形と発掘区(1/2,500)

訪の原始信仰である御社宮司祭祀と最も深い関係をもつとされている。もとは扇状地の大半を占める広大な邸を擁していたが明治以降次第に縮少された。邸内にはこの御射宮司の総社である御頭御社宮司社が祀られている。そして同家には足利期頃からの多くの古文書が保存されている。これらは信濃中世史上欠くことのできない貴重な史料で、「紙本墨書守矢家文書」として長野県宝に指定されている。

また、諏訪の原始信仰にかかわる遺跡地としての峰の湛(たたえ)と小袋石が存在する。峰のたたえは前宮と高部を画する火燈(とぼし)山の中腹山頂にあり、諏訪七木の一つで湛の神事をした場所である。小袋石は高部扇状地の扇頂部北側にそびえる山の北斜面に位置している。烏帽子形を呈した巨岩で、磯並社の境内にあり、別名を舟つなぎ石とも言う。諏訪七石の一つであり、磐座信仰の遺跡と考えられている。磯並社は前宮十三ヶ所の第三に位する末社で磯並神事が執り行われ、境内地には藤の森社・穂又社・玉尾社が祀られている。

この地、近世以降の大祝家の墓地である大祝御廟、神長家の墓地である神長廟・はかんどう墓地、権祝家の墓地が設けられている。また、高部は古代東山道の杖突峠直下に位置している。高部・神宮寺側から通じる高遠道は、この杖突峠にかかわる古代東山道とも関係しているものとみられ、高部が諏訪における古代交通上の主要地の一つであったことも窺える。高部の西側の丘陵は武居城(片山古城)で、元徳2年に諏訪五郎時重の築いたものといわれ、上社本宮に近く、その守りの山城といわれる。

(宮坂虎次)

第3節　遺跡の考古学的環境

高部扇状地には古墳が比較的多く造営されている。古墳は扇状地内一帯に広く分布しており、煙滅した古墳も含めると6基が知られている。これらの古墳は守矢山麓古墳群を構成するもの[※]として、また高部古墳群[※※]として認識されている。

このうち現存するものは塚屋古墳・疱瘡神塚古墳・神長官裏古墳の3基である。乞食塚古墳・神袋塚古墳・風無塚古墳は既に破壊され、またはわずかに痕跡を止めるにすぎない状態にある。古墳は本格的な調査のなされたものはなく、各々の出土遺物等が記録に残されているのみである。しかし乞食塚古墳については破壊当時の報告[※※※]があり、出土遺物や石室の状態を窺うことができる。それによると古墳は横穴式石室をもつ円墳で、出土遺物の中には和同開珎と神功開宝があり、注目される。現在は石室の鏡石1個が南側を向いた状態で現存する。神袋塚古墳は平面が長方形の石室を有していたとされているが明らかでない。出土遺物には直刀・馬具・金環・六角形管玉・坏・壺などがあったようである。風無塚古墳については明らかでない。疱瘡神塚古墳は玄室の奥

※　藤森栄一　1974　『古墳の地域的研究』
※※　桐原　健　1969　「諏訪盆地に見られる終末期古墳の様相」『長野県考古学会誌』　第7号
※※※　宮崎　糺　1936　「信濃宮川村の一古墳」『考古学雑誌』　第26巻第1号

処左右に副室をもつT字形の横穴式石室からなる円墳である。天井石は持ち去られているが、墳丘・石室共に現存する。出土遺物は勾玉・管玉・子持須恵器高坏・土師器・須恵器坏・六角形の馬具轡・杏葉・直刀残片等で、現在は東京国立博物館に収蔵されている。塚屋古墳は横穴式石室をもつ円墳で現存する。この古墳については未掘のようである。神長官裏古墳も横穴式石室をもつ円墳であり、現在茅野市の指定文化財となっている。大正13年に再発掘されており、直刀破片・小刀子残片等が出土している。この他、前宮と高部を画する火燈山から北の高部側に派出した山頂部に狐塚遺跡が所在する。古くから狐塚と称され、直刀・釧・鉾・土器等が出土したことから古式の古墳が存在すると考えられていた。昭和56年秋に公園造成に伴う緊急発掘が行われ、5世紀末から6世紀代の周溝墓1基と平安時代の土壙4基が発掘されている。この他、八稜鏡1面が扇頂部付近のうとう沢から寛政12年に発見されたとされている。この八稜鏡は「麟鳳瑞花八稜鏡」として、現在は諏訪大社上社の御神宝となっている。

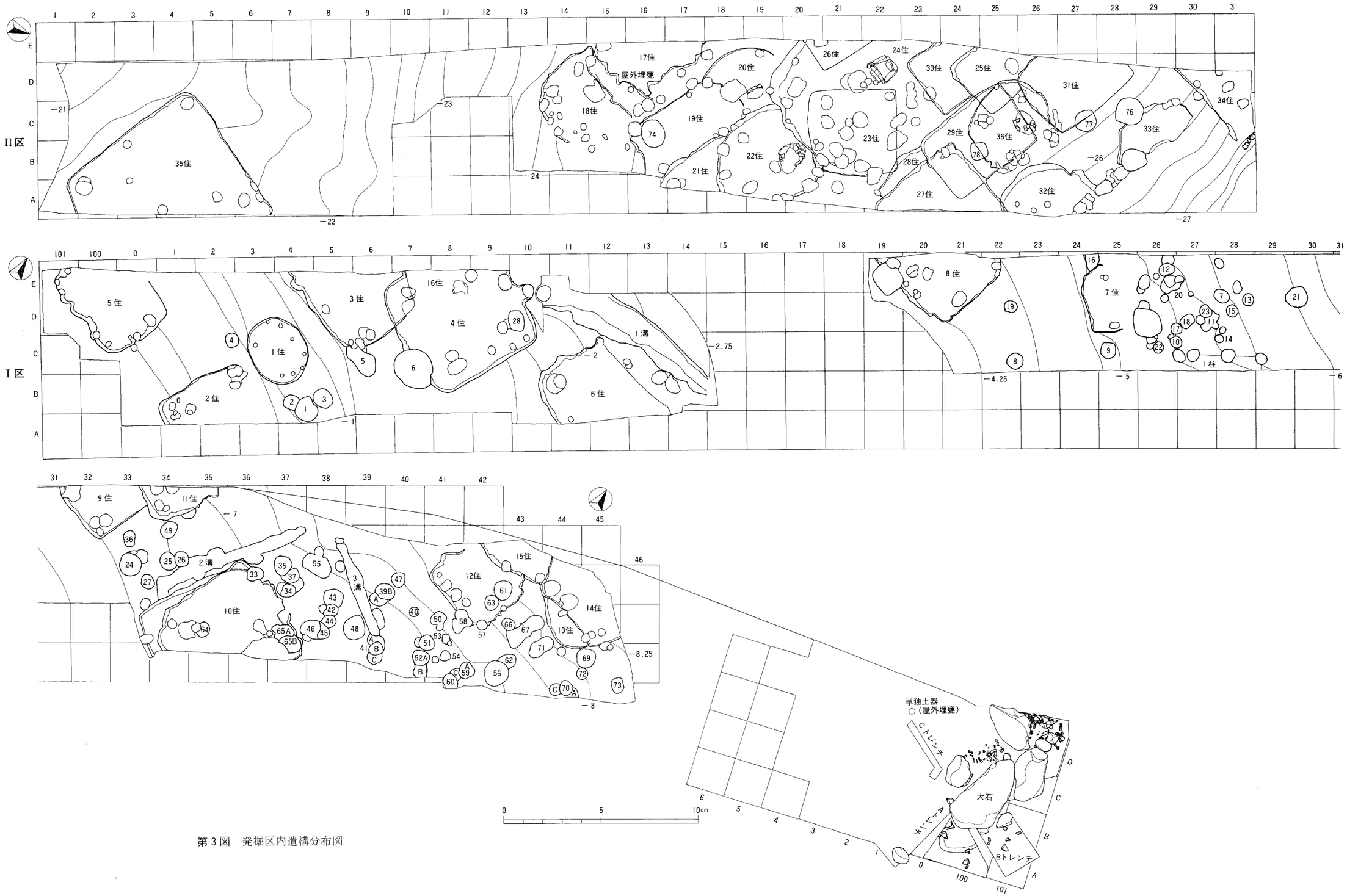
さて、高部扇状地内の高部遺跡については古墳と共に周辺の畑地から遺物が採集されることで古くから知られていた。諏訪史第1巻※によると、高部からは古墳以外にも多くの遺物が発見され、茅野・安国寺・小町屋と共に盆地南方においての遺跡分布の中心を形成するとされ、「高部神長官裏から疱瘡神古墳に掛かった丘陵腹には相当に広い範囲に亘って祝部土器片多量に散布している」と記されている。その後、昭和42年に行われた分布調査では、遺物の採集される地点のあり方から御廟遺跡と疱瘡神塚遺跡と2遺跡に分けて報告されている※※。この他に分布調査ではみられなかった縄文時代中期前半の遺物等が採集された報告※※※がある。採集された地点は今回発掘調査のなされたI区周辺であり、保ヶ原発見の新遺跡としたが、これは分布調査時に報告された御廟遺跡内であった。

今回の発掘調査区は昭和42年の御廟遺跡内に相当する。しかし鳥居龍三氏の報告による「高部神長官裏から疱瘡神古墳に掛かった丘陵腹」の「相当に広い範囲」を、あえて御廟遺跡と疱瘡神塚遺跡とに分けて理解する必要はないと考える。遺跡は地形的にも1つのまとまりをもっている。また、本遺跡についての考古学的研究の嚆矢となった鳥居氏の報告を尊重する意味からも、本遺跡については今後高部遺跡として一括に理解するのが妥当であると思われる。　（鵜飼幸雄）

※　鳥居龍三　1924　『諏訪史第1巻』　信濃教育会諏訪部会

※※　長野県教育委員会　1968　『中央道建設地域内、国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』　長野県教育委員会

※※※　鵜飼幸雄　1971　「茅野市高部保ヶ原発見の新遺跡」『長野県考古学会誌』　第11号



第3図　発掘区内遺構分布図

第Ⅲ章　遺跡の地層

Ⅰ区の基本層序の観察はA－6・7・8・9の各グリッド南壁面で行った（第4図）。

1層……表土層で現在の耕作土に当る。

2層……黒灰色土層で色調等は1層に類似する。土層内には小さな礫・炭化物を含み、土師器片等が混入する。

3層……礫を混入する黒褐色土層で、拳大の礫・砂利を含む。土層内への混入物のため粘性はなくパサつく。

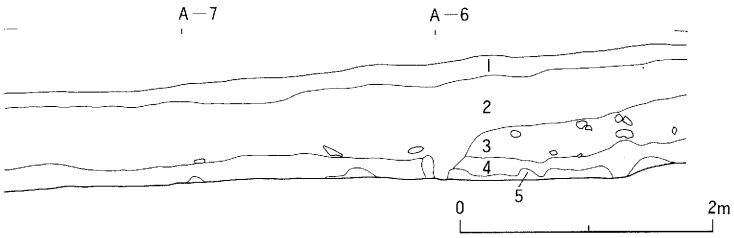
4層……ローム微粒を含む褐色土層である。粘性があり、2・3層に比べて小礫の混入はみられない。

5層……黄褐色土層である。内部にはブロック状のロームを含み、色調は黄味の強いものである。層全体の感じより漸移層的である。

高部遺跡は下馬沢川により形成された広い扇状地に位置している。今回の調査はその地形の一部を調査したに過ぎず、また地形等の成因により土層の堆積状態は不均衡な部分があり統一層序を捉えることは難しかった。その中に於いて特に層序の明確だったⅠ区のものを観察したが、基本的には1・2・5層が共通してみられ、3・4層は部分的に確認できた。尚、3・4層はⅠ区に於いても部分的に観察されるのみであり、しかも層の性状のためかそれぞれの地点で若干の内容差が認められる。

遺物の包含層は2・3層で、土器片が検出された。2層は土師器片・縄文土器片が渾然とした状態で出土している。3層内よりは若干縄文中期の土器片が出土している。しかし、適確に文化層の把握をするのには至らなかった。また、下馬沢川の氾濫等についてであるが、砂粒や礫を含む小規模な流れ現象は部分的に認め得たが、調査区に於いて遺跡全体を被うような氾濫等の痕跡はみられなかった。

（守矢昌文）



第4図　Ⅰ区A－5・6・7・8グリッド南壁層序(1/60)

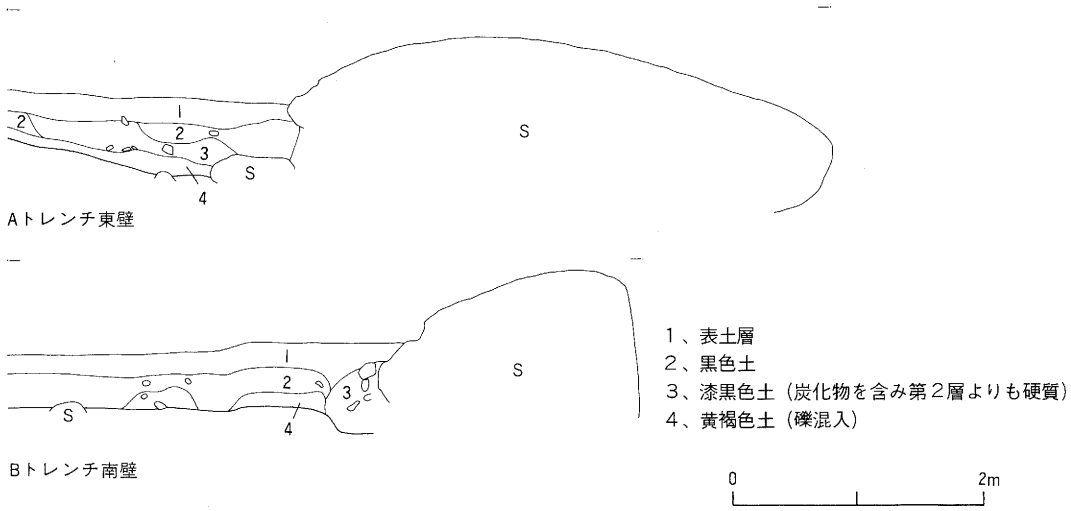
第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　大石周辺

公図454の南側境に古墳の存在を思わせるような大きな礫岩が集中しており、これが記録にない古墳であることが危惧された。地主はこれを「大石」と呼んでいる。かつて、諏訪地方の古墳を精力的に踏査された故・細川隼人氏も、この大石を古墳踏査時にボーリング・ステッキで探査されたとのことも聞き及んだ。このため、想定される石室に対して「十」字形にトレンチを設定して調査を進めたが、大石は古墳とは認められなかった。また、セクション観察（第６図）によっても周辺の土層は自然堆積を示しており、出土遺物も縄文土器や土師器片が散発的に発見される程度であり、その他の遺構としても認め難いものであった。

一方、大石周辺から西側にかけては、地山面のほぼ全面に不規則な形に大小の礫が認められた。殊に大石の西側部分では南北方向に一部帯状に認められた箇所もある。このため何等かの集石遺構を想定して調査を進めた。しかし礫は地山中から突出しているものが多く、掘り方も検出されず、また遺物もほとんど伴わないことから、これらの集石様礫群は遺構とは見故しえなかった。後の調査の進行により、礫群はその西端部が第14号住居址付近にあることが判明したため、礫群は南北方向に流れた状態でこの一帯の地山面を被うものと予想される。

遺物は大石北側で発見された屋外埋甕の他、周辺の第２層中から縄文時代中期と後期の土器片や黒曜石片・打石斧片と共に、平安時代の土師器等が若干出土した。　（鵜飼幸雄）



第６図　大石・Ａトレンチ・Ｂトレンチセクション（1/60）

第２節　縄文時代の遺構と遺物

１　竪穴住居址

第１号住居址（第６・７図、図版第３－２・26－１）

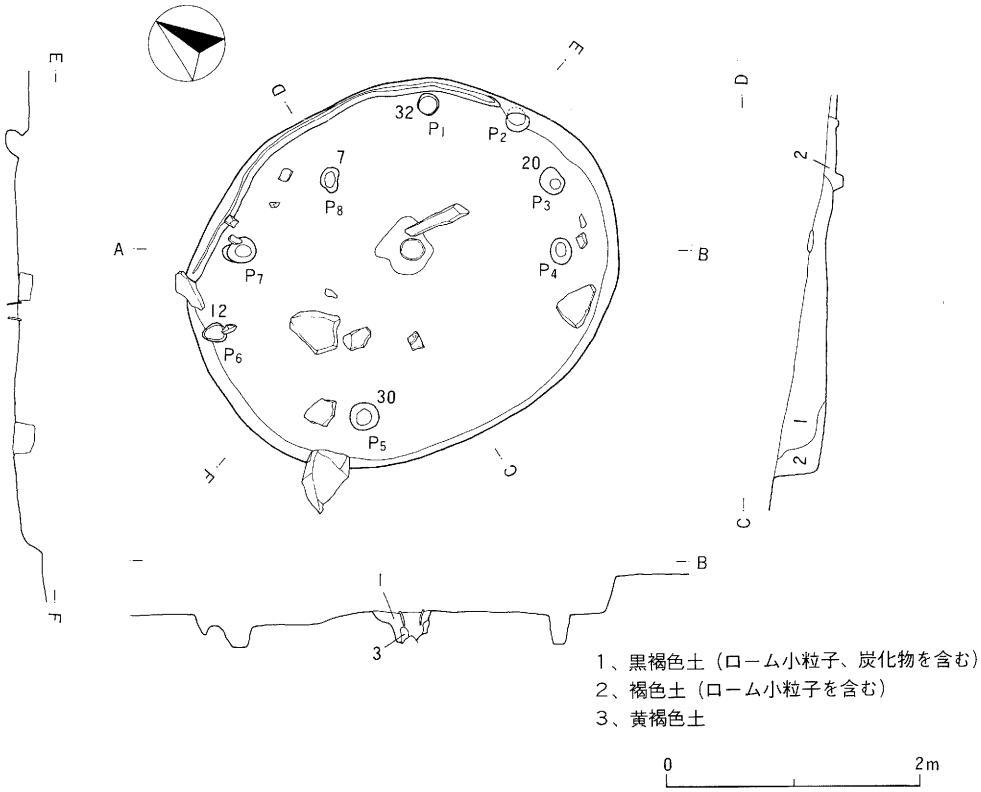
検出状況　本址はＩ区Ｃ－３、Ｂ－３を中心に黒色土の落ち込みが検出されその存在が明らかとなったものである。

覆土はロームの小粒子・炭化物を含有する黒褐色土（第１層）で壁際には第１層に比べローム小粒子の含有の割合が多い褐色土（第２層）が堆積する。

遺構の構造　本址は東西方向に長軸350×短軸286cmの楕円形を呈し、長軸方向はＳ86°Ｅを向く。

壁は南壁側は地山に掘り込まれており34cmと高く、北壁側は地形が北側に傾斜する関係より８cmと低く、南壁側に比べ判然としなかった。

周溝は住居址の北壁側に約¼周する形で検出された。幅は８cmと狭く、深さも８cmと貧弱な断面がＵ字形を呈するものであった。



第６図　第１号住居址（1/60）

床面は割合硬いもので住居址北西側が窪みをもち、そこに若干傾斜する形で構築されている。

床面には大きさ22～44cm位の扁平な礫がP_5とP_7の間、南東壁下に遺存しており、付近より打製石斧等が出土した。このことよりこの礫は作業台が想定でき得る。

柱穴はP_1・P_4・P_5・P_7が主柱穴と思われ、深さも22～32cmと他のピットに比較して深いもので、ほぼ垂直に掘り込まれている。この主柱穴に、若干浅いP_3・P_6が補助的な役割で加わり、柱構造は基本的には6本柱であったと思われる。柱の建て替えはP_7に認められる。

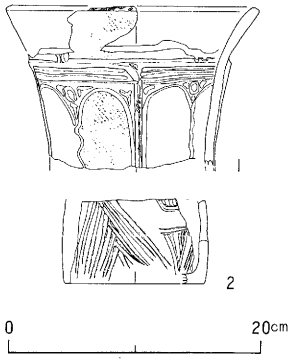
炉址は埋甕炉で、長軸上より若干ずれた住居址ほぼ中央部に設けられている。掘り方は48×46cmの不整楕円形で深さ24cmを測る。掘り方ほぼ中央部に、胴部下半を欠損する土器を埋設している。内部には焼土等の堆積は見られずローム粒を混入する黒褐色土が堆積していた。石囲い等の施設は見られなかったが掘り方東側に長さ50cmの柱状をなす礫が置かれていた。

遺物の出土状態　遺物の出土量は非常に少なく覆土内より若干と、床面より底部が1個体分、埋甕炉に使用されていた土器が出土しただけである。この土器の他に作業台と思われる礫の付近より打製石斧が出土している。

出土遺物（第7図）

1：埋甕炉として埋設されていた土器で、胴部下半・口縁部の一部を欠損する。器形は口縁部が外反し、胴部がわずかに内反する深鉢形を呈する。胴部は低い隆帯が垂下し4区面する。区画内はΩ状の沈線により胴下半まで垂下する区画構成をもつ。地文はＬＲの縄文を施文する。

2：胴部下半で、底部・口縁部等は欠損する。器形は胴部が若干脹みをもち、底部で張る。文様は半截竹管状工具により矢羽根状沈線を施文する。文様構成は区画文状の構成をとる。



第7図　第1号住居址出土土器(1/6)

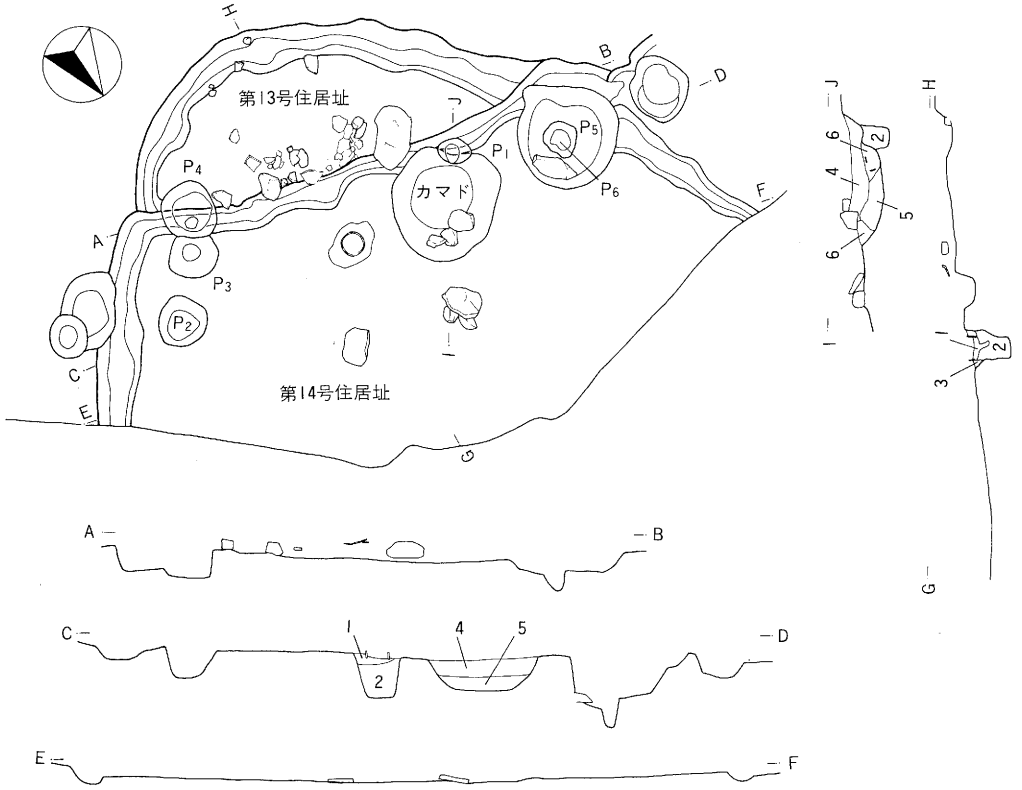
第13号住居址（第8・9図、図版第10－1）

検出状況　本址はＩ区Ａ－44グリットより縄文中期初頭の土器片が集中して検出され、その存在が明らかになった住居址である。住居址北側を第14号住居址によって切られており、検出された部分は全体の約1/3程度に過ぎない。また第14号住居址の貼り床下より埋甕炉が確認されている。

遺構の構造　本址は全体の約1/3が検出されたに過ぎず、そのプラン、規模については不明である。南側コーナー部より推定すると不整円形プランを呈するものと思われる。住居址の規模は検出された埋甕炉を住居址の中央とすると、直径4ｍ程度の住居址が想定される。

壁はローム面に掘り込まれており北壁側で8cmほどの高さを測る。立ち上がりは緩やかな傾斜をもち、南西側は不明確で判然としなかった。

周溝は住居址をほぼ全周する形で検出された。幅が34cmと広い割りには深さは7cmと浅く、断面が緩やかなＵ字形を呈する。



第8図　第13・14号住居址(1/60)

床は全体的に堅緻で特に壁際が顕著で、住居址中央部に傾斜する皿状をなす。

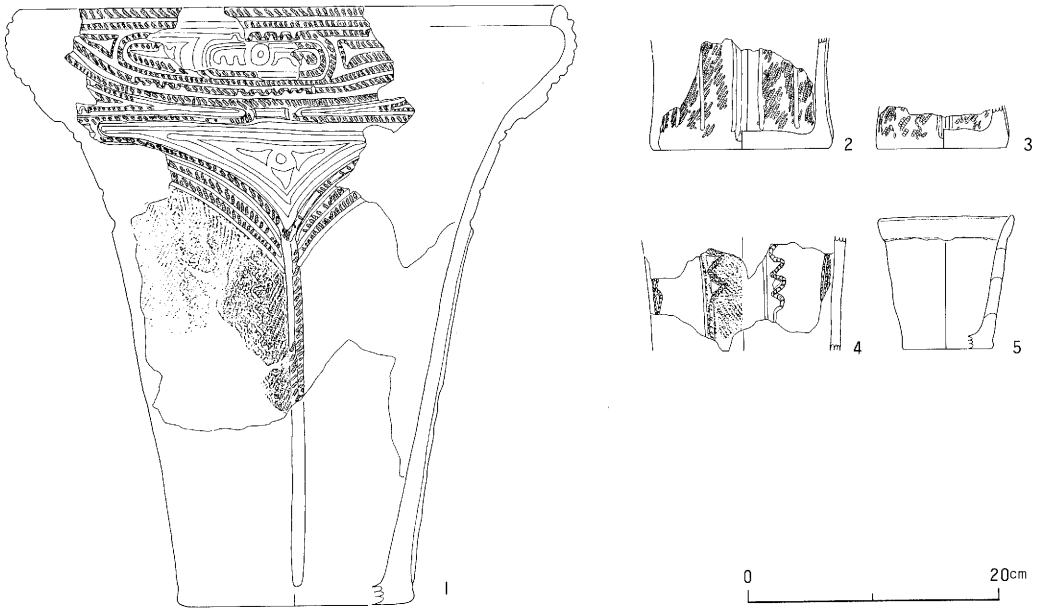
柱穴は2箇所検出され深さ20～24cmのものである。両者共ほぼ垂直に掘り込まれており、建て替えしについては確認できなかった。柱穴はほぼ相対する位置にあることなどを考えると、炉址を囲むように構築された4本柱の相対する柱のものかと思われる。

炉址は第1号住居址と同様な埋甕炉で、住居址のほぼ中央部に設けられている。炉址の掘り方は長軸42cm、短軸30cmの楕円形を呈し、深さ36cmと深い。深鉢の胴部を埋設土器とし、内部には炭化物を混入する黒褐色土が、掘り方内には炭化物、ローム粒子混入の褐色土が堆積しており、焼土の堆積は見られなかった。

遺物の出土状態　遺物は第14号住居址壁際を中心に、床面より12cmほど上部に礫と一緒に廃棄されるような形で、まとまって出土した。土器は深鉢が中心で横倒れの状態で検出された。

出土遺物（第9図）

1：器形は口縁が内彎し、胴部には脹みはみられず底部が若干張り出す深鉢である。胴部には



第9図　第13号住居址出土土器(1/6)

低い隆帯が垂下し、口縁部が⌓状と三角状の区画構成をもつ。胴部は隆帯により三角形状の区画をもち、内部に玉抱三叉文が施文される。胴部の地文はＲＬの結節縄文を用いる。

２・３：両者共底部が張り出す器形であり、底内部は厚く断面がカマボコ状を呈す。文様は胴部より垂下する低い隆帯による区画で区画内はＲＬの縄文とＲＬの結節縄文(3)を施文し、２は沈線を垂下させている。

４：埋甕炉に用いられていた土器で胴部のみを残すものである。器形は残存部が少なく推定できなかったが、１などと同様な器形を呈するものと思われる。文様は連続刺突による懸垂文をもつもので地文にＬＲの縄文を施文する。

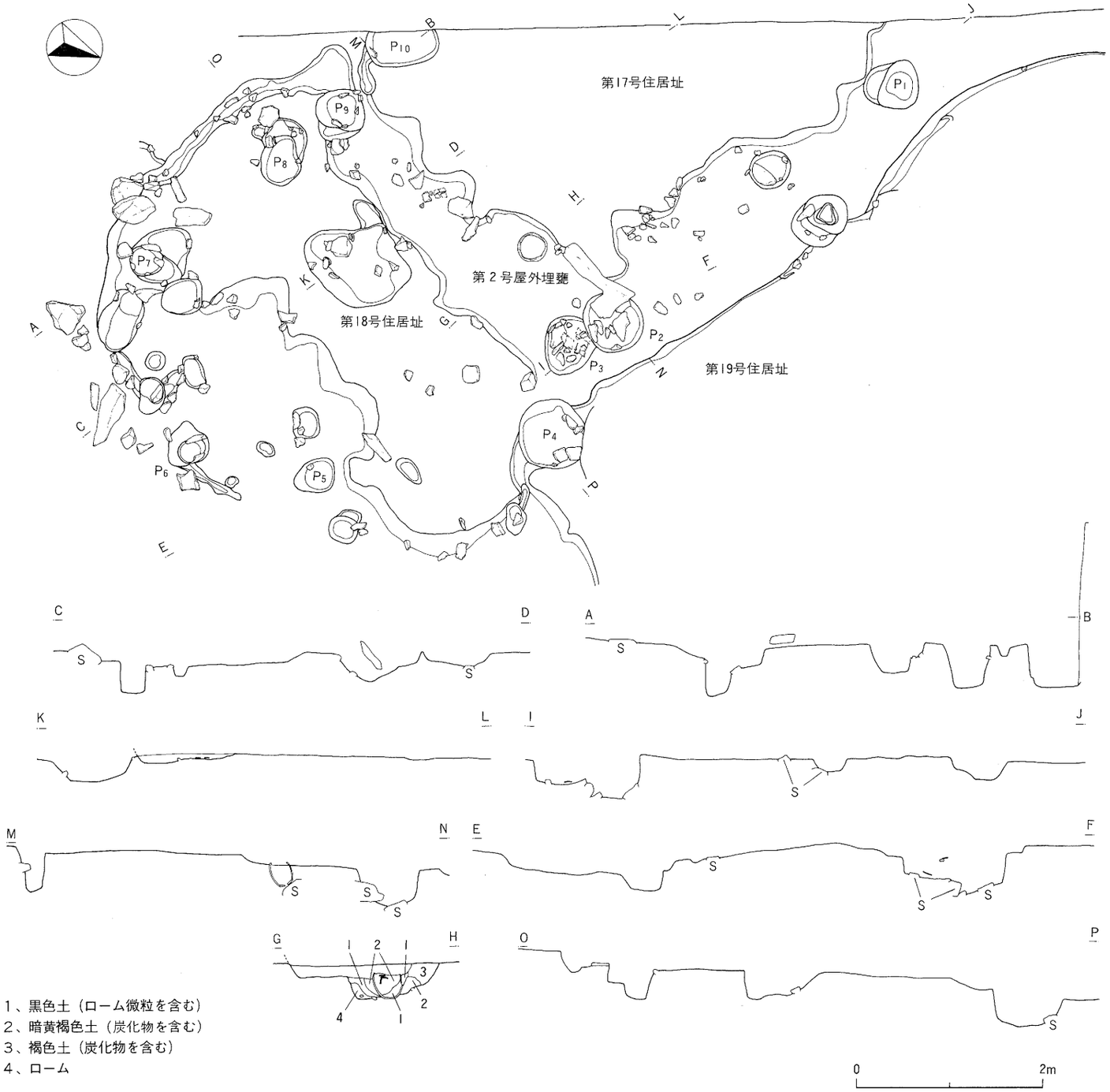
５：器形は口縁部が外反し胴部に脹みをもたないもので、口縁部は折り返しによるためか厚くなっている。器高が低く小型のものである。

第18号住居址（II区第２号住居址）（第10図、図版第11－２）

検出状況　本址はII区Ｃ－15グリッドを中心に住居址の床面が検出され、その存在が明らかとなった住居址である。住居址西側を第17号住居址によって切られ、東側は床・壁共に水流により削り取られており、プラン確認は南壁、各コーナーより検出された柱穴により推定し得た。

遺構の構造　本址は全体の⅔ほどが残存していたに過ぎず、プラン、規模等については南壁、各コーナーの柱穴より推定すると横長の隅丸方形を呈するものと思われる。住居址の規模については推定の域を脱しないが、長軸530×短軸520cm位の規模になるものかと思われる。

壁は地山礫層内に掘り込まれているため不明確であるが、南壁側では14cmを測る。掘り方は南壁側ではほぼ直に近く、南東壁側では緩やかな傾斜をもつ。



第10図　第17・18・19号住居址・第２号屋外埋甕(1/60)

周溝は南壁側の一部、東壁側の一部に検出された。幅16cm、深さ８cmで割合幅の狭いものである。

残存する床面は地山面を直接床としており部分的に地山礫が床面に突出している。床面は若干北東側に傾斜した形で構築されている。

柱穴は東側南北の各コーナー部に隅柱と思われるピットが、また東壁ほぼ中央部にも検出され、５本柱又は６本柱かと考えられる。主柱の深さは30～40cmほどでほぼ垂直に掘り込まれている。尚、柱穴は数回に渡り建て替えが行われているようである。柱の建て替えしは同位置に於いて行い、その後前位置とは異なる外側に拡張を行っている。柱穴内より唐草文系の曽利IIの土器片が約１個体分出土しており、旧柱穴内に土器を投げ込んだものとして捉えられようか。

炉址は住居址の中央より若干南西寄りに設けられている。石囲い炉址であったと思われるが石囲いは残存していず、90×90cmの不整方形の掘り方が検出されたのみである。炉址内部には石囲いに用いられたと思われる扁平な礫が遺存していたが、焼土等の堆積は見られなかった。

遺物の出土状態　遺物は後世に覆土内が攪乱されているために出土量は少なかった。

第20号住居址（II区第４号住居址）（第11図、図版第12－２）

検出状況　本址は第19号住居址の精査中に検出された住居址で、東側を第19号住居址、北側を第24号住居址によって切られており、プラン確認は南・西壁により推定し得た。

遺構の構造　本址は第19号、第24号住居址によって切られているために住居址プランは推定の域を脱しないが、南・西壁より考えると円形プランを呈するものと思われる。住居址の規模は不明であるが、検出された炉址を住居址のほぼ中央部と考えると直径約480 cmの住居址が推定でき得る。

壁の立ち上がりは不明確で南西側に於いては８cmほどと低い。

周溝は貧弱で南東壁下に若干見られるだけであり不明確なものであった。

床は部分的に堅緻な部分が見られるだけで全体的には軟弱で北東側に傾斜する形で構築されている。

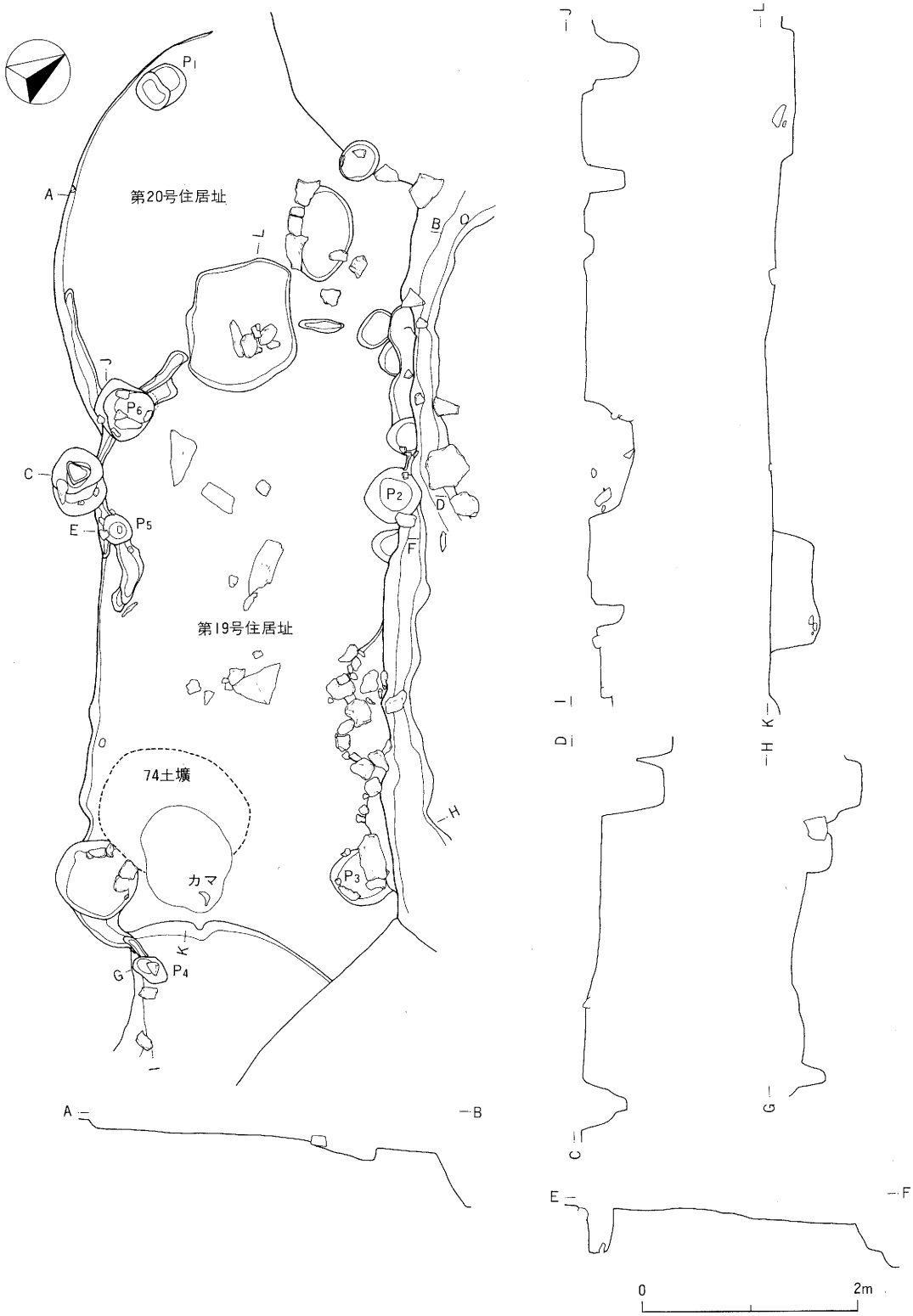
柱穴は隅柱と思われる柱穴がP_1・P_2・P_6の３箇所検出されただけである。深さは45～60cmほどで、ほぼ垂直に掘り込まれている。P_1は建て替えしの痕跡が見られる。検出された柱穴より考えると本址は４本柱の構造をもつ住居址ではないかと思われる。

炉址は石囲い炉址であり、住居址のほぼ中央部に設けられている。掘り方は長軸90cm、短軸54cmの不整楕円形を呈しており、石囲いに用いられた礫が掘り方西南部に３個遺存していた。礫は割合扁平なもので加熱による変化等は見られなかった。炉址内に焼土等の堆積は見られなかった。

遺物の出土状態　本址の時期を決定付けるような遺物の出土はみられなかった。

第21号住居址（II区５号住居址）（第12・13図、図版第13－１）

検出状況　本址は第19号住居址の精査に伴ない検出された住居址で、住居址の東側が用地外に当たるため調査されたのは全体の½ほどに過ぎない。住居址覆土中に第19号住居址の貼り床が検出



第11図　第19・20号住居址(1/60)

され、また本址も第22号住居址覆土上に貼り床をしており数多くの重複関係をもっている。

覆土は炭化物及びローム粒、礫を含む茶褐色土（第３層）の単一層で、貼り床も覆土と同様な色調を示すもので、第19号住居址の覆土上に硬く貼られていた。

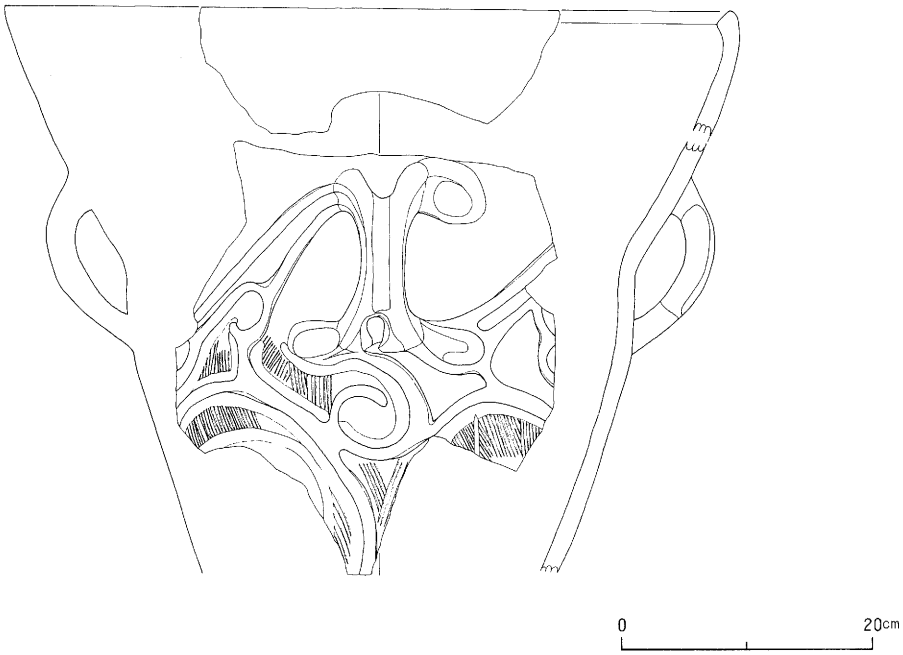
遺構の構造　本址は約½が用地外に当たるため全体プランを把握できなかったが、南壁・東南側コーナー等より考えると隅丸方形に近いプランを呈するものと思われる。住居址の規模は不明であるが、南壁・東南側コーナー等の様子より、長軸が480cmほどの規模になると考えられる。

壁は南壁側は地山礫層内に掘り込んでおり明確であったが、北壁側は黒色土内（第２層内）に掘り込んでいるため判然としなかった。掘り方は南壁側ではしっかりしており高さ12cmほどを測る。立ち上がりはほぼ直である。

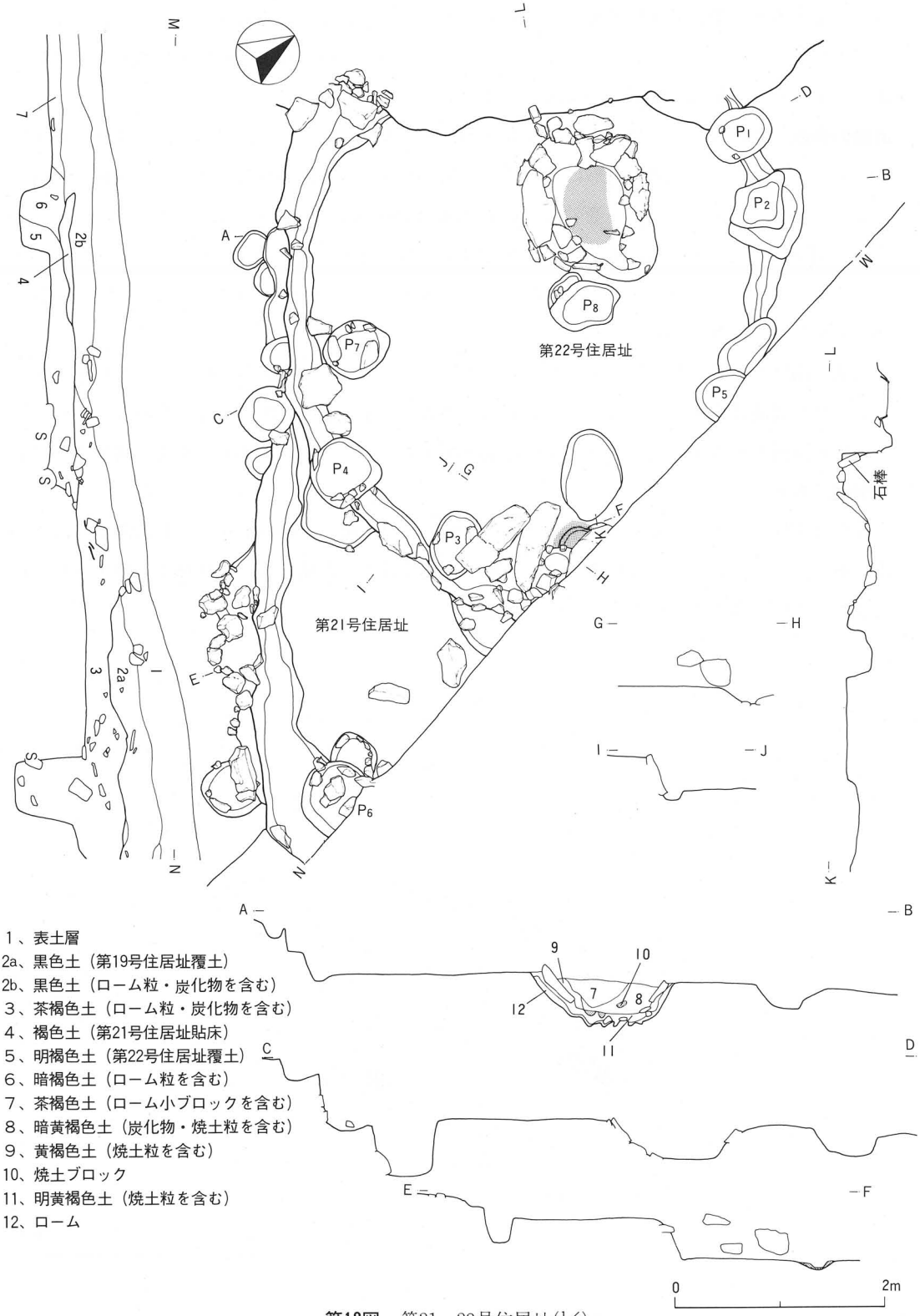
周溝は南壁下に見られ、幅28cm、深さ26cmとしっかりしたものである。断面は凵状形をなす。確認された周溝は南壁下のみであったが未調査の部分に連なる可能性は十分にある。

床は地山面を直接床としており部分的に地山礫が突出している。全体的に水平に構築されており堅緻である。

柱穴は主柱穴と思われるP_5・P_6・P_7・P_8が検出された。深さは60cm前後と比較的深く、ほぼ垂直に掘り込まれている。柱は拡張による外側への建て替えしが見られる。柱構造は検出された柱穴より６本柱の構造をもつものと考えられる。



第12図　第21号住居址出土土器（⅙）



第13図　第21・22号住居址(1/60)

炉址は石囲い炉址で住居址のほぼ中央部に位置する。掘り方のプランは検出できなかったが、炉址の掘り方の一部が第22号住居址の床面に残存しており、深さ50cmほどのしっかりした掘り方の構造があったものと考えられる。石囲いに用いられている石は長さ90cm、幅30cmの柱状をなすもので加熱のために亀裂が生じている。石囲いの状態は崩れた状態であったが、掘り方の四辺に四角に囲む様に据えられていたものかと考えられる。炉址内の焼土の堆積は6cmほどであった。

遺物の出土状態　遺物は覆土である第4層内より若干の土器片が出土しているに過ぎない。

出土遺物（第12図）

器形は口縁部が直線的に外反し、最大径が口縁にある。胴部は脹みが弱く底部に直線的に降りる。頸部はX字状把手をもつ。文様は渦巻文を構成するものである。渦巻文を構成する隆帯は低く、脇は割合幅広のナデが加えられている。地文は櫛状工具による条線で、隆帯ナデ後施文されているようである。

第22号住居址（II区6号住居址）（第13図、図版第13－2・26－2）

検出状況　本址は第21号住居址の精査に伴ないその貼り床下より床面が検出されその存在が明らかとなった住居址である。西側を第24号住居址により切られ、東壁部分を用地外に位置するが南・北壁より住居址プランの大略は把握し得た。

覆土は炭化物を含む明褐色土（第5層）の単一層で上面に第21号住居址の貼り床が見られる。

遺構の構造　住居址は南壁・北壁が直線的な在り方をしており、東壁側は張り出すように丸くなる不整形な隅丸方形を呈す。住居址の規模は480×540cmであり東西方向に長いものである。

壁は南壁側は地山に掘り込んでおり高さ24cmとしっかりしているが、北壁側は茶褐色土層より壁が掘り込まれているため判然としなかった。立ち上がりは直で堅緻である。

周溝は住居址南側・北側に検出され、入口部を除く壁下に巡るものかと思われる。掘り方は断面が凵状形を呈するもので南壁側で8cm、北壁側で20cmの深さを測る。

床はローム層を直接床としており、全体的に堅緻でほぼ水平に構築されている。

柱穴はP_1・P_2・P_3・P_4が検出され、この他に第24号住居址に切られた部分に2箇所の柱穴があったと仮定すると6本柱の構造を持つ住居址が想定されよう。深さ20～54cmとばらつきがあるが、住居址北側にある柱穴が南側のものに比べ浅い。掘り方は垂直に掘り込まれている。

炉址は石囲い炉で、住居址の中央部より奥まった位置に設けられている。掘り方は120×160cmの大きな楕円形を呈するもので深さ50cmである。石囲いは掘り方に沿う形で東端を除き扁平な板状の礫を掘り方壁側に貼り付けたような具合に置いている。炉址内には焼土ブロック、焼土混りの暗黄褐色土が堆積していたが、焼土のほとんどは掻き出された様相を示していた。

炉址西側に石壇の一部かと思われる石棒を伴なう遺構が検出されたが、その大半は第24号住居址構築の際に壊されている。石壇の一部と思われる敷石は、炉址西側肩部より始まっている。用いられている石は炉石と同様な扁平礫である。石棒は第24号住居址構築の際にズリ落ちた様相を呈している。埋甕の有無についてサブトレンチを住居址入口部と思われる部分に設定したが検出

することはできななかった。

遺物の出土状態　本址の覆土内より若干の土器片が出土しているだけである。

第24号住居址（II区８号住居址）（第14・15・16図、図版第14－２・26－３）

検出状況　本址は第23・26号住居址の貼床下より検出されたものである。住居址の東側が用地外にあり、調査したのは全体の約⅔に当たる。住居址のプランは南東側壁、北東側柱穴により大略を把握し得た。

遺構の構造　本址は全体の約⅓が用地外にあり、北東壁側は壁の掘り込みがローム層内まで至っておらず、住居址のプランの把握は南東側壁、北東側柱穴により行った。住居址のプランは東西方向に長い楕円形を呈するものと思われる。規模は長軸が約880cm、短軸が720cmと大型のもので、長軸方向はN58°Wを向く。

壁は南壁側は地山礫層に掘り込んでおりしっかりしている。高さは40～60cmと高い。東壁側は褐色土中にあったと思われるが、地形が北側に傾斜する点、住居址周辺が後世において激しく攪乱されている点などにより確認はできなかった。

周溝は南壁下に検出された。東壁側には検出されなかったが、全体の様子より考えるとほぼ住居址を全周していたのではないかと思われる。幅は25cm、深さ８cmで幅の広い割に深さが浅いものである。掘り方は割合不規則で、底に若干の凹凸が見られる。断面はなるいU字形を呈する。

床はローム層を直接床としており堅緻で、ほぼ水平に構築されている。床下には４基の土壙が検出されたが、直接的に住居址に関わるものでなく、住居址が構築された以前のものと思われ、土壙上面はロームにより貼り床がなされている。

柱穴はP_1～P_7が検出された。本址は北側に拡張されており、拡張以前の住居址柱穴はP_4～P_7で拡張後のものと比べ、その大きさ、深さ等は小規模なものである。尚、これらの柱穴は２～３回程度の建て替えが行われている。柱穴位置等より推定すると、旧住居址は新のものに比べ規模も小さい。拡張後の主柱穴と思われるものはP_1～P_3、P_6・P_7で、これより考えると７本柱と云う不規則な柱構成になる。柱穴は98×82cm～69×63cmと大きなもので、深さも70～60cmと深いものである。住居址の規模等を考慮した場合、この位しっかりした柱構造を持たなければ上屋構造が維持できなかったと考えられる。

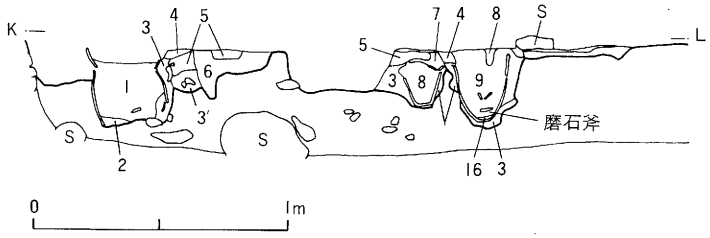
炉址は石囲い炉址で住居址の中央部より西側寄りの奥まった位置に構築されている。旧住居に伴なう炉址は検出されなかったことから、拡張に際して炉址の移動は行われず、旧住居の炉を新住居の炉として用いていたことが考えられる。掘り方は154×134cmの方形で、四辺に板状若しくは柱状に近い礫を用いている。礫は加熱を受けており亀裂等が見られる。また、石囲いの裏詰めに利用されている礫は石棒であり、完形のものを３分割し、その２点を用いている。炉址内にはローム粒、焼土粒、炭化物を含む黒褐色土、暗黄褐色土が堆積し、焼土の堆積はわずかで、掻き出されたような様相を示していた。

埋甕は住居址南東側の入口部と思われる位置に３箇所、ほぼ長軸線上に並んで検出された。位

第14図　第24・26号住居址（1/60）

置等より考えると、No.2・3は旧住居址に伴なうものと思われ、No.1は拡張後の住居に伴なうものと考えられる。埋甕No.2、No.3の上面には貼り床がなされており、埋甕の新旧関係はその切り合い関係より把握できる。No.3がNo.2の貼り床を切り、掘り込みを作っていることにより、No.3がNo.2よりも新しい時期に埋設されたことが看取できた。No.1との関係については、切り合い関係では新旧関係は把握できなかったが、埋設されていた土器よりみると、No.1が最も新しい時期に属するものである。以上のことをまとめてみると埋甕はNo.2、3、1の順序で埋設されたことになる。No.1は胴部下半を欠損するもので、正位の状態で口縁部を若干床面より出す感じで水平に設置している。掘り方と土器の間は、粘性のある黄褐色土(第3層)で埋めている。埋甕内には炭化物を若干含む暗黄褐色土が入っており、底近くより磨製石斧が出土した。No.2は口縁部を欠損するもので上部に貼り床がなされている。埋甕内には炭化物を含む暗黒褐色土が入っていた。No.3は口縁部を欠損するもので、正位の形で埋設され、掘り方と土器の間はロームブロックの混る褐色土を埋めている。埋甕内にはロームブロックが混る褐色土が観察でき、堆積状態等より人為的に埋めたものと思われるものである。また、底部近くより磨製石斧が水平の状態で出土した。

遺物の出土状態　遺物は埋甕の他に若干の土器片が覆土内より出土している。また、炉址の裏詰め石に用いられていた石棒の接合関係についてであるが、裏詰めに用いられていたものは接合関係があるが、置かれた状態に於いて接合するものでなく、一方が反転した状態で置かれており、置いた後に折れたものでないことを示している。この2点に、P_6の西側床上61cmより出土したものが接合した。これより考えると炉址構築時点に於いては一本の石棒は3分割されていたことになり、その内1点は住居址廃絶時に屋外にあったと考えることができようか。以上のような状況よりこの石棒は住居址構築の祭祀に関わったものとして捉えることもできよう。また、本址は他の住居址よりも規模的に大きいことなどより他の住居址とは性格の異なる住居址として捉えられようか。



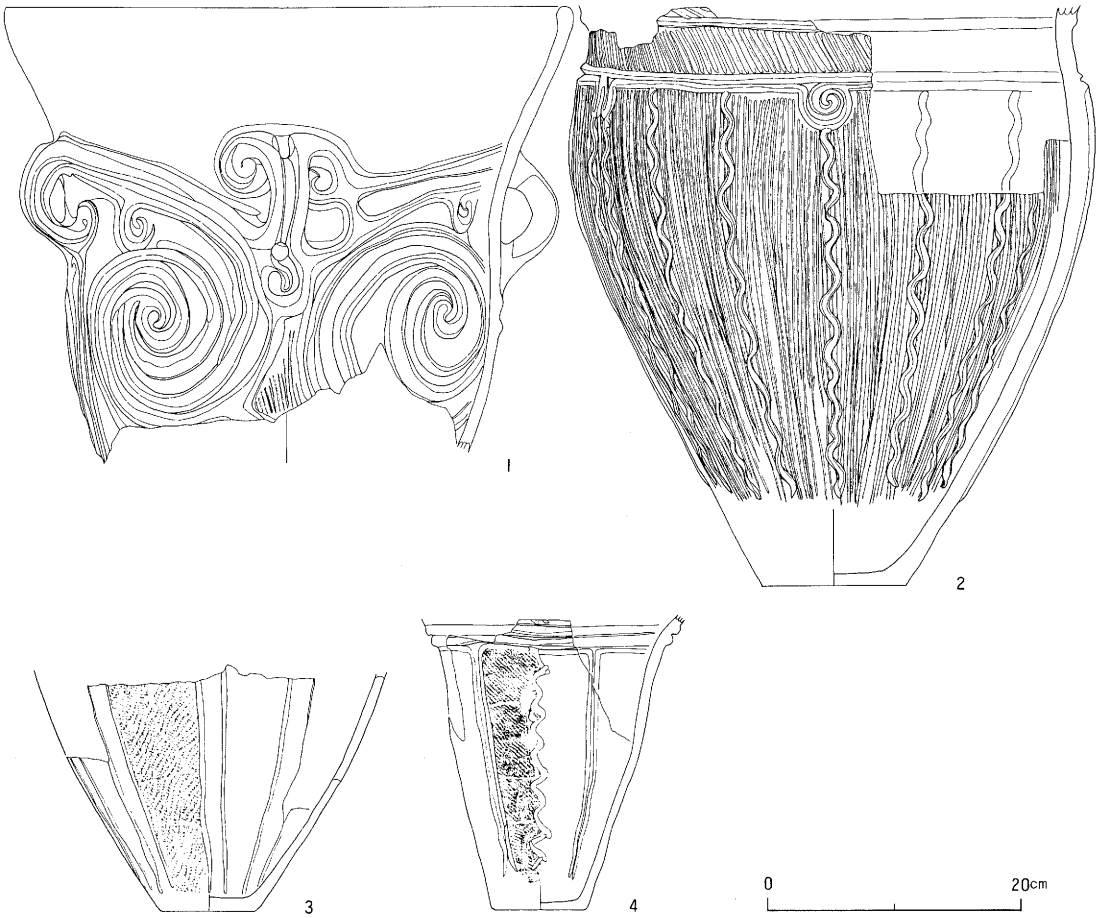
1、暗黄褐色土(炭化物を含む)　2、明黄褐色土　3、黄褐色土(埋め土)　4、黒褐色土(炭化物を含む)　5、ローム　6、黒色土(ローム粒子・炭化物を含む)　7、褐色土　8、暗黒褐色土　9、ロームブロック混入褐色土(人為的)　10、小礫のみの礫層

第15図　第24号住居址埋甕セクション(1/40)

出土遺物(第16図)

1：住居址入口部と思われる位置に埋設されていた埋甕No.1である。胴部下半は欠損しており、欠損部には調整が加えられている。器形は口縁部が直線的に大きく開くもので、胴部は上半に若干の脹みをもつ甕形を呈する。頸部にはX字状の把手が付けられている。文様は左巻きの隆帯の渦巻文を4単位に構成している。地文は条線状のものを空白部に施文している。

2：1と同様に埋甕No.3に用いられていた土器である。器形は口縁が内彎し、頸部がくびれる



第16図　第24号住居址出土土器(1/6)

ものかと思われる。胴部上半は脹みをもち底部の小さいものである。口縁部は欠損しており、欠損部には調整が加えられている。文様は頸部を隆帯で区切り文様帯を設け、右傾する沈線を施文する。胴部は隆帯により蛇行懸垂文を付けている。地文は条線状の沈線である。

3：1・2同様埋甕No.2に用いられていたものである。口縁・胴部上半部を欠損する。尚、欠損部は調整が加えられている。器形は、胴部に脹みをもち底部で小さくなる深鉢形である。文様は地文にＲＬの縄文を施文するもので、垂下する磨消部をもつ。

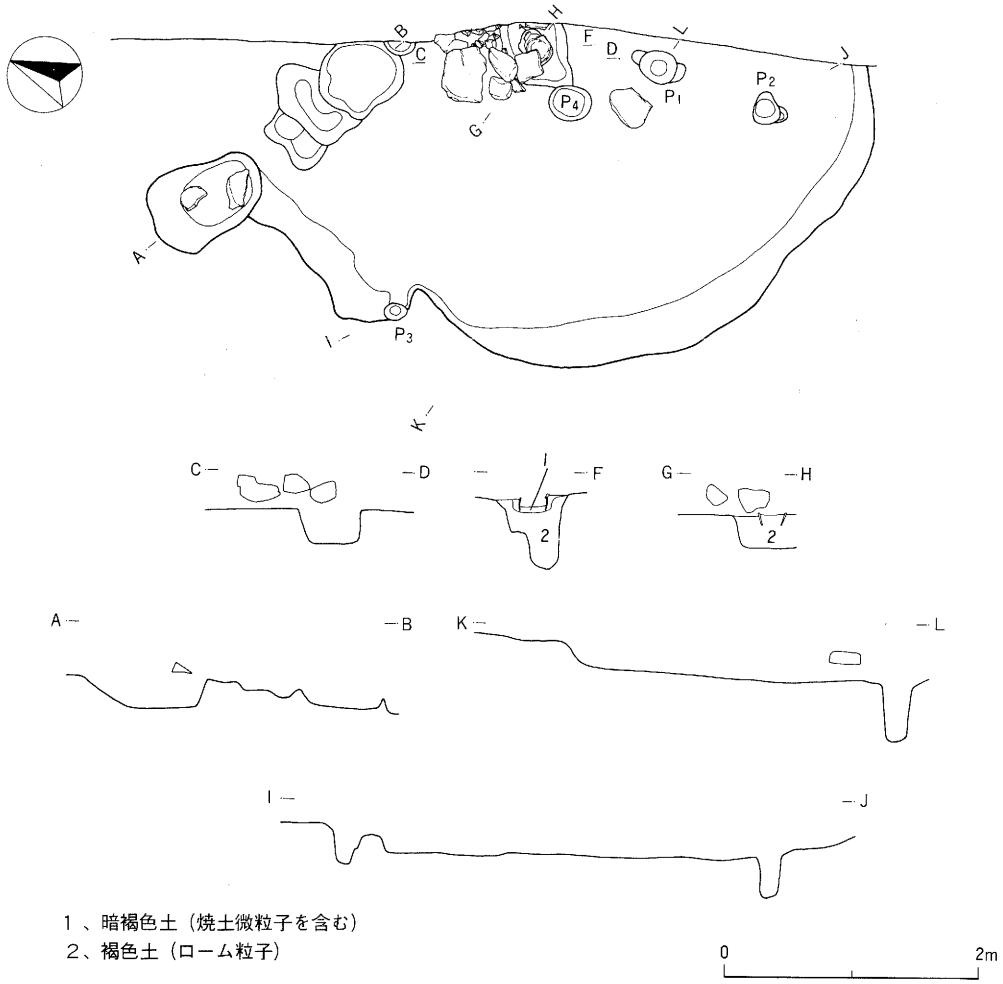
4：胴部に脹みはみられず、U状を呈するものである。口縁部は欠損するが内彎するものかと思われる。文様は地文にＬＲの縄文を施文するもので、沈線により凵状の区画をつくり、蛇行する沈線を垂下させる。区画間は磨消しが行われている。

第32号住居址（Ⅱ区16号住居址）（第17・18図、図版第17－2・25－4）

検出状況　本址はⅡ区Ｂ－26グリッドを中心に黒色土の落ち込みが検出されその存在が明らかとなったものである。住居址の½ほどは用地外に当たり、北壁側は土壙によって切られているためにプランの大略は南壁等により把握した。

遺構の構造　本址はその½ほどが用地外にあるためその規模は把握できなかったが、検出された炉址を住居址のほぼ中央部と仮定すると直径540cm位の規模が想定できる。住居址のプランは南・西壁等により考えると不整楕円形に近い形を呈するものかと思われる。

壁は南・西壁共にローム層内に掘り込まれている。壁の掘り方は22cmと深く緩やかな傾斜をもって立ち上がる。北壁側は地形の関係上褐色土中に掘り込まれていたと思われるが検出できなかった。



1、暗褐色土（焼土微粒子を含む）
2、褐色土（ローム粒子）

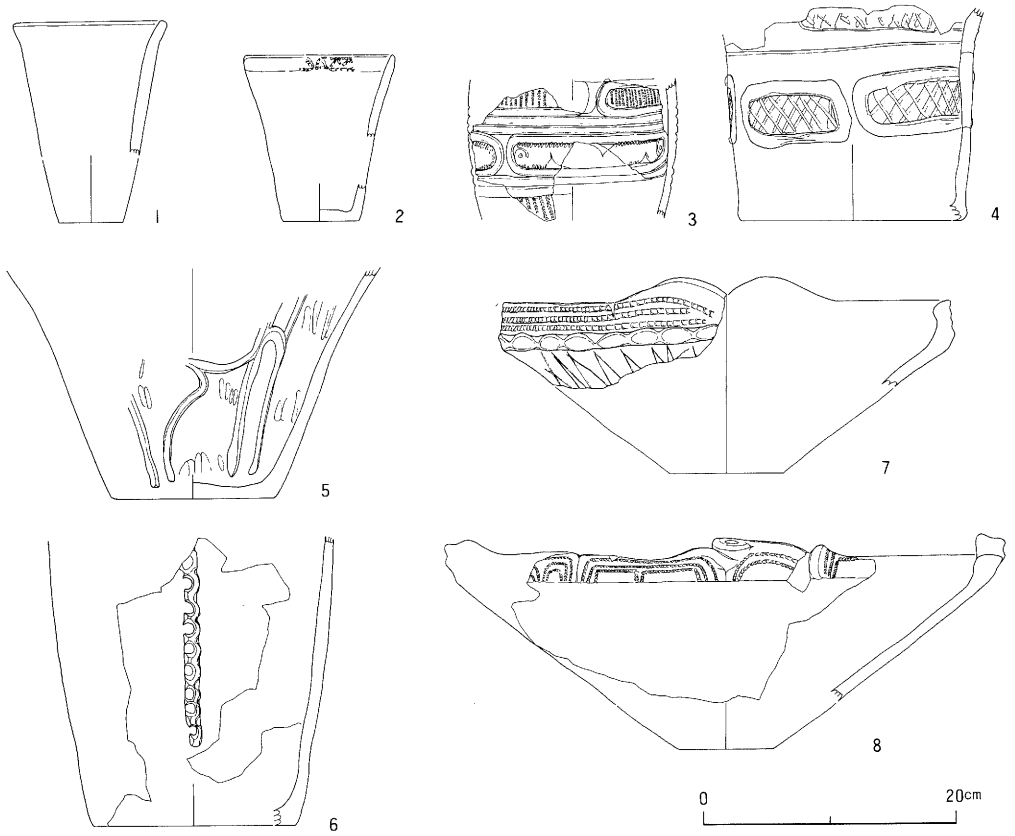
第17図　第32号住居址（1/60）

床はローム層を直接床としており、皿状をなす形で構築されている。全体的に床は堅緻でなく軟弱な部分がみられた。

柱穴はP_1～P_4が検出されたが、その配列は不規則である。深さは28～44cmと深く、ほぼ垂直に掘り込まれている。配列が不規則な点などを考えると上屋構造がどのようなものになるか問題である。

炉址は埋甕炉で住居址のほぼ中央部に設けられている。埋甕炉は新旧があり、旧の炉を壊し新の炉が設けられている。掘り方は50×55cmほどの不整方形を呈するもので、そのほぼ中央部に土器を埋設する32×22cm、深さ30cmの楕円形を呈する掘り方を設ける。掘り方はロームブロックを含む褐色土で、ある程度埋め、土器胴部を埋設している。旧埋甕炉は西側を新埋甕炉により壊されているが、東側は殆ど原型を残し、内部に焼土及び炭化物を含む褐色土が堆積していた。尚、炉址周辺に大小の礫が集中していたが、直接的に炉址に関わるものでなく、住居址廃絶の際に炉址を中心とした範囲に捨てられたものだと考えられよう。

遺物の出土状態　遺物は埋甕炉に用いられた土器の他には覆土内より若干の土器片が出土したに過ぎない。



第18図　第32号住居址出土土器(1/6)

出土遺物（第18図）

1：口縁部が外彎する形で折れるもので、胴部に脹みはみられず直線的に底部に至る。無文のもので胴部に縦方向のナデ痕がみられる。

2：底部から口縁部にかけて直線状に開くものでコップ状を呈する。文様は口縁部に楕円形の連続刺突文による横帯文をもつものである。

3：胴部のみのもので、器形はほぼ胴部中央部に脹みをもつものである。文様は低い隆帯により楕円形の横帯区画文を構成するもので、内部に連続刺突文を施す。

4：埋甕炉として埋設されていたもので底部・口縁部を欠損する。器形は口縁部が直線的に開く器高の低いバケツ状の深鉢であったと思われる。施文は隆帯による横帯区画をもつもので、区画内は格子目状の沈線が施文される。

5：胴部上半を欠損するもので、胴部中央で若干外彎し開く深鉢形を呈する。文様は不規則な隆帯が垂下するもので、器面には指圧痕が残る。

6：器形は胴部が直線的に開く深鉢形を呈し、口縁部・底部を欠損する。文様は胴部に隆帯が垂下する。隆帯上は押圧が施される。

7：浅鉢で底部を欠損する。口縁部には2箇所突起をもつ、文様は口縁部に連続刺突文を3条めぐらせ、頸部に押圧隆帯をもつ。胴部にはヘラ状工具による縦位の沈線が山形状に連続し施文される。

8：浅鉢で底部を欠損する。口縁部には捻り把手をもつ。文様は口縁部のみにペン先状工具による連続刺突文が∩状に施文される。

第33号住居址（II区第17号住居址）（第19・20図、図版第18－1）

検出状況　本址はII区C－29グリッドを中心に黒色土の落ち込みが検出されたもので、北側は傾斜する地形より考えると、褐色土内に住居址が構築されていたと思われるが、床面は地形に沿って崩れ落ちたと思われ検出ができなかった。

遺構の構造　住居址のプランは南壁より推定すると不整円形を呈するものと思われる。住居址の規模については、検出された部分より推定すると直径450cmほどの規模をもつものかと思われる。

壁は南・西壁はローム層に掘り込まれており検出が可能であった。掘り方は若干の傾斜をもつもので、高さ22cmを計る。

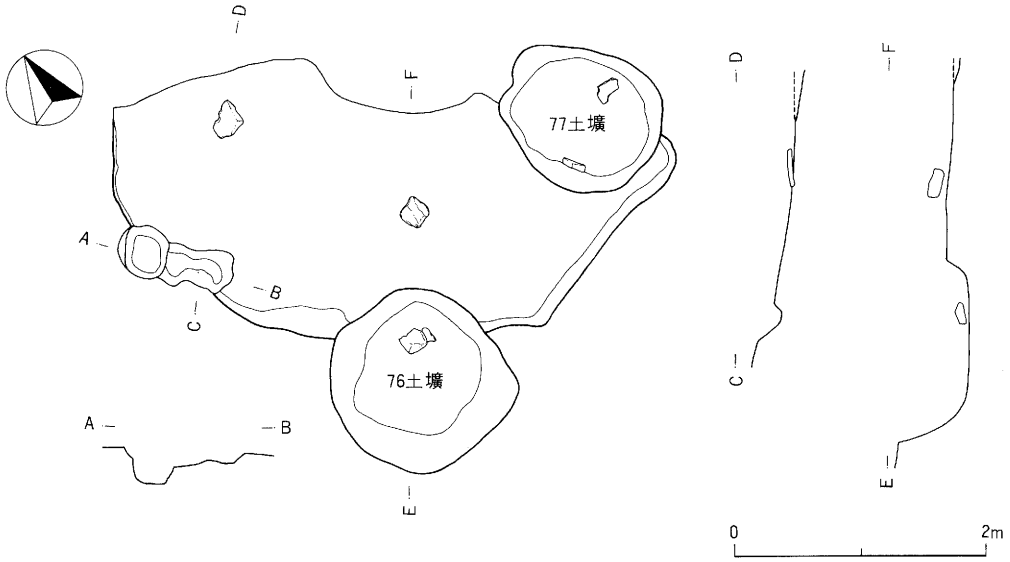
床は住居址南側はローム層内に、北側は地形の都合上褐色土層内に構築されていたものと思われる。床は全体的に軟弱で、若干の傾斜をもち皿状を呈する。

柱穴はP_1が1箇所検出されただけであり他には検出されなかった。この柱穴は深さ18cmで内側に向く傾斜で掘られている。

炉址は検出されなかった。

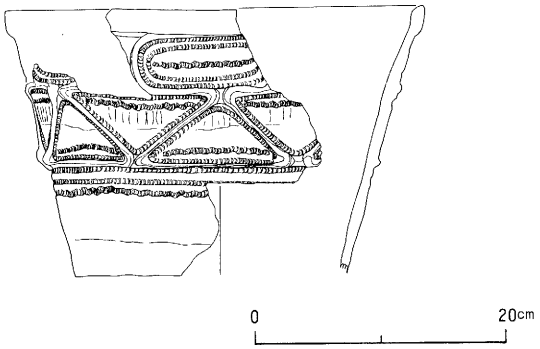
遺物の出土状態　本址よりの遺物は覆土内より若干の土器片が出土しているだけである。

出土遺物（第20図）



第19図　第33号住居址(1/60)

器形は口縁に最大径をもつバケツ形に近い形を呈するもので、口唇部が厚みをもつ。文様は胴部に隆帯による楕円・三角形の横帯区画文を構成するもので、区画内に連続刺突文を施文する。土器の輪積み痕を残し、器面整形の際の指圧痕がみられる。



第20図　第33号住居址出土土器(1/6)

第36号住居址（II区第20号住居址）（第21・22図、図版第19－2・25－5）

検出状況　本址は25号、29号、31号住居址の貼り床下より検出されたもので、北壁側は検出できなかったが、住居址プランの大略は各コーナー部に検出された柱穴及び南・東・西壁により把握し得た。尚、本址は78号土壙と重複関係をもつが、土壙上部に本址の貼り床が検出され、本址よりも古い時期のものであることが確認できた。

遺構の構造　本址のプランは柱穴、周溝等の位置より把握できた。それによると西側壁のほぼ中程に脹らみをもつ五角形に近いプランを呈する。住居址の規模は426×442cmのもので大きな住居址ではない。

壁は南・西側に検出されたが、北側壁については褐色土中に壁が掘り込まれていたためか検出

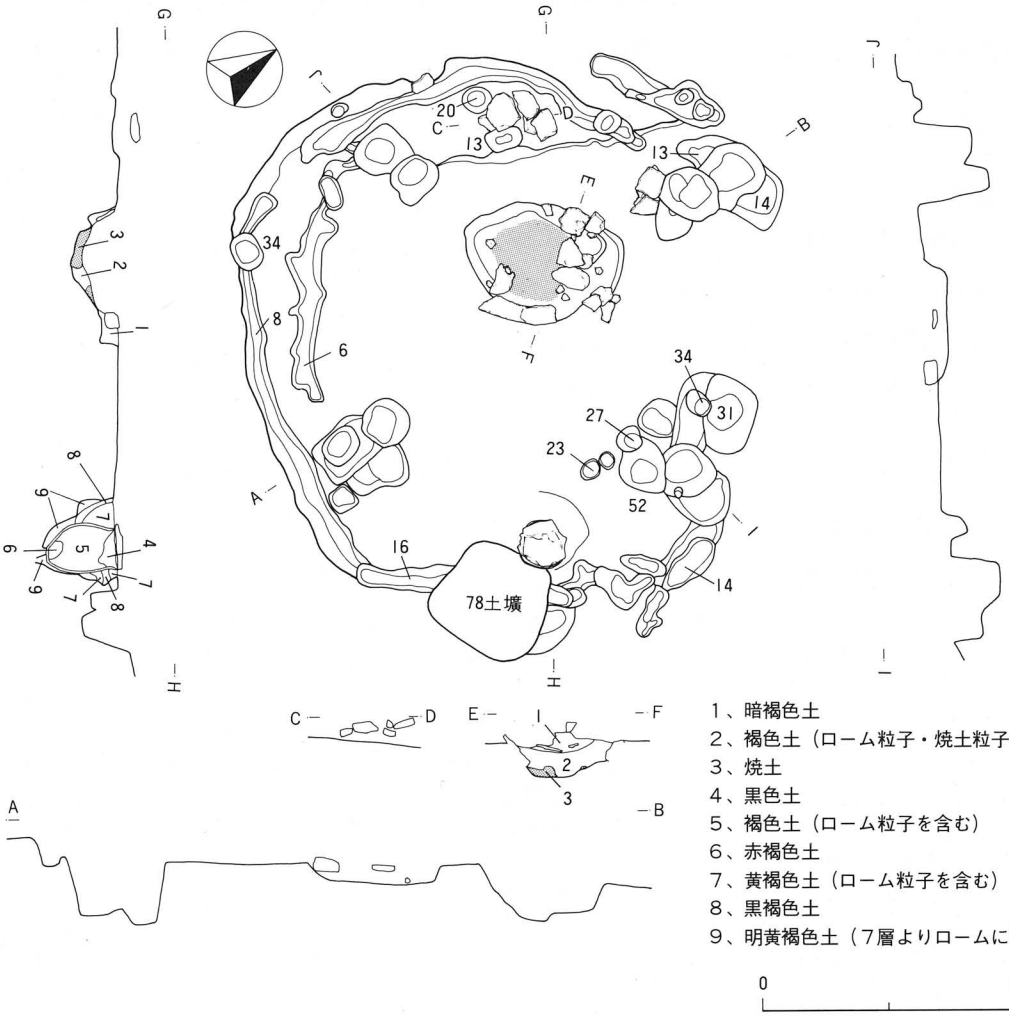
はできなかった。掘り方は南壁側で18cm、西壁側で13cmと割合しっかりしており、立ち上がりも直に近い形である。

周溝は南・東・西壁下に検出された。不規則な掘り方であるが、幅16cm、深さ９cmで割合しっかりしたものである。

床はローム層を直接床としており全体的に堅緻でほぼ水平に構築されている。

柱穴は住居址の東西南北各コーナー部に検出された。柱穴の深さは45～58cmである程度一定である。各柱穴共に３回以上の建て替えが行われている。柱構造は各コーナーに柱をもつ４本柱の構造のものと思われる。

炉址は石囲い炉址で住居址の中央部よりやや奥まった位置に設けられている。掘り方は128×86cm、深さ26cmの楕円形を呈する。石囲いに用いられている礫は扁平の割合小振りのものである。石囲いの半分は取り去られていた。内部には上層に褐色土、下層に焼土が堆積していた。



第21図　第36号住居址(1/60)

埋甕は入口部と思われる東壁ほぼ中央部に検出された。埋甕は40×36cmの扁平の礫を蓋とするもので、口縁部を欠損する土器を正位の状態で埋設している。掘り方は直径70cm、深さ60cmほどの不整円形で土器を埋設した後黄褐色土と黒褐色土を交互に埋めている。埋甕内には上部に流れ込みによると思われる黒色土が、下部にはローム粒子を含む褐色土が堆積していた。

この他の施設として石壇かと思われる集石が西側奥壁ほぼ中央より検出された。この集石は25cm大の割合扁平な礫5個より構成されている。礫の配置のし方は割合不規則であるが、ほぼ平坦な面を出すように置かれている。この集石の付近には深さ13～20cmの不整形のピットが検出できた。この集石が直接的に石壇かどうかは判断できなかったが、位置的関係より考えると石壇として捉えることができよう。

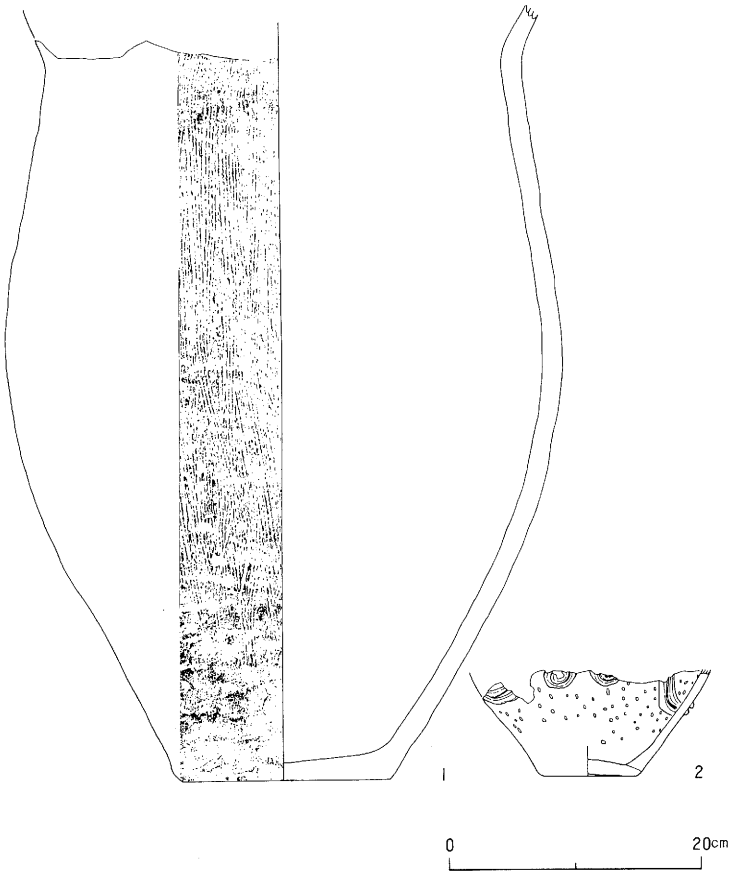
住居址と重複関係をもつ土壙であるが、時期的には上面に本址の貼り床がなされていることより本址よりも古いものと思われるが、土器等の出土がなく、時期を判断することはできなかった。土壙内にはロームブロック・焼土粒子を含む褐色土が上層に、下層には焼土が堆積していた。

遺物の出土状態　本址よりの出土遺物は埋甕に用いられていた土器の他に、北側柱穴脇の礫の下より土器底部が出土している。

出土遺物（第22図）

1：胴部の長い深鉢形で口縁部を欠損する。埋甕として埋設されていたもので欠損部は調整が加えられ、ほぼ平らに仕上げられている。文様は櫛状工具により垂下する形で沈線が施文されている。

2：底部・胴部が遺存するもの。器形は胴部に脹みをもつもので底部が若干上げ底状を呈する。文様は2本一組の隆帯を弧状・渦巻状に付けている。地文に刺突文をもつ。



第22図　第36号住居址出土土器(1/6)

2　屋外埋甕

第１号屋外埋甕（第23・24図１、図版第25－６）

検出状況　大石西北のＤ－２グリッドに位置しており、第２層の掘り下げ中に発見された。

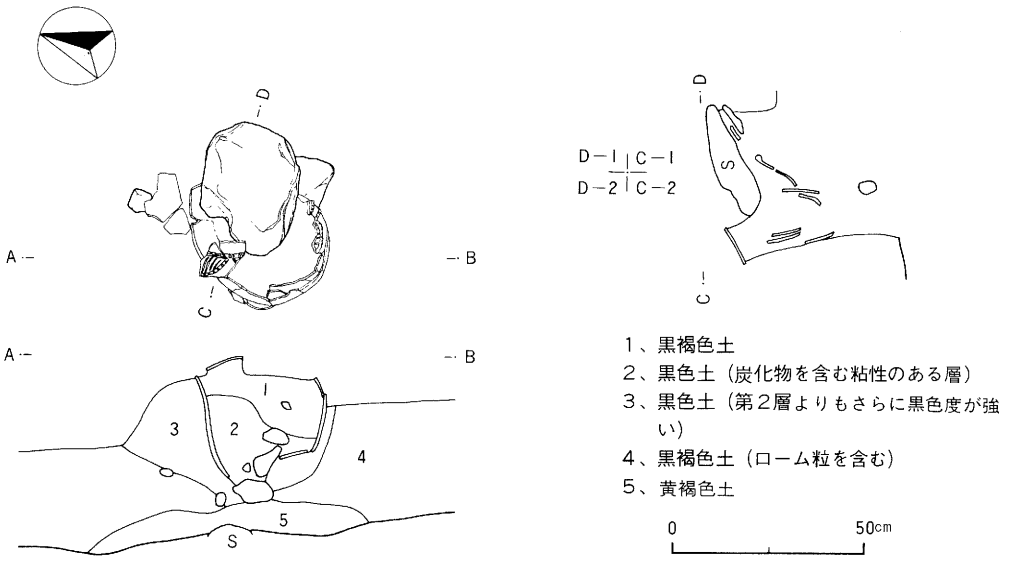
遺構の構造　土器（第24図１）は第２層から第３層中へ掘り込んでいる。黒色土中のため掘り方のプランは検出できなかったが、埋設後に周囲を埋め戻している様である。土器は深鉢形で正位に埋設されており、底部を欠損している。土器内には拳大から人頭大の扁平礫７個が下部に積み上げられた状態で検出された。一方、土器上面にはＡ４大の厚い扁平礫が、土器の上に蓋をした状態で遺存していた。

本例は調査中は単独土器として扱ったものであるが、ここでは縄文時代中期中葉の屋外埋甕として記すこととする。

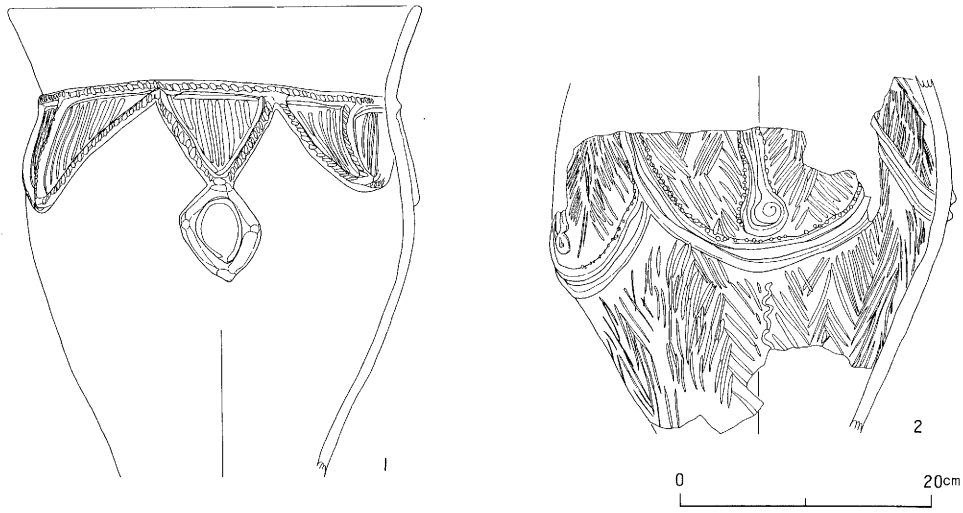
第２号屋外埋甕（第10・24図２、図版第26－７）

検出状況　17・18号住居址の精査に伴ない検出されたものである。上面に17号住居址の貼り床がなされていた。検出当初住居の埋甕かと思われ、住居址の想定でき得る範囲にサブトレンチを設定し調査したが、遺構は確認できず屋外埋甕として取り扱った。

遺構の構造　土器（第23図２）は口縁部・底部を欠損するものを用いている。土器は径90cm、深さ28cmの掘り方のほぼ中央部に正位で埋設している。埋設後、土器の外側にはローム粒を含む黒色土（第１層）、炭化物を若干含む色調のくすんだ暗黄褐色土（第２層）で埋めている。埋甕内には、暗黄褐色土・骨片を含む黒色土がみられた。



第23図　第１号屋外埋甕（1/20）



第24図　第1・2号屋外埋甕(1/6)

遺物の出土状態　埋甕内からは遺物の出土はみられなかった。

埋甕に用いられていた土器は口縁部、底部を欠損するもので、胴部中央部が脹む深鉢である。文様は胴部に2本からなる隆帯を弧状に配して区画をし、区画内には末端が渦巻状を呈する隆帯が垂下する。隆帯脇は刺突が施されている。地文はやや粗雑な綾杉文である。　（守矢昌文）

第3節　古墳時代の住居址と遺物

第2号住居址（第25・26・27図、図版第4－1・26－1）

検出状況　A－2グリッドに一括土器と焼土を発見し、これを中心に精査を進めた。住居址は約1/2ほどが用地外のため、その西側1/2ほどを調査したことになる。しかし北側のプランは黒色系の土層内に設けられていたためか、この部分の床面や壁については判然としなかった。しかし北コーナー部に柱穴が検出されたことから、不確実ではあるがプランは推定しえた。

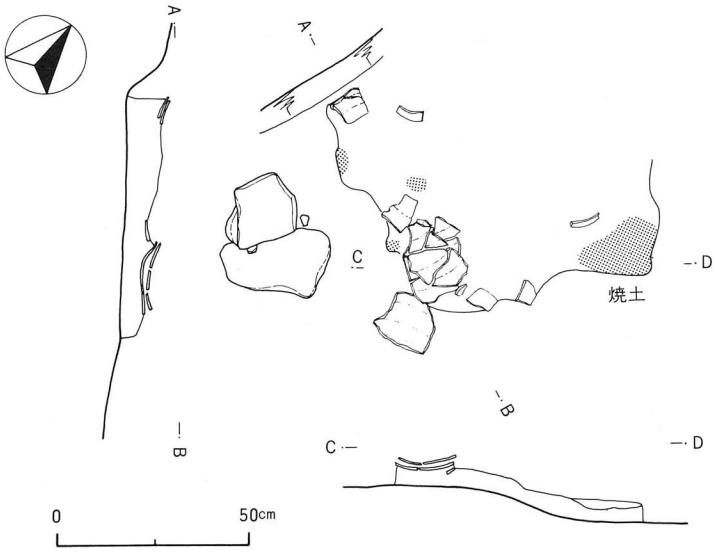
遺構の構造　本址は西壁中央部にカマドを有する隅丸方形に近いプランの住居址であろう。西壁の中点を直に通した主軸線はN62°Wを示し、主軸線に直交する軸線の長さは4.8mある。

壁面は掘り込みの深い南壁でやや丸味をもっており、壁高は25cmほどある。また、壁の西コーナーと北コーナーは若干の丸味を帯びている。

床面は中央南側では地山面を直接床としているため、地山礫が床面に突出している。一方、中央北側は黒色系の土層内に設けていたようだが、この部分については判然としなかった。

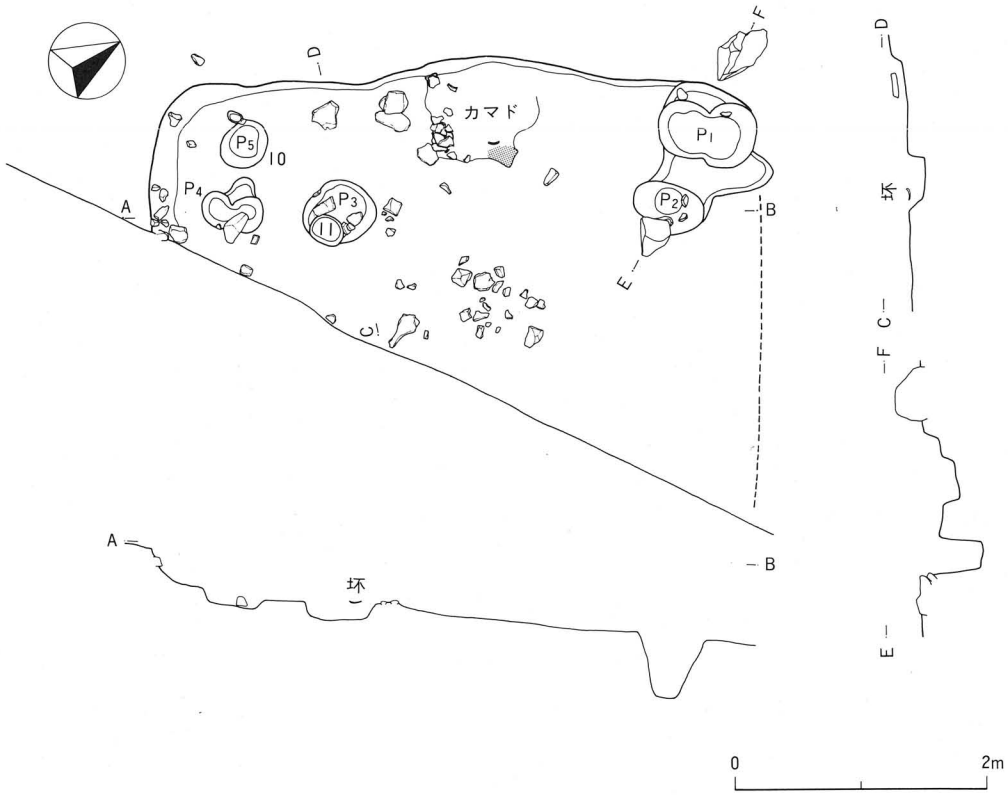
カマドは西壁中央部の主軸線上に構築されていたものと考えられる。石組は検出されなかったが、焼土と一括土器周辺に認められた白色粘土のブロックの存在から推定される。

カマドの南には56×50cmの円形ピットP_3が設けられている。貯蔵穴であろうか。

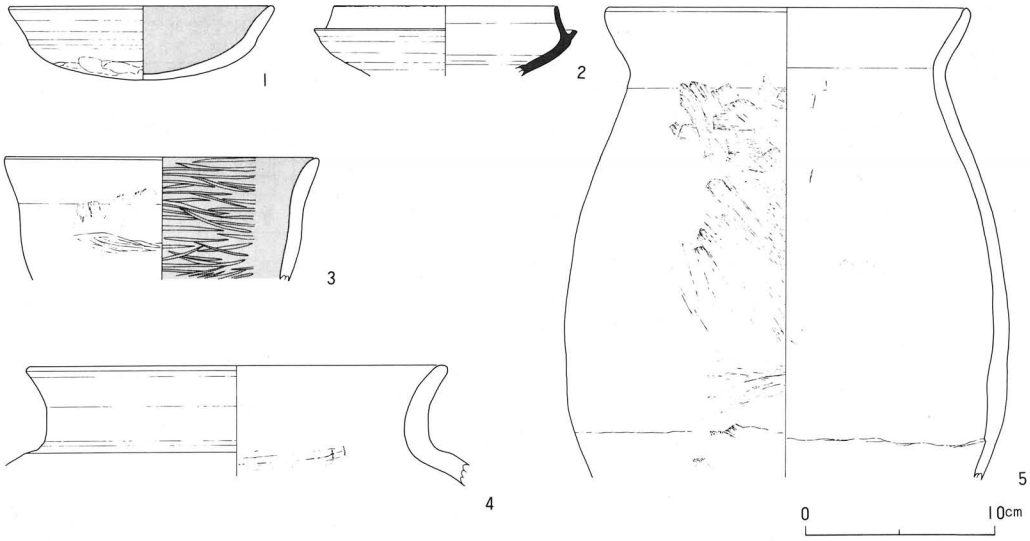


第25図　第２号住居址カマド(1/20)

柱穴は北コーナー部と西コーナー部に設けられており、西コーナー部のP_4・P_5は浅く、北コーナー部のP_1・P_2は掘り方が深い。これらは住居址コーナーの対角線上に位置する隅柱と考えられ、西・北両コーナー部のものとも内側から外側へ移動している。これは住居の拡張によるものと考えられるが、床面や壁等からは拡張の状態を把握できなかった。



第26図　第２号住居址(1/60)



第27図　第２号住居址出土土器(1/4)

遺物の出土状態　カマドと考えられる位置からは土師器甕と須恵器坏が一括出土し、P_3内には黒色土器が遺存していた。その他は覆土中より出土した。

出土遺物（第27図）

土器　坏（１・２）・鉢(3)・甕（４・５）がある。１は外側へ大きく開いた口縁部から弱い稜を境に丸底の底部へ移行する器形。口縁部は横ナデ、腰部はナデ、底部はヘラ削り後調整されており、内面はヘラ磨きと黒色手法がとられている。胎土には白色粒・雲母を含み、焼成は堅緻である。２は須恵器の坏身で胎土に白色微粒等を多く含み青灰色を呈す。３は口縁部が横ナデ、頸部以下はハケ調整し、体部のみハケ調整後に横方向のヘラ磨きを加えている。内面は横方向のヘラ磨きと黒色手法をとる。４は口縁部内外を横ナデ、胴部内面はハケ調整されている。５はカマド周辺から一括出土した。胴下位に最大径をもつ長胴の甕であろう。口縁部は短かく、端部はやや内彎気味に立ち上がっており、胴部は全体に歪んでいる。口縁部内外は横ナデ、胴部内外はハケ調整されており、内面はハケ調整後丁寧な調整が加えられている。

第11号住居址（第28・29・30図、図版第９－１）

検出状況　本址は第９号住居址の床面精査中に発見された住居址である。住居址は2/3ほどが用地外にあるため、プラン等については明らかでない。

遺構の構造　プランは隅丸方形を呈すると思われる。

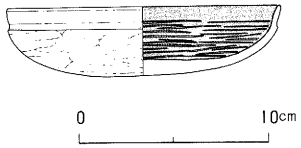
壁は南壁側が地山面への掘り込みが深いため45cmほどの壁高をもつが、東壁中央部から東コーナーにかけては地山が不安定なため壁高も低く、しかもプランが判然としない。

床は地山面を直接床面としている。全体に掘り込みの深い南側では堅緻な床であるが、東側は軟弱で凹凸が認められる。

第28図　第９・11号住居址(1/60)

柱穴は南コーナーの隅柱であるP_1・P_2の他にP_3があり、南コーナーの隅柱には建直しが認められる。P_4は柱穴以外の施設であろう。また、東壁中に土壙様のピットが検出されたが重複関係は判然としなかった。本址に伴うものではないだろう。

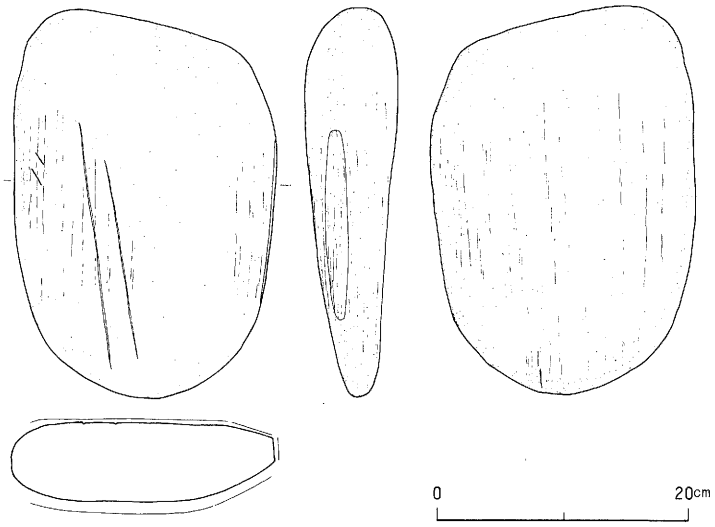
遺物の出土状態　出土遺物は土師器と須恵器の破片でほとんどが覆土中の出土である。床面からの出土遺物は坏1点と砥石1点のみである。



第29図　出土土器(1/4)

出土遺物（第29・30図）

土器　坏がある。坏は口縁部の短い有稜の坏である。口縁は外傾して開き、稜下部は内彎しつつ丸底の底部へ続いている。口縁部は横ナデ、稜下から底部はヘラ削りの後磨いているようである。内面はヘラ磨きが施され、内底面では同心円上に弧を描いており、暗文に似ている。内面は黒色手法をとっているが部分的に黒色化していない。外面は全面紅彩である。胎土は比較的良く、微赤粒等を含み焼成は普通である。



第30図　第11号住居址出土砥石(1/6)

砥石　扁平な安山岩を用いており、表裏の他側面にも平坦な磨り面を設けている。表面には並列する長短4本の沈線状のキズが認められることから、鉄器の砥石としても使用されたことが窺われる。

（鵜飼幸雄）

第4節　平安時代の住居址と遺物

第3号住居址（第31・32・33・34図、図版第4－2・26－2）

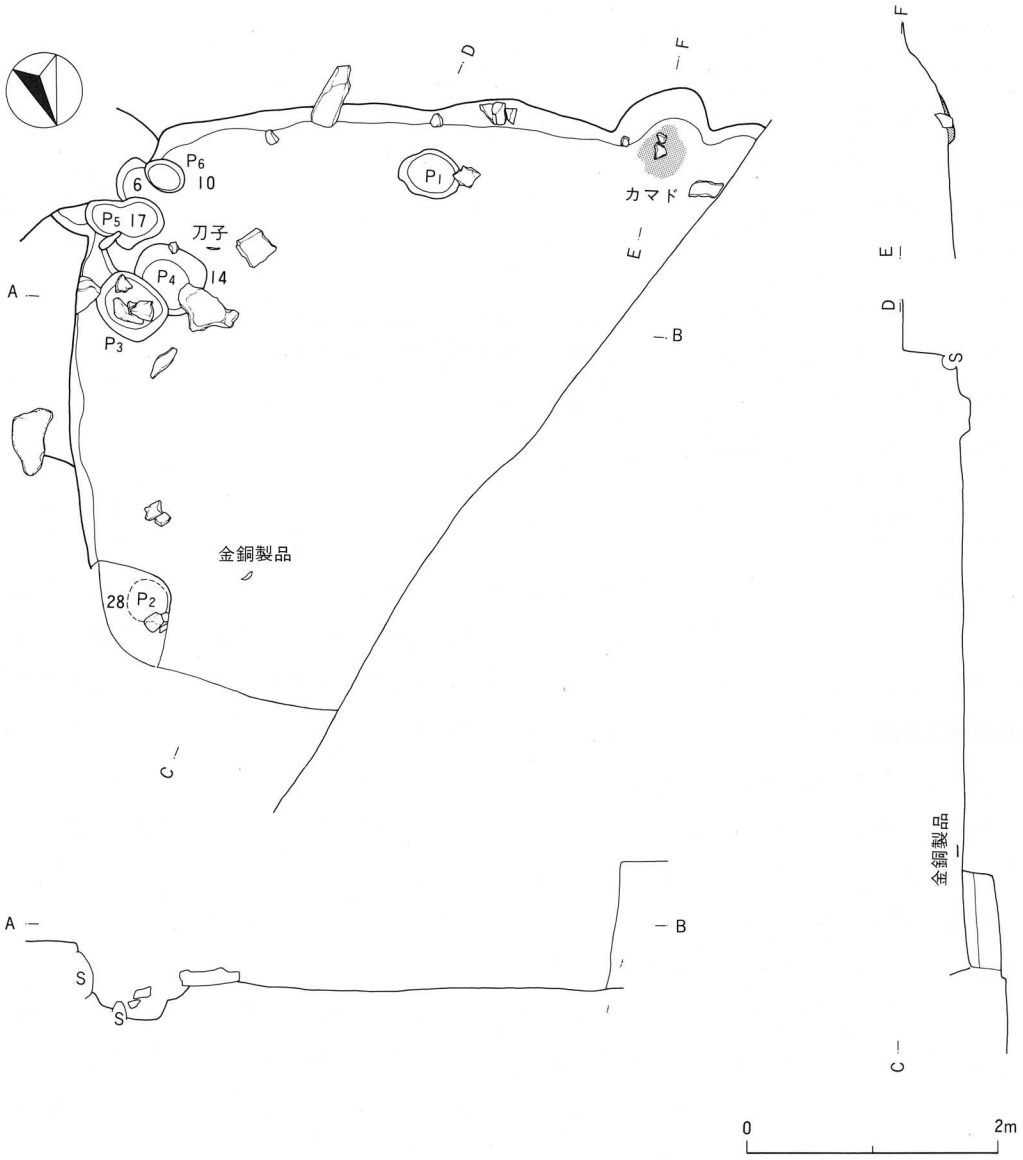
検出状況　本址は住居址の北西部約½ほどが用地外にある。しかし住居址の東・西・南の3コーナーをほぼ把握でき、また西コーナー部にカマドが設けられていたことから、プランは大略であるが推定し得た。ただ東側コーナー部は下位の第4号住居址の西コーナー部と重複関係にあるため貼床の広がりによって把握したが、柱穴周辺は判然としなかった。この部分での本址の床面は

下位の第４号住居址西コーナー部の床面より約30cm上位に設けられている。

遺構の構造　西壁コーナー寄りにカマドを有する住居址である。平面形は540×440cmほどの隅丸長方形を呈し、主軸はS17°Wを向く。

壁は地山への掘り込みの深い南壁と東壁が深く40～45cmを測るが、北壁は黒色系の土層中に設けられていたため判然としなかった。

床面は地山を掘り込んだ後埋め戻して貼床をしており、水平で堅い。東コーナー部は第４号住

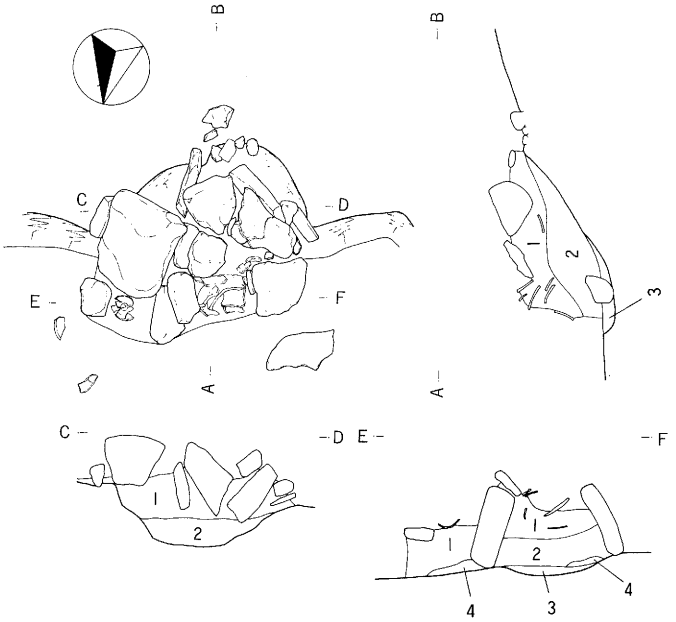


第31図　第３号住居址(1/60)

居址と重複するため、この部分には厚さ10cmほどのロームを主とした貼床を行っている。

カマドは西壁の西コーナー寄りの位置に構築されている。石組カマドで、袖石には厚い扁平礫を用いて直立させており、天井石も認められる。燃焼部は窪んだ底面で、焼土が残っている。両袖石間の燃焼部底面には拳大の礫が遺存しており、これが支脚であると考えられる。燃焼部奥壁は西壁ラインより半円形に突出しており、煙道部は緩やかな傾斜をもって外へ続いている。

柱穴はP_2・P_5・P_6であり、南コーナー部のものは浅く数回の建直しが認められる。いずれも住居址コーナーの対角線上に位置する隅柱であろう。P_3とP_4は柱穴以外の施設と考えられる。P_3内には緑色岩の角礫が3個遺存していた。また、工作台を想定させる厚い扁平礫と角礫が床面に遺存しており、P_4の脇からは刀子が出土した。したがって両ピットは何等かの作業に関わる貯蔵穴的施設とみてよいであろう。



1、黒褐色土（粘性を有し若干の焼土粒を含む）
2、黒褐色土（粘性が弱く焼土・炭化物を含む）
3、焼土
4、黄褐色土（礫混入・炭化物・焼土を含む）

第32図　第3号住居址カマド(1/30)

遺物の出土状態　遺物は覆土からも若干出土したが、床面でまとまった出土状況を示したのはカマドを中心とした部分である。カマドでは焚口部と左袖部周辺から坏の出土をみ、カマド内には甕の胴上部と底部が一括出土した。またP_4の脇からは刀子、P_2に近い東側床からは、床面から若干浮いた位置で金銅製金具が出土した。

出土遺物（第33・34図、図版第34図）

土器　皿・坏・高台坏・碗・甕がある。

皿(1)　底部から立ち上がる部分がくびれ、腰部がやや張り、口縁がわずかに外反気味に開く皿。粘土紐巻き上げ後、左回転によるロクロ成形されており、底部は糸切りで内底側に厚く仕上げられているのが特徴である。内外面は丁寧にロクロナデされているため外面のロクロ痕は顕著でなく、特に内底は丁寧に調整されている。胎土は良好で、焼成も他のものに比べて良い。色調は赤褐色を呈す。

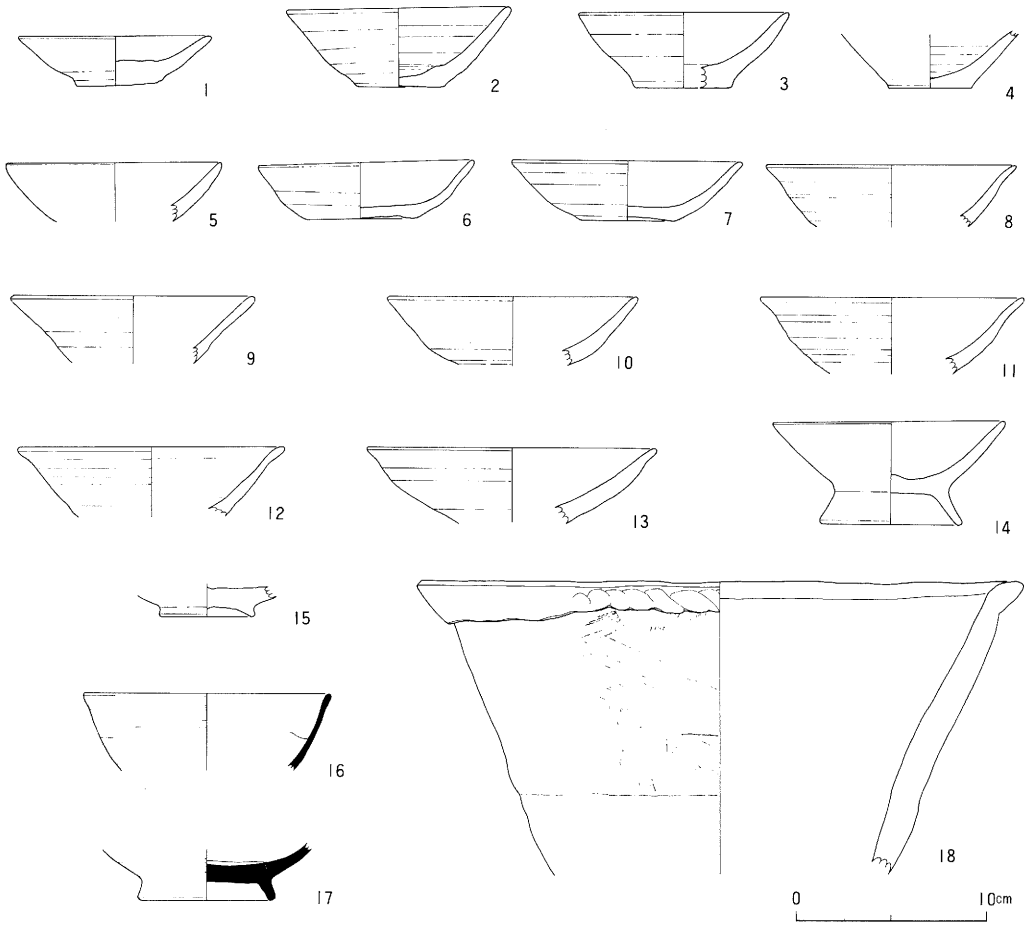
坏はロクロ成形糸切り底であり、これらは口径の大きさによって大・中・小に3分類される。

粘土紐巻き上げ後、左回転によるロクロ成形されており、底部は糸切りで内底側に厚く仕上げられているのが特徴である。内外面は丁寧にロクロナデされているため外面のロクロ痕は顕著でなく、特に内底は丁寧に調整されている。胎土は良好で、焼成も他のものに比べて良い。色調は赤褐色を呈す。

坏はロクロ成形糸切り底であり、これらは口径の大きさによって大・中・小に3分類される。

Ⅰ類（2～6） 口径が11cm代と比較的小さいもの。2・3は底部から立ち上がる部分がくびれ、口縁は直線的に開く。全体に器肉が厚く、特に3の底部は厚く仕上げられている。2は粘土紐巻き上げ後、左回転のロクロ成形されており、内底側がする鉢状に深くなっている。2～6はいずれも内外面ロクロナデされており、焼成はあまり良くない。2～5は胎土に微赤粒を含み、橙褐色を呈す。6は胎土に石英粒・白色粒を含み乳褐色を呈している。

Ⅱ類（7～10） 口径が13cm代の中程度のもの。7は口径12.2cmとやや小形であるが本類に入れ



第33図 地3号住居址出土土器(1/4)

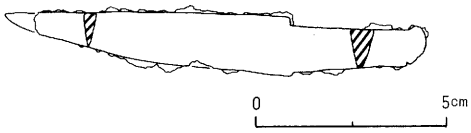
た。腰部がわずかに張る器形で、これはⅠ類の6と類似する。胎土に微石粒・白色粒を含み、焼成はあまり良くない。色調は乳赤褐色を呈している。8は口縁が緩く外反し、9は口唇が丸くおさめられている。10は腰部が厚くやや張っている。いずれも内外面ロクロナデされており、胎土には微赤粒を含んでいる。焼成はあまり良くなく、橙褐色を呈す。

Ⅲ類（11～13） 口径が14cm以上のもので比較的大型のもの。8は口径13.9cmであるが本類に入れた。11は口縁が緩く外反し、Ⅱ類の8と器形が類似する。内面は丁寧に調整されている。12は丸くおさめられた口唇部が緩く外反する器形、内外面ロクロナデされているが、内面にはロクロ痕が残っている。13は全体に器肉が厚いが、口縁部は薄く仕上げられ、内外面はロクロナデされている。胎土にはいずれも微赤粒や白色微粒を含んでおり、焼成はあまり良くなく、色調は赤褐色を呈す。

高台坏（14・15） 14は口縁が直線的に開く器形。粘土紐巻上げ後右回転のロクロ成形されている。底部は糸切り後高台を付け、丁寧にロクロ調整され糸切り痕は消されている。高台部・身共に内外面ロクロナデされており、ロクロ痕が顕著でない。内底中心部には凸起を残している。胎土は微赤粒を含み、焼成はあまり良くなく、赤褐色を呈す。15は低い高台が付き、底面には貼付け時のおさえ痕が残る。内底面は平坦で、底部は厚い。胎土は雲母・微赤粒を含み、焼成はあまり良くなく橙褐色を呈す。

碗には灰釉陶器がある。16は外面と口縁部内側に施釉されている。釉は漬掛で青味のかかった灰白色を呈している。胎土・成形・焼成共に良い。折戸53号窯期の東濃産である。17は静止後に内底面を調整しており、底部でも糸切り痕を消している。内外面共施釉されているが、施釉範囲は不明瞭である。胎土は黄白色で、高台には一部タールが付着している。折戸53号窯期の東濃産であり、この他の灰釉陶器の破片もすべて東濃産である。

甕はカマド内より一括出土した18がある。口縁部に最大径をもち、直線的に底部へ移行する器形。口縁部は短く外反し、屈曲部内面には緩い稜がつく。口縁部は折り返しと粘土紐によって肥厚し、指圧痕を残す。口縁端部は面取りをしている。全体に雑なつくりである。胴部は軽くハケ調整されているが内面にはみられない。胎土は砂粒を含み、焼成は良い。全体に暗褐色を呈すが、部分的に煤けて黒色を呈している部分もある。底部には木葉痕を残す。



第34図 第3号住居址出土刀子（½）

刀子（第34図） 全長10.3cm、刃部残長6.8cmで切先部を欠損している。身部は平造りの両関式で断面形はクサビ形を呈す。刃先は軽いそりを有している。茎部は背圧6mmとやや厚く造り、茎尻は丸味をもっている。重さ21.6g。

金銅製品（図版第34） 長さ11.5cm、幅4cm。板状のものが3回折り曲げて重ねられた後、短軸方向に潰されている。片面残存部には径1mmほどの鋲留め状の小穴が1箇所認められる。馬具の

第35図　第4・16号住居址(1/60)

鞍金具とも考えられるが、どのような性格のものか判然としない。

第４号住居址（第35・36・37・38図、図版第５－１）

検出状況　本址は第３号住居址の床面精査中に存在が明らかとなった住居址である。住居址の西側は第16号住居址と重複し、また一部は用地外のため未調査ではあるが、プランはほぼ把握できた。

当初、ローム面で確認された黒色土の落ち込みの範囲が広いため複数の住居址の存在を想定して調査を進めたが、第６号土壙との切り合いが把握された外は、規則的な隅丸方形の大型プランとなった。プラン確認後床面への掘り下げを行い、この段階で中央やや北寄りの覆土中にカマドを検出した。カマドは覆土中での発見であったためにこれに伴う壁が判然としない。また、床面が第４号新・旧のものと区別がつかない状態にあるため、カマドの帰属が問題となった。しかしカマドの主軸方向と、プラン追求中に西コーナー部に切り込んで発見された壁のあり方とが関連していると考えられたため、ことカマドを有する住居址を第４号住Ｂとして調査を進めた。この段階では第６号土壙を通してのセクション観察が終了していたが、第４号住Ｂとの切り合い関係は確認できないでいた。

この第４号住Ｂについては、報告に際し、新たに第16号住居址の番号を付し別項で説明することとする。

第４号住居址は上下２枚の床面を捉えることができ、下位の床面に伴う壁の立ち上がりも捉えることができた。また柱穴の切り合い関係も明確に把握できたことから、本址は一度拡張の行われた住居址であることが明らかとなった。

本址には第16号住居址が重複する他、２基の土壙が重複関係にある。第６号土壙は本址埋没後に南壁部に掘り込んでいる。また第28号土壙は旧住居址の東コーナー部床下に発見された。

遺構の構造　本址は630×610cmのほぼ隅丸方形に近い平面形を呈し、主軸方向はS26°Wを向く。

壁高はローム面からの掘り込みの深い東壁と南壁で50cmほどあり、わずかに傾斜をもって立ち上がっている。

周溝は旧住居址には設けられていないが、拡張した新たな住居には壁下に幅の広い周溝を設けている。

床は旧住居址の床面よりも10cmほど高くなっている。拡張部の床は地山面を直接床面とする部分と、埋め戻して床面としている部分、それに埋め戻して５cm前後の貼床をし、床面を設けている部分とがある。

発見された柱穴はP_5・P_6・P_7である。拡張前の主柱穴はP_1・P_2・P_3・P_4で、これらは拡張後のものよりも深く、掘り方も安定している。主柱穴はいずれも対角線上に位置する隅柱であり、旧住居址のものには貼床がなされていた。

旧住居址のカマドは南壁中央やや西寄りの位置に設けられており、溝状に浅く掘り窪められた燃焼部と熱変した地山面が認められた。拡張後は新たに南コーナー寄りの位置に構築されたもの

と思われるが、後の第6号土壙の掘り込みによって破壊されたのであろう。

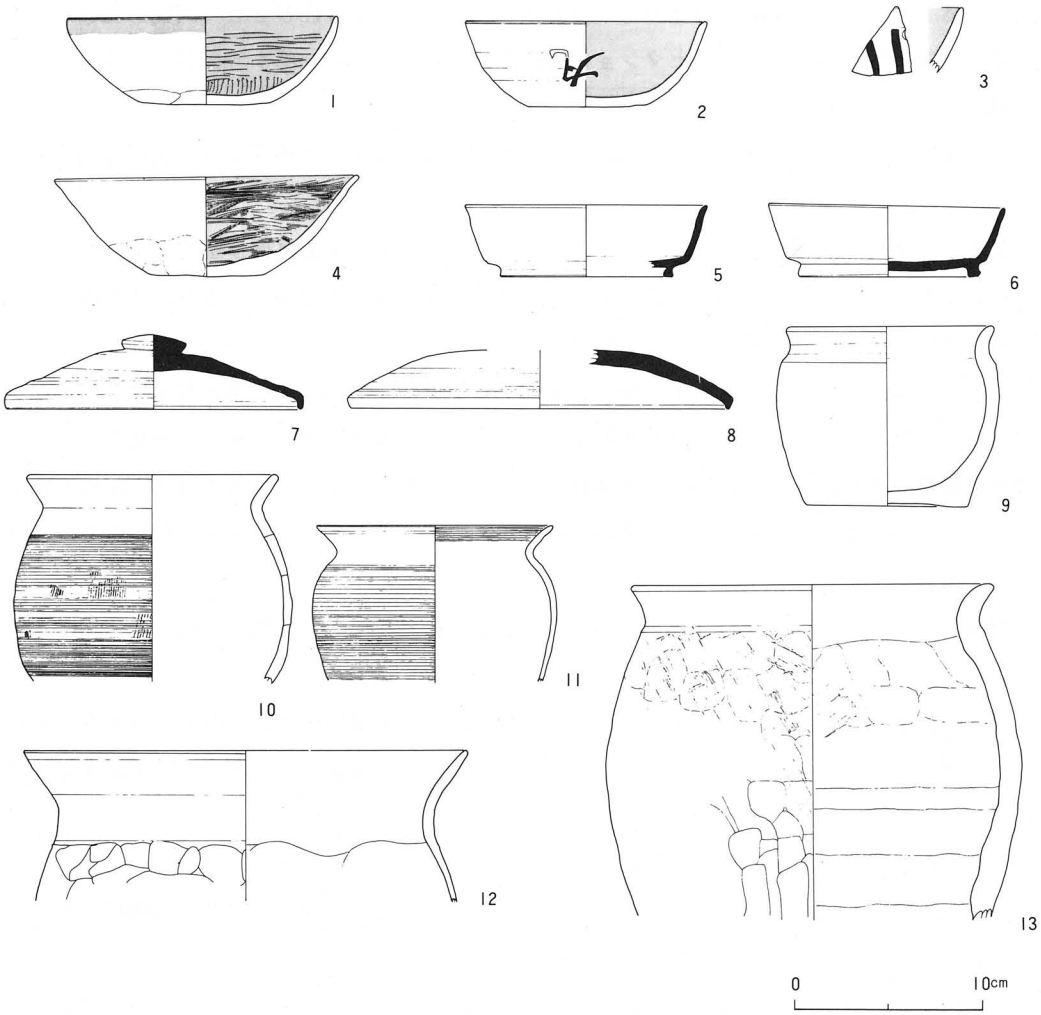
遺物の出土状態　床面からの完形・あるいは一括遺物の出土は、P_4とP_5間から完形の須恵器高台坏と土師器の小型甕、やや北へ離れて完形の小型甕が出土した。またP_8の脇からは黒色土器、中央部の旧住居址貼床下から灰釉坏蓋が出土し、旧住居中央部の床面から滑石製模造品が出土した。

以上の出土遺物のうち、旧住居の貼床下から出土した坏蓋は折戸10号窯期のものとみられ、住居構築時を推定させる資料として注目される。

出土遺物（第36・37・38図）

土器　坏・蓋・小形甕・甕がある。

坏は黒色土器（1～4）と須恵器高台坏（5・6）とがある。1は内彎気味に開く器形で内面はヘラ磨きされている。底部は糸切り後周辺までヘラ削りした後磨いている。焼成は良く赤褐色を呈

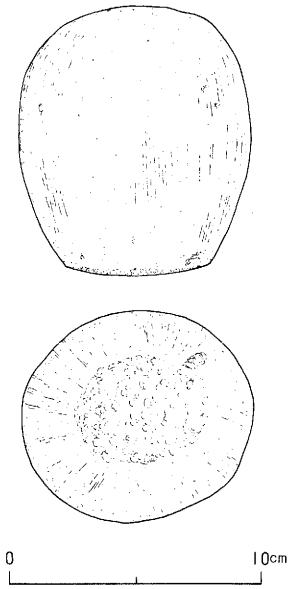


第36図　第4号住居址出土土器(1/4)

し、口縁部も黒色化している。2も1と同じ器形で底部は糸切り痕を残す。口縁部下に「丸」字が逆位に墨書されている。焼成は良く明褐色を呈す。3にも墨書が認められるが、書体は明らかでない。4はP_1出土、手捏ねによる坏で全体に歪んでいる。内面はカキ目調整と黒色手法がとられれており、底部はヘラ削りされている。焼成は良く明褐色を呈す。全体につくりが雑である。5・6は底部回転ヘラ削り後高台を付けている。腰部からの立ち上がりが強く、5は口唇がわずかに外反する。胎土には白色粒を含み、5は青灰色を呈し、6はやや黒味がかっている。

蓋(7・8)　7は旧住居址を埋め戻して床とした床下の掘り方から出土した灰釉の蓋である。平坦な天井部に扁平な凝宝珠のつまみを付したもので、口縁部はやや丸味をもって下がり、端部も軽い丸みをおびている。天井部のつまみ寄り½ほどは回転ヘラ削りされ、天井部には淡青色の自然釉がかかっている。内面はロクロナデされており、中心部のみ丁寧に調整されなめらかである。胎土は白色粒を含み白柴灰白を呈す。折戸10号窯期の猿投産である。8は須恵器の蓋である。内外面ロクロナデされ、天井部は回転ヘラ削り後部分的に調整が加えられている。内面½ほどから外面天井部端までは自然釉がかかり、この部分には重ね焼きの熔着が認められる。胎土は黒色粒を多く含み、これが熔出している。青灰色を呈す。

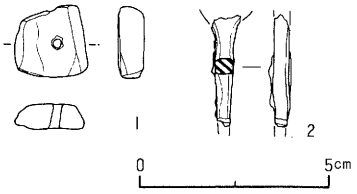
小形甕(9～11)　小形甕には粘土紐巻き上げ法によって成形された9と、その後再びロクロ成形された10・11とがある。9は口縁部内外を横ナデし、体部内外は丁寧に調整している。底部には木葉痕をとどめ、口縁部内側には炭化物が付着している。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良くない。10は粘土紐巻き上げで成形した後に縦方向のカキ目調整をし、その後に再度ロクロによるカキ目調整を行っている。11は口縁内側にも軽いカキ目痕をとどめる。共に薄手で焼成は良い。



第37図　出土石器(⅓)

甕(12・13)　12は所謂武蔵型の甕と親縁関にある甕であり、頸部は若干「コ」の字形を呈しつつある。口縁部から頸部にかけては内外面共ヨコナデされ、肩部は横方向の小さなヘラ削りがなされている。全体に薄手で焼成は良く明褐色を呈す。13は胴上部に最大径をもつ。外反した短い口縁部はヨコナデされ、肩部内外には第1成形時のオサエ痕をとどめ、さらに内外面共ハケ目調整されている。下位には軽いヘラ削り痕が認められる。全体に厚手である。胎土には雲母を含み、焼成は良く暗褐色を呈す。

敲石(第37図)　安山岩製の敲石である。下端が敲打面で、敲打のため平坦となっており、上端は磨り面となっている。覆土より出土したか、縄文時代の石器とは思わ

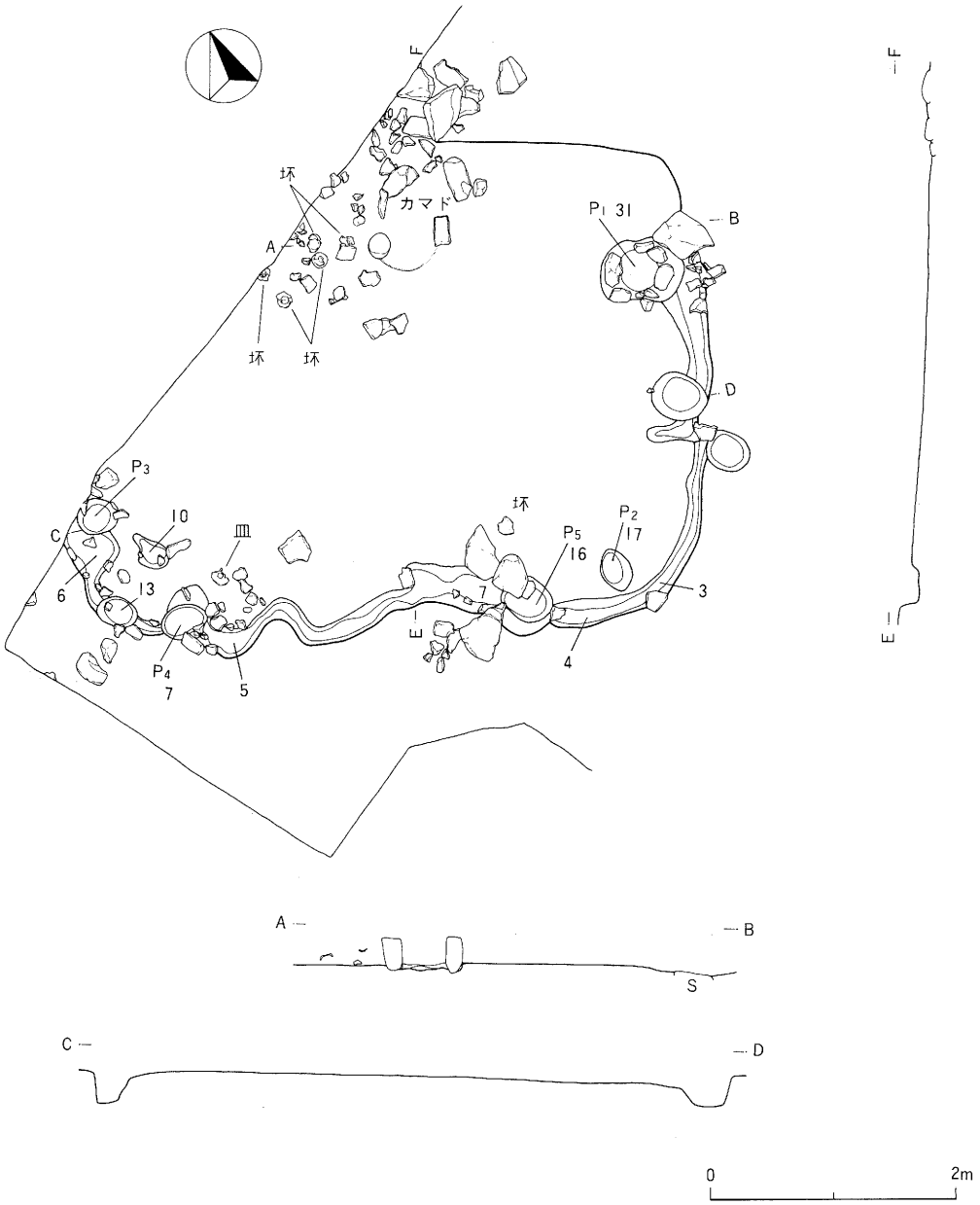


第38図　石製模造品・鉄鏃(½)

れない。

石製模造品（第38図１）　旧住居址の床面から出土した。1.9×1.9cmの梯形を呈し、中央部に径2.5mmの孔が斜めに穿たれている。表裏とも斜め横方向に磨かれており、上下側面も磨かれている。左右両側面が磨かれていることから、折断後再利用されたものと考えられる。重さ4.2ｇ。

鉄鏃（第38図２）　鉄鏃の茎部である。



第39図　第５号住居址（1/60）

第５号住居址（第39・40、図版第５－２・26－３）

検出状況　本址は今回の発掘調査によって発見された遺構としては最も高位に位置している。住居址は北コーナー寄りの部分が用地外にあるものの、北壁中にカマドが設けられており、また住居址の３コーナーが明らかになったことから、プランの大略は知ることができた。住居址は全体に地山への掘り込みが浅く、カマド周辺の北壁際は黒色系土層への貼床である。このため、この部分については床の広がりによってプランを想定した。また、南壁側の地山は礫を多く含むため、壁・周溝・床面に地山礫が多く出ている。

遺構の構造　北壁中央部にカマドを有する隅丸長方形プランの住居址である。住居址の規模は500×380cmほどあり、主軸方向はN20°Eを向く。

壁は北壁が検出されなかったが、南壁・東壁は10cm前後の高さをもって発見された。

周溝は北壁部以外はすべて壁下をめぐっており、深さは南壁下で５～８cm、南コーナーから東壁下では３～４cmと浅い。

床は地山面を直接床面としているが、東コーナー部からカマド周辺部では黒色系土層へ貼床をして水平な床面を設けている。床面は全体に水平で堅緻であるが、地山礫の出ている南コーナー部では凹凸もあり、判然としない部分もあった。

主柱穴はP_1・P_2・P_3であり、用地外のものも含めると、おそらく４本主柱となるであろう。柱穴は比較的深いP_1が対角線上から若干南に外れて位置しているが、基本的には対角線上に位置する隅柱である。

カマドは北壁中央部に設けられている。残存する両袖石からみて石組カマドである。袖石には厚い扁平礫を用いているが、左袖先端部には長さ24cmの縄文時代の石棒を用いている。焚口部の幅は40cmあり、熱変した地山面が両袖石先端部から半円形に住居中央部へ向かって突出していた。

遺物の出土状態　土器類はカマド焚口部西側に集中して出土した。いずれも坏類であり、２箇重なった状態のものなど、床面から７～10cmほど浮いた位置で出土した。この他はP_4の近くから高台皿が、またP_5脇の礫の近くから高台坏が出土した。

出土遺物（第40図）

土器　坏碗・高台皿・甑がある。

坏はロクロ成形、糸切り底であり、口径の大きさによって二分される。

Ⅰ類（１・２）　口径が10cm代のもの。１・２共に底径が小さい。底部は比較的厚くつくられており、底部から立ち上がる部分にくびれをもち、口縁は直線的に開く。１・２共にロクロナデされているが、１の内底面は丁寧に調整されている。１は胎土に微赤粒を含み、２は砂粒を含む、焼成は普通で橙褐色を呈す。共に右回転によるロクロ成形である。

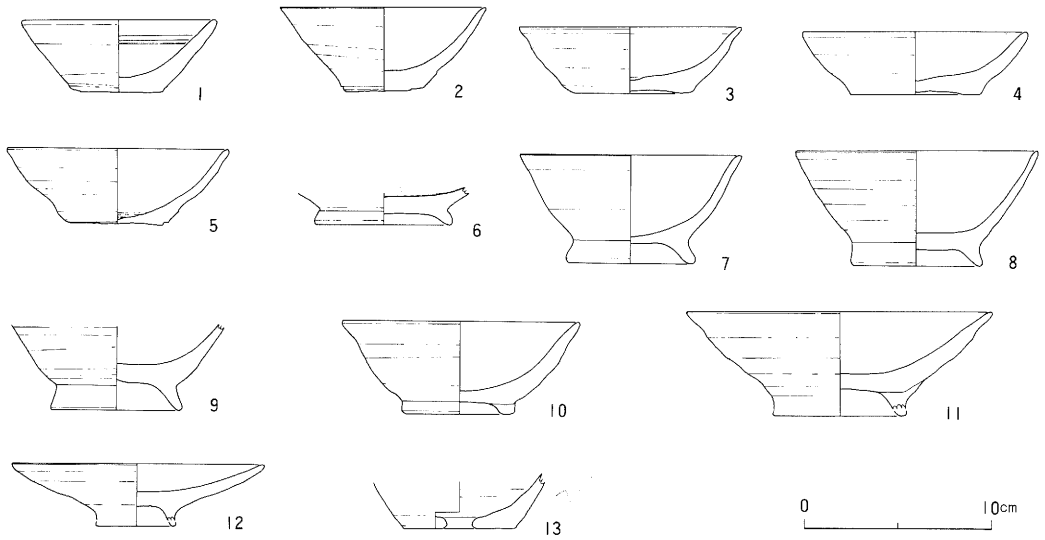
Ⅱ類（３～５）　口径が11cm代で土類よりも底径の大きいもの。３は口縁部が緩く外反する器形で、内底中央部がヘソ状に凹んでいる。内外面はロクロナデされている。４は器肉がやや厚い。底部から立ち上がる部分がくびれ、口縁はやや内彎気味に開く。内外面共にロクロナデされてい

る。3・4共に胎土には白色粒・石英粒・雲母を含み、焼成は普通で赤褐色を呈す。5は腰部のくびれる器形で底部内面が浅く凹んでいる。内底面にはロクロ痕が顕著に残る。胎土に白色粒を含み、焼成は十分でなく暗褐色を呈す。3～5共に右回転ロクロによる成形である。

高台坏(6～11)　高台坏には黒色手法をとるものとそうでないものとがあり、黒色手法をとるものは破片で数が少ない。いずれも高台の低いもので、灰釉陶器の模倣品と考えられる。6は低い高台で底部に糸切り痕をとどめた黒色土器。7は腰部から内彎し、口縁部がわずかに外反する。高台は端部が丸くおさめられた低い高台で、底部はロクロ調整され糸切り痕は消されている。胎土には白色粒・雲母を含み、ロクロ痕は顕著でない。焼成は普通で明褐色を呈す。8は口縁が直線的に開く。外面はロクロナデされ、内面は磨かれている。底部は高台貼付け後ロクロ調整されているが、糸切り痕をわずかにとどめる。胎土に白色粒・雲母を含む。焼成は普通で橙褐色を呈す。9も高台貼付け後、底部はロクロ調整されている。胎土に微赤粒を含む。焼成は普通で橙褐色を呈す。10は全体に器肉が比較的厚い。口径は7～9とほぼ同じであるが、わずかに浅く、高台も低い。外面はロクロナデされており、内底面は丁寧に調整されている。高台は厚く短いもので、底部は高台貼付け後ロクロ調整されている。胎土に微赤粒を含み、焼成は普通で橙褐色を呈す。11は口縁が直線的に大きく開き、口縁部は薄く仕上げられている。口径は7～10よりも大きいが器高は低く、むしろ皿とした方がよいのかもしれない。外面にはロクロ痕が残り、内面はロクロ調整されている。胎土には砂粒を含み、焼成は普通。明褐色を呈す。

高台皿(12)　腰部から高台部にかけて厚みをましており、高台の付け方が11と同様である。内外面共にロクロナデされており、底部は低い高台貼付後ロクロ整形されている。胎土に白色粒を含み、焼成は十分でない。灰釉陶器の模倣品であろう。白黄褐色を呈す。

甑(13)　底部中央に径1.3cmほどの孔を有す。孔は円形で、穿孔は両面から行われている。底部



第40図　第5号住居址出土土器(1/4)

は糸切り、内面はロクロナデされている。胎土に砂粒を含み、焼成は他のものに比べて良い。赤褐色を呈す。

第6号住居址（第41・42・43図、図版第6－1）

検出状況　本址はローム面の安定している西コーナー部周辺の落ち込みを発見したことにより存在が明らかとなった。住居址は東南部½ほどが用地外にあるため詳細の多くは不明である。また、住居址の北側には一部重複する形で第1号溝址が発見されたが、住居址の床面が黒色土中への貼床であったこともあり、両者の重複関係は判然としなかった。

遺構の構造　平面形が隅丸長方形を呈す住居址であると考えられる。

ローム壁面は南壁では緩い傾斜をもって立ち上がっているが、西壁中央部ではかなり緩くなり、北コーナー部ではみられなくなる。

周溝は西壁下と南壁下に設けられており、用地外の部分も含め、北壁下以外の壁下にも設けられているものと思われる。

床はローム層を掘り込んで構築し、中央南側ではローム面を直接床面としているが、中央北側ではローム面の上に貼床をして水平な床面を確保している。

主柱穴はP_2とP_3が発見された。P_2は掘り方も大きく対角線上に位置する隅柱であるが、P_3は対角線上から外れた位置にあり、掘り方も大きくない。共に1回の切り合い関係が認められ、同地点での柱の建て替えが行われたことを物語っている。

遺物の出土状態　全体に遺物は少ない。床面からの出土遺物はP_2脇の周溝肩部から黒色土器底部、中央やや北寄りの位置から坏底部が出土した他、P_3に近い床面には磨り石が遺存していた。その他はすべて覆土中から出土した。

出土遺物（第42・43図）

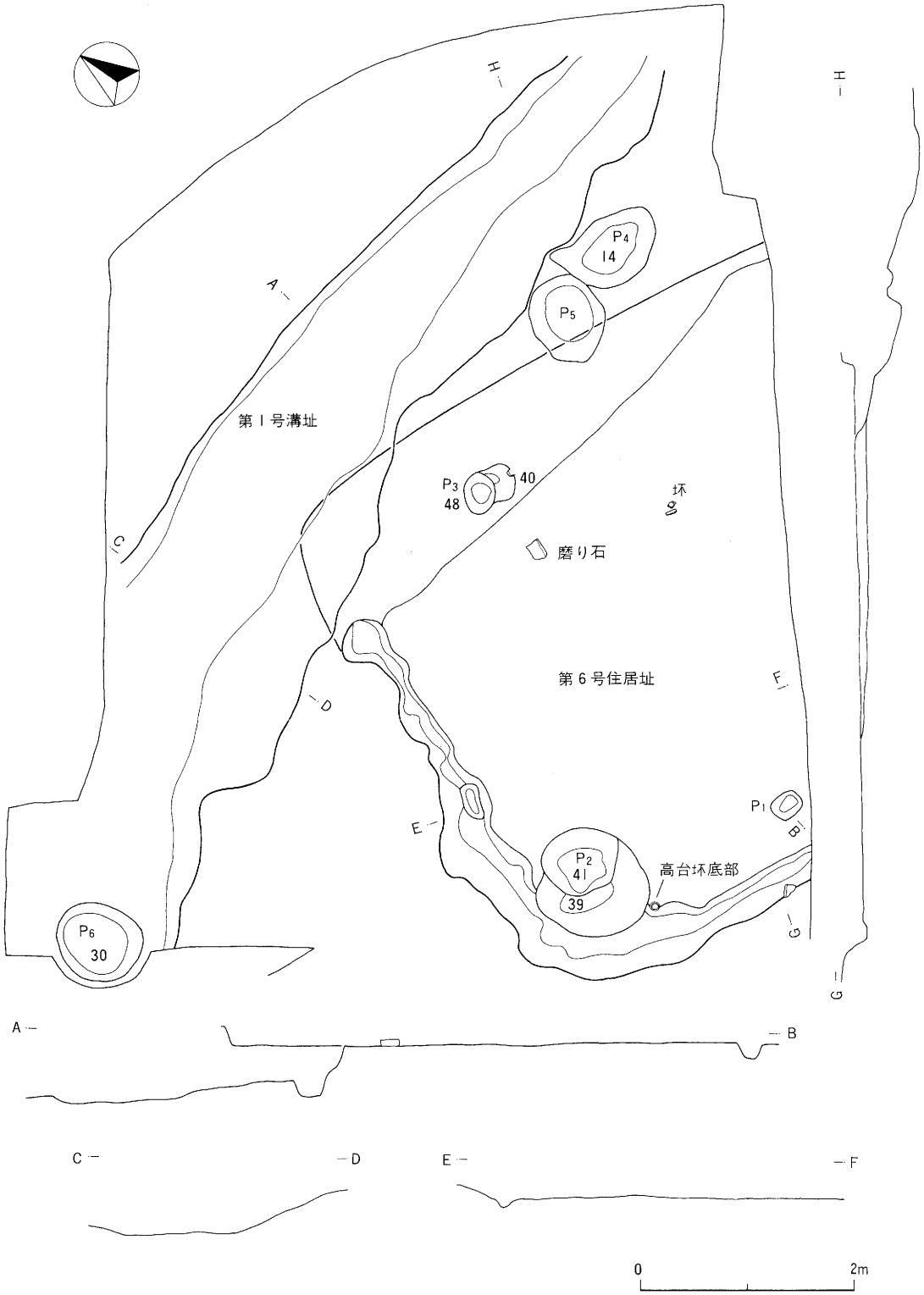
土器　皿・坏・蓋・碗がある。

皿（1）　腰部がやや張り、口縁が外反気味に開く器形。底部は厚いが、内底側に厚いのが特徴である。ロクロ成形で底部は糸切り、内外面ロクロナデされ、内底面は剝落している。赤褐色を呈す。

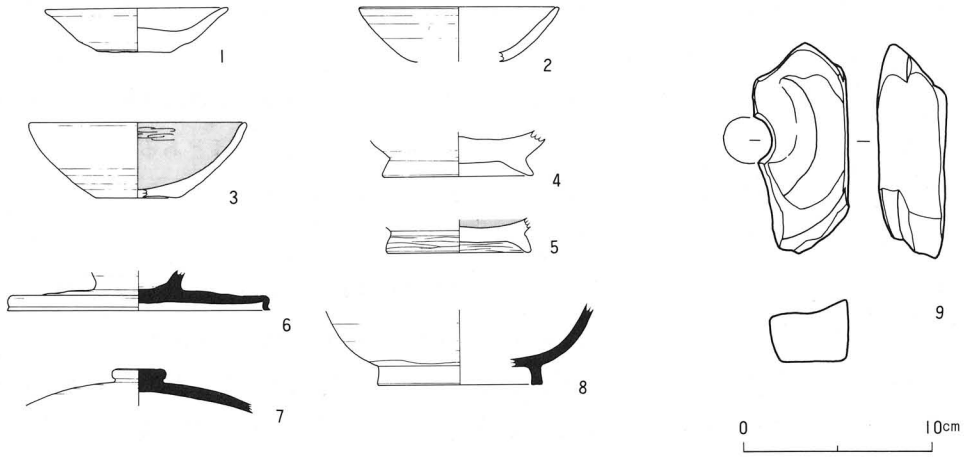
坏（2～5）　2・3はロクロ成形糸切り底で、3は内面をヘラ磨きと黒色手法をとっている。4・5は高台底。4は高台貼付後、ロクロ調整されている。5は高台部内外面・底面共に丁寧にヘラ磨きされている。P_2脇の周溝肩部より出土した。

蓋（6・7）　6・7共に須恵器の蓋である。6は内外面ロクロナデされ、摘み内側の調整が丁寧でない。胎土に白色粒を多く含み、青灰色を呈す。7は扁平な宝珠のつまみがつく。天井部は回転ヘラ削りが施され、内面はロクロナデされている。胎土には黒色粒と白色粒を含み、焼成はあまり良くない。共に覆土の出土であり、混入品である。

碗（8）　身の深い碗である。釉は薄く透明で、内面には施釉されていない。折戸53号窯期の東濃産である。



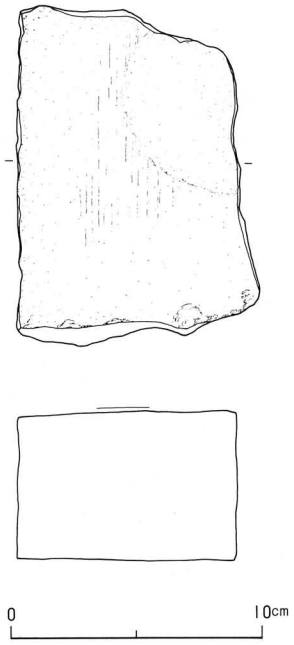
第41図　第6号住居址・第1号溝址(1/60)



第42図　第６号住居址出土土器(¼)・紡錘車(½)

紡錘車(９)　高台坏の高台部を利用した紡錘車と思われる。孔は径が1.3cmほどあり、側面の一部を磨きとって平坦面としている。

磨り石（第43図）　底面に据えられていた磨り石である。安山岩製で、左側面と下側面を打ち欠いて調整し、平面形を長方形に整えている。上側面にも一部自然面を残し剝離痕が認められる。また左上端部は黒色にすすけている。



第43図　出土磨り石(⅙)

第７号住居址（第44・45図、図版第６－２）

検出状況　本址周辺は地山のローム面までの土層が浅く、耕作土一層のみという堆積状態を示している。地山のローム面は緩く傾斜しながらも安定しているため、掘り込みの深い住居址南側は容易に検出された。一方、プランの北側はローム面に設けられていなかったことと、また耕作が深く及んでいたこともあり、ほとんど判然としなかった。しかし本址に伴うと考えられる柱穴が発見されたことから、大略ではあるがプランは推定しえた。

ところで、本址の対角線上に位置する東コーナー部には100×100cmほどの大きな礫が遺在する。これは本址構築にかなりの支障を来たした様である。礫は円形の掘り方内に遺存しており、この掘り方が礫を取り除くためのものであったことが理解される。しかしこの礫は根付きの地山石であり、動かしきれなかった様で再度掘り方を埋め戻している。このため対角線上に位置する隅柱を北側にずらしており、本址はやや変則的な柱穴配置の形態をとる住居址となっている。

遺構の構造　南壁中央左寄りの位置にカマドを有する住居址である。平面形は主軸方向に長い400

×340cmほどの隅丸長方形を呈すると思われるが、南コーナーは丸味を帯びず、逆に西コーナーでは丸味が強くなっている。

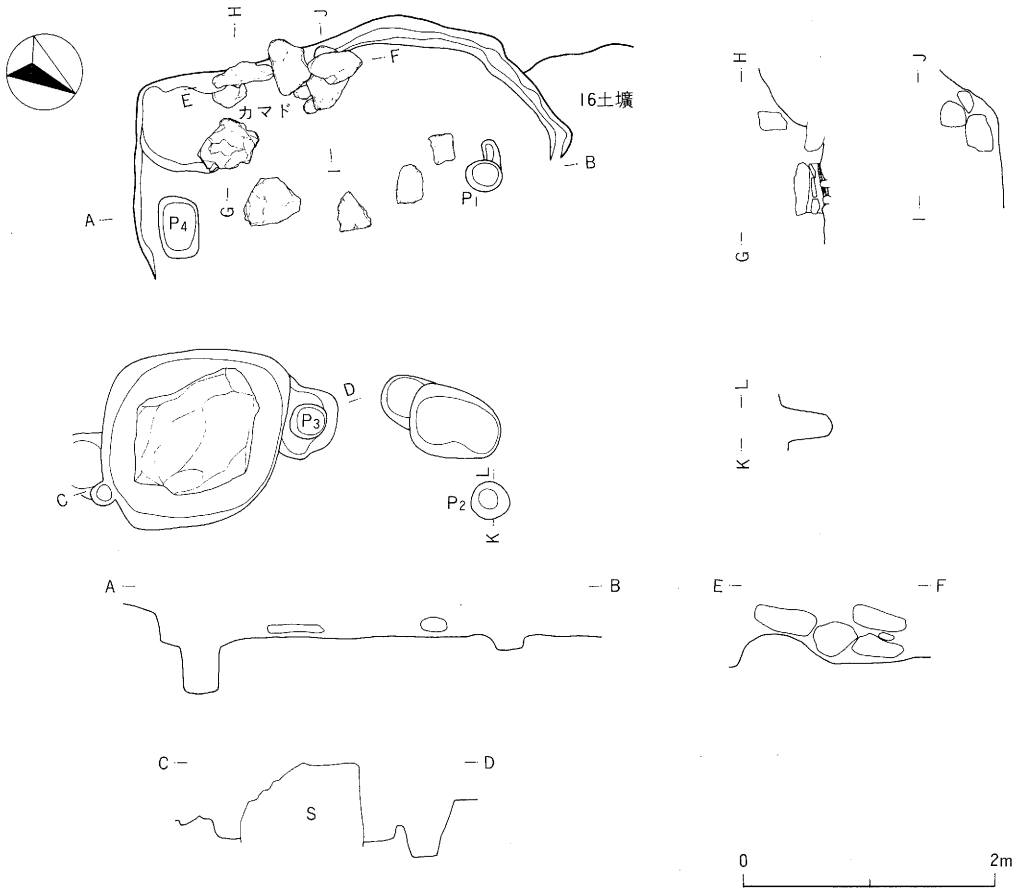
壁は掘り込みの深い南壁と東壁の一部が良好な形で検出された。壁面の深さは東壁で25cmほどあり、ほぼ直に立ち上がっている。南壁は傾斜をもっており、深さは40cmほどある。

周溝は掘り込みの深い南壁下のカマドから右側に設けられている。

床は地山に掘り込んで設けられた南側½ほどはローム面を直接床面としているが、北側½ほどは黒色土中への貼床であったものと思われる。ローム面を床面としている部分は水平で堅緻であるが、カマド左の南コーナー部のみ一段低くわずかに窪み、若干の凹凸も認められる。

柱穴はP_1・P_2・P_3・P_4であるが、P_3は地山石を避け、対角線上からわずかに外れた位置に設けられている。掘り方の規模はほぼ同一であるが深さは北側のものが深く、P_1のみ浅い。

カマドは南壁中央左寄りの位置に設けられている。石組カマドであり、袖石として使用された扁平で厚い礫が数個遺存していた。焼土はごくわずか認められた程度であり、カマド構築の掘り



第44　第7号住居址(1/60)

方も認められなかったため、カマドの構造については多くが不明である。カマド周辺の床面に散在する礫はカマドに関わるものであろう。

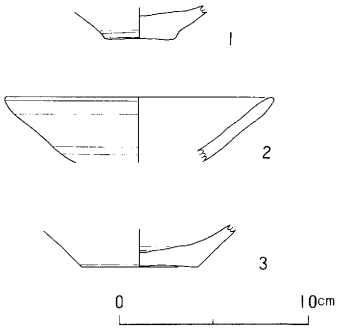
遺物の出土状態　出土遺物は少ない。床面からの出土遺物は皿底部と坏がカマド周辺から3個体出土したのみであった。

出土遺物（第45図）

土器　土師器皿・坏・灰釉碗・須恵器甕があるがいずれも破片であり、図示できたものは3点である。3点はいずれもロクロ成形・糸切り底をもつものである。

皿（1）　左回転ロクロ成形で底部は厚くつくられている。内面には黒色物の付着が認められる。胎土には石英粒・雲母を含み焼成は普通。暗褐色を呈す。

坏（2・3）　内外面共ロクロナデされている。2は底部内面に黒色物が付着しており、3も内面に黒色物の付着が認められる。2は胎土に微赤粒、3は雲母を含んでおり、暗褐色を呈す。



第45図　第7号住居址出土土器（1/4）

第8号住居址（第46・47・48図、図版第7－1・26－4・5）

検出状況　本址は487-イの南隅に位置している。土捨場を480の東隅から487－イにかけて設けたため、本址の南壁側は厚い排土を取り除いての調査となった。

本址は南コーナー部に設けられている石組カマドの発見によって明らかとなった住居址である。住居址は全体にローム層中まで掘り込んで構築されていたため、遺構の検出は容易に進められた。ただ、西側1/2ほどが用地外にあるためプランの詳細については不明である。しかしカマドの存在と共に、東コーナーと南コーナーを明らかにすることができたため、プランのあり方についてはある程度推定し得た。

遺構の構造　カマドを東壁の右隅に有する主軸方向に長い隅丸長方形プランの住居址である。規模は明らかでないが、P_5が隅柱である可能性が強いため、それから推定すると560×480cmほどとなろう。主軸方向はE13°Sを向く。

壁は住居址がローム層中へ掘り込まれていたことから調査部の全周に認められたものの、東壁から東コーナー部にかけては浅い立ち上がりとなっている。

周溝は南壁下の中ほどの位置と東壁下の中央部、それに東コーナー部と各々壁下に断続的に設けられており、壁の立ち上がりの弱い東コーナー部のものは12cmと深い。

床はローム面を直接床面としている。水平ではあるが中央から東コーナー寄りにかけては軟弱な部分もあった。

柱穴はP_2・P_3・P_4・P_5であり、P_5とP_6は対角線上の隅柱であろう。P_2には貼床がなされていた。

カマド左脇には86×64cmの断面形が台形を呈するP_1が設けられている。貯蔵穴とも考えられる

が、ピット内には焼土や炭化物・灰が多量に詰まっていたことからみて灰落しとして利用された施設とも考えられる。また、南壁中央部には150×134cmの小竪穴が重複しているが、本址に伴う可能性は少ない。本址との時間的な関係については判然としなかった。

カマドは東壁右隅に構築されている。石組粘土竈であり、今回の調査によって発見されたカマドの中では最も造りの良い立派なカマドであった。カマドは182×138cmの楕円形の掘り方をもち、両脇に厚い扁平礫を深く直立させて袖石としている。焚口から燃焼部にかけての掘り方の低面には第5層を入れ、第5層上面を燃焼面としている。燃焼面は1枚であり、舟底状を呈した燃焼部は1段高い掘り方にある煙道部へと続いている。底面には長さ約15cmの角柱礫が遺存しており、

第46図　第8号住居址(1/60)

これが支脚であると考えられる。両袖石間には天井石と思われる板石が崩落しており、これらの礫間や袖石間には灰白色の粘土の存在が著しかった。

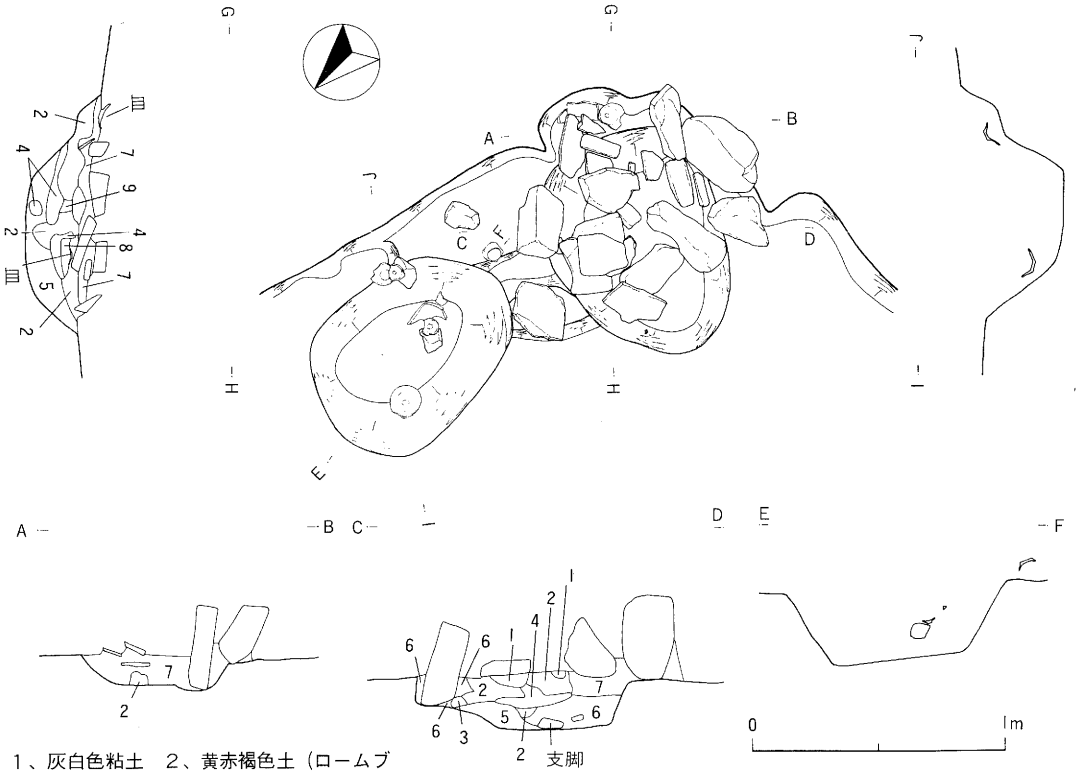
カマド手前の床面には人頭大の礫や角柱礫を集めた集石が遺存していた。カマドに関わる礫だとは思われないが、性格は明らかでない。

遺物の出土状態　土器群はカマドとP_1内からの出土が多い。カマドでは煙道部から坏と須恵器甕の破片、崩落した天井石の中に須恵器甕の破片、燃焼部上位の第８層と第２層の境より坏が出土した。P_1内からは皿１点・坏１点と須恵器甕、ピットの肩部から坏２点、ピットとカマドの間から坏１点が出土した。ピット内から出土した須恵器甕はカマドから出土したものと同一個体である。この他にはP_2の北側床面より灰釉長頸瓶破片と白磁皿片が一括出土し注目された。

出土遺物（第48図）

土器　皿・高台皿・坏・白磁皿・須恵器甕・灰釉陶器がある。

皿（１）　底部が厚く、底部から立ち上がる部分にくびれをもち、口縁は直線的に開く。内外面



1、灰白色粘土　2、黄赤褐色土（ロームブロック・焼土ブロック混入）　3、赤褐色土　4、焼土　5、黒褐色土（ロームブロック・焼土ブロック混入）　6、黒褐色土　7、黒褐色土（ローム粒・炭化物を含む）　8、赤褐色土（炭化物を多く混入）　9、乳赤褐色土（粘土の焼けた層）

第47図　第８号住居址カマド（1/30）

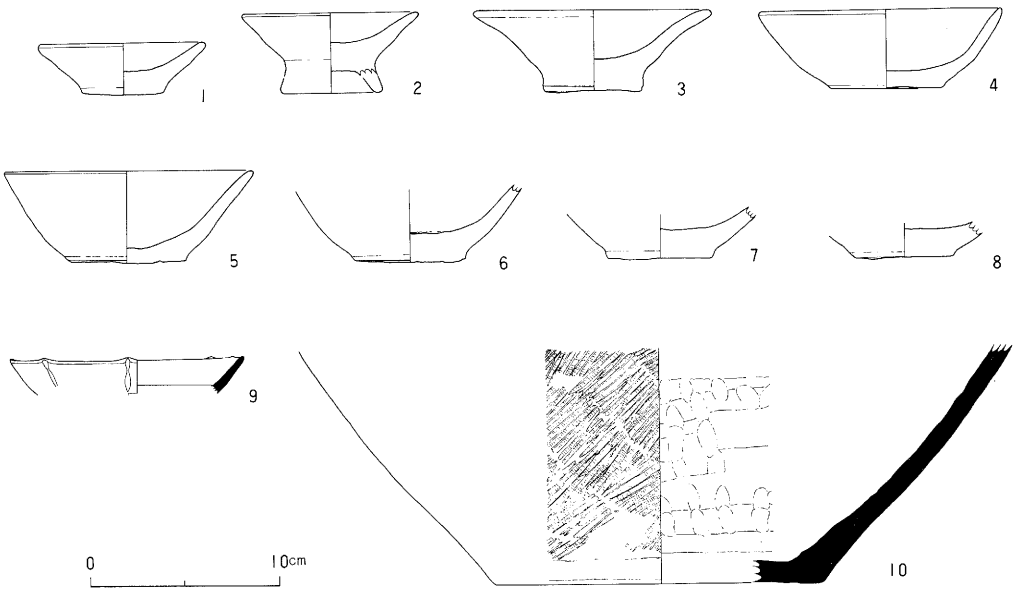
ロクロナデされており、底部は糸切りである。胎土には白色粒・石英粒を含み、焼成は比較的良く橙褐色を呈す。

高台皿（2） 底部の厚い皿に高台を付したもの。ロクロ痕が顕著でなく、内外面ロクロナデされ、底部はロクロ調整されている。内面には黒色物がわずかに付着している。胎土には砂粒を含み、焼成は比較的良く黒褐色を呈す。

坏（3～8） ロクロ成形糸切り底の坏で、口径の大きさはほぼ似た数値を示すものである。3は擬似高台状の底部をもつもので、口縁部は外側へ大きく開く。内外面ロクロナデされておりロクロ痕が顕著でない。内面には黒色物の付着がシミ状に認められる。胎土には砂粒を含み、焼成は比較的良く暗褐色を呈す。4は腰部が張り、内底面は平坦となる。5は口縁が直線的に開く器形、内外面ロクロナデされており、4は内面に黒色物が付着する。いずれも胎土に砂粒を含み、焼成は比較的良い。6は右回転ロクロ成形による。いずれもロクロ痕が顕著でない。

白磁皿（9） 口縁下内面に稜をもち、面取りされた鋭い口縁が開く輪花皿である。輪花の施文法はやや崩れており、口縁下までヘラによる押圧痕が認められる。輪花は8単位となると考えられるが、単位間が均等割りされていない。口縁部は体部より1段薄く成形されているが稜はつかない。体部はロクロナデされており、条線状の痕跡が認められる。胎土は乳灰白色で釉は薄いが、口縁下の胎土が薄くなる部分には厚く掛けられている。色調はわずかに緑がかった乳灰白色を呈す。産地は明らかでないが、景徳鎮窯系のものとみられる北宋代の灰白磁である。

須恵器甕（10） 器形は底部から大きく開くが底部付近は歪んでいる。外面は底部付近まで平行



第48図 第8号住居址出土土器（1/4）

叩き目文。内面はナデられ、指圧痕をとどめている。胎土には白色粒を含む。表面には黒色粒が熔出しており、青灰色を呈す。

灰釉陶器　碗・輪花皿・長頸壺等の破片がある。いずれも折戸53号窯期の東濃産である。

第9号住居址（第28・49図、図版第7－2）

検出状況　本址は北西部½ほどが用地外にある。住居址はローム面に掘り込んでいるが、下位の第11号住居址際の部分では浅く、壁の立ち上がりもほとんど認められない状態にある。住居址の東側は下位の第11号住居址の覆土中に貼床をして設けられているため、この部分のプランについてはセクション観察から推定した。

遺構の構造　南壁中央やや右寄りの位置にカマドを有する隅丸長方形プランの住居址であると推定される。住居址の規模は明らかでないが、主軸方向はS20°Wを向く。

壁はローム面への掘り込みの深い南壁では壁高も20cm前後あり安定している。東壁は南コーナー寄りの部分では安定しているが徐々に低くなり、第11号住居址の南壁際ではほとんど認められなくなる。第11号住居址と重複する部分の壁については判然としなかった。

床はローム層を掘り込んだ後に埋め戻して床面としているが、第11号住居址と重複する部分には覆土への貼床をしており、この部分は水平な床となっていない。

周溝は南壁下のカマドの掘り方に接してわずかに認められる。

柱穴は南コーナーの隅柱が発見されたのみである。掘り方は大きく安定しており、P_2からP_1へ建て直しが認められる。

カマドは南壁中央やや右寄りの位置に設けられていたものと考えられる。カマドの掘り方と煙道部が認められたのみであり、その他のカマドに関わるものは何等発見されなかった。

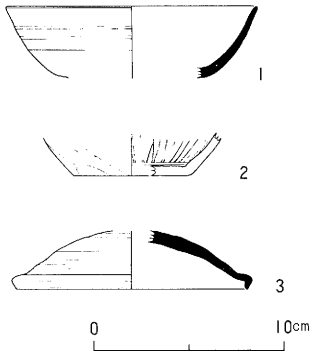
遺物の出土状態　覆土が浅く、耕作が深く及んでいるためか遺物は少ない。床面からは土師器坏が出土した。

出土遺物（第49図）

土器　坏と蓋がある。

坏（1・2）　1は須恵器坏で口縁が内彎気味に立ち上がる。胎土には黒色粒・白色粒を含み、黒色粒が目立つ。口唇部には自然釉がかかっており、焼成は良く灰色を呈す。2は甲斐型坏。外面と底部はヘラ削りされた後磨いており、底部にはわずかに糸切り痕が残る。内面底部と腰部の境には沈線がめぐり、内面と内底面端部には暗文が施されている。胎土は良好で焼成も良く、赤褐色を呈す。

蓋（3）　須恵器蓋である。天井部は丸く、口縁部は内折する。天井部は回転ヘラ削りされ、内面はロクロナデされている。胎土に白色粒を含み青灰色を呈す。



第49図　出土土器（¼）

第10号住居址（第50・51・52・53図、図版第８－１・２）

検出状況　Ａ－37グリッドを中心にカマドが発見されたことにより存在が明らかとなった。住居址の南東部は用地外にあるが、プランの大略は推定しえた。本址は一度拡張を行った住居址であり、拡張前の住居址の存在が明らかになったのは新住居址調査後、雨の日を挟んで数日を経てからであった。

住居址はローム面を掘り込んで構築されている。このため掘り込みの深い南壁側は安定した壁をもっており、容易に検出された。しかし西壁は第３号溝址を切って設けられており、しかも部分的に重なっているため整った壁としては検出されなかった。また、本址は拡張に伴って貼床をして床面を上げている。このため新住居床面での施設の精査では、確認した落ち込み面が掘り下げの段階でかなり広がってしまったり、あるいは深さが判断しにくいこともあった。殊にP_2は当初のプランよりも大きくなってしまったし、北壁下の周溝も十分には把握しきれなかった。また、東コーナー部には床面に地山礫が出ており、この地山礫の周囲の掘り方と施設との関係についてもほとんど判然としない状態であった。

遺構の構造　新住居址は北壁中央部にカマドを有する住居址であり、平面形は各コーナーの丸味が弱い隅丸長方形を呈している。住居址の規模は700×580cmほどあり、主軸はＮ22°Ｅを向く。

壁は住居址がローム面まで掘り込んで設けられていたことから全周に認められるが、特に掘り込みの深い南壁は深さもあり安定している。

周溝は拡張前には西壁下に設けられていたが、拡張後は同じ壁下にも認められない。

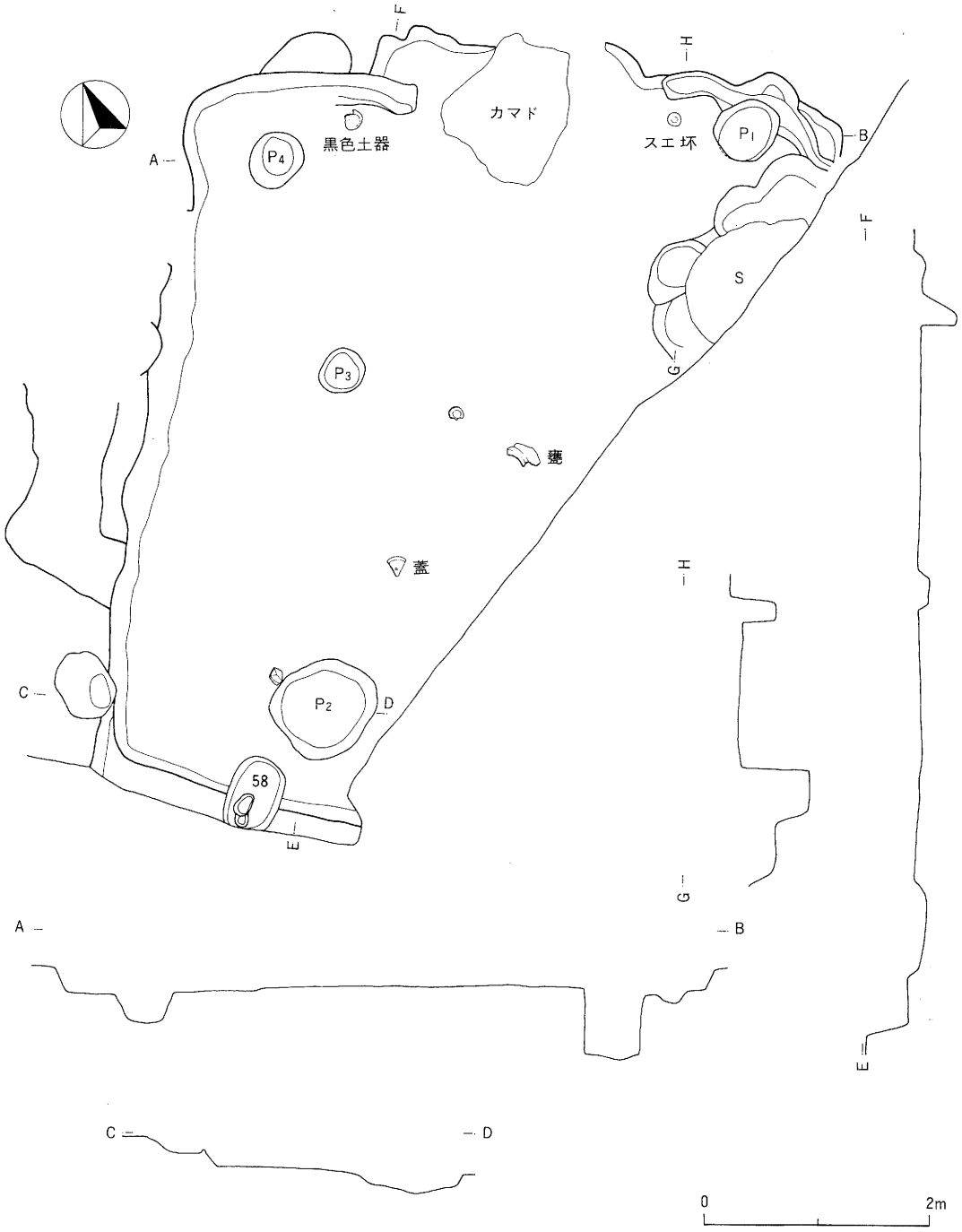
床は旧住居の床面上にロームと粘土を混えた貼床を行い、６cmほど上位に設けている。水平で堅緻な床である。

柱穴はP_1・P_2・P_3・P_4以外は明らかでない。

カマドは北壁中央部に設けられており、この位置は拡張後も変更されていない。略楕円形の掘り方をもち、断面形は舟底状を呈している。燃焼面は２枚認められる。これは、住居の拡張に伴う床面レベルの変更と関連しているものと思われ、拡張後も位置が変わっていないことと符合する。燃焼部のやや奥まった位置には下位の燃焼面に食い込んで直立する焼けた角柱礫が遺存する。これは支脚であろう。カマドには袖石や天井石が認められず、小さな板石が上面に数個散在していたのみであった。また、両側面や上面には灰白色の粘土が認められたことから、粘土を主として構築されたカマドであったことが理解される。住居の拡張が各コーナーを中心に北壁と南壁側へ行われているが、カマドの位置は変えられていない。

旧住居のプランはコーナーの丸味が強い隅丸方形に近い形態にあるが、拡張後は主軸方向に規模が大きくなっている。旧住居址の規模は590×560cmほどである。

主柱穴は対角線上に位置するP_1・P_2・P_3が発見されている。４本主柱と考えられ、各コーナー部よりも内側へ寄った位置に設けられている。この他、北壁下の幅広い溝状の掘り方内には、カマドを挟んで２個一対の隅丸方形を呈する柱穴P_4・P_5・P_6・P_7が設けられていた。



第50図　第10号新住居址(1/60)

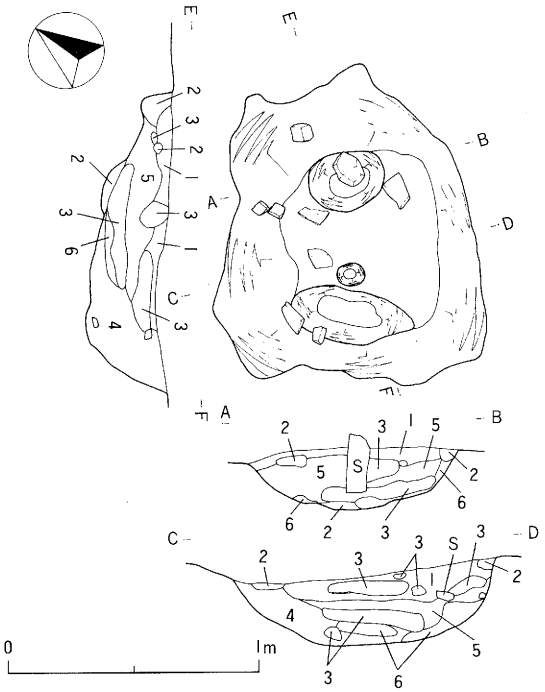
第51図　第10号旧住居址(1/60)

遺物の出土状態　今回の調査で発見された同時代の住居址の中では出土遺物が最も多い。しかしそのほとんどは覆土中からの出土である。床面では中央部とカマドの両側から完形品及び半完形品が出土した。

出土遺物（第53図）

土器　坏・高台坏・蓋・小形甕・小形短頸壺・短頸壺がある。

土師器坏（1～4）　1・2は口縁が内彎気味に立ち上がる黒色土器である。1は底部と底部周辺をヘラ削りした後磨いている。1・2共に焼成は良く赤褐色を呈す。3は甲斐型の坏で、外面と底部をヘラ削りした後磨いている。内面と内底面には暗文が施されており、胎土は良好で焼成も良く、赤褐色を呈す。混入品であろう。4は手捏ねの坏で口唇部に沈線が認められる。胎土に砂粒を含み、焼成は不十分で赤褐色を呈す。本址に伴うものではないだろう。

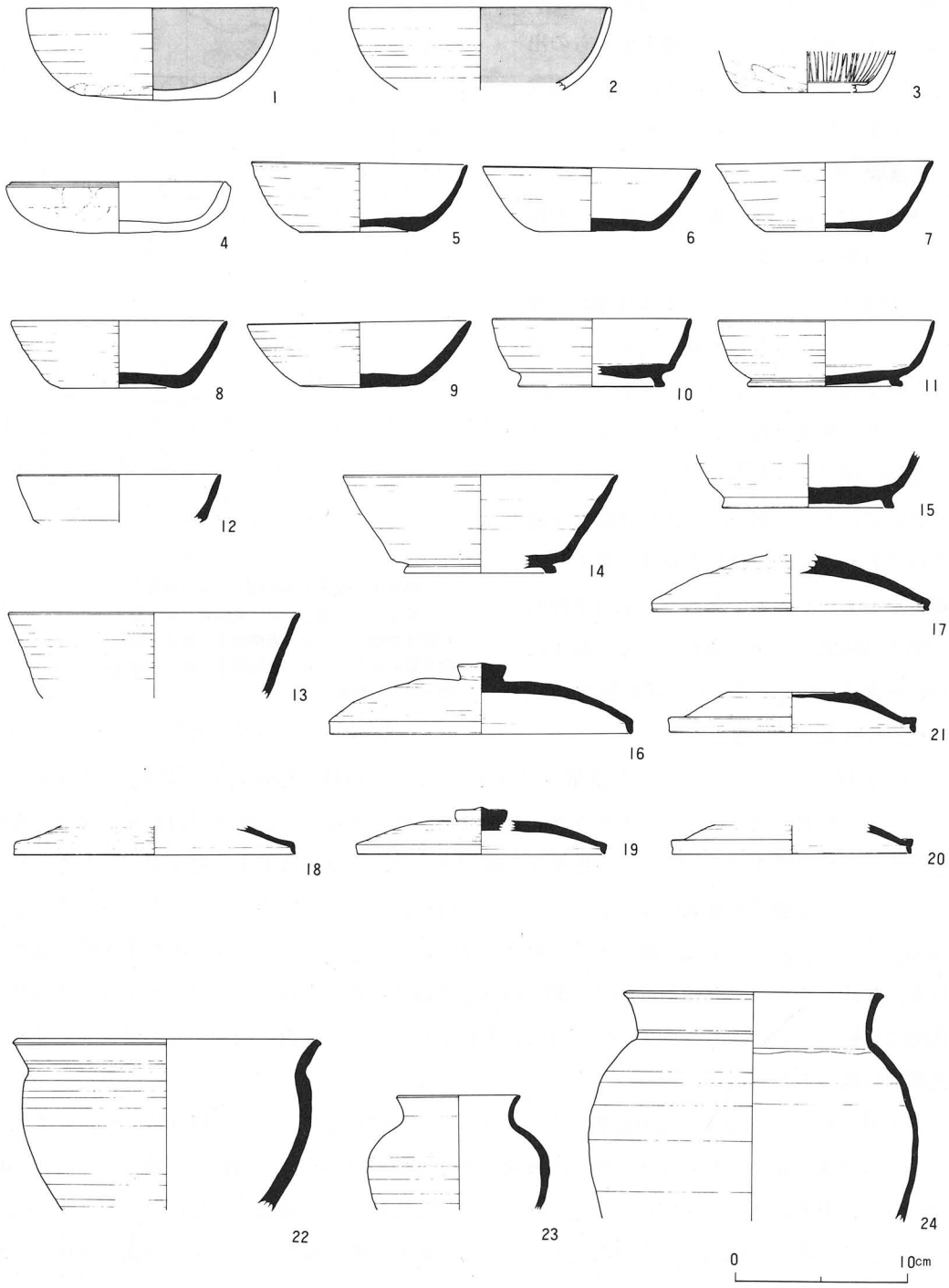


1、褐色土（焼土・炭化物・ローム粒混入）
2、粘土　3、焼土　4、褐色土（第1層より黄味が強い）　5、赤褐色土（焼土・炭化物多量に混入）　6、黄褐色土（焼土・炭化物・ローム粒混入）

第52図　第10号住居址カマド（1/30）

須恵器坏（5～9）　須恵器坏は法量がほぼ等しい。5は口縁が内彎気味に開き、6は直線的に開く。5・6共に内外面ロクロナデされ、底部は糸切りである。5は胎土に白色粒を含み、焼成は良く青灰色を呈す。6は胎土に白色粒を比較的多く含み、焼成はあまり良くない。黒青灰色を呈す。7・8は酸化炎焼成によるもので鮮やかな橙褐色を呈す。内外面ロクロナデされている。底部は糸切りであるがかなり雑である。胎土には白色粒を含み、内外面には火だすき痕が認められる。9はやや厚手で口縁が直線的に開く白色須恵器である。内外面はロクロナデされており、底部は回転ヘラ削りである。胎土には白色粒をわずかに含み、猿投産灰釉陶器の胎土と似ている。色調は白色である。

高台坏（10～15）　いずれも須恵器である。10～12は口径が小さく、13～15は口径が比較的大きい。10は口縁が強く立ち上がり、腰部内外面に稜をもつ。底部外周を回転ヘラ削りして高台を付けており、中央には糸切り痕をとどめている。高台は比較的高く端部はやや膨らみをもつ。胎土には白色粒を含み、焼成は良く青灰色を呈す。11は腰部が張る器形である。内外面ロクロナデされているが内底面は特に滑らかである。底部は外周を回転ヘラ削りして高台を付けており、中央部には糸切り痕をとどめている。高台は低いもので端部を外方へ突出させている。胎土は白色粒と黒色粒を含んでおり、わずかに黄味のかかった青灰色を呈す。12は胎土に白色微粒をわずかに



第53図　第10号住居址出土土器(1/4)

含み、焼成は良く灰黒色を呈す。13は口縁が直線的に大きく開く深身の高台坏である。底部は回転ヘラ削り後高台を付け、内側のみロクロ調整されている。高台は低く高台の稜は鋭い。胎土には白色粒・石英粒を含んでおり、焼成は不十分で器面は全体にザラついている。14は底部回転ヘラ削りで高台付け後調整されている。底部は厚く、高台は台形を呈す。胎土には白色粒を多く含み、焼成は良く青灰色を呈す。15は外面に自然釉がかかっている。

蓋(16～21)　蓋には口径の大きい16と、中程度の17・18、やや小振りの19～21とがあり、17のみ灰釉陶器の蓋である。16は平坦な天井部から緩やかに内彎しつつ口縁に至る器形である。口縁はやや外開きであり、先端部は丸味をおびている。天井部は回転ヘラ削りされており、宝珠のつまみを付けた後その周辺のみ調整されている。内外面ロクロナデされており、内面には外周に沿って自然釉がかかっている。胎土には白色粒・黒色粒を含んでおり、焼成は良く青灰色を呈す。17は灰釉の蓋である。口縁は内折した後丸味をおびて外側へわずかに端部が突出する。天井部は厚く、天井部全面に淡黄緑の釉がかけられている。折戸10号窯期の猿投産である。18は口縁が外開きに内折する。全体に薄手で焼成は良く、内面には自然釉がかかる。19は天井部に回転ヘラ削り痕をとどめる。口縁部はわずかに内折しており、先端部は断面三角形を呈す。胎土には白色粒を含んでおり、黒灰色を呈す。20・21は口縁部が一旦外側へ屈曲した後に垂れ下がる。20は先端部が平坦に近いが、21はやや尖り気味である。21は天井部が糸切りのままであり、摘みを付けていない。胎土には白色粒を含んでおり、全体に黄味のかかった青灰色を呈す。

小形甕（22）　口縁に最大径をもつ須恵器の小形甕。口縁部は短かく緩く外反し、口唇部は平坦で外傾している。内外面ロクロナデで外面は特に丁寧である。胎土には黒色粒・白色粒を含み、内面には黒色物が熔出している。青灰色を呈す。

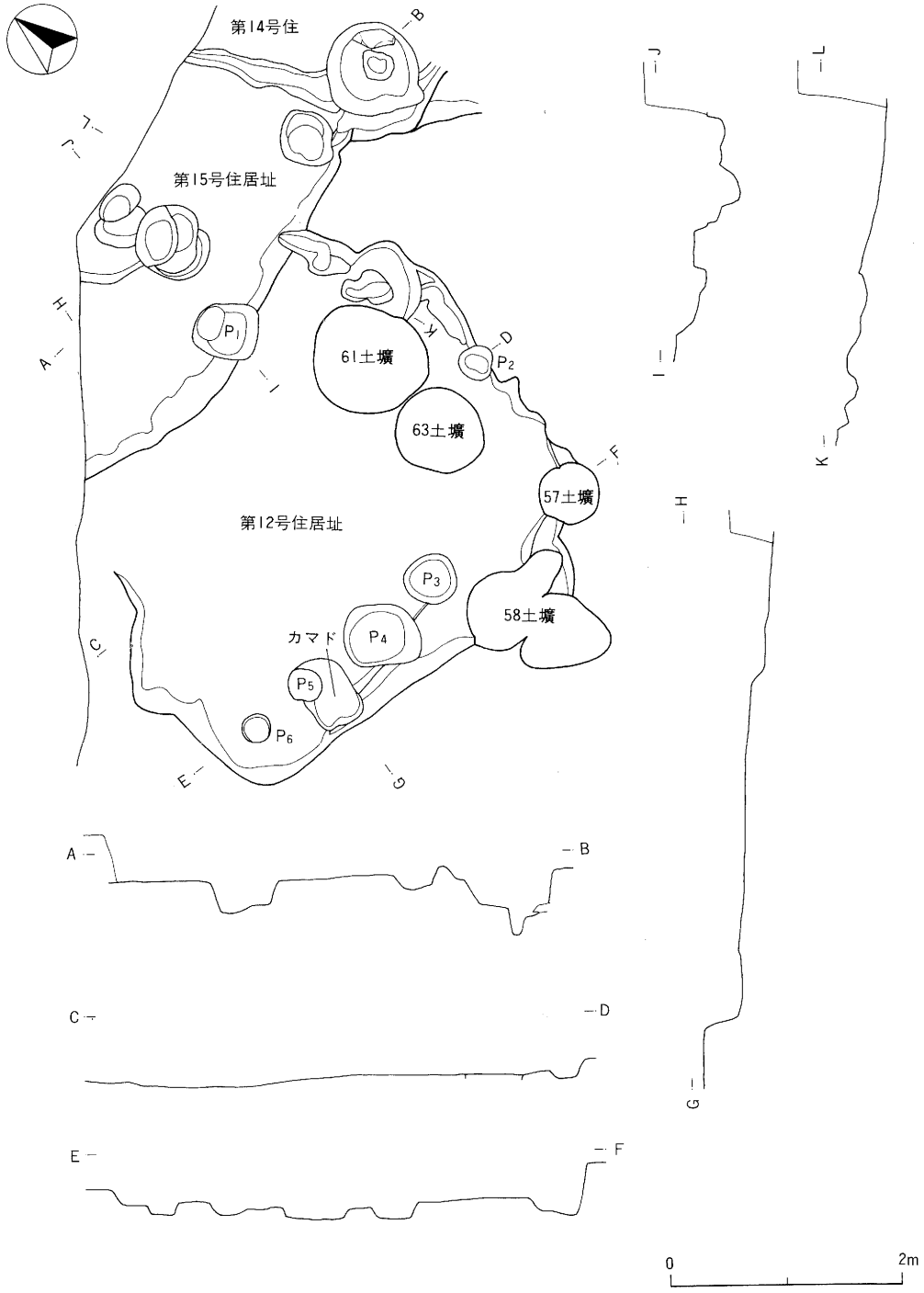
小形短頸壺（23）　肩部に最大径をもつ須恵器の小形短頸壺。短い口縁部は外反気味に開き、端部は丸味をもっている。内外面共に肩部から口縁にかけては丁寧にロクロナデされている。胎土には白色粒を含み、色調はやや黒味をおびた青灰色を呈す。

短頸壺（24）　須恵器の短頸壺。扁球形の胴上位に最大径をもち、口縁はやや外返気味に強く立ち上がる。全体に薄手で、粘土紐巻き上げ成形後ロクロ調整されている。胎土には黒色粒を含み、焼成は良く黒青灰色を呈す。口縁部内側と胴部には自然釉がかかる。

第12号住居址（第54・55図、図版第９－２）

検出状況　本址は発見された住居址の⅔ほどが455－１の南隅に位置している。455－１は南隅全体に切土と削平をし、この上に石積みをして畑の境としている。石積みはカマド上の壁際に地山面から積み上げられている。このため本址は全体に攪乱を受けており、殊に西側での攪乱と削平が著しい。しかし第15号住居址の壁に切られた形で発見された柱穴が東コーナー部に設けられていたものと考えられたため、本址の規模とプランについては大略を推定しえた。

一方、本址の北側には本址を切った形に第15号住居址が設けられている。本址は第15号住居址上に貼床をしていた可能性もあるが、攪乱が激しいこともあり、両者の重複関係は判然としなか



第54図　第12・15号住居址(1/60)

った。また、本址の床面下には第61・63号土壙、南コーナー部には第57・58号土壙が存在する。

遺構の構造　南壁中央右寄りの位置にカマドを有する住居址である。住居址は400×380cmほどの主軸方向に長い隅丸長方形を呈するものと考えられ、主軸はS15°Wを向く。

壁は掘り込みの深い南壁が比較的安定しており、30cmほどの壁高で遺存している。東壁・西壁は攪乱のため不整な壁となっており、西壁はその中央部までしか検出できなかった。

周溝は西壁下にわずかに認められた。

床はローム層を掘り込んだ後に埋め戻して貼床をし、床面としているが、北側は掘り込みが浅いこともあり、おそらく黒色系土層中への貼床であったと想定される。検出された床面はそれほど堅くはなく、西側では攪乱による凹凸が著しい。

主柱穴は西コーナーのP_6、それにP_6と対角線上に位置するP_1であり、南コーナー部には発見されなかった。P_4・P_5はカマドに関わる施設とみられ、P_2・P_3は柱穴とすれば補助的なものであろうか。

カマドは南壁中央右寄りの位置に設けられている。隅丸方形の掘り方をもち、断面は浅く船底状に窪んでいる。左側面部から肩部にかけて灰白色の粘土が付着していた他は、焼土や礫等はまったく検出されなかった。焚口部に円形の浅い掘り方があり、これは袖石を据えるための施設であったのだろうか。掘り方の規模からみて、全体に小形で粘土を主として構築されたカマドであったと考えられる。

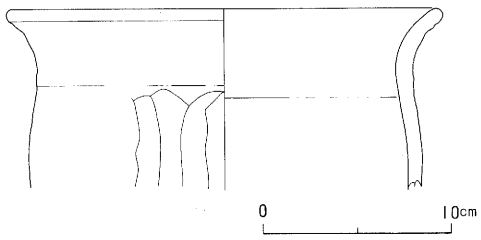
遺物の出土状態　住居址の掘り込みが浅く、また、全体に攪乱を受けているためか出土遺物は少ない。床面からの出土遺物はほとんど認められなかった。

出土遺物（第55図）

土器　土師器・甕がある。甕は口縁に最大径をもつ長胴形のものであろう。口縁部内外面はヨコナデ、胴部は縦方向に軽くヘラ削りされており、内面は丁寧に調整されている。胎土には雲母等を含んでおり、焼成は良く明褐色を呈す。

第14号住居址（第8・56図、図版第10－1）

検出状況　第13号住居址の精査に伴い明らかとなった住居址である。住居址の北側は未調査となってしまったが、カマドを調査しえたのは成果であった。住居址は南の第13号住居址と西側の第15号住居址を切っており、カマド東脇の床下には第13号住居址の埋甕炉が発見された。



第55図　第12号住居址出土土器（1/4）

遺構の構造　南壁中央右寄りの位置にカマドを有する住居址である。規模は明らかでないが隅丸長方形を呈する住居址と考えられ、主軸はS14°Wを向く。

壁はローム面に掘り込んでいる北壁が8cmほどの高さをもっている。東壁はほとんど認められ

ず、西壁も判然としなかった。

周溝は各壁下に設けられている。

床は北壁際でローム面を直接床面としている他は、全体にローム面上へ貼床をしている。床面は全体に軟弱であったため、十分に検出しきれなかった。

柱穴は南コーナー部にP_2とP_3の２箇所、西コーナー部のP_5内にP_6が１箇所設けられている。P_5は柱穴と重複しており、第15号住居址の施設とも考えられたが判然としなかった。上面に貼床は行われていない。

カマドは南壁中央右寄りの位置に設けられている。86×82cmの平面形が円形を呈する掘り方をもち、燃焼部は船底状を呈している。袖石や天井石は認められず、上面にわずかに礫が遺存していたのみである。全体に粘土の小ブロックが認められ、特に燃焼部では灰褐色の粘土を主体とした層が厚く堆積していた。カマドは粘土を主として構築されたものと考えられる。

遺物の出土状態　遺物の出土量は少なく、覆土とカマド内から若干の土師器と須恵器が出土したのみである。

出土遺物（第56図）

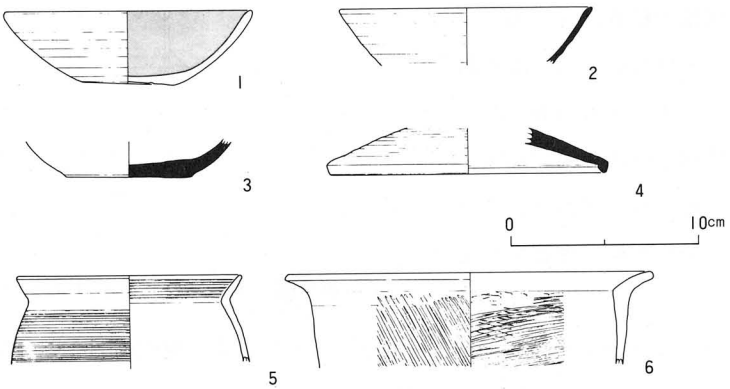
土器　坏・蓋・小形甕・甕があり、量的には須恵器が多い。

坏（１～３）　１は黒色土器で底部に糸切り痕をわずかにとどめる。内面は黒色手法をとっているが光沢はない。胎土には微赤粒・砂粒を含み、焼成は比較的良く橙褐色を呈す。２・３は須恵器。３は底部糸切り。２・３共に胎土に白色粒・黒色粒を含み灰色を呈す。

蓋（４）　須恵器蓋。内外面ロクロナデされており、端部はやや厚く仕上げられている。胎土はややガサついており、白色粒・黒色粒を含む。

小形甕（５）　胴部中程に最大径をもつロクロ成形された小形甕。口縁部内側と胴部にカキ目が施される。胎土に砂粒を含み、焼成は良く明褐色を呈す。

甕（６）　６以外にカマド内から出土した須恵器甕の大破片がある。６は口縁が強く外反し、口縁部内側に段をもつ。口縁部内外面はヨコナデされ、内面はその後丁寧にナデられている。胴部内外面はカキ目様の調整が施されており、外面は若干ナデられている。胎土には雲母と砂粒を含み、焼成は良く赤褐色を呈す。



第56図　第14号住居址出土土器（1/4）

第15号住居址（第54図、図版第10－2）

検出状況　本址は東側を第14号住居址に切られており、南側の第12号住居址を切った形にある。住居址はローム層を掘り込んでいるものの、地表までが浅いため攪乱が多く及んでいる。しかも調査できたのが一部分であったことから、本址については不明な部分を多く残している。

遺構の構造　コーナーの丸味の強い隅丸長方形プランの住居址と考えられる。

壁は緩い傾斜をもつ南壁が検出されたのみである。

周溝は設けられていない。

床面は攪乱のためか軟弱で凹凸があり、判然としない。ローム層まで掘り込んだ後に埋め戻して貼床をしたものと考えられる。

遺物の出土状態　遺物は覆土から数点の土器片が出土したのみである。

第16号住居址（第35・57・58図、図版第5－1）

検出状況　検出状況については第4号住居址の項を参照されたい。

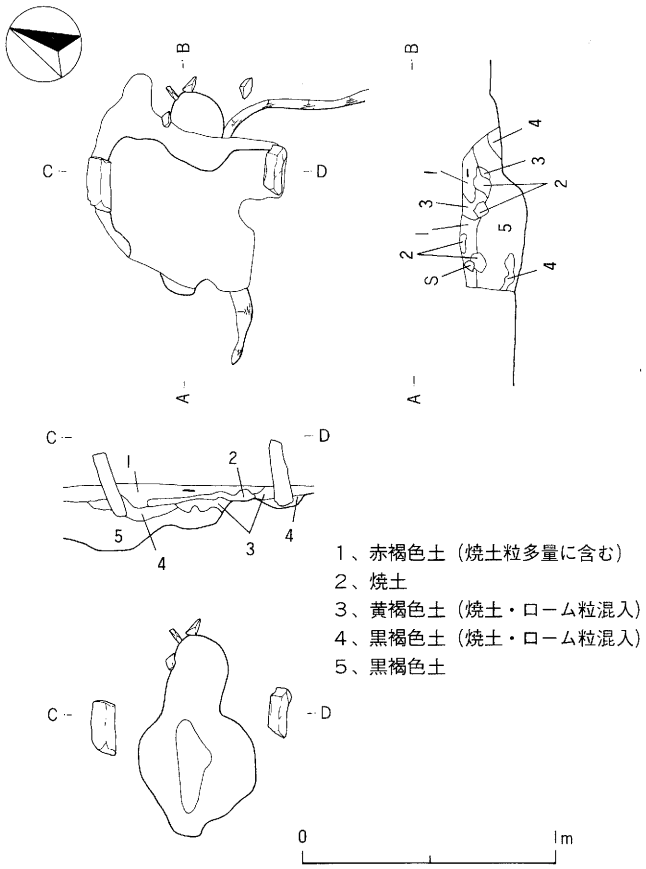
遺構の構造　住居址の大部分は用地外にあるものと考えられ、また第4号住居址と重複する部分でも柱穴等は発見されず、プランはほとんど判然としなかった。そのためここでは発見されたカマドについてのみ記すこととする。

カマドはD－8グリッドに位置しており、主軸はE30°Sを向く。扁平礫が1枚ずつ両袖に直立しているが、これが袖先端部になるとは思われない。焚口部から煙道部にかけては平面形が柄鏡形を呈する掘り方があり、断面形は煙道部で一段高くなっている。燃焼部の上面には天井石と考えられる礫も遺存したようであるが、詳細は不明である。

遺物の出土状態　カマド西側より皿と坏が出土した。

出土遺物（第58図）

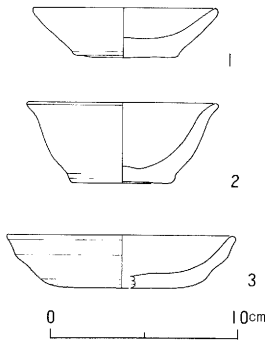
土器　皿・坏がある。



第57図　第16号住居址カマド（1/30）

皿(1)　底部から立ち上がる部分がわずかにくびれ、厚い口縁が直線的に開く。内外面ロクロナデされており、底部は糸切りである。全体に厚手のつくりで底部も比較的厚いがそれほど特徴的ではない。胎土には石英粒を含み、焼成は比較的良く明褐色を呈す。

坏(2・3)　2は底部から立ち上がる部分にくびれをもち、腰部がやや張り、口縁は外反する。内外面はロクロナデされているがそれほど丁寧ではない。底部は糸切りである。全体に厚手のつくりであるが、底部はそれほど厚くない。白色粒・石英粒を比較的多く含む。成形・焼成はあまり良い方ではなく、明褐色を呈す。3は底径が大きい割りには器高が小さく皿に近い形態である。底部から腰部への移行部は丸味をもっており、口縁はやや内彎気味に開く。内外面共丁寧にロクロナデされているが、外面にはロクロ痕をとどめる。内底面は平滑であり、底部は糸切りで平坦である。胎土は比較的良く、白色粒・微赤粒を含む。焼成は普通で明褐色を呈す。



第58図　出土土器(1/4)

第17号住居址 (II区第1号住居址) (第10・59図、図版第11－1)

検出状況　D・E－16グリッドに堅緻な床面が発見されたため、この床面の広がりを追求し、プランの把握に努めた。住居址の南側約1/2ほどは用地外にある。また、東側は縄文時代中期の第18号住居址と重複し、北側は第19号住居址に接している。

プラン把握への手掛かりとなるものと思われた床面は、礫を多く含む不安定な地山面を貼床状に整えて設けられている。このため堅緻な部分の周辺部は部分的に検出されるのみであり、殊に東北のコーナー部に相当すると思われる部分では非常に不明確であった。このように、本址は他の遺構と重複関係にある等、また地山面が安定していなく壁の立ち上がりが検出されなかったこともあり、プランは堅緻な床面の広がりと、部分的に認められた貼床の残存部の位置、それに本址に伴うと考えられる柱穴との相互関係から想定した。

遺構の構造　本址は平面形が隅丸方形を呈する住居址と考えられる。規模については明らかでないが、各コーナー部の対角線上に位置する隅柱と考えられるP_1・P_2間は460cmほどあり、P_2・P_{10}間では440cmほどある。住居址の方向は、II区で発見された同時代の他の住居址と同様の方向をとるものと考えられる。

壁は、礫を多く含む不安定な地山面に掘り込んだ東壁が、わずかな立ち上がりをもって発見された。他の同時代の住居址と同様に、おそらく南壁は地山中に比較的深く掘り込んでいるものと思われる。

周溝は検出されなかった。東壁下では、掘り方を埋め戻して床を設ける際に、おそらく周溝も設けられたものと思われるが、検出できなかった。

床面は地山礫を多く含む地山面を貼床状に整えて堅緻な床面としているが、東コーナー部周辺

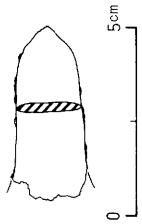
では貼床状の床面が部分的に認められた程度である。また、東壁側の溝状の掘り方部は埋め戻して貼床をしたものと考えられるが、堅緻な床面は認められなかった。

柱穴は各コーナー部に設けられていたものと考えられる。P_1・P_2・P_{10}であり、対角線上に位置する隅柱であろう。

遺物の出土状態　東側溝状の掘方底面に甕の胴部片が遺存していた。また、床面からは鉄鏃が出土した。その他はすべて覆土中からの出土であり、本址の時期決定に足る資料はない。

出土遺物（第59図）

鉄鏃　広根型式の鉄と思われる。柳葉形を呈する腸抉のつくものであろう。重さ5.3ｇ。



第59図 出土鉄鏃（½）

第19号住居址（Ⅱ区第３号住居址）（第11・60・61図、図版第12－１）

検出状況　Ｂ－16グリッドに鉄製鎌と床面が発見されたことにより、存在が明らかとなった住居址である。住居址の北側から西側にかけては縄文時代中期の第20・21・22号住居址と重複関係にある。一方、南側では縄文時代中期の第18号住居址と部分的に重複しているとみられる。また、住居址の南コーナー部床下には第74号土壙が存在し、西南部では第17号住居址と接した形に設けられている。

床面はローム層中に設けられているものの、明確に検出できたのはＢ－16周辺のみであり、他の部分は軟弱で判然としなかった。このため住居址の西側は周溝の検出によってプランを把握した。また、住居址の北側から東側にかけての約½ほどは縄文時代中期の第21・22号住居址の覆土中に設けられていたため、この部分についてはプランの把握に的確さを欠いてしまった。しかし、セクション観察によって第21号住居址の覆土中に本址の存在を認めえたため、規模やプランについては略々推定しえた。したがってセクション観察でも明らかであったが、本址の東コーナー部は用地外に存在している。

遺構の構造　検出された住居址の最大幅は、南壁に並行する住居址の主軸線となるものと思われる位置で約600cmほどある。これに直交する軸線の長さは、第21号住居址のセクションに現われた状態から推測すると480cm前後となろう。平面形は検出された住居址のあり方からみて隅丸方形を呈するものと思われる。

壁は地山面への掘り込みが全体的に浅いため、掘り込みが比較的深くなる南壁部のみ検出された。しかし、ローム壁高は高い部分で10cmほどしかなく、西側コーナー寄りの部分ではごくわずかに認められた程度である。

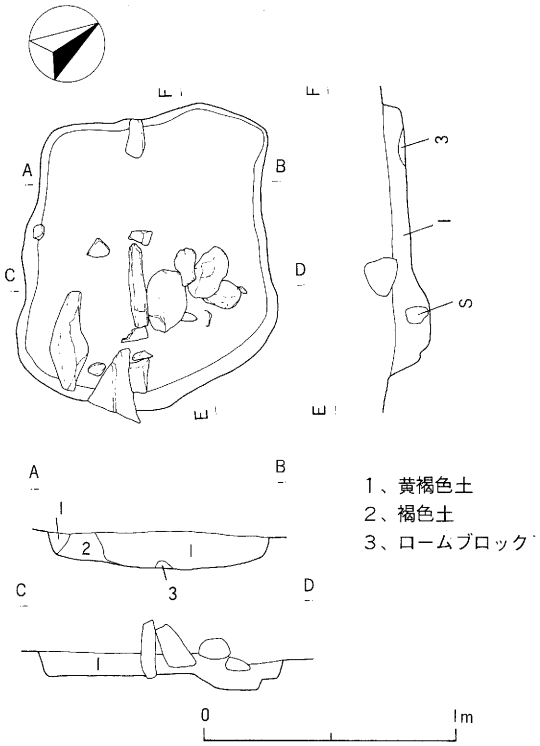
周溝は南壁下の西側から西コーナーへかけて設けられており、さらに石組状遺構を挟んで北へ続いている。また、一部分ではあったが南コーナー部にも認められるため、南コーナーを中心に東壁へかけて、西側と対称的な形で設けられていたことも考えられる。

残存する床面は地山面を直接床面としているが、Ｂ－16周辺以外は軟弱であり、これらの部分

では地山礫が床面に突出している。B－16周辺は、下位の第74号土壙上に貼床をする等堅緻な床面を残していたが、それに連なる東側部分は不安定な礫を多く含む砂質の地山層中に設けられていたため、壁等と共に検出できなかった。

カマドは発見されなかった。当初、住居址西側の周溝ライン上に石組が発見されたため、カマドを想定して精査した。石組は小規模ながらも袖石や天井石らしきものを有して箱形に組まれていた。しかし、浅い掘り方は認められたものの、遺物や焼土・粘土等はまったく検出されず、カマドとは認め難い施設であった。

柱穴は明らかでないが、コーナー寄りのものとしてP_4とP_5が考えられよう。

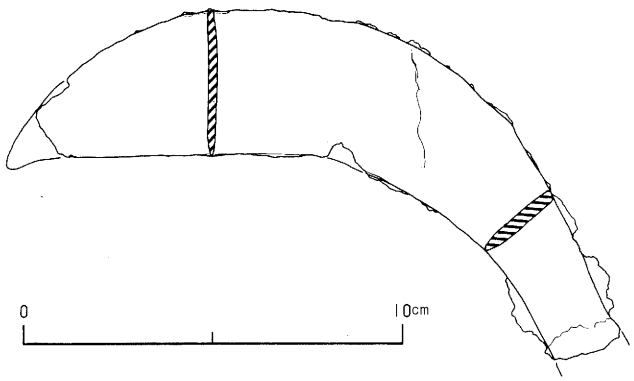


第60図　第19号住居址石組(1/30)

遺物の出土状態　住居址南コーナー部の床から鉄製鎌が出土した。鎌は、焼土粒と木炭粒が100×80cmの楕円形を呈して集中する硬い床面上に遺存していた。付近からは遺物は出土せず、また粘土等も認められないことから、この部分はカマド址とは考えられなかった。この他、本址の時期を決定できるような遺物の出土はない。

出土遺物（第61図）

鎌　刃部最先端と基部を欠損する。刃部は直線を呈し、逆に背は丸味をもって基部へつらなる。基部は身部よりも幅が狭いが1cmほど厚い。

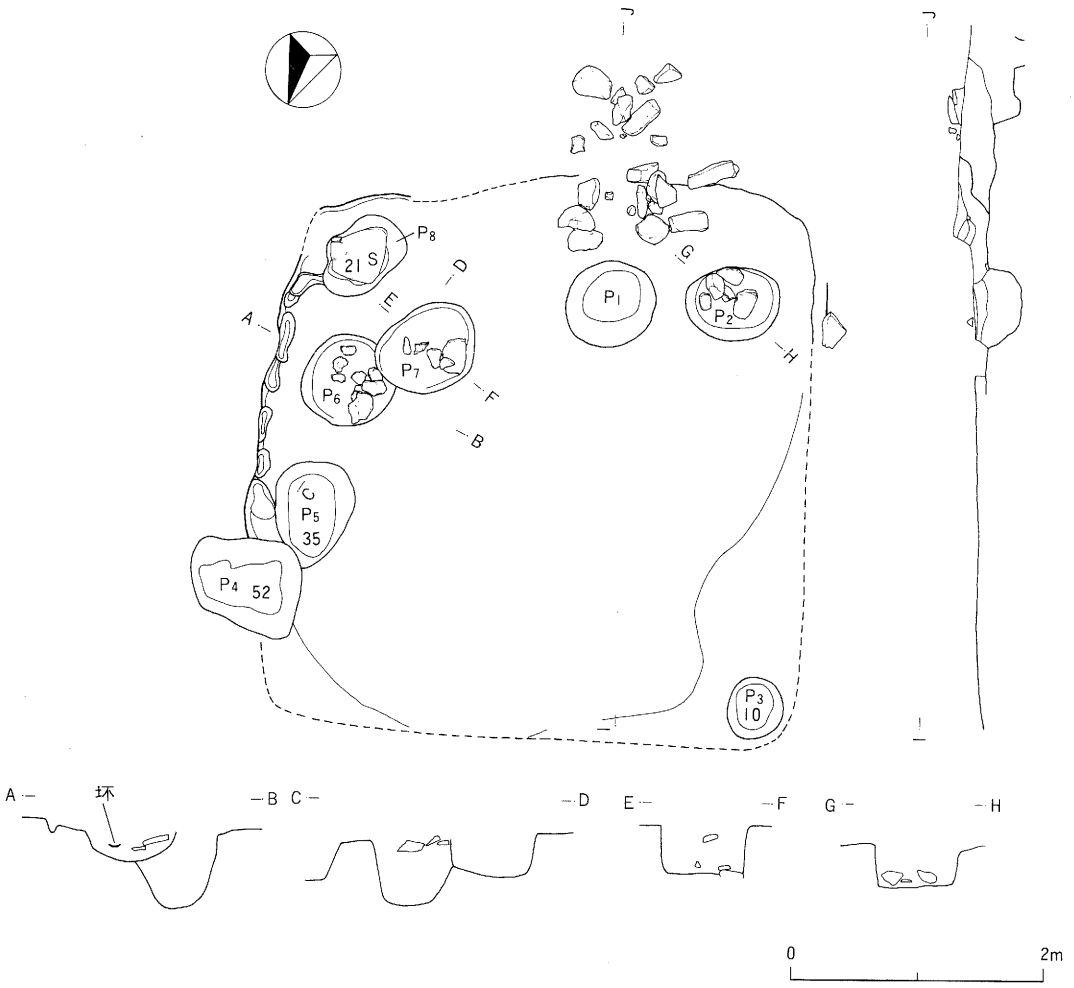


第61図　第19号住居址出土鎌(1/2)

第23号住居址（Ⅱ区第７号住居址）（第62・63・64図、図版第14－１・26－６）

検出状況　Ｃ－20グリッドに石組カマドを発見したことにより、存在が明らかになった。

本址は、縄文時代中期の第24号住居址覆土中に構築されている。東壁部はローム面へ掘り込んでいるものの、プランの大概は第24号住居址覆土中での床面の広がりによって把握した。まず、カマド周辺の床面を露呈し、東壁側と北壁側へ床面を追求した。床面はカマド周辺部では厚い貼床となっているものの、北壁側へは緩く傾斜して薄くなり、北壁部では下位の第24号住居址の床面へと続いてしまう。一方、西壁側では床面の追求から一部壁の立ち上がりを検出しえたものの、西コーナー部から西壁側にかけては十分検出しきれなかった。このため西コーナー部のプランについては、柱穴と考えられたP_3と床面の広がり、それに西壁の一部との関係により推定した。



第62図　第23号住居址（1/60）

ところで、カマド周辺の貼床の状態と貼床下の施設の存在、それに東壁側に設けられている同規模の小竪穴状の施設が同地点で新たに設けられていること等からみて、本址は改築の行われた住居址であることが予測された。しかし、住居を拡張した様子は認められず、また、カマドについても移動した痕跡等検出しえなかった。このため本址は住居を拡張することなく、何等かの理由によりカマド周辺部のみ部分的に改築し、これと共に東壁側の施設も新たに設け直された特異な事情をもつ住居址であると考えられた。

遺構の構造　南壁中央やや西寄りの位置にカマドを有する隅丸方形プランの住居址と考えられる。住居址の規模は450×440cmほどあり、主軸方向はS24°Eを向く。

壁は、ローム層中に掘り込まれていた東側でごく浅い東壁部の立ち上がりを検出した他は、西壁の一部を除いてほとんど検出できなかった。

周溝も、ローム層中に掘り込まれて設けられた東壁部に沿ってのみ検出された。周溝は1本の溝状を呈すものではなく、長円形の小ピットが連続するものであり、深さは6cm前後と比較的浅い。

床は、ローム層中に設けられた東壁沿いの部分が直接ローム面を床面としている他は貼床である。貼床はカマド周辺が厚く、北側へ薄い。カマド周辺では、改築前にはカマドに伴ったと考えられるP_1とP_2に貼床がなされており、P_6も床下に検出された。

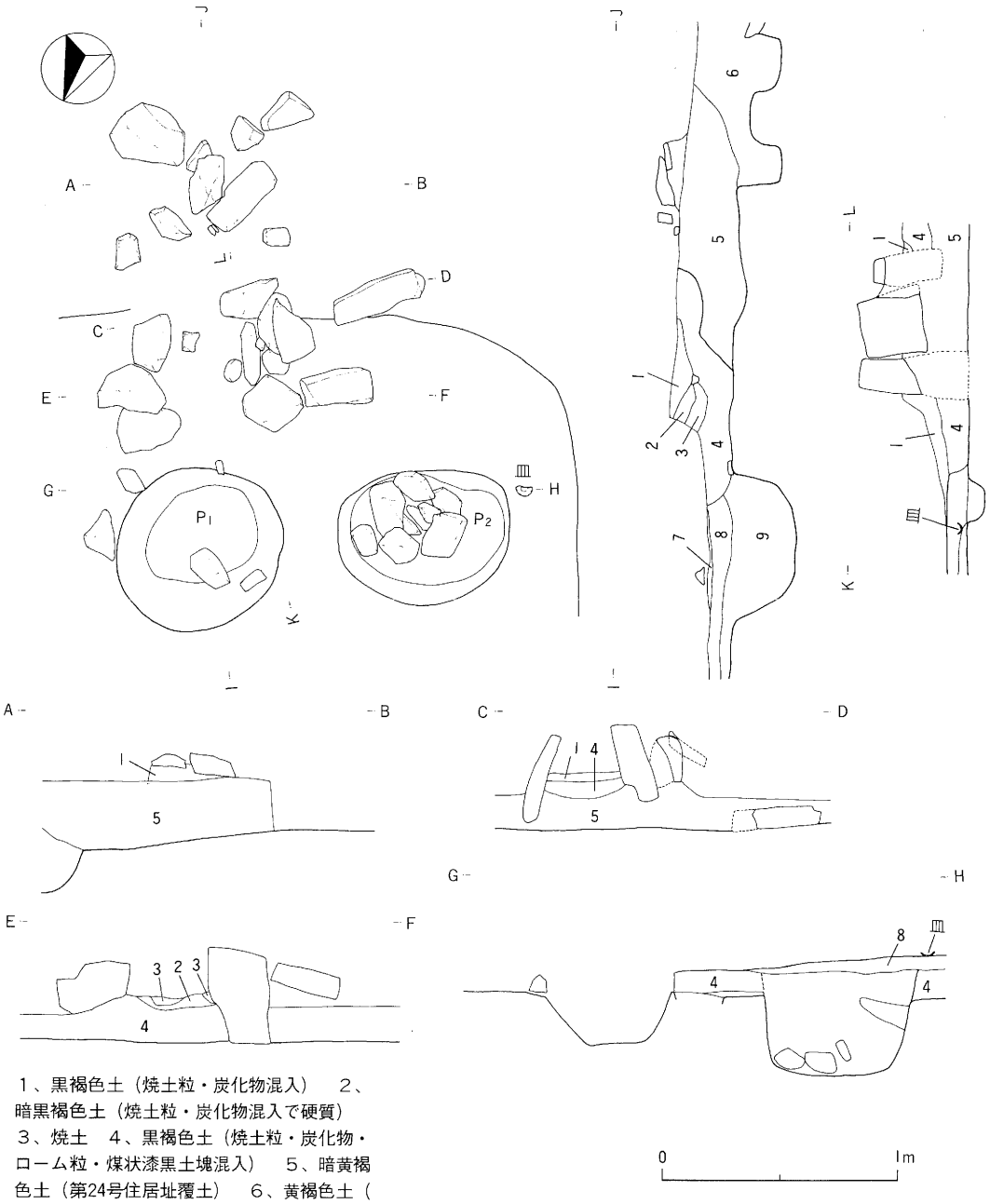
柱穴は東コーナー部のP_8の他は、P_8と対角線上に位置する西コーナー部のP_3が相当しよう。P_8は底面に上面の平坦な地山石が存在する。床面からの深さは21cmである。一方、北コーナー部と南コーナー部では柱穴は検出されなかった。しかし変則的ではあるが、北壁際のP_5がこのうちの1つに相当しよう。

カマドは南壁中央やや右寄りの位置に構築されている。石組カマドで、袖石には厚い角柱礫と厚い扁平礫を据えている。燃焼部は船底状を呈して一段高い煙道部へと続いており、煙道部の先にはカマド石が散在している。焚口部から燃焼部・煙道部にかけては焼土・炭化物・灰を含む黒褐色土が充満し、燃焼部ではこの土層の上に燃焼面が一枚みられる。焚口部周辺の床面には煤状の漆黒土が広く認められた。

カマド焚口部と焚口部右側にはピットが設けられている。P_1・P_2共にカマドに関係した施設と考えられるが、両者共に上面に貼床がなされている。P_1はカマド焚口部に設けられており、カマド燃焼部を埋める土層とほとんど同質の土層で埋まっている。P_2は拳大から人頭大の角礫や扁平礫を底面に遺存しており、ピットは炭化物や焼土を含む黄褐色土で埋められている。P_1とP_2は共存したものではなく、各々カマドとセットをなしたものと推測される。しかしカマドは最終的にはこうした施設を伴っていないため、問題が残る点でもある。

また、これらのピットと同規模で、P_2と同様、ピット内に礫等を有するP_6とP_7がP_1を挟んだ東壁寄りの位置から発見された。このP_6・P_7は縄文時代中期の第8号住居址の柱穴と同地点で重複している。このうちP_6には貼床がなされており、後に同地点に設けられたP_7に切られている。共

に覆土中に礫を有しており、P_6からは礫の他に坏が1点出土した。P_7からは遺物は出土しなかったものの、P_6・P_7は同性格の施設とみてよいであろう。P_1・P_2に貼床がなされていること。また、P_6に貼床がなされ、同地点に同性格の施設と思われるP_7を新たに設けている等、これらの施設のあり方には一連する事象の存在を想定させるものがある。



1、黒褐色土（焼土粒・炭化物混入）　2、暗黒褐色土（焼土粒・炭化物混入で硬質）　3、焼土　4、黒褐色土（焼土粒・炭化物・ローム粒・煤状漆黒土塊混入）　5、暗黄褐色土（第24号住居址覆土）　6、黄褐色土（第24号住居址覆土）　7、漆黒色土（煤状を呈す）　8、貼床　9、黒褐色土（灰混入）

第63図　第23号住居址カマド（1/30）

P_4は灰釉陶器と土師器を出土したが、本址に伴う施設であるのか判然としない。

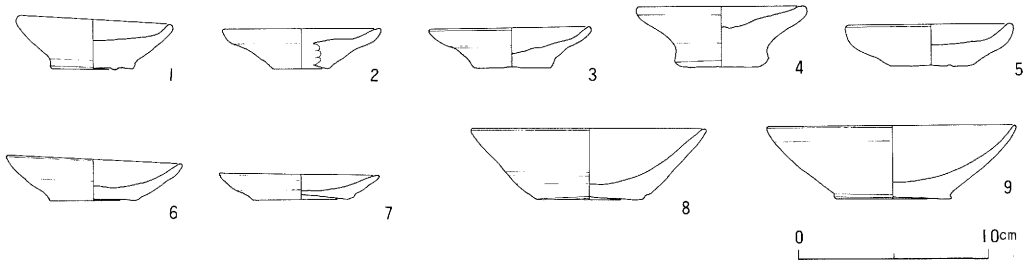
遺物の出土状態　床面ではP_2の脇から皿が出土した。また、カマド右側の貼床中からも皿が出土し、P_6内からは坏が出土した。この他はカマド焚口部周辺から出土した。

遺土遺物（第64図）

土器　皿・坏がある。

皿（1～7）　ロクロ成形糸切り底の皿である。1～3は底部を厚く切った皿で、口縁がやや内彎気味に立ち上がる。1は底部を厚く切るために糸の掛け口を3㎜ほど下位に下げて掛け直した後切っている。右回転ロクロ成形で胎土には白色粒を含み、焼成は比較的良く明褐色を呈す。2は胎土に微石粒を含み、焼成は比較的良く、ややくすんだ橙褐色を呈す。3はやや薄手であり、内底面中央部がやや深くなっている。右回転ロクロ成形で胎土に石英粒を比較的多く含む。焼成は良く赤褐色を呈す。4は底部を擬似高台にしたもので、器高が高く全体に厚手のつくりである。厚く丸い口縁が直線的に開く器形で皿部は浅い。胎土には石英粒を多く含んでおり、成形・焼成共にあまり良くない。明褐色を呈す。5は全体に器肉が厚く、口縁部が内彎気味に立ち上がり、底部が張り出さない器形。内底面は平坦で、外面にはロクロ痕が認められないが口縁部内面のみロクロナデされている。焼成はやや劣り明褐色を呈す。口縁内側に黒色物が付着している。6は口縁が内彎気味に大きく開く器形。底部は比較的薄く上底様の底部となり、糸切りは比較的丁寧である。右回転ロクロ成形で内外面はロクロナデされており、ロクロ痕は顕著でない。胎土には粒子をそれほど多く含んでおらず、焼成は良く赤褐色を呈す。7は器高が低く口縁が直線的に開く器形。底部は薄く上底状を呈し、糸切りは比較的丁寧である。右回転ロクロ成形で内外面ロクロナデされているが、外面にはロクロ痕が残る。胎土には微赤粒を含み、焼成は良くくすんだ橙褐色を呈す。

坏（8・9）　8・9はP_6内出土。8は口縁が直線的に開く。腰部にロクロ痕をわずかにとどめる。内外面ロクロナデされているが、内底面は特に丁寧に調整されている。胎土には石英粒等を含み、焼成は9ほど良くなく橙褐色を呈す。9は口縁が内彎気味に大きく開く器形。外面にはロクロ痕をとどめずロクロナデされており、内面も丁寧に調整されている。胎土の状態は8と同じで、焼成は良く明褐色を呈す。



第64図　第23号住居址出土土器（1/4）

第25号住居址（Ⅱ区第９号住居址）（第65・66図、図版第15－１・26－７）

検出状況　本址は北側を第31号住居址に切られると共に、第30号住居址の北側に切り込んでいる。また、東コーナー部は第29号住居址西コーナー部上に貼床をして設けられていた。

地山面は全体に北側へ緩く傾斜しており、北壁側床面は地山面に掘り込まずに直接地山面を床面としている。この部分の床面は堅緻であり、床面の北側ラインは容易に検出しえた。一方東コーナー部は第29号住居址覆土中への貼床であり、貼床は部分的に検出しえた程度であった。しかし床面から灰釉陶器が出土したことから、この灰釉陶器の位置と貼床のあり方の両者から、この部分のプランを捉えることができた。

遺構の構造　平面形はコーナーの丸味が弱い長方形を呈するものと思われる。長軸方向の大きさは不明であるが、発見された部分での短軸方向には330cmほどある。長軸はN30°Eを向く。

壁はローム層への掘り込みが深い南壁から東壁にかけては20cm前後の立ち上がりとなり、壁面も安定している。北壁は検出しえなかった。

周溝は南壁下と東壁下に検出された。比較的幅が広く、深さも10cm前後あり、周溝内には小ピットが認められる。

床は水平で堅緻である。北壁側はローム面を直接床面としているが、掘り込みの深い南壁側は埋め戻して水平な床面としている。第29号住居址と重複する東コーナー部は覆土への貼床であり、部分的に検出しえた。

住居中央部に相当すると思われる位置に拳大、人頭大の礫を有するP_1が設けられている。ピットは平面形が80×70cmほどの楕円形を呈し、断面形はタライ状を呈している。ピット上面に貼床はない。ピットは、その覆土下部２層が住居址の覆土と同質であることから、ピットは住居廃棄時には開口していたと考えられた。ピット内からは遺物は出土しなかった。

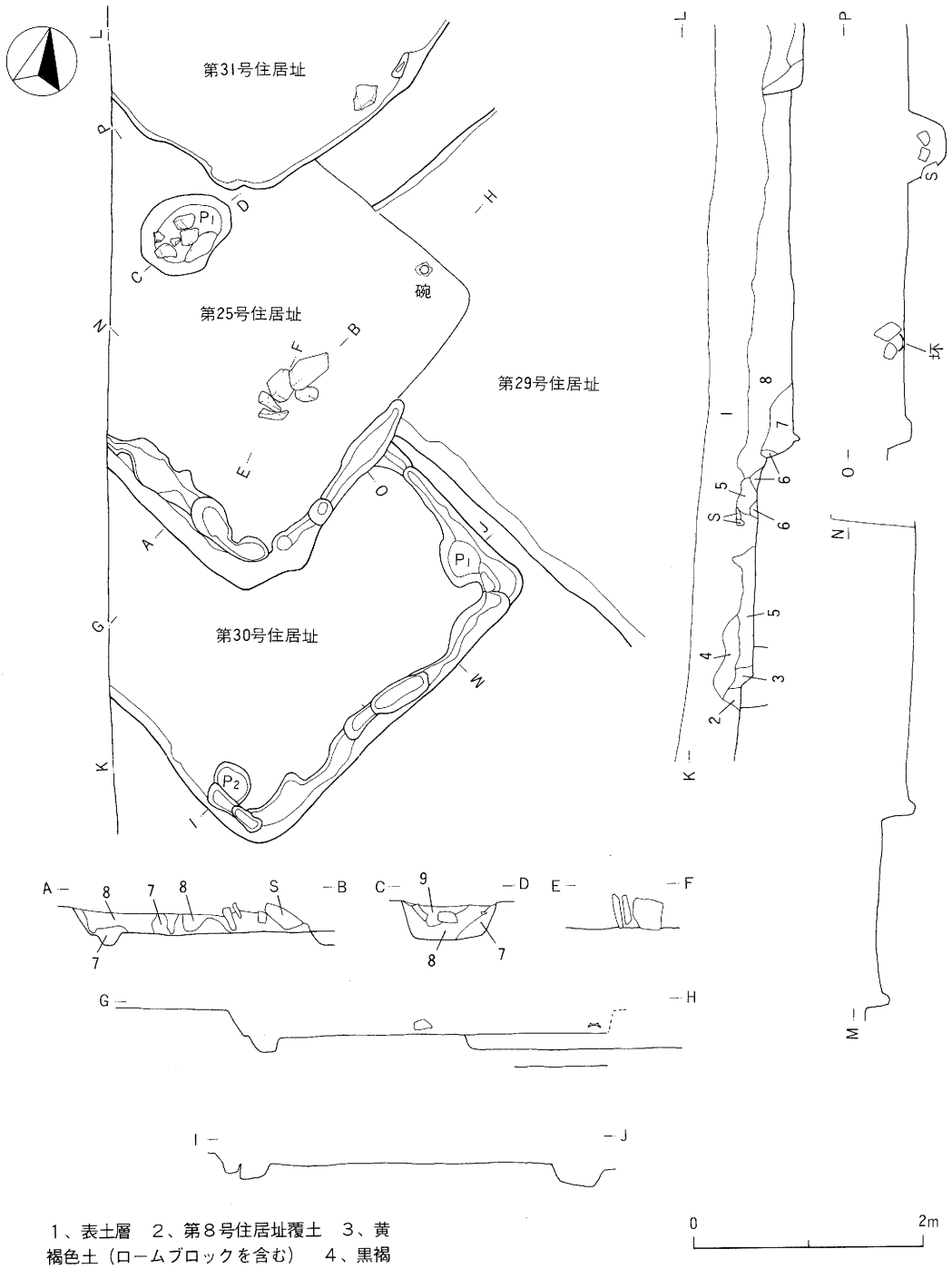
また、ピットから東壁側へ120cmほど離れた位置に集石が設けられていた。集石周囲には掘り方がなく、覆土中にも掘り込みが認められないことから、集石は本址に伴うものと考えられる。集石は大きい角柱状のものが一部床面に食い込んでおり、大きいものは床面に立てられていた様である。集石間の礫下から坏が２点出土した。

柱穴やカマドは検出されなかった。

本址は第30号住居址と同規模の住居址である。第30号住居址は火災に遭った住居址と考えられ、その状況からみて、そのまま放置されずに整理されたものと思われる。また、本址の南壁の掘り込みが第30号住居址の覆土中には観察されなかったことから、本址は第30号住居址が埋没しきらない比較的早い段階に設けられた住居址であることが理解される。このため本址は第30号住居址焼失後、新たに建て替えられた住居址である可能性が強い。

遺物の出土状態　ほとんどが覆土中からの出土である。特異な例としては、集石間の礫下床面より坏の大破片が２個体分出土した。

出土遺物（第66図）



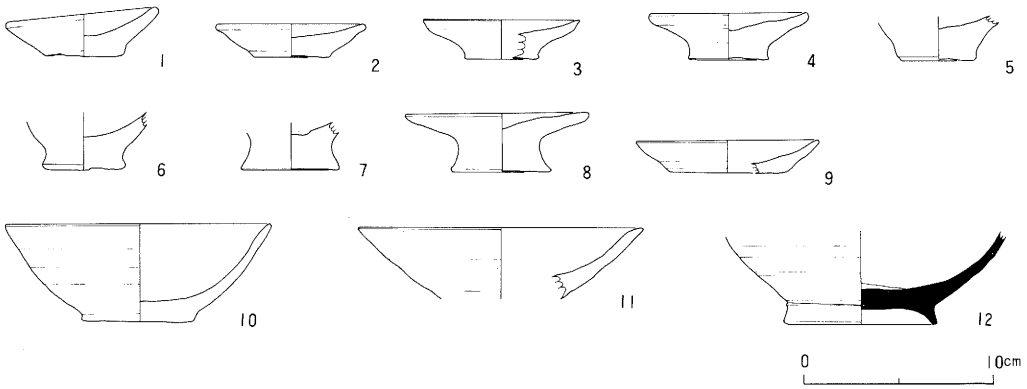
1、表土層　2、第８号住居址覆土　3、黄褐色土（ロームブロックを含む）　4、黒褐色土（ロームブロックをわずかに含む）
5、褐色土（木炭片・ロームブロック等を含む）　6、褐色土混りの黄褐色土（貼床に用いた土層）　7、暗黄褐色土　8、暗褐色土（炭化物・ローム粒を含む）　9、暗褐色土

第65図　第25・30号住居址（1/60）

土器　皿・坏・碗がある。

皿(1～9)　ロクロ成形糸切り底の皿。1・2は底部を厚く切り、厚い口縁が直線的に開く。1は底部をわざわざ厚く切っており、底面を磨って平坦面としているため糸切り痕をとどめない。内外面ロクロナデされておりロクロ痕は顕著でない。胎土には石英粒・長石粒を含み、焼成は比較的良く赤褐色を呈す。2は器高がやや低く明褐色を呈す。3は底部がやや張り出し、口縁部が内彎気味に立ち上がって開く。内外面ロクロナデされておりロクロ痕は顕著でない。焼成は比較的良い。4は底面の平坦な擬似高台状の底部を有し、厚い口縁がわずかに立ち上がり気味に開く。右回転ロクロ成形で内外面ロクロナデされており、外面にはロクロ痕をわずかにとどめる。胎土には白色粒を含み、焼成は普通で明褐色を呈す。5～8は底部が高台状に厚くつくられ強く張り出す。器高は3cm以上あり、厚い口縁が直線的に開く。5は右回転ロクロ成形。胎土に石英粒を含み明褐色を呈す。6は内外面ロクロナデされており、外面にはロクロ痕をとどめない。底部はやや雑な糸切りである。7は内外面ロクロナデされ、内底面中央部が窪んでいる。底面は平坦で糸切りは比較的丁寧である。焼成は良く明褐色を呈す。8は口縁が外へ弘き出ており、底部は外へ大きく張り出す。内底面中央部が一段低く凹む。内外面ロクロナデされており、ロクロ痕をとどめない。底面は平坦で糸切りは比較的丁寧である。胎土には白色粒を含み、焼成は良く明褐色を呈す。9は口縁が直線的に開き、底部のつくりが薄い。器高は比較的低く口径に対する底径比が比較的大きい。内外面ロクロナデされており、ロクロ痕をほとんど残さない。焼成は良くくすんだ橙褐色を呈す。

坏(10・11)　10は底部から立ち上がる部分に括れをもち、腰部が内彎しつつ開く器形。底部は比較的厚く糸切り痕をとどめる。内外面ロクロナデされているが内底面にはロクロ痕が残る。11は内そぎ状の口唇部をもち口縁部が直線的に開く器形。内外面ロクロナデされており、外面から内面にかけて縞状に黒色物が付着している。10・11共に集石中の礫下床面より出土したもので、10は覆土中出土のものと接合している。



第66図　第25号住居址出土土器(1/4)

碗(12)　口縁が内彎しつつ開く深身の比較的大形の碗。底部付近の腰部はヘラ削りされておらず底部には糸切り痕をとどめる。高台は貼付け後ロクロ調整されているが付け方は雑であり、高台には亀裂が入っている。内外面共に施釉は不明であるが内面には自然釉が掛かっている。また、欠損部のほぼ全周には黒色物が付着している。折戸53号窯期の東濃産の碗である。

第26号住居址（II区第10号住居址）（第14・67図）

検出状況　第24号住居址の覆土掘り下げの段階で遺物が比較的多く出土し、また部分的に硬質の貼床状の面が認められたが、プラン等十分確認しえなかった。このため本址についてはセクション観察を主として推定することとなった。

遺構の構造　遺物の出土した部分と貼床状の硬い面が認められた範囲、それにセクション観察を合わせて本址のあり方を推定すると、本址はそのほとんどが用地外に存在するものと考えられる。遺物の出土した部分と貼床状の面が認められた範囲は、おそらく住居址の東コーナー部であったと思われ、住居址の方向は第23号住居址以外の同期の住居址と同様の方向をとっているものと予測される。

セクション観察によると、本址は第24号住居址の覆土上部に掘り込んで設けられており、第24号住居址の床面上40cmほどの位置にある。竪穴の掘り込みは南側が30cmほどあり、北側は20cmほど掘り込んでいる。覆土は炭化粒を含む黒味の強い黒褐色土である。

床は15cm前後の厚さで全体に埋め戻して床面を設けている。埋め戻した貼床部はローム粒混入の黒褐色土で、しまりの良い黒褐色の硬質ブロックを含んでいる。床面は堅緻であるが北側では軟弱な部分が多く、全体に緩く北へ傾斜している。床面には中央部に人頭大の礫が遺存していた。

遺物の出土状態　出土した遺物は東コーナー部の覆土中、あるいは床面出土のものと考えられる。この他、丁寧で作りの良い完形の高台皿が、セクションに現われた南壁寄りの貼床中から正位の状態で出土した。高台皿は竪穴の掘り方の底面に遺存していたことになり、埋め戻して床を設ける時点かそれ以前のものとして、そのあり方が注意される。

出土遺物（第67図）

土器　皿・高台皿・坏・高台坏・鉢がある。

皿(1～6)　ロクロ成形糸切り底の皿である。1～3は底部を厚く切り、口縁が直線的に開くもので、1・2は口径がやや大きく器高も高い。共に底部は擬似高台状につくられている。1は底部を平坦にするため厚みのある糸切りの出口を焼成前に取り除いて調整している。このため糸切り痕が½ほど消えている。2の底面は平坦で糸切りは丁寧である。1・2共に内外面をロクロナデし、外面にはロクロ痕をとどめない。胎土は良好で色調も等しく、焼成も良い。2は右回転ロクロ成形である。3は口縁がやや内彎気味に立ち上がる。内外面ロクロナデされているが外面にはロクロ痕が残る。底部の糸切りは雑で、底部½ほどは糸の掛け口で切っていない。このため切り残りの部分があり、不安定な底面となっている。胎土には石英粒を比較的多く含み、焼成は良く暗褐色を呈す。4～6は比較的厚い底部をもち、皿部が浅い。器高は低く、口径に対する底

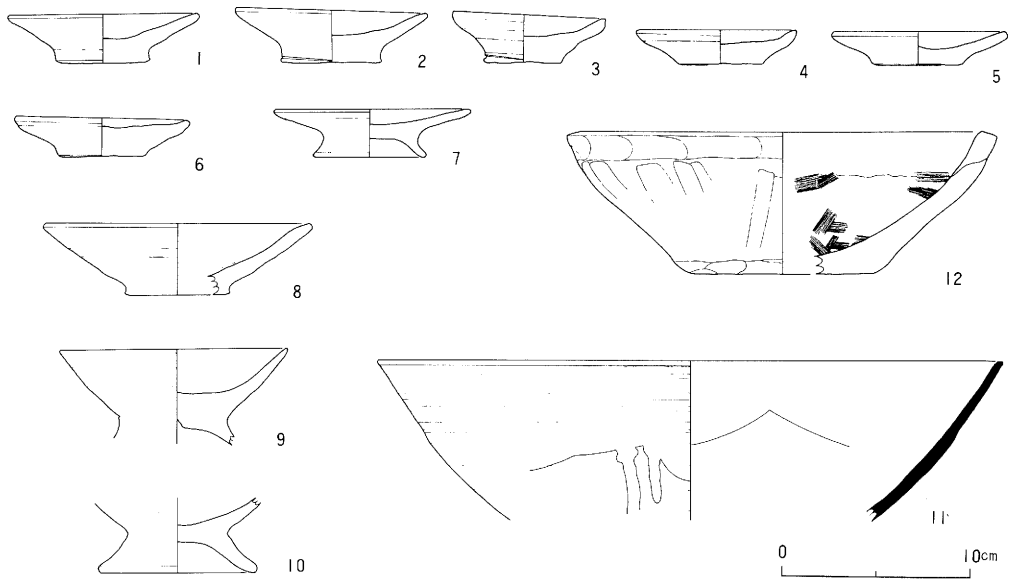
径比が比較的大きい。4は口縁が内彎気味に立ち上がる。右回転ロクロ成形で内底面は平坦である。内外面ロクロナデされており胎土に微赤粒を含み橙褐色を呈す。5は口縁が直線的に開く。内外面ロクロナデされており、ロクロ痕は認められない。胎土に粒子を多く含み、焼成はあまり良くない。右回転ロクロ成形である。6は1・2と同質の胎土。口縁がわずかに内彎気味に立ち上がり、内底面は平坦である。右回転ロクロ成形で内外面ロクロナデされており、ロクロ痕は残らない。焼成は良く明褐色を呈す比較的丁寧なつくりの皿である。

高台皿(7)　口縁は外方へ直線的に開く。高台は外方へ開き、端部は丸くおさめられている。高台は貼り付け後ロクロ調整されており、底部の糸切り痕は消され、丁寧に調整されている。右回転ロクロ成形で内外面共に丁寧にロクロナデされ、ロクロ痕をとどめない。胎土は1・2・6と同質で良好である。焼成も良く橙褐色を呈す丁寧なつくりの皿である。

坏(8)　底部が厚く底径の小さい坏で、口縁内側がやや肥厚して直線的に開く。内外面ロクロナデされているが内底面にはロクロ痕をとどめる。胎土に石英粒を含み焼成は良く、内面が橙褐色で外面は黒褐色を呈す。

高台坏(9・10)　9は高い高台をもつ、高台はロクロ調整されており、底部中央には円形の凹みを残している。内外面ロクロナデされているが内底面にはロクロ痕をとどめる。10は高い高台が外反気味に開く。高台端部は丸くおさめられており、高台は丁寧にロクロ調整されている。底部は糸切り痕をとどめず内外面はロクロナデされている。

鉢(11・12)　11は灰釉大平鉢。胴部は口縁部よりも厚くつくられ、この部分はヘラ削りされて



第67図　第26号住居址出土土器(1/4)

いる。内外面には釉が漬け掛けされている。折戸53号窯期の東濃産である。12は粘土紐巻き上げ成形による土師器の浅鉢である。口縁はやや内彎気味に開き、口唇部はヘラで削り取って平坦な口唇部としている。口縁部外面は指頭ナデ、胴部は縦方向の軽いヘラ削り、底部は外周を横方向にヘラ削りしており、内面はハケ調整されている。胎土には雲母・微赤粒・石英・白色粒を含み、焼成は良く墨橙褐色を呈す。内底面には油煙状の付着物がわずかに認められる。

第27号住居址（II区第11号住居址）（第68・69図、図版第15－2）

検出状況　第28号住居址を切り、西コーナー部から西壁側にかけては上位に第29号住居址が重複する。住居址は南西部½弱を調査したことになり、北東部の½強は用地外にある。本址は南壁側と東壁側へ1度拡張を行った住居址であり、それに伴う床面の状況等も把握できた。

遺構の構造　住居址の規模は明らかでないが、検出された南壁間は520cmほどあり、比較的規模の大きな住居址と考えられる。旧住居址の南壁間は420cmほどあり、拡張は西壁側へ広い部分で60cmほど、南壁側へ100cmほど拡張している。

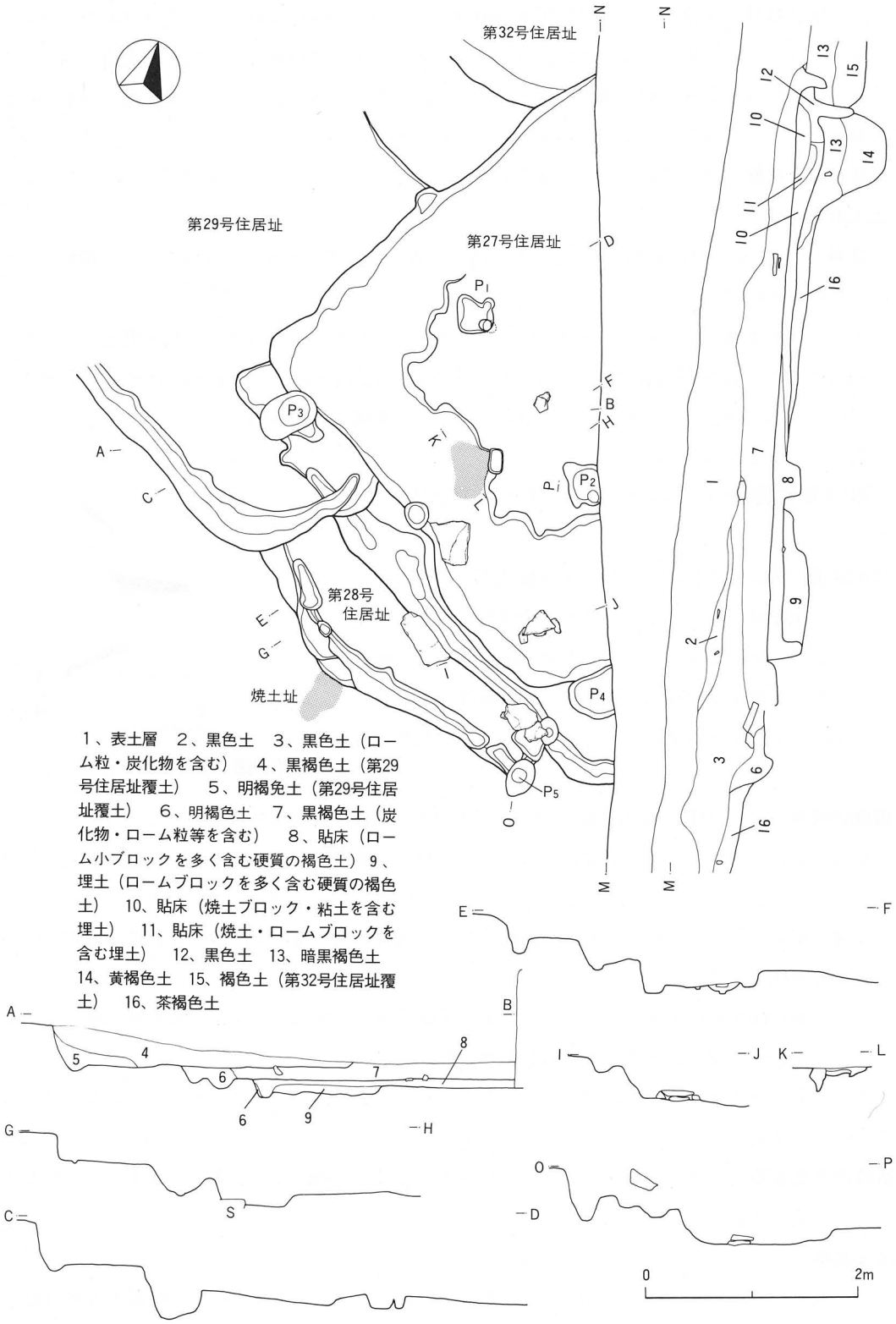
壁は掘り込みの深い南壁側ではかなりの高さをもっていたと考えられる。しかし、第28号住居址の覆土への掘り込みと第29号住居址により切り取られているため、残存する南壁は安定しているものの、ローム壁高はそれほど高いものではなくなっている。また、旧住居址の南壁も新住居址の南壁同様かなり深く安定していたものと考えられる。一方西壁は北側へ向って徐々に低くなっている。このため表土層直下に設けられていた北隅の壁は不明確であった。

周溝は南壁下から南コーナー部にかけて設けられている。幅の広い安定した溝状の周溝であり、深さは10cm前後ある。地山面への掘り込みが深くなる東壁下にも設けられているものと予測される。周溝は旧住居址にも設けられている。幅10cm・深さ15cmほどあり、新住居址のものと同様に南壁下から東コーナー部にかけて溝状にめぐっていた。

床は全体に北側へ緩く傾斜しており、新住居址の床は旧住居址の床面より10cmほど高く設けている。床面は新たに拡張した部分は直接地山面を床面とし、拡張前の部分は全体に旧住居址の床に埋土をし、堅緻な貼床面を設けている。旧住居址の床は中央部では直接地山面を床面とし、北側は漸移層の茶褐色土中に設けられている。また、北隅では下位のピットと重複したため、この部分の貼床部が若干窪んでいる。一方、西コーナー部から東コーナー部にかけては中央の床面よりも15cmほど深く、しかも幅広い溝状の掘り方が検出された。この部分の床は、この掘り方を設けた後に埋め戻され、周溝と共に計面的に設けられている。

柱穴は旧住居址のものがP_1・P_2であり、新住居址のものはP_3・P_4である。旧住居址のものがコーナー部よりもかなり内側に位置していたのに対し、新住居址のものはかなり外側のコーナー部に設けられており、規模と深さも大きくなっている。

カマドは発見されなかったが、旧住居址の南壁側の溝状の掘り方内に焼土址が発見された。焼土址は旧住居址の長軸線上に位置しており、これがあるいは旧住居址のカマドの跡であるかもしれない。



第68図　第27・28号住居址（1/60）

この他に特殊な施設として、旧住居址の南コーナー部に小規模な石組みが発見された。石組みは溝状の掘り方の底面に設けられており、掘方完成後の床面構築前に設けられた施設であることが判る。石組みは拳大の礫を両側に据えて中央部に扁平礫を置き、その上に扁平な三角形の焼石を覆せている。焼石下には焼土がわずかに認められた。

遺物の出土状態　遺物はほとんどが覆土中より出土した。

出土遺物（第69図）

土器　土器類は比較的多いがほとんどが破片であり、実測できるものは少ない。土器類の中では須恵器が比較的多い。

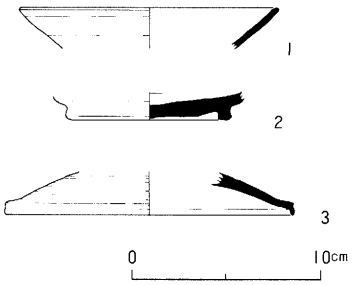
坏（1）　須恵器の坏である。内外面ロクロナデされており、胎土には白色粒・黒色粒を含む。

高台坏（2）　須恵器高台坏。底部は回転ヘラ削りによる平坦面と、高台貼付けのための傾斜した回転ヘラ削り面とからなる。胎土に白色粒を含み、焼成は良く青灰色を呈す。

蓋（3）　須恵器の蓋である。

第28号住居址（II区第12号住居址）（第68図、図版第15－2）

検出状況　第27号住居址と第29号住居址によって住居址の大半以上を切られており、わずかに南壁側のみ検出された。また、壁が弧状に張り出した突端部に焼土址が検出された。当初第28号住居址のカマドの可能性も考えられたが、精査の結果本址に伴うものでないことが判明した。



第69図　出土土器（¼）

遺構の構造　南壁は緩く弧状に張り出し、南コーナーは鋭角で丸味を帯びていない。

壁はローム層中へ掘り込んで設けられている。ローム壁高は20cmほどあり、壁面は安定している。

周溝は壁直下に設けられている。地山面への掘り込みが深い南壁下に設けられている点、他の住居址と同様である。

床面は地山面を直接床面としており、水平で堅緻である。床面には第27号住居址の壁にかかって大きな角柱礫や厚い扁平礫が3個遺存していた。

柱穴は南コーナーのP_5が本址に伴うものと考えられるが、プランのコーナー上に位置している点、特異である。

遺物の出土状態　本址の時期を決定付けられるような出土遺物はない。すべて覆土中からの出土であり、混入が多い。

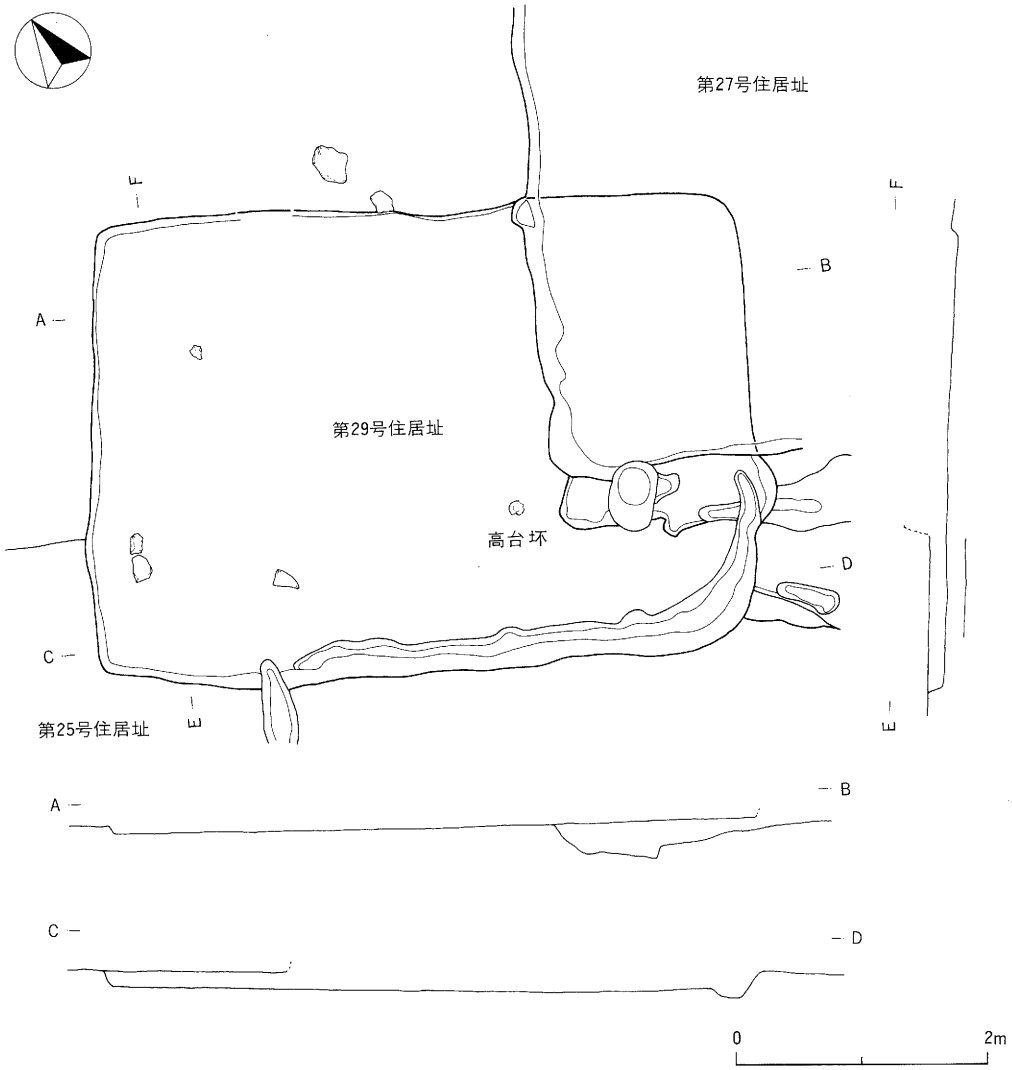
出土遺物

重複関係が著しく残存部が少ないため遺物量も少ない。混入と考えられる土師器・灰釉陶器がある。

第29号住居址（II区第13号住居址）（第70・71・72図、図版第16－1）

検出状況　本址は第28号住居址を切り、第27号住居址西コーナー部の覆土中へ貼床をしている。一方、西コーナー部の覆土中には第25号住居址の床面が設けられており、床下には縄文時代中期の第36号住居址が存在する。

本址はローム面への掘り込みが深い南側プランは容易に検出しえたが、縄文時代中期の第36号住居址の覆土中に設けられていた北側と西側プランは容易には検出されなかった。この部分のプランについては、部分的に検出される壁のあり方と床面の広がりの状態の相互関係から把握した。また、東側のプランについては第27号住居址覆土中の貼床が明確でない部分もあったため、第27



第70図　第29号住居址(1/60)

号住居址とのセクション観察によってプランを推定した。

遺構の構造　平面形は南コーナーのみ丸味を有した長方形を呈する。規模は540×380cmほどあり、長軸はE33°Nを向く。

壁はローム面への掘り込みが深い南コーナー寄りの南壁で36cmほどの高さがあり、南壁は全体に壁面が安定している。西壁は西コーナー寄りの部分が明確に検出しえたものの、北コーナー寄りの部分と北壁は、床面の追求から部分的に立ち上がりを検出しえた程度である。

周溝は南コーナー部から南壁下に設けられている。幅・深さ共に安定した１本の溝状の周溝で、周溝内には小ピットがみられない。

床は、他の住居址と重複しない部分の中央から南側は直接ローム面を床面としている。その他の部分はすべて貼床である。特に第28号住居址と重複する部分には黒褐色土を厚く盛り、水平な床面を設けている。床面は中央から南側は堅緻な床面であるが、北側や第27号住居址覆土中への貼床等やや軟弱な部分が多い。

柱穴やカマドは検出されなかった。

遺物の出土状態　住居址中央やや南寄りの床面から完形の須恵器高台坏、中央部の床面から鉄鏃が出土した。その他はすべて覆土中からの出土である。

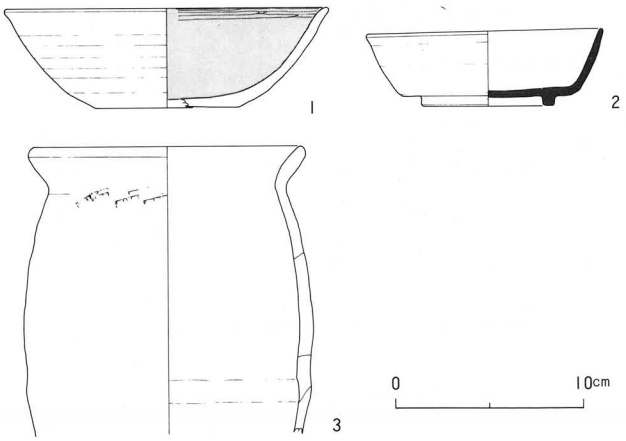
出土遺物（第71・72図）

土器　坏・高台坏・甕がある。

坏（１）　口縁がやや外反気味に開く内面黒色の坏。底部には糸切り痕をとどめており、口縁部内側には幅２mm以下のヘラ磨き痕が数条認められる。胎土には白色粒・微赤粒を含み、焼成は良く明褐色を呈す。

高台坏（２）　床面からの出土である。口縁に歪みがあり、底部は糸切り後丁寧に回転ヘラ削りをし、高台を付けている。高台は断面形が台形を呈し、底部の外周部よりもやや内側へ寄った位置に付けられている。内外面はロクロナデされており、外面は自然釉がかかって光沢を帯びている。胎土には白色粒を含み、焼成は良く黒青灰色を呈す須恵器である。

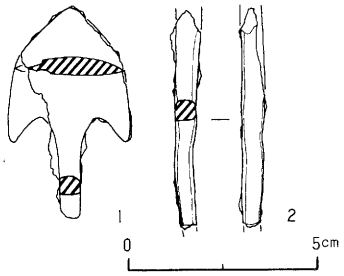
甕（３）　最大径を胴部中程にもつ粘土紐巻き上げ成形による長胴形の中形甕である。胴部は軽くハケ調整されており、口縁部内外は



第71図　第29号住居址出土土器（¼）

横方向に調整されている。胎土に雲母と石英を含み、焼成は比較的良く暗褐色を呈す。混入品であるかも知れない。

鉄鏃（第72図１・２）　１は圭頭式で腸抉をもつ鏃の根部。根部は両丸造りで腸抉部の一方を欠損する。重さ10.0ｇ。２は鏃の茎であろう。



第72図　出土鉄鏃(½)

第30号住居址（Ⅱ区第14号住居址）（第65・73図、図版第16－２）

検出状況　本址は北西部を第25号住居址によって切られている。また、西コーナー側は用地外にある。このためプラン等本址については不明な部分が多い。

ところで、本址の覆土には大きな木炭片が多く含まれており、また床直上には柱状の炭化材が部分的にわずかに残っていた。このため本址は火災に遭った住居址と考えられた。しかし床上の炭化材は散乱する状態で多量に遺存しているのではなく、わずかに残る短い炭化材の状況は、これ等の炭化材等が被災後片付けられた状態を思わせるものであった。

遺構の構造　平面形はコーナーの丸味が弱い長方形を呈するものと思われる。長軸方向の大きさは不明であるが、東壁間は約340cmほどある。長軸方向はN30°Eを向くものと思われる。

壁はローム層へ掘り込んで設けられている東壁と南壁が検出された。ローム壁高は10cm前後と比較的浅く、南壁は東壁よりも浅いためか壁面はそれほど安定していない。

周溝は東壁下と、壁が検出されなかった北壁側に設けられている。地山面への掘り込みが比較的深くなる南壁下に設けられず、壁がほとんど検出されない北壁下に設けられている本址のあり方は、今回の調査で発見された同期の住居址と比較してみるとやや特異な例と言えよう。

床はわずかに埋め戻して設けられており、床面には若干の凹凸がある。床面はそれほど堅緻ではない。

柱穴はP_1とP_2が検出された。共にコーナー部で周溝に接して設けられている。

遺物の出土状態　遺物は少なく、ほとんどが覆土中からの出土である。床面からは坏と、炭化したヘラ状の木製品が出土した。

出土遺物（第73図）

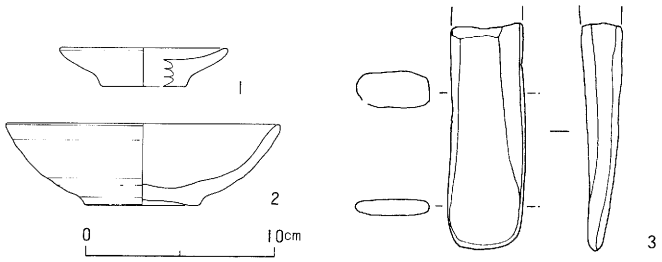
土器　皿と坏がある。

皿（１）　口縁はわずかに内彎気味に立ち上がって開く。内底面は平坦で皿部は浅い。底部は厚く糸切りされており、内外面はロクロナデされておりロクロ痕をとどめない。胎土には白色粒・雲母を含み、焼成は比較的良く褐色を呈す。

坏（２）　底部から立ち上がる部分にくびれを有し、口縁は内彎気味に開く。底部は糸切りであり、内外面はロクロナデされている。内底面にはロクロ痕が残るが、この部分は丁寧にロクロナデされている。胎土には石英粒・白色粒を含み、焼成は比較的良い。色調は内面が明褐色であり、

外面・底部は煤けた黒色を呈す。

木製品（第73図３） 炭化した木製品である。下端は丸味をもっており、下端に向かって次第に薄く削られており、ヘラ状を呈す。下端部は反っており、上部は欠損している。



第73図 第30号住居址出土土器(¼)・木製品(½)

楔とも考えられるが性格は明らかでない。現存長6.9cm、幅1.8cm、重さ3.5ｇ。

第31号住居址（Ⅱ区第15号住居址）（第74・75・76図、図版第17－１）

検出状況 本址はⅡ区の本調査に先立って行った試掘の時点で存在が明らかになっていた住居址である。住居址は縄文時代中期の第36号住居址の西壁側と一部重複し、北壁東コーナー寄りの位置にある第75号土壙には貼床をしている。また、第25号住居址の埋没後に第25号住居址の北側に掘り込んで設けられており、軌を一に連続する切り合い関係にある第30・25・31号の３軒の住居址の北端に位置する、最も新しい時間的位置にある。

住居址は、地形が緩やかな平坦面から傾斜部へ移行する部分の肩部に設けられている。また、ローム面への掘り込みが浅いため、地形が傾斜して行く部分に設けられた北側プランは明確には検出できなかった。しかし北コーナー部は部分的に貼床を把握でき、加えてセクション観察により褐色土中心の貼床と壁の立ち上がりを漸移層とみられる第６層上面に認めえたため、この両者から北コーナー部のプランはほぼ捉えることができた。

遺構の構造 平面形は各コーナーの丸味が弱い隅丸方形を呈し、東壁部はやや弧状に張り出している。規模は500×400cmを有し、長軸はＮ29°Ｅを向く。

壁は東壁を中心に北壁部の一部と南壁が検出された。ローム面への掘り込みが北較的深い南壁でもローム壁高は10cmほどであるが、セクション観察によると、第25号住居址の覆土から掘り込んだ南壁の壁高は34cmほどある。

床は直接ローム面を床面としているが、北側は褐色土中への貼床である。ローム面を床面とした部分は堅緻であるが、床面は全体に水平でない。

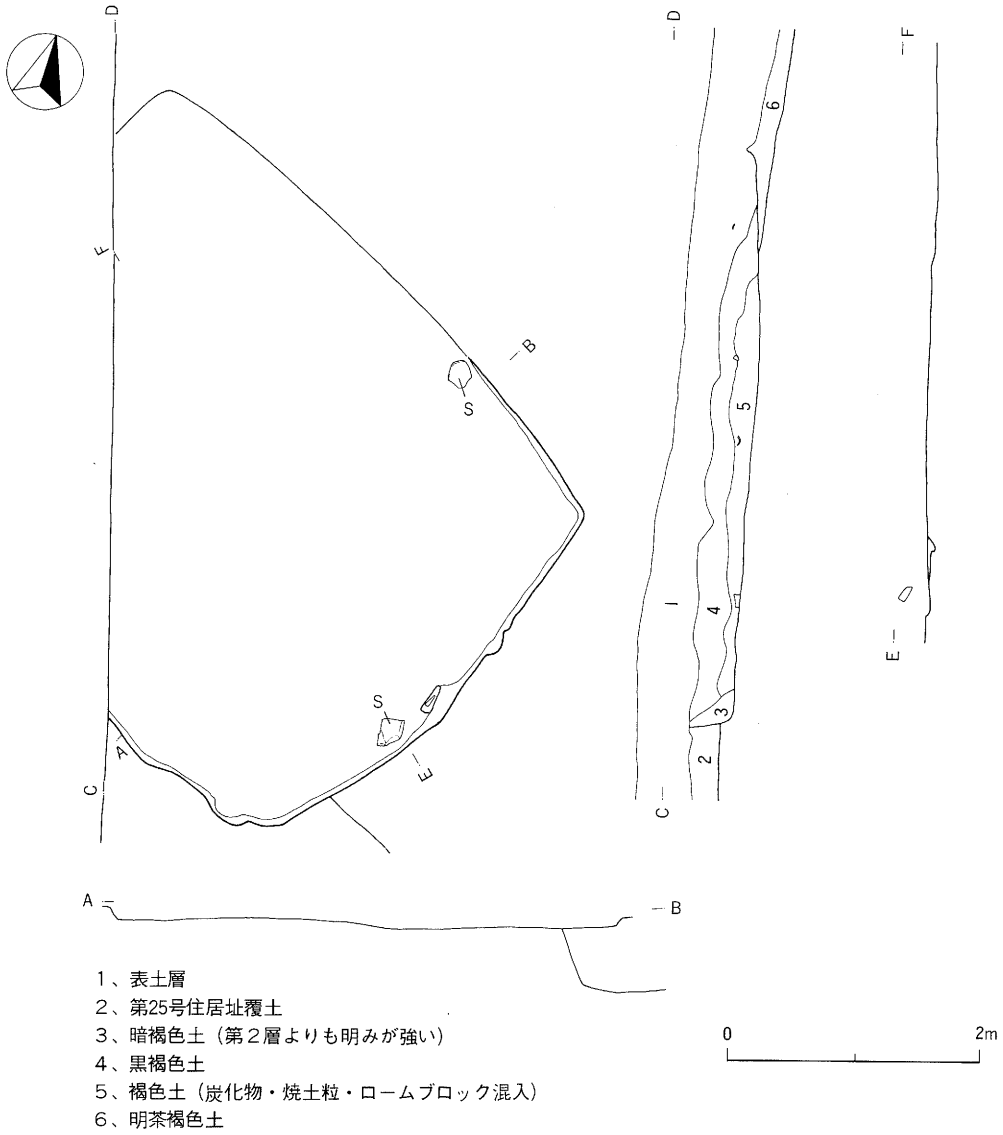
周溝や柱穴、その他の施設は検出されなかった。

遺物の出土状態 床面に近い覆土から完形の皿の他、復元可能な皿と坏が出土している。

出土遺物（第75・76図）

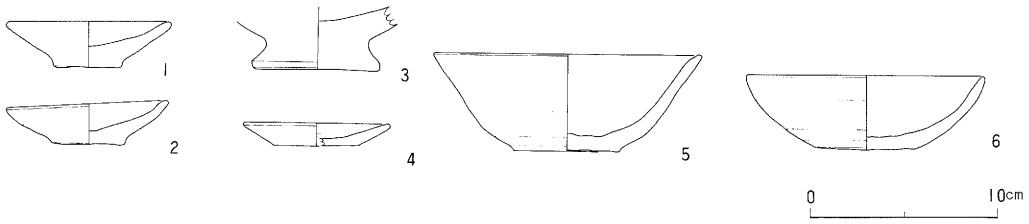
土器 皿と坏がある。

皿（１～４） ロクロ成形糸切り底の皿で擬似高台を呈すものがある。１は底部が厚く口縁が直線的に大きく開き、内底面中央が皿状に凹む。内外面ロクロナデされており、ロクロ痕は顕著でない。焼成は良く暗褐色を呈す。全体に２に近い器形である。２は内底面中央部が一段低くなり、



第74図　第31号住居址(1/60)

口縁がやや内彎気味に開く。右回転ロクロによる成形で内外面ロクロナデされており、ロクロ痕は顕著でない。底部の糸切りはやや雑である。胎土に雲母を多く含み赤褐色を呈す。３は擬似高台状の底部をもつもので坏とした方がよいかも知れない。高台状の底部は外側へ強く張り出し、端部は平坦な面を構成する。糸切り底の底部は厚く平坦で重い。底部には糸切り痕の上に板状圧痕が認められる。成形は良く内外面ロクロナデされており、ロクロ痕をとどめない。底部1/3ほどは第23号住居址からの出土で接合関係にある。胎土には雲母を含み、焼成は良く黒味の強い赤褐色を呈す。４は短い口縁が直線的に開く浅い器形。内外面ロクロナデされており、ロクロ痕をとどめない。底部は平坦で糸切りは丁寧である。

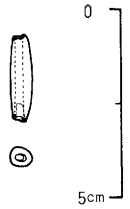


第75図　第31号住居址出土土器(¼)

坏(5・6)　5は腰部が張り、口縁が外反気味に開く器形。内外面はロクロナデされており、ロクロ痕は顕著でない。6は口縁が内彎気味に開く器形。内外面ロクロナデされており、ロクロ痕はそれほど顕著でない。共に底部はそれほど厚くなく右回転ロクロ成形であり、焼成は比較的良い。6は内面が黒色に煤けている。

土錘(第76図)　床面から1点出土した。完形で長さ2.3cm・重さ0.6g、中央部に径0.2cmの孔をもつ小型紡錘形の土錘である。

第34号住居址(II区第18号住居址)(第77・78図、図版第18－1)



第76図　土錘(½)

検出状況　発掘区の北西隅に発見された。住居址は地形が平坦な部分から北側へ傾斜して行く斜面部にかけて設けられている。この傾斜部は畑の境ともなっており、下位の畑はこの傾斜面を削って部分的に境石を設けている。このため住居址の北側は破壊されており、検出された部分は住居址の南側プランの一部と考えられる。

本址は一度拡張を行った住居址である。拡張は南壁側へ行われたものと考えられ、新住居址の拡張に伴い旧住居址に埋土をし、床面を20cmほど高く設けている。この新住居址の北側プランについては、床面が軟弱であり、また既に流出したり削られているためほとんど検出できなかった。旧住居址についてもプラン等多くは不明である。しかし住居址の南コーナー部を検出できたため、セクション観察と共に、旧住居から新住居への拡張のあり方を部分的ではあるが捉えることができたのは成果であった。

遺構の構造　住居址の規模やプランは明らかでない。発見された部分の旧住居址の東壁部は410cmほどの長さをもつ。壁はやや弧状に張っており、南コーナー部は丸味がない。発見された部分の新住居址の東壁部は480cmある。

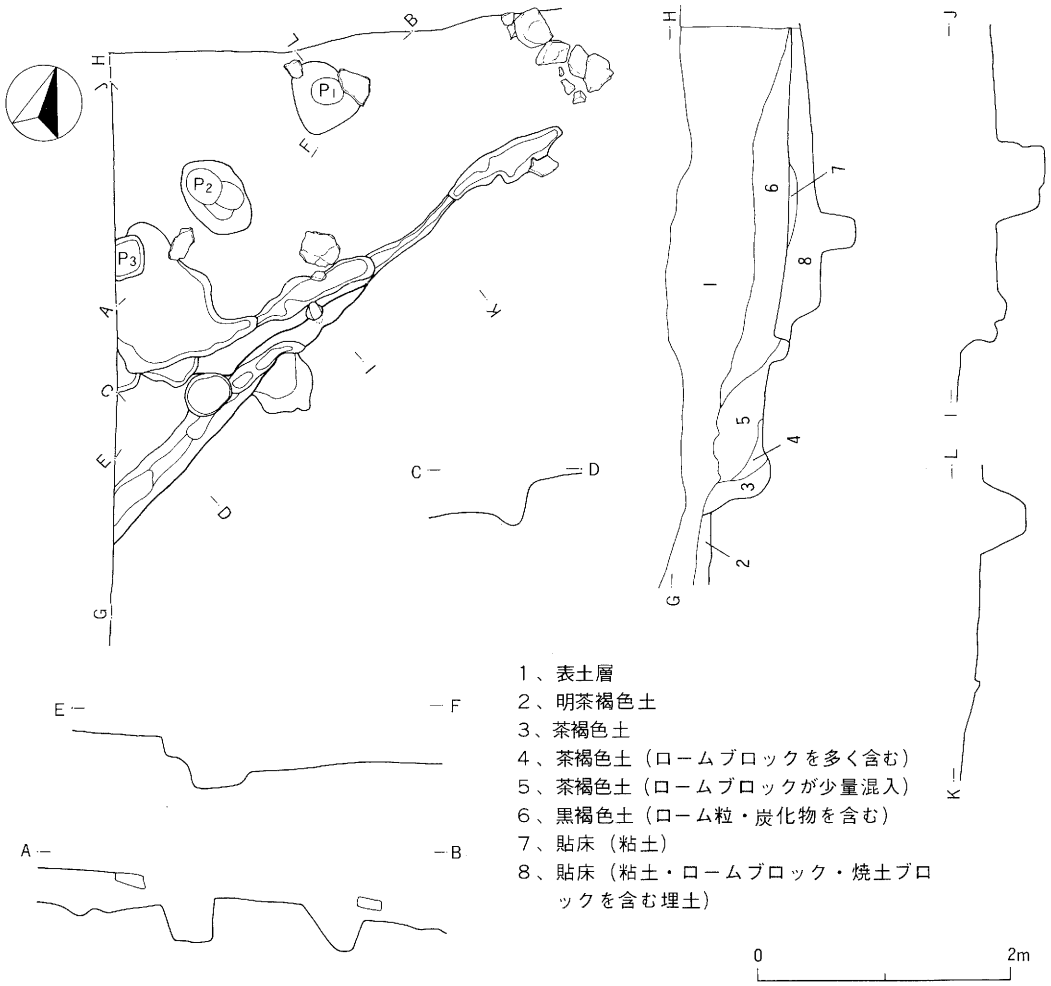
壁はローム層へ掘り込んで設けられている。しかし掘り込みが浅くなる北側ではローム壁は検出されなかった。一方、南側の壁は地山面への掘り込みが深くなるため高い壁となっている。このことからみても、旧住居址の南コーナー部は50cm前後の壁高があったと考えられるし、また新住居址の南隅のローム壁高は40cmほどある。

周溝は旧住居址・新住居址共に壁下に設けられている。殊に新住居址の拡張した部分に新たに設けられた周溝は幅も広く安定している。

発見された部分の旧住居址の床は、南コーナー部以外は直接ローム面を床面としており、水平で堅緻である。南コーナー部は浅く幅広い掘り方が設けられており、この部分は一度埋め戻して床面としている。新住居址の床は拡張に伴って旧住居址の床面よりも20cmほど上位に設けられている。拡張した部分の床面は旧住居址と同様に直接ローム面を床面としており堅緻である。その他、旧住居址分については粘土やロームブロック・焼土ブロックを含む黒褐色土の厚い埋土をして覆い貼床としており、全体に軟弱な床面となっている。セクション観察によると、新住居址の床面は北側へ向って緩く傾斜しており、全体的には皿状を呈するものと思われる。

柱穴はP_1・P_2・P_3が検出された。P_3は旧住居址の南コーナー部に設けられた柱穴であるが、P_1とP_2についてはどちらに伴うものであるのか判然としなかった。

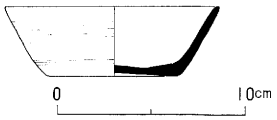
遺物の出土状態　発見された部分の南隅の新住居址の床面から完形の須恵器坏が出土した外は、ほとんどが覆土中からの出土である。



第77図　第34号住居址(1/60)

出土遺物（第78図）

土器　完形の須恵器坏がある。胎土に白色粒を含む焼成のあまり良くないもので、青灰色を呈す。右回転ロクロ成形で内外面ロクロナデされており、底部は糸切りである。



第78図　出土土器(1/4)

第35号住居址（II区第19号住居址）（第79・80・81・82図、図版第19－1）

検出状況　本址はII区の調査区域内では一段高い地形となる平坦面に位置している。これより一段低い緩やかな平坦面では遺構が重複密集した状況を呈して発見されたため、当初この平坦面でも同様な状況を呈して遺構が発見されるものと予測された。実際に本址の落ち込みを確認した段階では、その規模が大きいことから住居址2軒ほどの重複が想定された。しかし予測に反し重複関係はまったく認められず、本址1基が単独に発見されたのみであった。このため、本址の規模と出土遺物の内容とも合わせ、本址は特殊な性格の住居址であるとの感を深めた。

住居址は東コーナー寄りの北東部½ほどが用地外にある。住居址は粘性の強い地山面に掘り込んで設けられているため容易に検出しえた。一方、北コーナー寄りの西壁は地山面が北西へ向かって傾斜して行く地形の黒褐色土中に設けられている。この黒褐色土は浅い耕作土の直下に位置し、礫を多く含んでいる。このため黒褐色土は石抜きと耕作により不安定な状態にあり、壁は検出できなかった。しかし周溝が地山面に掘り込んで設けられていたことから、周溝を追求することで北コーナー側のプランも明らかにしえた。

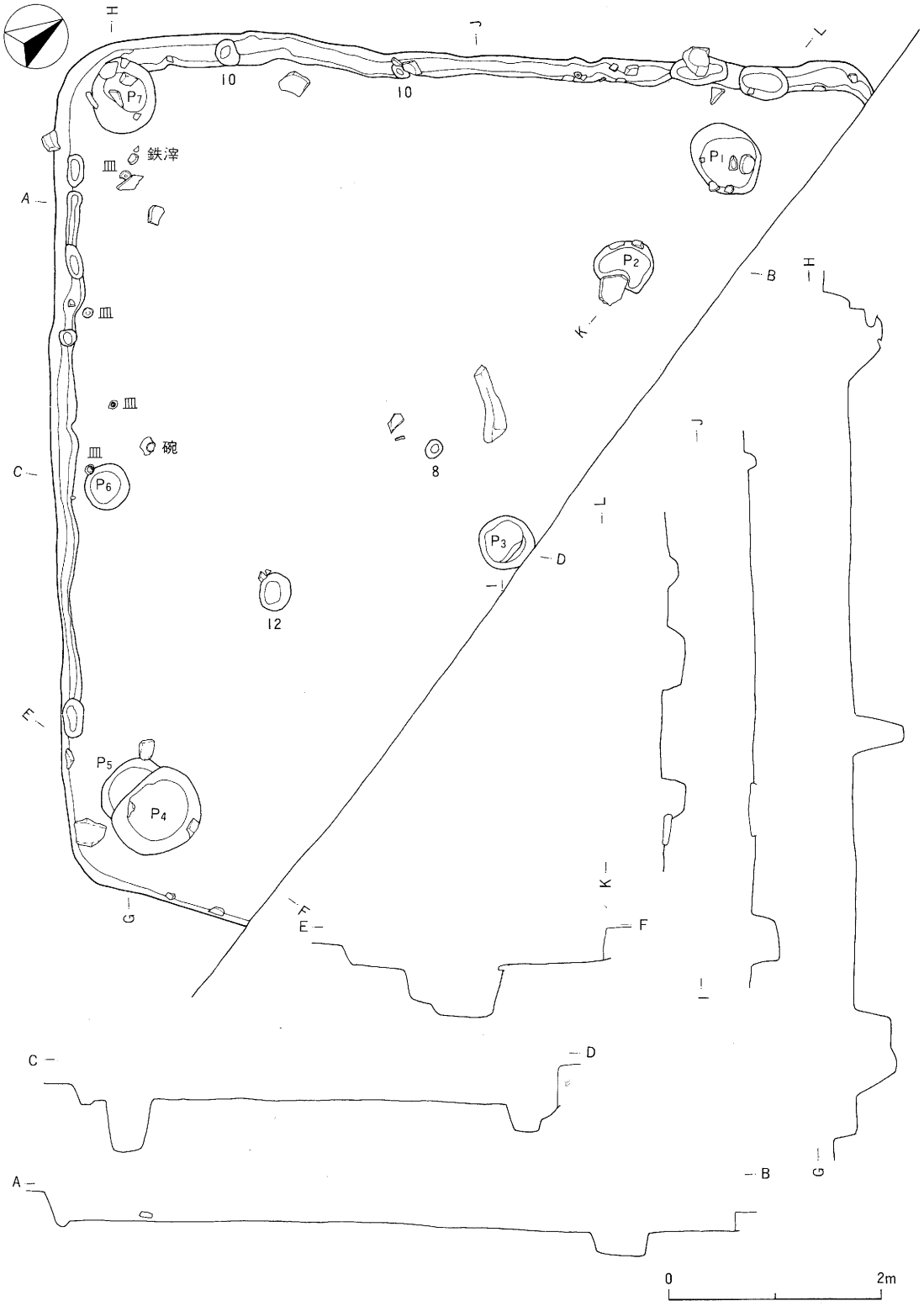
遺構の状態　平面形は840×770cmほどの隅丸方形を呈し、長軸はE33°Nを向く。

壁は地山面への掘り込みの深い南壁が25cmほどの高さをもっており、最も深くなる西コーナー部のローム壁高は30cmほどある。壁はわずかな傾斜をもって立ち上がっている。壁面は安定しているが部分的に地山石が突出している個所もある。西壁中央部から北コーナーにかけては黒褐色土中に設けられていたため壁は検出できなかった。

周溝は地山面への掘り込みが深くなる南壁下と、西コーナー部から壁が黒褐色土中に設けられている北コーナー部にかけて検出された。南壁下の周溝は西コーナー部には及ばず、両端には浅い小ピットが設けられている。西壁下の周溝に比べると幅がやや狭いが、深さは8cm前後と変わらない。西壁下の周溝は幅がやや広い。南壁下の周溝と同様に1本の溝状を呈するが、周溝内には小ピットもみられる。周溝内には地山石が認められるため、溝の下場は南壁下の周溝のように直線を呈さない。

床は直接地山面を床面としている。このため地山礫が床面に出ている個所がある。床面は中央部がやや皿状を呈すが、ほぼ水平である。全体に堅緻な床面であるが、浅い皿状を呈す中央部はやや軟弱である。

主柱穴はP_1・P_5・P_7で、これは対角線上に位置する隅柱であろう。掘り方の規模も大きく、P_4はP_5へと同地点で建替えをしているようである。P_7は底面と壁に地山石が突出しており、P_1はP_4・



第79図　第35号住居址(1/60)

P_5・P_7と比較すると深さが浅い。P_3・P_6は長軸に直交する形の短軸線上に設けられている。P_3は住居址のほぼ中央部に位置しており、P_6はP_5とP_7のほぼ中間に位置している。主柱穴に比べると掘り方の規模は小さく、P_3は同地点で建替えをしているようである。

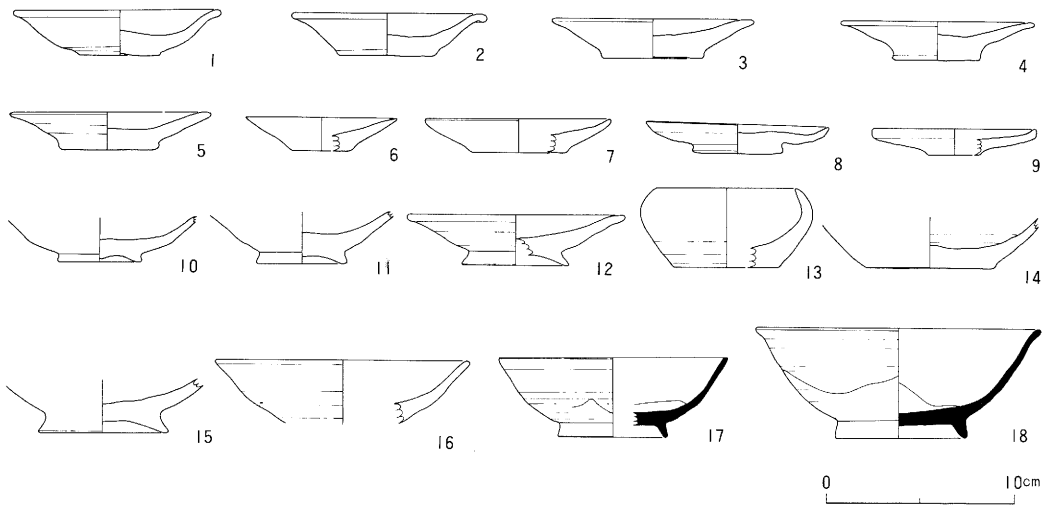
カマドやその他の施設は検出されなかった。

遺物の出土状態　出土遺物はほとんどが土師質土器の皿であり、破片の出土量が多い。床面か床面に近い覆土中から出土した完形か完形に近い土器類は、南壁側のP_6と西コーナーのP_7間に集中していた。この中には鉄滓が1点あり、P_7の掘り方から西へ16cm離れた位置で床面より11cm上位で出土した。また、P_4内からも皿が出土し、その底面からは砥石が出土している。

出土遺物（第80・81・82図）

土器　皿・高台皿・坏・高台坏・碗がある。

皿（1～9）　ロクロ成形糸切り底の皿で底部が擬似高台を呈すものがある。1・2は底部から立ち上がる部分がわずかにくびれ、腰部がやや丸く張り、口縁が外反して開くもの。底部は内底側に厚くつくられている。1は左回転ロクロ成形で内外面は丁寧にロクロナデされている。外面にはロクロ痕をとどめない。底部は糸切りの出口を中心に周縁がナデられている。胎土は良好で微石粒を含み、焼成は普通で明るい赤褐色を呈す。2は内外面が丁寧にロクロナデされ、外面にはロクロ痕をとどめない。底部は糸切りの出口を中心にナデられて水平な底面となっており、糸切り痕が消えかかっている。胎土・焼成・色調は1と同じ。3～6は底部を擬似高台的に厚く切り、口縁が直線的に開いたもので、3～5は口縁がやや外反する。3は内外面共丁寧にロクロナデされており、ロクロ痕は顕著でない。底部は糸切り後糸切りの出口を中心に周縁部をナデており、水平な底部となっている。胎土・色調は1・2に同じで焼成はやや良い。全体に丁寧なつくりの皿である。4も内外面が丁寧にロクロナデされており、外面にはロクロ痕をとどめない。底



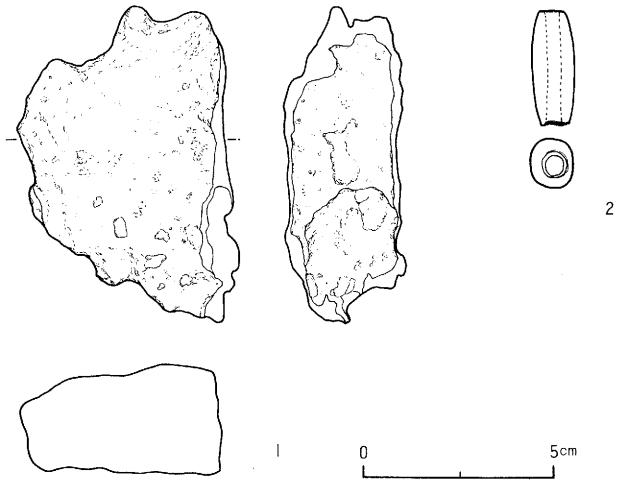
第80図　第35号住居址出土土器（¼）

部は糸切り後ナデられており、糸切り痕が消えかかっている。胎土・色調・焼成共に3と同じで、丁寧なつくりの皿である。5も丁寧なつくりである。内外面はロクロナデされ、外面のロクロ痕はそれほど顕著でない。底部はナデられ水平な底部となり、糸切り痕をわずかにとどめている。胎土・色調は1と同じで、焼成は普通。6は口径が小さい。内外面ロクロナデされており、外面にはロクロ痕をとどめない。底部は糸切り後ナデられている。胎土・焼成・色調共に3・4と同じで丁寧なつくりである。7～9は底部が厚く、口縁が内彎気味に立ち上がる器形で皿部は平坦で浅い。7は内外面ロクロナデされている。8は左回転ロクロ成形で内外面ロクロナデされており、ロクロ痕はそれほど顕著でない。底部は擬似高台状を呈し、わずかにナデられている。胎土・色調・焼成共に1と同じである。9も内外面ロクロナデされており、ロクロ痕は顕著でない。

高台皿（10～12） 10・11は腰の張る器形で小さな高台が付く。12も腰部がやや張り、口縁がやや外反する皿部をもつ丁寧なつくりの皿である。皿はいずれも高台部内外面共にロクロナデされており、ロクロ痕は顕著でない。10は左回転ロクロ成形である。いずれも胎土は良好で微赤粒を含む。焼成は普通で、10・11が明るい赤褐色を呈し、12は赤褐色を呈す。

坏（13・14） 13は口唇部が尖り、口縁部が丸味をもって内折する厚味のある小形坏である。底部は糸切り後ナデられており、糸切り痕が消されている部分が多い。ロクロ痕は顕著でないが腰部にわずかに認められる。胎土は良好で微石粒を含み、焼成は普通で明るい橙褐色を呈す。14は左回転ロクロ成形、胎土・焼成・色調は13と同じである。

高台坏（15・16） 内外面はロクロナデされており、16は外面にロクロ痕がわずかに認められる。胎土は良好で微石粒を含み、焼成は普通で明るい赤褐色を呈す。



第81図 第35号住居址出土鉄滓・土錘（½）

碗（17・18） 灰釉陶器の碗で、共に発色のわるい釉がかけられており、施釉範囲が不明瞭である。17はやや小形の碗で底部に糸切り痕をわずかにとどめる。内外面ロクロナデされており、高台の付け方は比較的良い。胎土には白色粒を含む。折戸53号窯新期の東濃産である。18はやや大形の碗で口縁がやや外反気味に開く器形。底部のつくりは比較的良く糸切り痕をとどめないが、底面には亀裂が認められる。折戸53号窯新期の東濃産である。

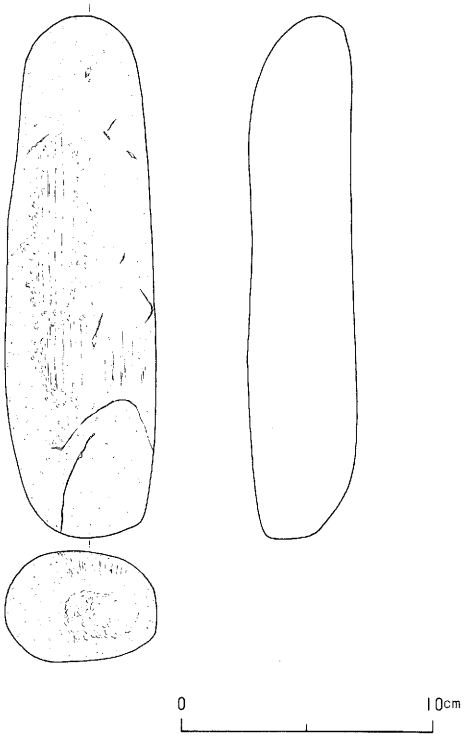
鉄滓（第81図1） P_7の東側から

出土した。8.4×5.5cmの梯形を呈し、厚さは3cmほどある。表面には小さな礫が付着している。多孔質でアバタ状の表面を呈しており、重さは210.8gある。

土錘（第81図2） 紡錘形の土錘である。長さ3.1cm・重さ5.3g、中央に径0.4cmの孔をもつ。

砥石（第82図）乳棒状を呈する緑色岩で、全体に小規模な磨き面が何箇所か認められる。また下端には敲打痕が認められ、敲打器としても使用されたことが窺われる。長さ20.7cm・重さ1,000g。

（鵜飼幸雄）



第82図　第35号住居址出土砥石（⅓）

第5節　その他の遺構と遺物

1　柱穴址

第1号柱穴址（第83図、図版第22－1）

B－27～29グリッドに位置する。南北方向に2間）あり、柱穴間寸法は1.8mある。軸線はN3°Eを向く。掘り方は円形でその規模もほぼ同様である。ただ中間のもののみ中央をピット状に一段深く掘り下げている。掘り方内からは縄文時代後期と思われる磨滅した無文土器片が1片出土した。これは本址に直接伴うものではないだろう。

本址は建物址の一部とも思われるが、存在が想定される東側が未調査のため判然としない。所属時期については明らかでない。

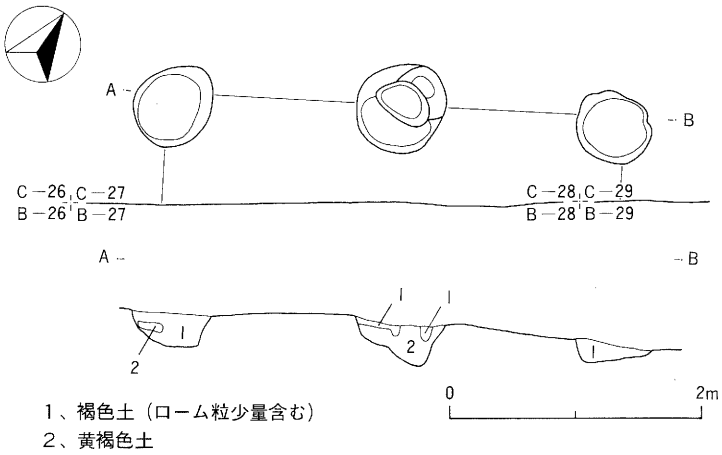
2　溝　址

第1号溝址（第41図、図版第20－1）

第4号住居址の北壁中央部から第6号住居址の東側にかけて、発掘区を横切る形に、公図480

番の東側に発見された。

検出された部分での溝の長さは1,040 cmほどあり、北端での幅は210cm・東端の幅は100cmほどを測る。溝はローム層を掘り込んでおり、ローム壁は緩い傾斜をもっている。底面は平坦で、幅の狭まる東側へ緩く傾斜しており、深さも東側では浅くなっている。溝西端には柱穴様のP_6・P_9が2箇所並んで発見されており、P_9は第4号住居址の壁を切る形に設けられている。この他にも南側の壁上にP_4・P_5が2箇所並んで検出されたが、これら4箇所のピットが本址に伴うものであるのかは判然としなかった。また、本址の南壁中央部には第6号住居址が部分的に重複する位置に設けられているものの、第4号住居址との関係同様に重複関係は判然としなかった。



第83図　第1号柱穴址(1/60)

遺物は出土していない。

第2号溝址（第84図、図版第20－2・21－2）

第10号住居址の西壁に沿って、ほぼ直線的な形で発見された。溝北端は第3号溝址へ続くことなく切れているが、南端部は105°の角度をもって南側へ続いている。第10号住居址に切られてはいるが、南側の溝が存在したことは明らかである。

長軸方向はN35°Eを向き、第3号溝址の長軸方向に直交している。全長800cm、幅は54～82cmほどあり、深さは深いところで60cmを測る。溝はローム層中へ掘り込んでおり、全体的に北端へ向かって緩く傾斜している。壁はほぼ直線的に立ち上がっている。覆土の状態は不自然な堆積を示していた。溝はいくつかの土壙と重複しているが、それらとは異なる柱穴状のピットを北端部と底面に設けている。この柱穴状のピットは、南側に続いて設けられていた溝内にも掘り込まれていたものと考えられ、その底面の一部が第10号旧住居址の壁に切られて認められた。

出土遺物は縄文土器の他土師器が出土している。土師器の中には赤彩の施された破片もある。

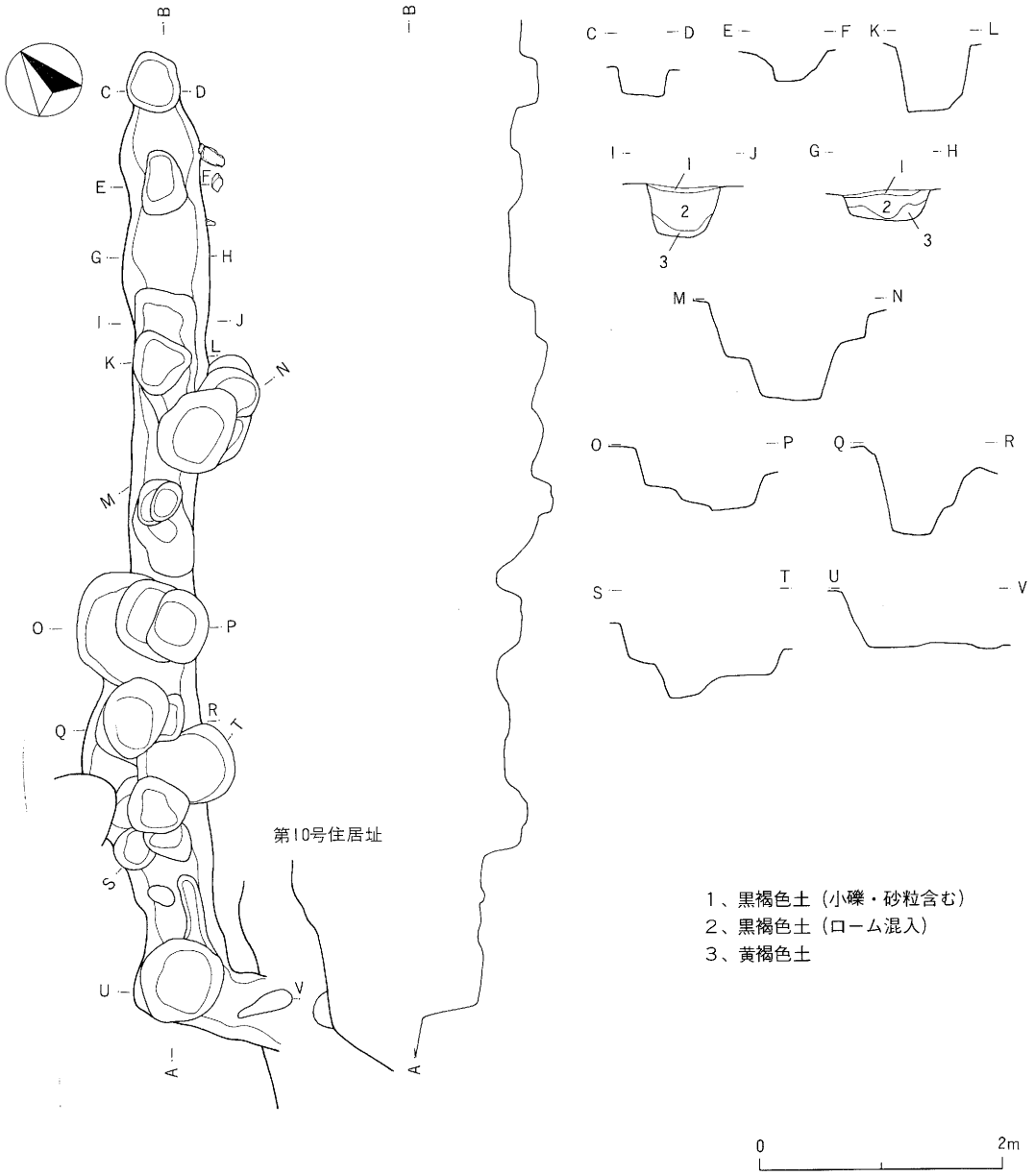
第3号溝址（第85図、図版第20－2・21－3）

A－39からD－38にかけて、ほぼ直線的な形で発見された。溝は縄文時代後期の第40号・第41号B土壙を切ってローム層中に掘り込んでいる。

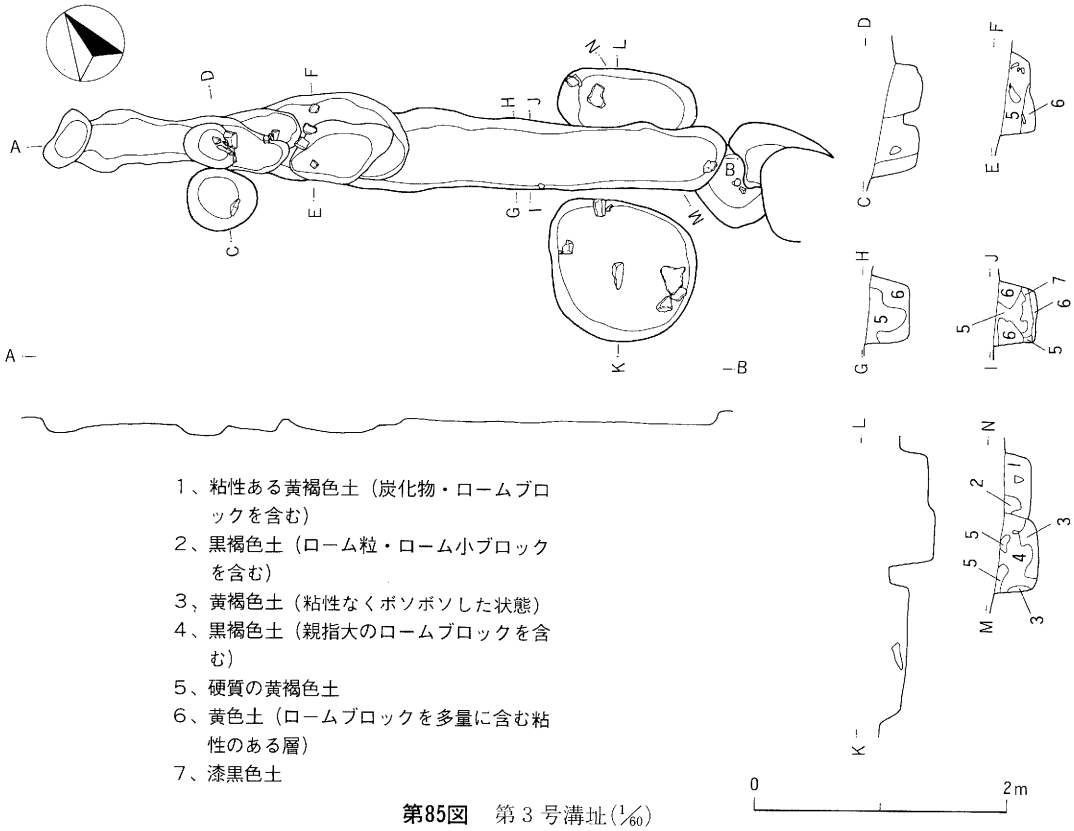
全長540cm、最大幅74cmを測り、深さは36cmほどある。長軸はE35°Sを向き、第2号溝址の長軸方向に直交する。底面は平坦であるが、中央やや西寄りの掘り方が不安定な部分では凹凸が認め

られ、壁面はほぼ直に立ち上がっている。覆土は不自然な堆積を示しており、掘り方の不安定な部分の覆土中には集石が認められた。出土遺物はこれらの礫のみである。

本址の西端部にも第２号溝址同様柱穴状のピットが設けられている。この両者間は160cmほどあり、この空間部は方形周溝墓にみられる陸橋部を思わせる。本址は第２号溝址との関係からみて



第84図　第２号溝址(1/60)



第85図　第３号溝址（1/60）

もさらに東側に他の溝址が存在するものと予測され、この空間部についても陸橋を思わせるものがある。

本址は第２号溝址と組み合わさって１つの遺構となるものと思われる。プランは長方形か方形と考えられるが、東側が用地外にあることと、南側溝が第10号住居址によって破壊されていることもあり、詳細は明らかでない。規模は東西方向が不明であるが南北方向には10ｍほどある。時間的には縄文時代後期の第40号・第41Ｂ号土壙以降、第10号住居址の平安時代初期以前となるが、所属時期や性格等明らかでない。

３　焼土址（第68図）

第Ⅱ区Ｂ－22グリッドに位置し、第28号住居址の南壁が弧状に張り出した突端部の壁外に検出された。

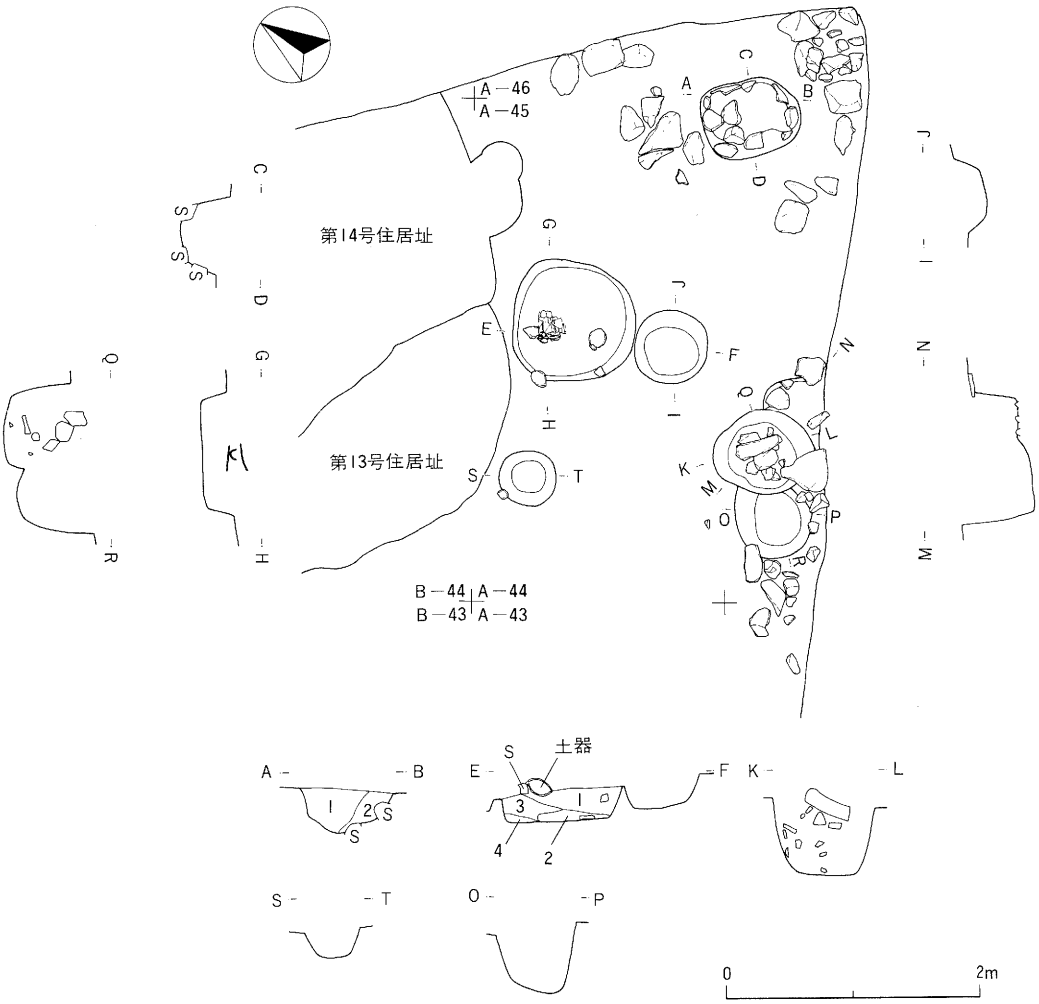
焼土址は北側を第28号住居址の南壁の一部によって切られており、残存部は52×30cmほどの不整な楕円形を呈している。焼土は地山面上の暗褐色土中にブロック状に堆積しているが、この茶褐色土中には炭化物や焼土粒が認められない。

以上のことから、焼土址はここで焚火が行われたことを示すものではなく、なんらかの形で焼土のみが遺棄されたものと考えられる。遺物はなにも出土していない。

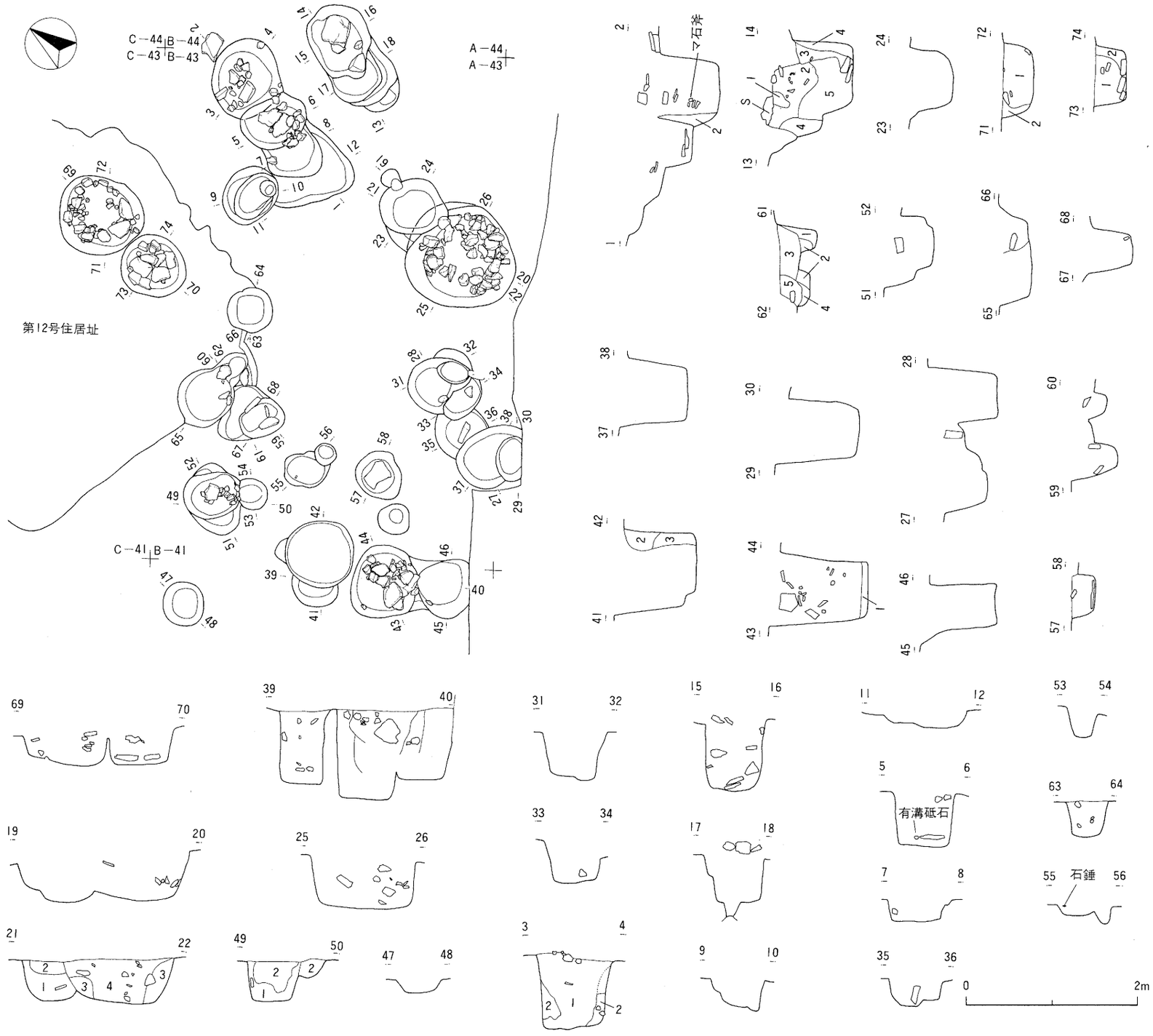
4　土　壙

（第86・87・88・89・90・91・92・93・94図、図版第20－2・23・24・25－8・26－8）

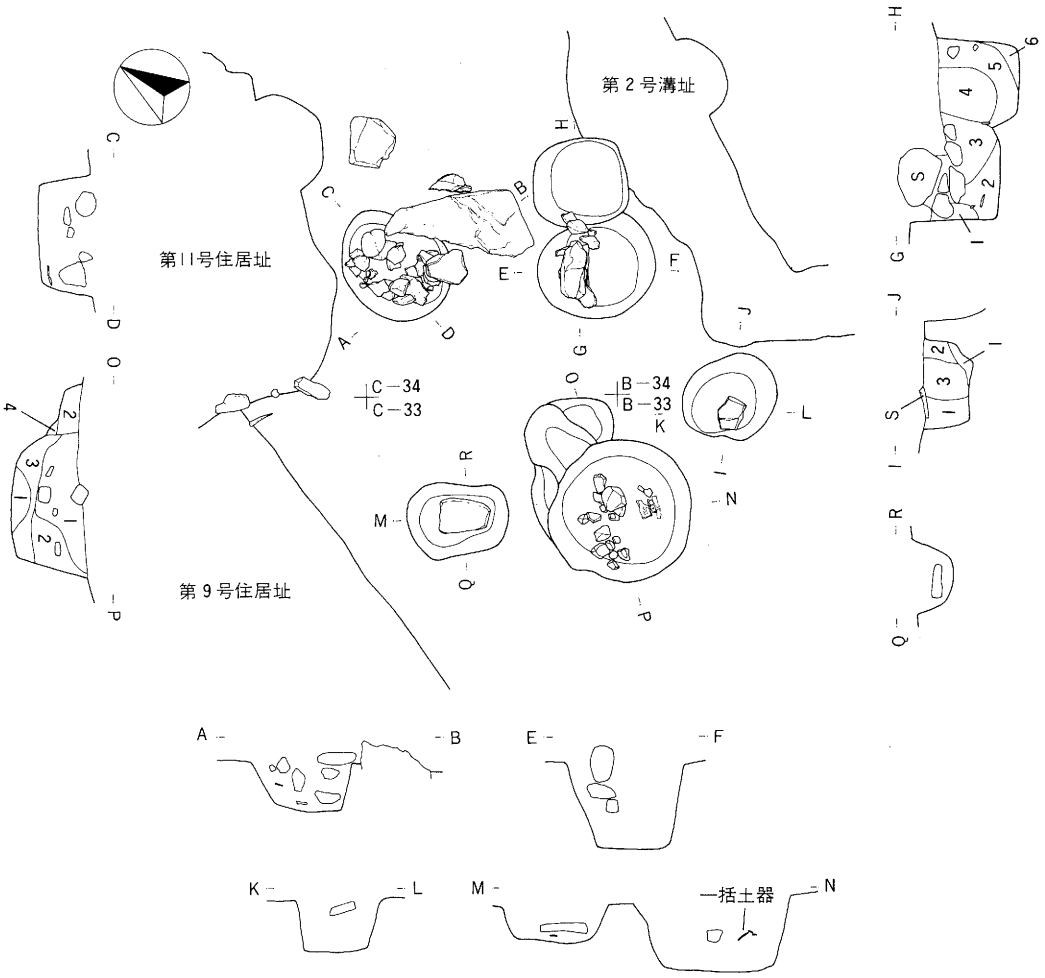
発見された土壙はⅠ区89基、Ⅱ区6基の計95基である。しかし重複関係にあるものや、あるいは住居址に付属するような形にあり、確実に住居址に付属するかどうか判然としなかった例も土壙として扱うと、その実数は若干多くなる。ここではそれらについては扱わず、単独に土壙として扱ったもののみを取り上げることとする。



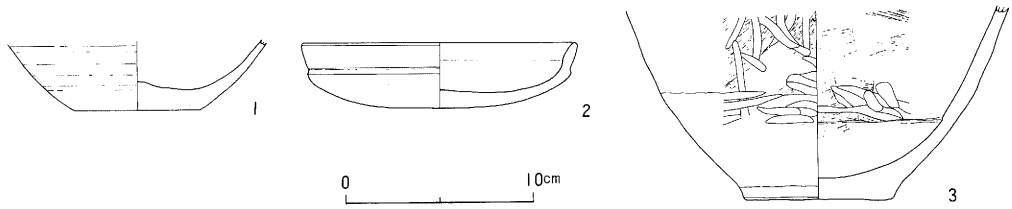
第86図　土壙(1)(1/60)



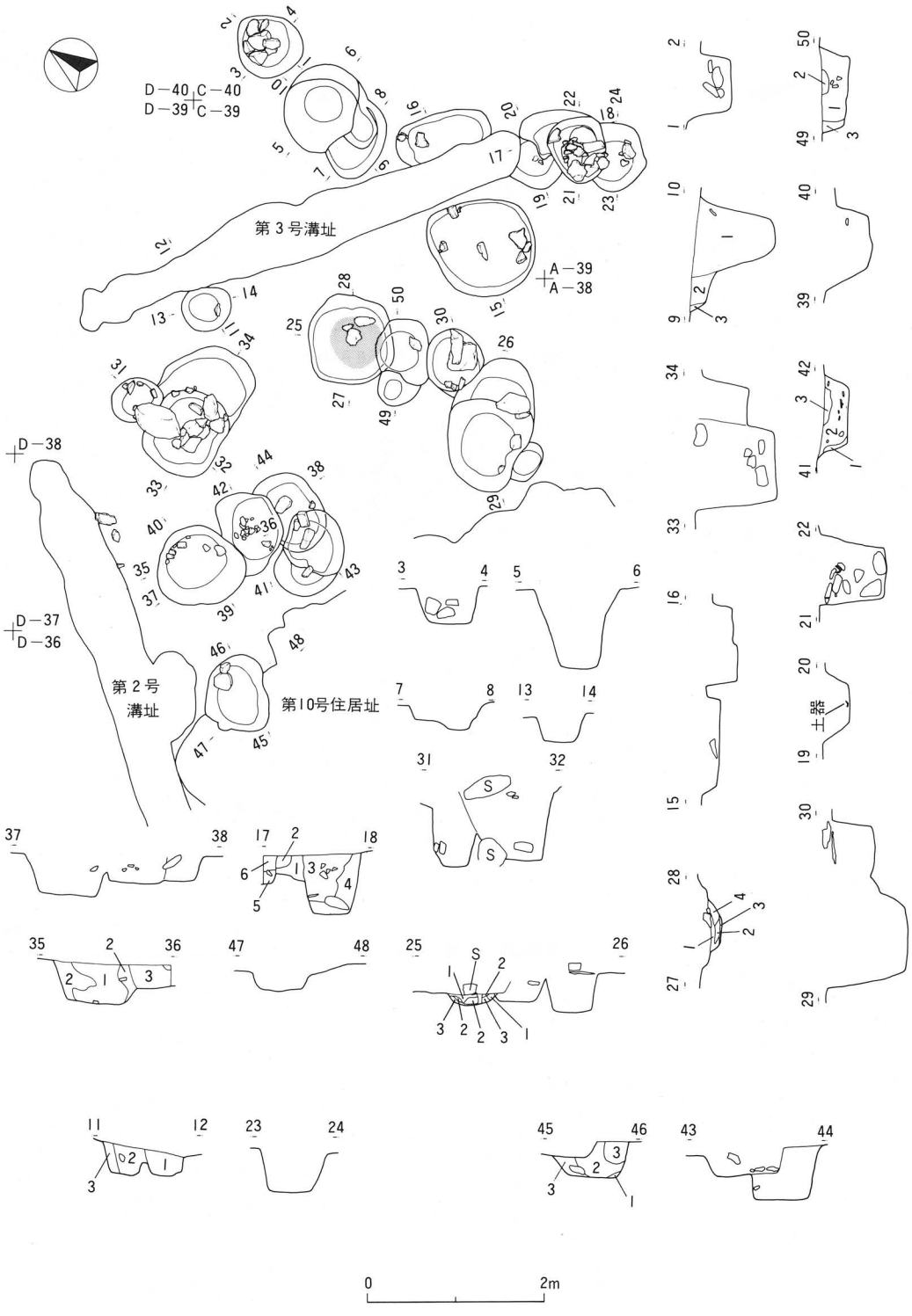
第87図　土壙(2)(1/60)



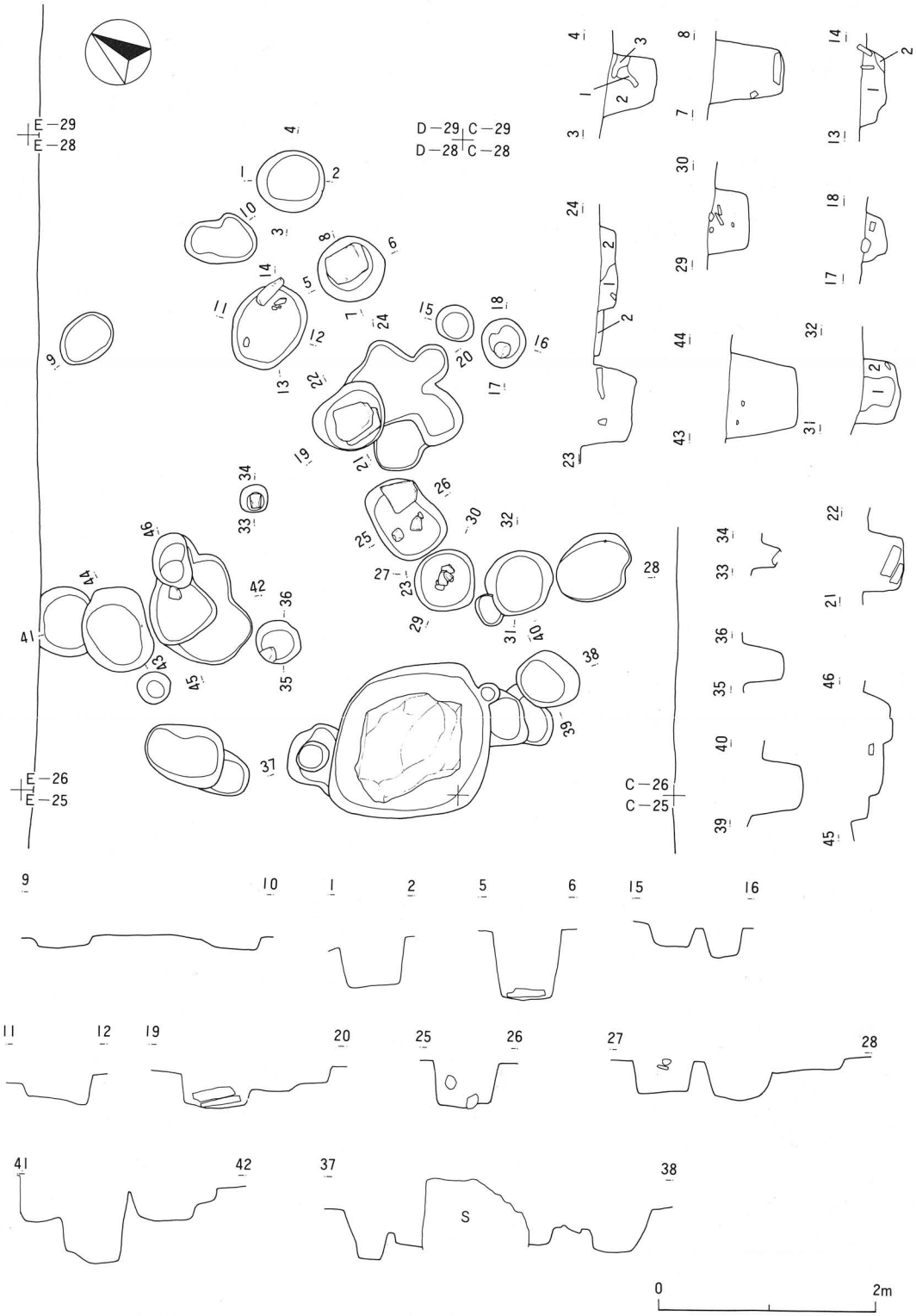
第88図　土壙(3)(1/60)



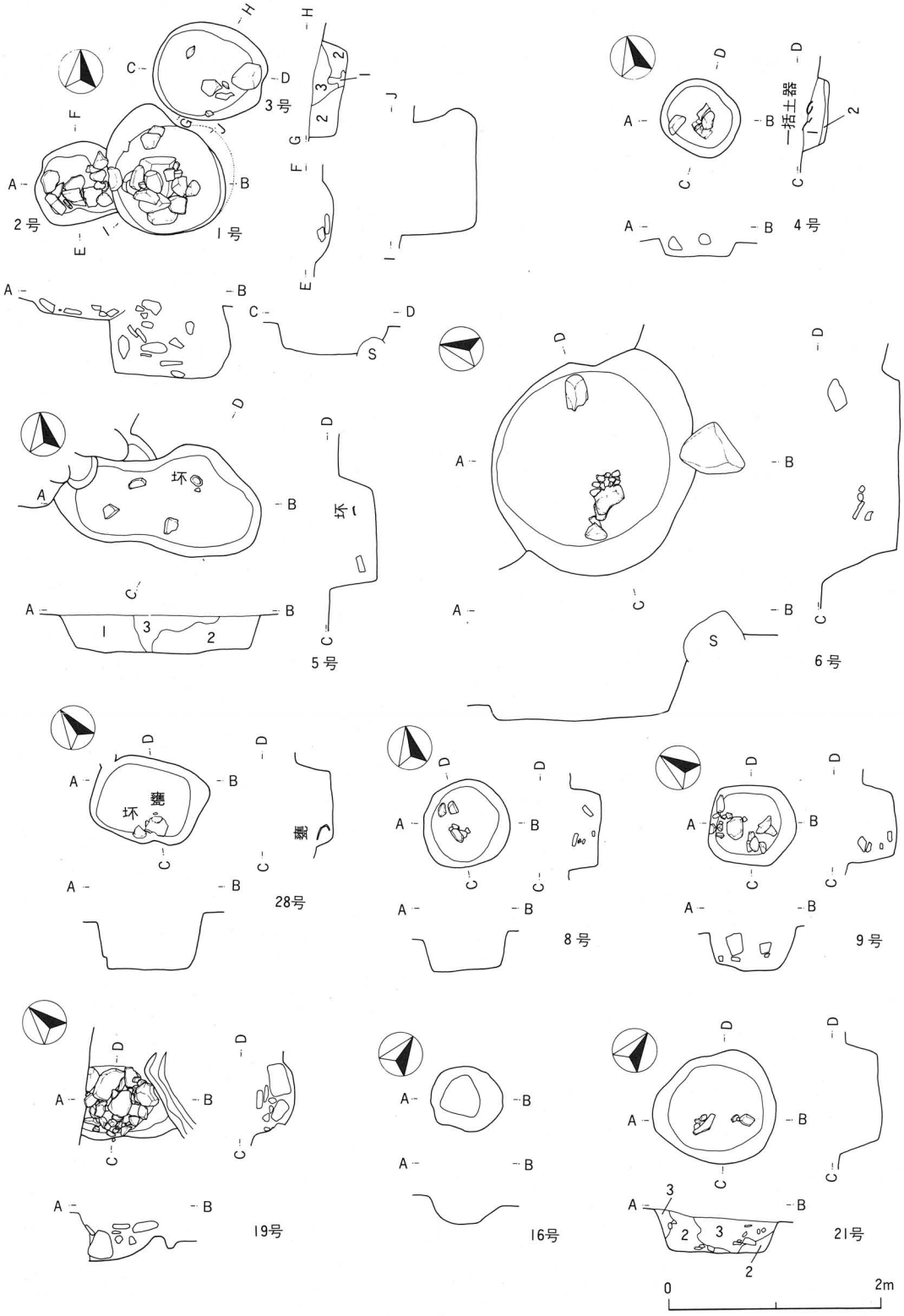
第89図　第5・28号土壙出土土器(1/4)



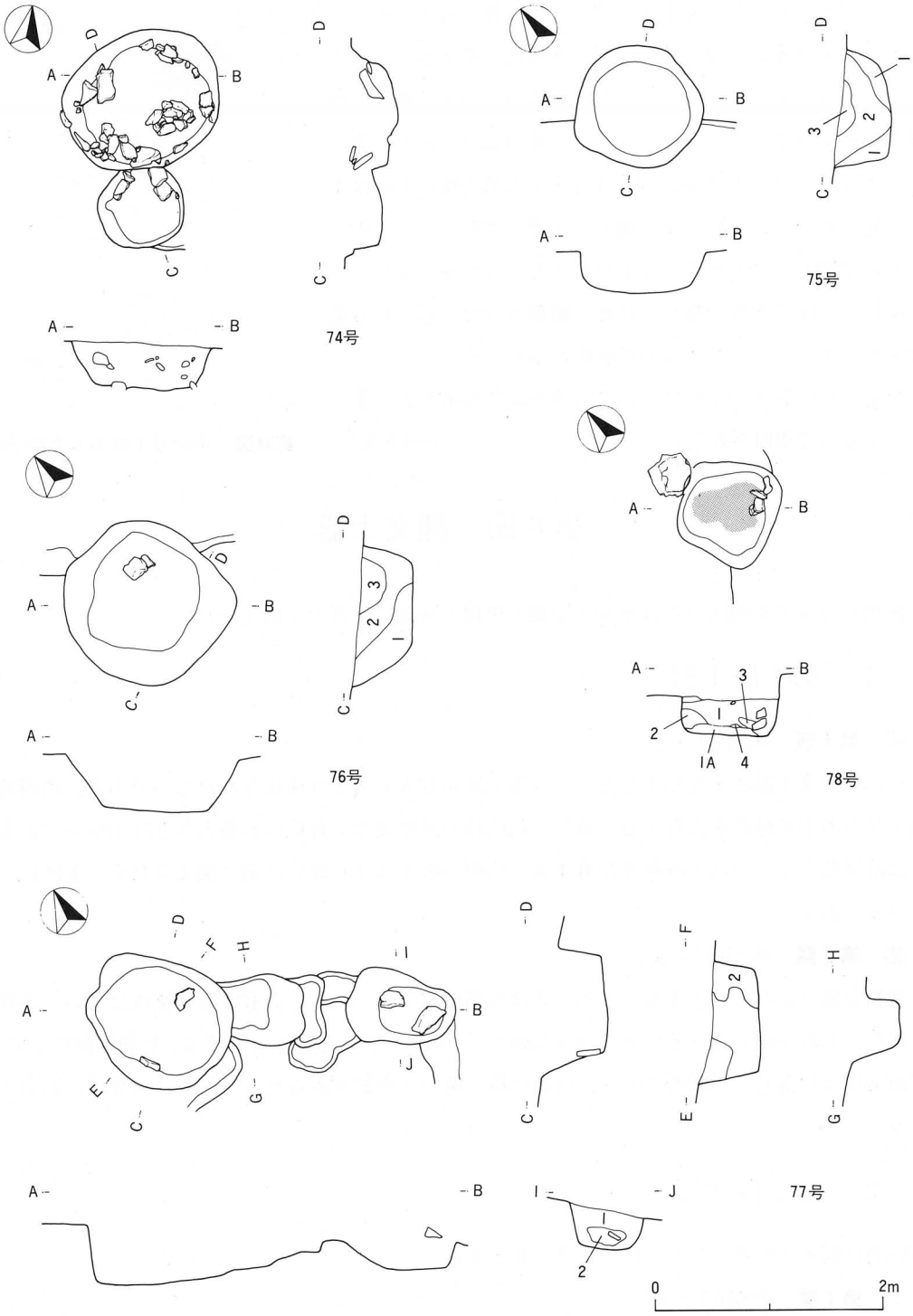
第90図　土壙(4)(1/60)



第91図　土壙(5)(1/60)



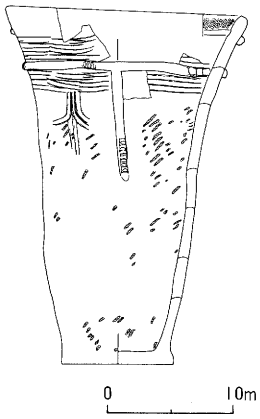
第92図　土壙(6)(1/60)



第93図　土壙(7)(1/60)

発見された土壙は縄文時代・古墳時代・平安時代に属するものと考えられ、中でもＩ区の縄文時代後期と考えられるものが圧倒的に多い。縄文時代後期の土壙は、第Ⅴ章に記すように、骨片や副葬されたと考えられる遺物の出土、覆土の埋没状態や土壙中の礫の状態、それに土壙の設けられた位置のあり方等からみて土壙墓と考えられる。古墳時代の土壙は１基発見されたが、これもまた覆土の状態や副葬されたと考えられる遺物のあり方からみて土壙墓と考えられる。また、平安時代の土壙も形態や覆土の状態、副葬されたと思われる遺物の出土からみると土壙墓の可能性が窺われる。

発見された個々の土壙についてはその属性を第１表にまとめてあるので参照されたい。　（鵜飼幸雄）



第94図　第69号土壙出土土器(1/6)

第６節　縄文土器

住居址以外の発掘区からは早期・前期・中期・後期の土器片が検出された。

１　第１群土器

(1)　第１類（第95図１・２）

楕円押型文土器が２片出土した。１は第１区70号Ａ土壙より検出されたものである。色調黄褐色を呈し若干の砂粒を含有する。細長い穀粒状の押型文で、穀粒の形態大きさは不揃いである。２は暗褐色を呈し白色の砂粒を含有する。楕円の彫りは浅く縦位に密に施文される。１区Ｃ－３グリッド出土。

(2)　第２類（第95図３・４）

条痕を施文したものを本類とする。３は灰褐色を呈し、繊維を含有するが焼成はよい。内外面に横位に条痕が施文される。４は口縁部破片で、胎土に粗い砂粒を含有する。色調黄褐色を呈し、器面文様は剝落して不鮮明である。内面に粗い横位の条痕がみられる。前者は粕畑式に比定されよう。

２　第２群土器

前期に編年されるものを一括して第２群とする。

(1)　第１類（第95図５・６）

５は櫛状竹工具による連続刺突文・平行沈線文・列点文により文様を構成し、器厚はやや厚く、６は赤褐色を呈し無節縄文が施文される。神之木式に比定されるものである。

(2) 第2類（第95図7～11）

竹管による爪形文・平行沈線文土器で諸磯Aとして分類される。7は縄文と爪形文、8は微量の繊維を含有し幅広の爪形曲線文である。9は斜縄文を地文として、鋭く深い平行沈線文間の縄文を磨消する。10は円形竹管文と平行沈線の組合せした肋骨文の手法とるものである。11は曲直線と縄文を施文する。

(3) 第3類（第95図12～18）

前期末葉の土器を一括する。12は平行沈線文の胴部破片。14は口縁部破片で、口唇は幅広く内彎し、口唇に山形の突起を貼付する。13は沈線文にボタン状突起が貼付されたものである。下島式土器に比定される。15は平行沈線文に粗雑な刻目をつけたもの、16は結節状浮線文土器である。17は粘土紐を貼付して地文の縄文の同じ施文具で、粘土紐上にも縄文を施す。18は貼付した浮線文上に繊細な爪形文が施文される。17は十三菩提、18は北白川式系のものであろう。

3　第3群土器

(1) 第Ⅰ類A（第95図19～21）

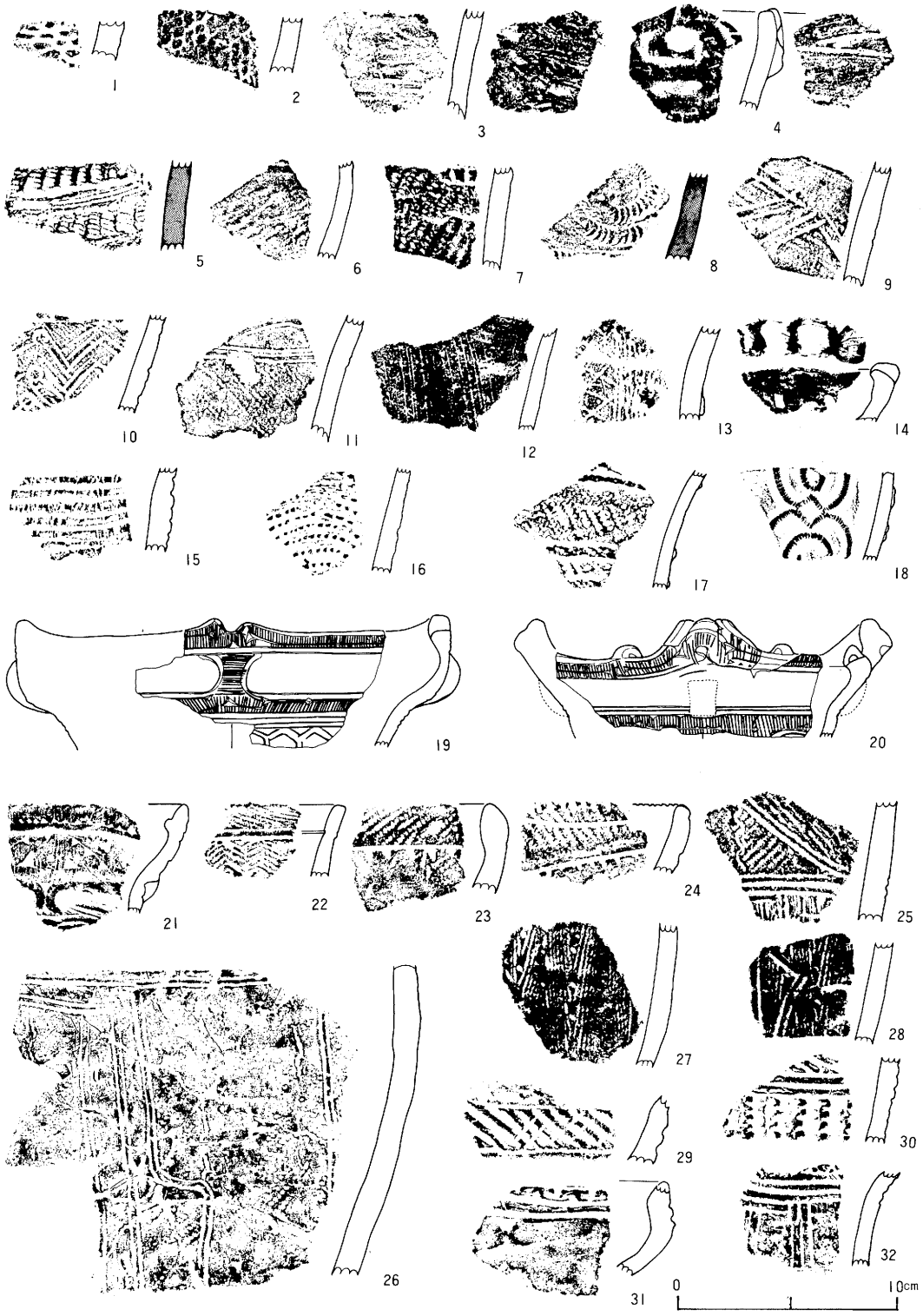
口縁部文様帯が細線文と三角陰刻文で特徴付けられるもの。19・20は口縁が4単位の波状をなす深鉢である。口縁部文様帯下には無文帯を配し、無文帯を挟んでさらに一段文様帯が構成されている。共に波頂下の無文帯部には橋状把手状の突起が設けられており、19は頸部に連続Y字状文が施文されている。21は口縁が波状とならないが4単位の突起をもつものと思われ、単位の中間下に小さなX字状を呈す把手状の隆帯を配している。

(2) 第Ⅰ類B（第95図22～26）

地文に縄文を施文したもので沈線を伴なうもの。22は口縁部にRL縄文からなる縄文帯をもち、以下に山形文を充塡している。23・24は縄文地の上に沈線を施文した後刺突文を加えており、24は口唇部に同じ施文具で刻みを施こしている。縄文は23がＬＲで24はＲＬである。25・26は胴部破片で地文にＲＬ結節縄文をもつ。26は第4号土壙からの出土である。

(3) 第Ⅰ類C（第7図1・第9図1～3・第94図）

地文に縄文をもち、胴部を垂下する隆帯で4分割するもの。第9図1は口縁が内彎する深鉢で口縁部文様帯と胴部文様帯からなる。口縁部文様帯は舟底状の区画と三角形状の区画が縄文を施文した半隆起帯で構成される。胴部は垂下する隆帯で4分割され、隆帯の頂部には三角形状の区画が成立し、玉抱三叉文が施文されている。胴部はＲＬ結節縄文である。2は縦位の隆帯間に沈線を垂下させており、縄文はＲＬ。3はＲＬ結節縄文である。第7図1は口縁が外反気味に開く深鉢である。口唇部・口縁はＬＲ縄文で施文され、頸部には隆帯が横位にめぐる。胴部は垂下する隆帯で4分割され、頸部下区画中央部には沈線間に三角形状の区画が成立し、玉抱三叉文が施文されている。第94図は垂下する隆帯が1本であるが本類に含めた。短かい口縁が外反気味に開く胴部の長い深鉢で、口縁部文様帯と胴部文様帯とからなる。口縁部文様帯には浅い並行沈線と



第95図　出土土器(1)(⅓、19・20は⅙)

隆帯が配される。上位の隆帯は部分的で全周せず、下位の隆帯からは胴部に向って隆帯が1本垂下する。頸部は並行沈線が施文され、胴部は頸部から垂下する並行沈線と孤状沈線により4分割されている。縄文は口縁部内側と胴部に施文されているが、胴部はごく軽く施文されている。底部には木葉痕が残る。

(4) 第Ⅰ類D（第95図27・28）

地文に木目状撚糸文をもつもの。他の同類土器が胎土に雲母等を多く含んでいるのに対し白色粒を含んでおり、焼成は普通で赤褐色を呈す。色調や焼成も他のものとは異なり、搬入品とみられる。

(5) 第Ⅰ類E（第95図29～32・第7図2・第96図1・3）

半截竹管による並行沈線が文様の主体となるもの。第95図29～32・第96図3は太く深い沈線で構成される。第7図2は底部付近まで施文されており、区画文状の文様構成をとる。第96図1は口縁部に隆帯をもつ。口縁部・頸部共に沈線が施文されており、隆帯上にも施文されている。同類のものの中ではやや新しい様相にある。

(6) 第Ⅰ類F（第9図4・第96図2・4）

連続刺突文をもつもの。第9図4は連続刺突による懸垂文をもつもので地文に縄文をもつ。第96図2は口縁部に幅広い縄文帯をもち、頸部に連続刺突文帯をもつ。また口唇部にも刻みを施しており、縄文はＲＬである。第96図4は半隆起線上に連続刺突を加えたもの。

(7) 第Ⅰ類G（第9図5）

無文のもの。5は小型の深鉢形土器で折り返し状口縁をもつ。

(8) 第Ⅰ類H（第96図5・6）

浅鉢形の器形となるもので、直線的に開く口縁部内面に文様をもつもの。共に口唇部には刻みが施されている。

(9) 第Ⅱ類A（第18図4・第96図7）

横帯区画をもつもので、区画内を沈線で施文するもの。第18図4は底部付近まで文様帯をもつもので、区画内は格子目状に施文されている。器形はやや浅めのバケツ形を呈する。第96図7はバケツ形に近い器形となるもの。口縁下は山形に施文し、楕円形区画内は縦位に施文している。

(10) 第Ⅱ類B（第20図・第18図2・3・第96図8～13）

三角形や楕円形の横帯区画文を構成し、区画内に連続刺突文を配した深鉢形土器。器面のほぼ全体に文様が構成されるが、第20図は口縁下に2段のみ構成されている。第18図2の小型深鉢は口縁部のみ施文されている。

(11) 第Ⅱ類C（第18図5・6）

横帯区画文や連続刺突文が施文されず、垂下する隆帯のみで文様が構成されるもの。5は指圧痕が残り、隆帯は不規則に垂下する。あるいは口縁部には連続刺突文が施文されるものかも知れない。6は押圧隆帯が懸垂するのみであり、同類土器の中ではやや特異な土器と言えよう。

第96図　出土土器(2)(1/3)

⑿　**第Ⅱ類D**（第18図１）

無文のもの。１は無文の小型深鉢で、短かい口縁がわずかに外反して開く。

⒀　**第Ⅱ類E**（第18図７・８）

浅鉢形土器。７は口縁に連続刺突文を３条めぐらせ、頸部に押圧隆帯をもつ。胴部はヘラ状工具で縦位に沈線が施文される。８は口縁に捻り把手をもつ。文様はペン先状工具により口縁部にのみ細かな連続刺突文が施文されている。

⒁　**第Ⅲ類A**（第96図14～20・第97図１）

藤内Ⅰ・Ⅱ式に相当するもの。半隆起線や隆帯・沈線等によって口縁部から胴部までほぼ全体に文様が構成されるもの（14～16）や口縁部が無文となるもの⒄、胴部が縄文となるもの⒇、また口縁部に縄文帯をもつ第97図１と沈線が施文される18のように、頸部が無文帯となるものがある。

⒂　**第Ⅲ類B**（第24図１・第97図２～７）

井戸尻式に相当するもの。第24図１は口縁が頸部から「く」の字状に開く深鉢。口縁部は無文となり、頸部下に文様をもつ。文様は櫛形文に近いものであり、１箇所のみ隆帯による円形の文様が垂下する。本例は丁度口縁部文様帯部を欠く例であり、やや特異な土器である。第97図2・3・7は半隆起帯による区画内に太い沈線を施文したもの。４・５は口縁部に彫刻的手法により施文したもの。６は胴部が縄文となる深鉢の底部である。

⒃　**第Ⅳ類A**（第16図２・第22図２・第97図８～13）

曽利Ⅱ式に相当するもの。第16図２は口縁部が内折する器形となる深鉢形土器。頸部を隆帯で区切って幅の狭い文様帯を構成しており、胴部には隆帯による蛇行懸垂文が配されている。口縁部・頸部は右傾する条線状沈線を施文し、胴部は縦位の条線状沈線が地文となる。本例は第97図11と共にやや新しい様相のものである。第22図２は地文に刺突文をもち、あまり調整されない隆帯による渦巻文をもつ、やや新しい様相にある。第97図８～10は口縁部が内折する深鉢形の器形となるもので、太い条線上沈線の上に隆線を配したもの。12・13は大型の深鉢形を呈する器形となるもので、X字状の把手が付くものとみられる。

⒄　**第Ⅳ類B**（第97図14～20）

曽利Ⅱ式段階に平行する唐草文系の土器。14・15は条線状沈線を地文にもつもので、剣先状の渦巻文が構成されるものであろう。16～20は綾杉状沈線を地文にもつもの。20はその口縁部で刺突文を伴なう。

⒅　**第Ⅳ類C**（第16図１・第22図１）

曽利Ⅲ式に相当するもの。第16図１はX字状把手の付く大型の深鉢形土器である。口縁部は無文で胴部には大きな渦巻文が構成される。第22図１は長胴を呈す大型の深鉢形土器。胴部は櫛状工具により条線状の沈線が施文されているのみである。

⒆　**第Ⅳ類D**（第24図）

第97図　出土土器(3)(1/3)

曽利Ⅲ段階に平行する唐草文系土器。第24図２は最大径が口縁部か胴部中程にあり、口縁が開くものである。地文の綾杉文はやや粗雑となっており、隆帯や沈線も退化した形を呈している。

⑳　第Ⅳ類E（第12図）

曽利Ⅳ式に相当するもの。最大径が口縁にあり、胴部の張りが弱いのが特徴である。頸部にＸ字状把手をもち、胴部にはやや簡略化された渦巻文が配されている。

㉑　第Ⅳ類F（第98図１～９）

曽利Ⅴ式に相当するもの。１～４はやや古手の様相をもったもので、１～３は櫛状工具により条線状の沈線が施文される。５は櫛状工具を用いた施文であるが、施文は刺突様となっている。その他はヘラ状工具による施文であり、７～９はハの字文を呈す。

㉒　第Ⅳ類G（第16図３・４、第98図10～18）

縄文を地文にもつものを一括した。この中には曽利系のもの（第98図13・14）と加曽利Ｅ系のものがある。加曽利Ｅ系のものは曽利Ⅲ段階に伴うもの（第16図３・４・第98図10～12・15・16）とそれ以降に伴うもの（第98図17・18）とがみられる。第16図３は丁寧な磨消部をもつ。縄文は丁寧に施文されたＲＬ縄文である。搬入品であろうか、同図４は磨消部の幅がごく狭く縄文はＬＲである。10は口縁部に隆帯による渦巻文、11は沈線による渦巻文をもつ。12も口縁部に渦巻文をもつものであろう。13は口縁部から胴部全体に縄文が施文される深鉢で、口縁部から胴部まで蛇行沈線が施文されるもの。14はＬＲ縄文地に沈線をもつもので在地型の土器である。15・16は磨消部をもつが、16は縄文が磨消されていない部分が残っている。17は口縁下に隆帯をもち、ＲＬ縄文を施文している。18は口縁下に沈線をもつもので、沈線下にＲＬ縄文とＬＲ縄文を羽状に施文している。

4　第４群土器

(1)　第Ⅰ類A（第99図１～３）

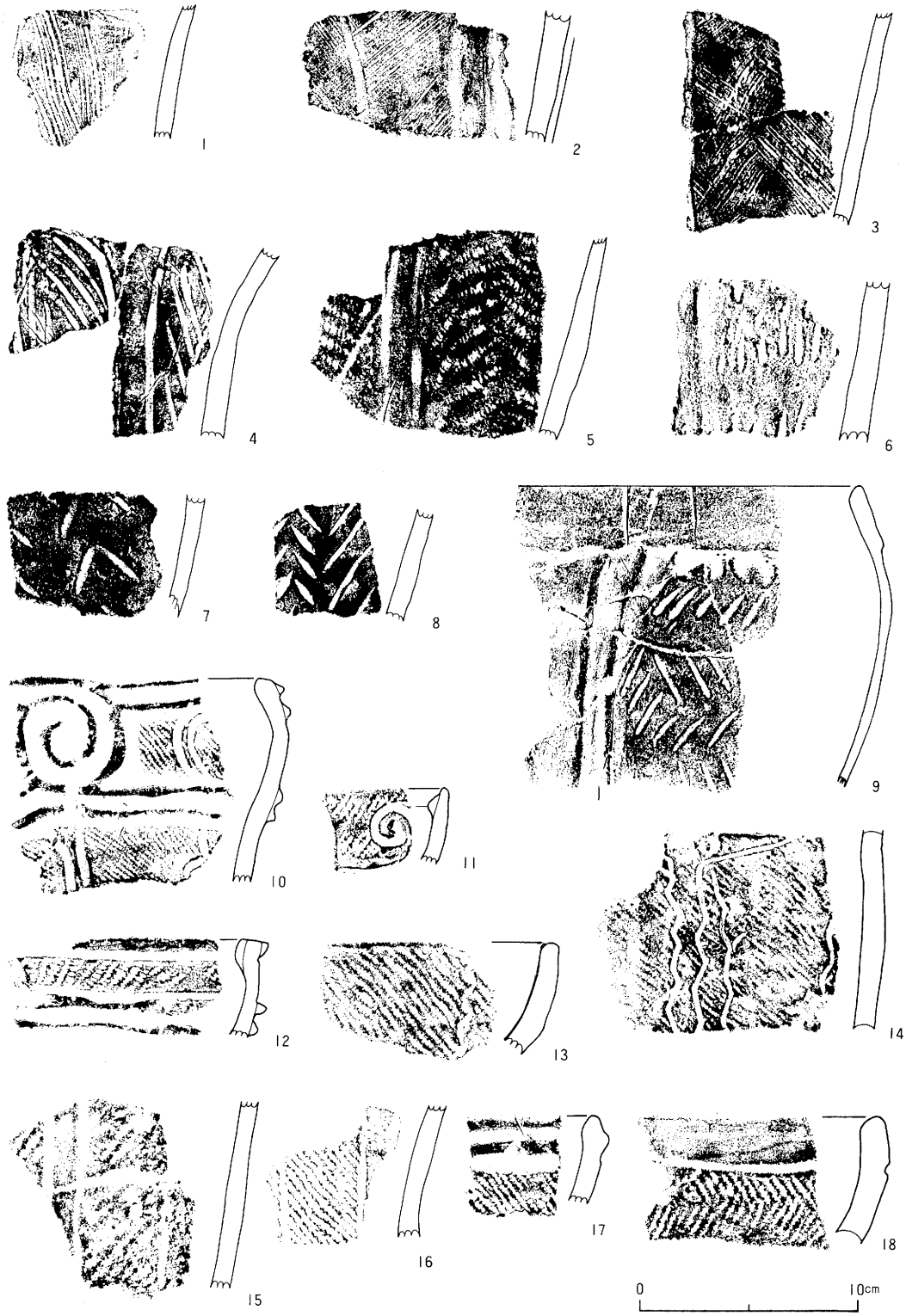
称名寺式に相当するもの。１・２共に沈線による区画施文後、区画内へＬＲ縄文を施文している。１は波状口縁の深鉢である。３は逆Ｊ字状の文様構成をもつものとみられ、沈線による区画内へＬＲ縄文を施文している。

(2)　第Ⅱ類B（第99図４～14）

口縁部に沈線をもつものを一括した。４・５は口縁部に１本の沈線をめぐらしたもの。３は沈線内と口唇部に円形の刺突文をもつ。８は波状部に縦位の沈線を施文しており、横位にめぐる沈線の先端には円形の刺突文をもつ。７・13・14は頸部に文様を施文したもの。９はやや特異な器形となるものである。

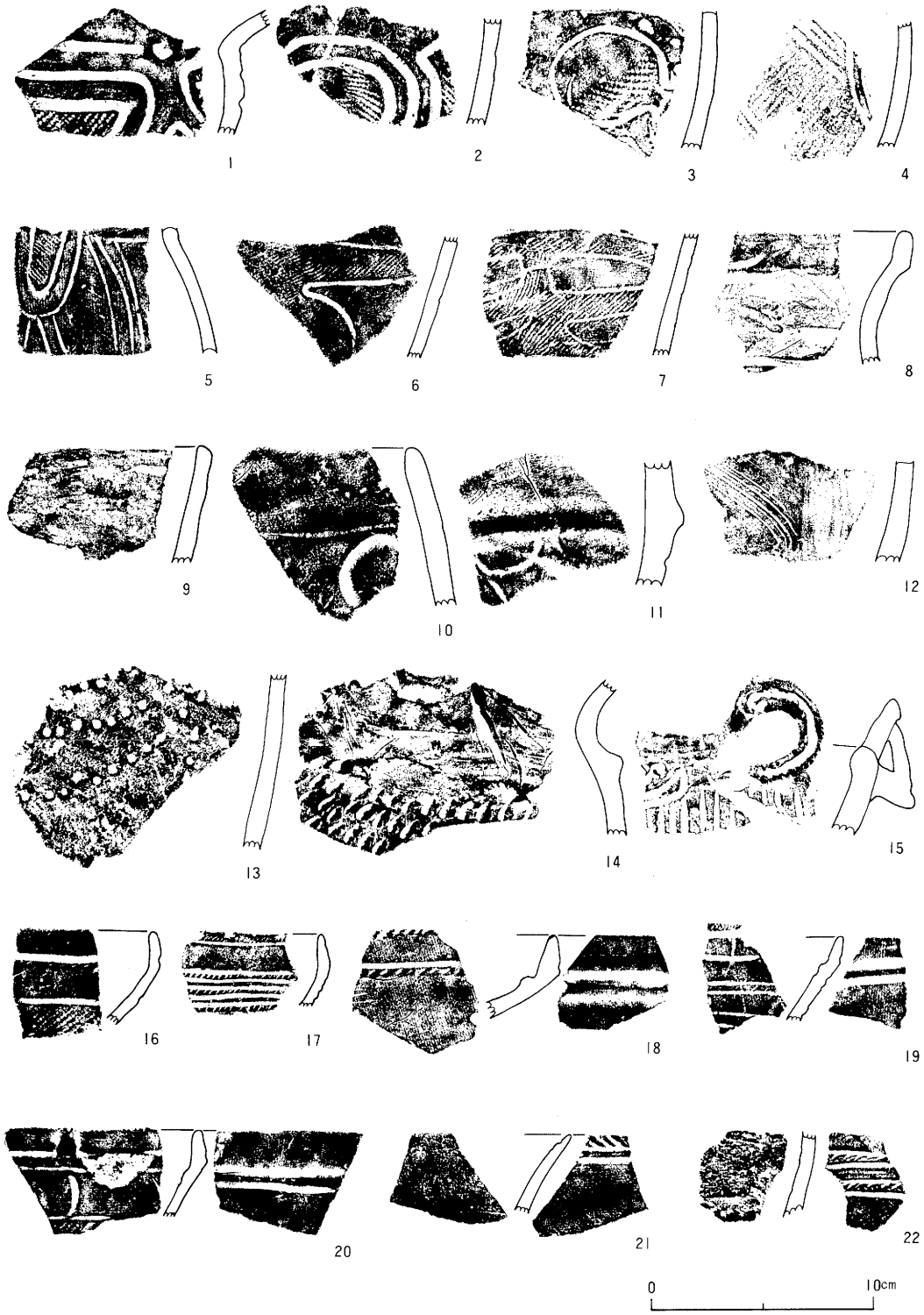
(3)　第Ⅱ類C（第99図10～12）

深鉢形土器の把手部である。10は波状部に円孔をもつ。11は把手部に円形の刺突をもつ。12はカエル形の把手をもち、地文にＲＬ縄文をもつ。



第98図　出土土器(4)(1/3)

第99図　出土土器(5)(1/3)



第100図　出土土器(6)(1/3)

(4) 第Ⅱ類D (第99図15・18～20)

隆帯上に刺突や刻みを加えたもの。15は波状口縁となる深鉢で、口縁部の沈線下に刺突を加えている。18・19も同様な施文法をとるものであるが、20は隆帯上に施文している。18は口縁下に円形の刺突文をめぐらしている。

(5) 第Ⅱ類E (第99図16・17・21)

沈線による区画内に刺突や刻みを加えたもの。16・17は沈線状の刺突を加えたもので、21はヘラ状工具による浅い沈線を斜位に施し縄文状の効果を出している。

(6) 第Ⅱ類F (第99図22・23)

口縁部に沈線をめぐらし、頸部以下を縄文と沈線で施文した深鉢。共にＬＲ縄文を地文として縦位の沈線を施文しており、23はやや区画状の文様構成となっている。

(7) 第Ⅱ類G (第99図24～26・第100図１～５)

甕形土器の胴部で、文様は地文の縄文と隆線で構成されるもの。第99図24～26・第100図1～3は太いもの。第100図4は数条の沈線で文様を構成し、広い空間部に縄文を配している。5は沈線がやや細く、縄文は区画内にわずかに施文されている。

(8) 第Ⅱ類H (第100図６・７)

磨消縄文によって文様が構成される深鉢。６・７共に胴部に数条の磨消縄文をもち、それぞれの縄文帯が橋状に接続した形を呈す。施文された縄文はＬＲ縄文で細かなものである。

(9) 第Ⅱ類Ⅰ (第100図８・９)

無文の粗製深鉢形土器の口縁部。８は口縁が立ち上がって開く器形。９は直線的に開くもの。

(10) 第Ⅱ類J (第100図10～13)

粗製の深鉢形土器で文様が施文されたもの。10は胴部に最大径をもつもので、口縁下に浅い沈線と弧状の凹線が施文されている。11は口縁下に隆帯をもち、隆帯下には沈線が弧状に施文されており、縦位にヘラ磨きされた部分もある。13は小さな円形の刺突文が弧状に配されている。

(11) 第Ⅱ類K (第100図14・15)

他地域からの搬入品と考えられるもの。14は頸部が無文となり、胴部には瓜形状の刺突文が逆時計廻りに重層的に施文されている。頸部を挟んで橋状把手が付くものであり、把手部は剝落している。胎土には砂粒を含め黄褐色を呈す比較的焼成の良い土器である。三十稲場式の胴部が丸くなる甕形土器である。15は勾玉状把手をもつ。把手部には沈線内に円形刺突が加えられている。胴部は縦位の沈線が施文され、口縁下には沈線内に円形の刺突文が弧状に配されている。胴部から口縁が直線的に開く円筒形を呈する深鉢であろう。

(12) 第Ⅱ類L (第100図16～19)

後期中葉の土器で、胴上部に縄文帯や無文帯、それに間隔のつまった文様帯等をもつもの。16は口縁部沈線下に刻みをもち、17は口縁先端部に刻みをもつ。18は口唇部と口縁部沈線下の隆帯上に刻みをもつ。19は口縁下に幅狭い無文帯をもつ。口唇部には刻みを施し、口縁内面にも無文

帯が形成されている。

⒀　第Ⅱ類M（第100図21・22）

後期中葉の土器で、器内面に文様帯をもつもの。21は内面口縁部に並行沈線をめぐらせ、口唇直下に斜傾する沈線を施文している。22はやや下った口縁部に文様帯をもつ。並行沈線による区画帯内に刻み状の沈線を施文する。

⒁　第Ⅱ類N（第100図20・第101図１～５）

後期中葉の土器で、口縁部に重層的に縄文帯を配したもの。いずれも縄文帯間の無文帯部に短線や弧線を施文するのが特徴である。第100図20は口縁部に小さな突起がみられ、内面口縁下に無文帯が構成される。第101図1は口縁部に玉抱三叉文がみられる。２～５は口縁が大きく開く深鉢。縄文はいずれも細かなＬＲである。

⒂　第Ⅲ類A（第101図６・７）

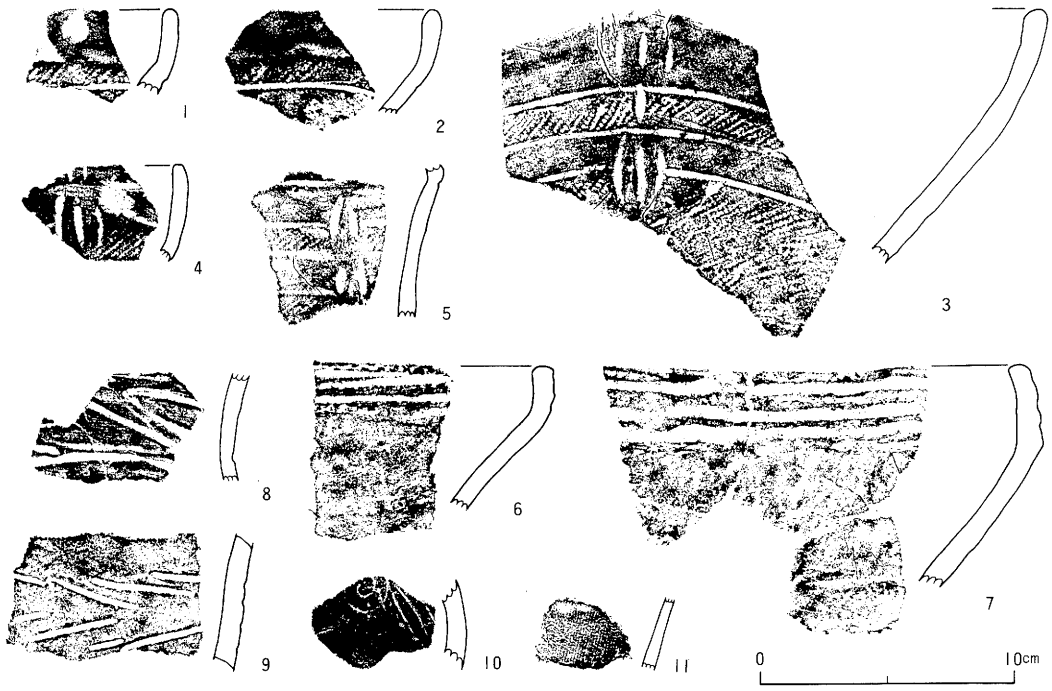
口縁が立ち上がって開く器形で、口縁部に沈線がめぐるもの。６・７共に頸部は無文である。焼成は良い。

⒃　第Ⅲ類B（第101図８・９）

頸部に沈線を施文したもの。８は頸部に斜傾する沈線を配したもので胴部は無文となろう。９は沈線を横位にハの字状に施文したもので、沈線は綾杉状のものがややくずれた形を呈す。

⒄　第Ⅲ類C（第101図10）

胴部に沈線で文様を構成した注口土器の胴部。　　（宮坂虎次）



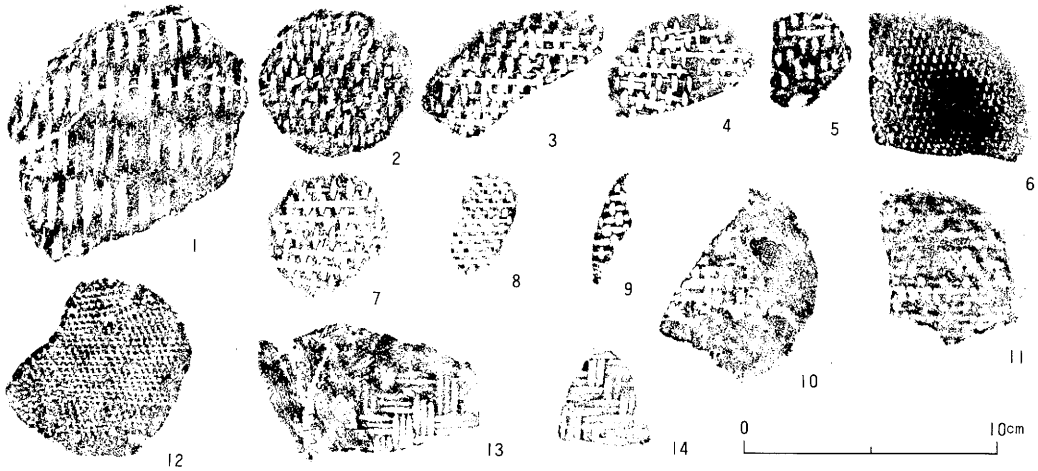
第101図　出土土器(7)(⅓)

第7節　網　代　底

本遺跡から出土した土器のうち網代痕を有するものは17点ある（第102図）。この中には中期初頭のものが1点あり、他は堀ノ内Ⅰ式・Ⅱ式・加曽利BⅠ式が含まれているものと思われる。

1は中期初頭。緯の条に対する経の条は1本越え、1本潜り、1本送りである。2～12は緯の条に対する経の条が2本越え、1本潜り、1本送りであるが、3・4・7は部分的に2本潜っている。13の経は6本越え、5本潜り、3本送りであり、緯は6本越え、6本潜り、3本送りでやや変則的である。14は緯の条に対する経の条は6本越え、4本潜り、2本送りである。

1は中期初頭でやや類例が少ないようである。2～12は他遺跡でも多くみられる普遍的な編み方であるが、13・14は特異な例で注意される。　（鵜飼幸雄）



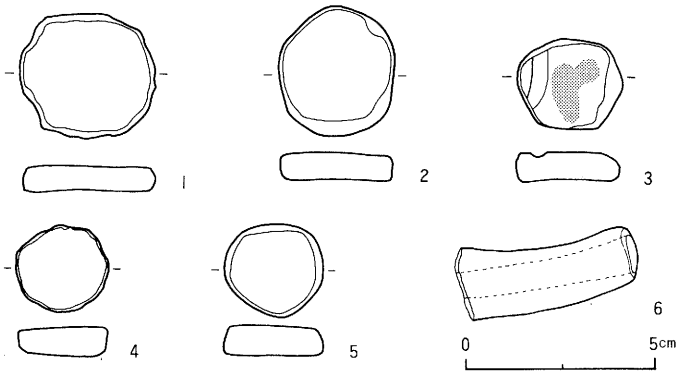
第102図　網代痕（1/3）

第8節　縄文時代の土製品

1　土製円板

（第103図1～5）

土器片を丸く打ち欠いたもので、2・5は周縁を磨耗している。比較的大きい1・2とやや小型の3～5がある。いずれも縄文時代後期のものとみられ、3には沈線と炭化



第103図　土製品（1/2）

物の付着がみられる。4の第58号土壙出土以外は遺構外の出土であり、 重量は1が10.6ｇ、 2が10.8ｇ、3が5.6ｇ、4が6.2ｇ、5が4.5ｇを測る。

2　注口部（第103図６）

注口土器の注口部である。文様はみられない。孔の径は0.6～0.7cmほどあり、先端部でやや広まっている。長さ5.0cm、最大径2.6cmを測る。（鵜飼幸雄）

第９節　弥生土器

弥生土器（第101図11）は１片発見された。Ⅰ区Ｂ－１からの出土で、中部高地型の浅い櫛描文が施文されている。（宮坂虎次）

第10節　石　　器

調査区より出土した石器類は、打製石斧39点、磨製石斧11点、石匙・横刃形石器５点、凹石51点、石錘10点、石鏃27点、剥片石器８点、両極打法による石器群19点が出土している。この中で遺構内より出土したものは全体の48％で、そのほとんどは遺構外よりのものである。また、住居の重複関係も激しく、住居址内が何回にもわたり攪乱されており、住居址との共伴関係をとらえることが大変困難である。これらのことより遺構単位での石器組成、所属時期の把握は困難であった。しかし、器種等より考えると、石器の大半は縄文期の所産であろう。

ここでは前項の理由等より、各器種毎に説明を加えていきたい。

1　打製石斧

打製石斧は39点出土しており、石器全体の4.3％を占める。これらをまず平面形状より分類するとⅠ類～Ⅲ類に分類できる。

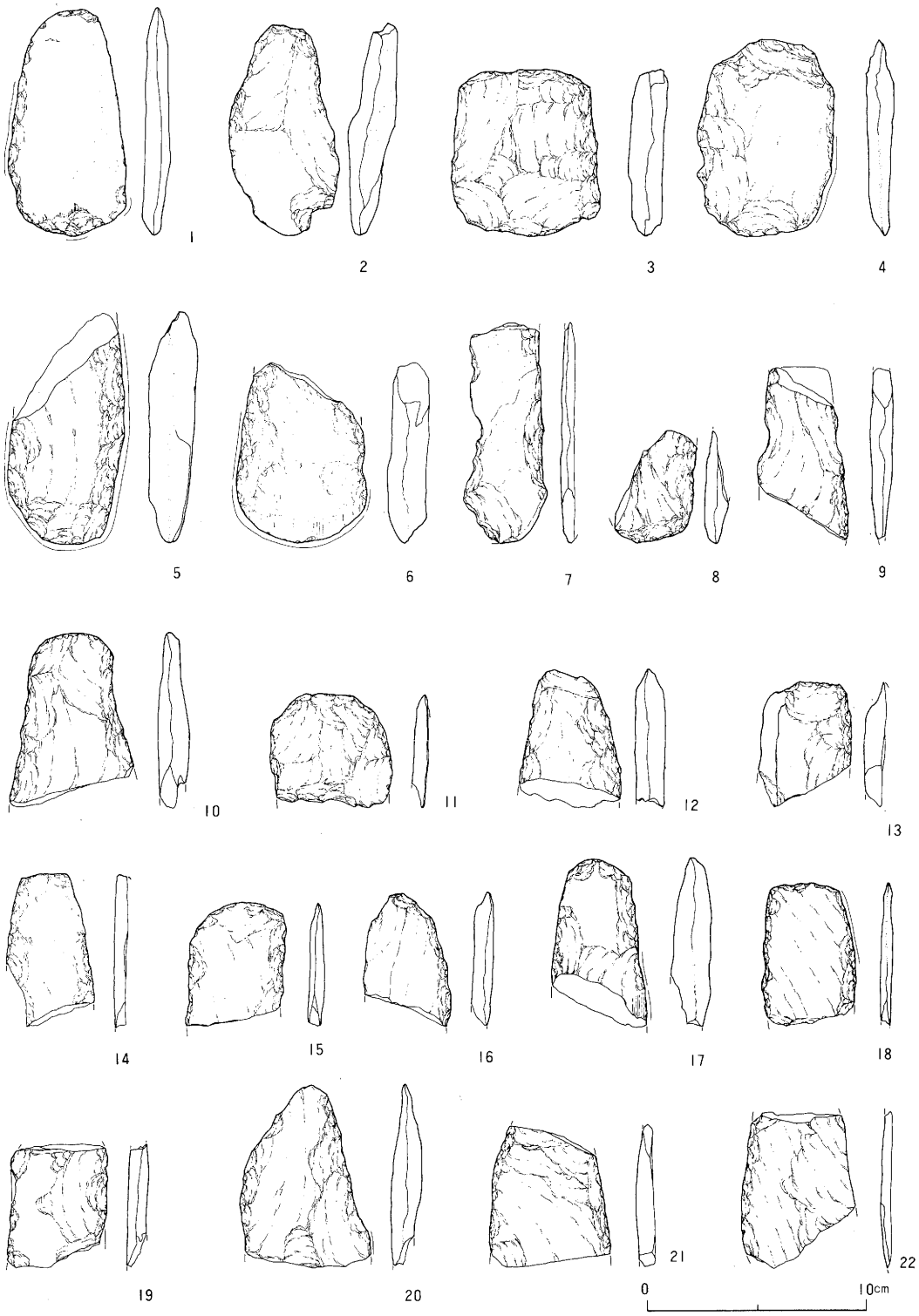
Ⅰ類（第104図１～７）

Ⅰ類は両側縁が平行で平面形状が短冊形を基本とするものである。これらは刃部形状・欠損部分による分類ができる。刃部形状についてみると、直刃、円刃、偏刃の分類が可能である。

直刃のものは５点（第104図２・３・５・９・11）、円刃のものは13点（第104図１・４・６・10・12・13・14・15・17、第105図１・２・５・６）である。刃部の丸味はそれぞれ異なるが、大別すると強く外彎するものと緩やかに外彎するものとがある。偏刃のものは３点で（第104図７・８・16）、その形状は円刃に近いものが主体で、極めて偏よった刃部をもつものは見られない。

欠損部分についてみると、Ⅰ類では刃部・基部を欠損するものがあり、その偏在性は認められなかった。

第104図　出土石器(1)(⅓)



第105図　出土石器(2)　(1/3)

Ⅰ類のものについて側面形状をみると、全体に偏平なものと、基部が刃部よりも厚いもの（第104図4・6・7)などがある、側面形が顕著に彎曲したものはみられなかったが、若干彎曲する傾向のものがみられた（第104図6）。これは背部に彎曲をもつ礫面を有しており、彎曲と礫面の有無には関係があるものと考えられる。

Ⅱ類（第104図8・11～17、第105図1・2）

Ⅱ類は両側縁が基部より刃部へ開き、側縁がハ字状を呈するもので、平面形状が撥形を基本とするものである。これらは刃部形状・欠損部分により分類ができる。まず刃部形状が円刃をなすものは7点で最も多い。刃部は緩やかに外彎するもので、強く外彎するものはみられない。偏刃をなすものは1点で、円刃のものは肩部が使用の際のダメージにより偏刃をなしたような様相を呈する。直刃は1点である。Ⅱ類のものを側面形状よりみると凸レンズ状を呈するものが主体を占める。側面が彎曲状をなすものは見られないが、側面稜線が曲線をなすものが1点（第104図12）ある。

Ⅲ類（第104図9・10）

Ⅲ類は側縁部の一部に抉り込みを有するもので平面形状が分銅形を基本とするものである。今回の調査に於いて典型的なⅢ類のものはみられず、Ⅱ類の亜流として捉えた方が妥当なものが主体であった。刃部形状等については他の類のものと変りがなかった。本類の特徴である側縁部への抉り込みであるが顕著でなく、側縁加工の際に意識的に調整を集中させた部分が浅い抉り込み状を呈しているものである。

これらの打製石斧は平面形状Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類だけでなく大型のものと小型のものとに分けられる。大型のものに比べ小型のものは調整剥離も丹念でなく、母岩からの剥離面を残すものが多い。刃部・基部等の構造は大型のものとは変りないが、直接剥片・砕片を用いているために粗雑な感を受ける。また、（第105図3･4）のように他の打製石斧とその構造を異にするものがある。これらは平面形状よりみると正方形に近いもので、製作法等は打製石斧と同じである。この石器が打製石斧の一種なのか、または別の器種なのか問題があるものである。

2　磨製石斧

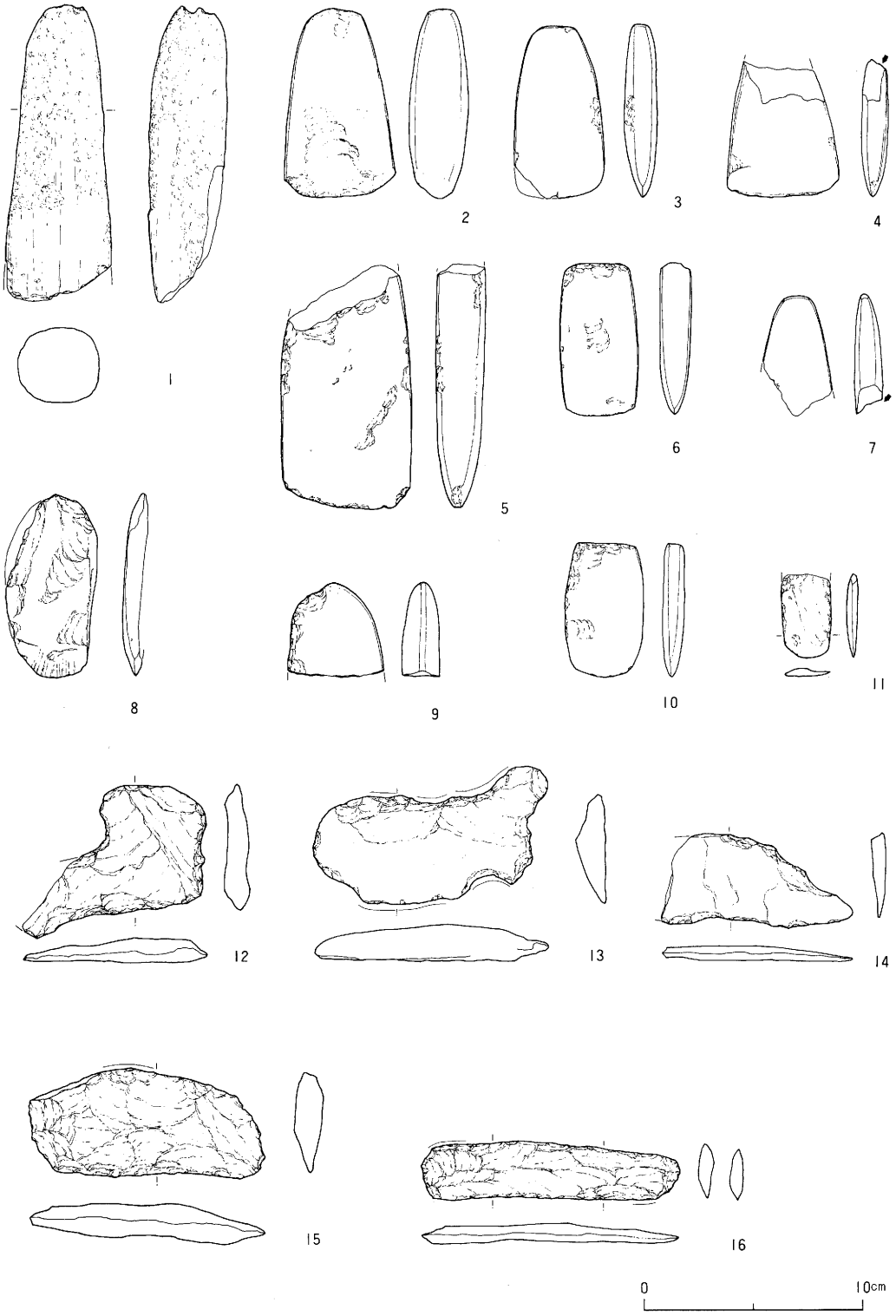
総数11点（第106図1～11）で、完形3点、基部欠損3点、刃部欠損2点、側縁部欠損1点、基部破片2点の内訳である。これらは形状等によりⅠ類～Ⅲ類までの分類が可能である。

Ⅰ類：乳棒状のもの（第106図1）

Ⅱ類：定角式のもの（第106図2～7・9・10）

Ⅲ類：箆状のもの（第106図8・11）

第106図1はⅠ類に属するもので、刃部を欠損する。全面に敲打整形痕が残り、その一部に使用によると思われる磨痕が認められた。Ⅱ類に属するものは8点である。平面形状をみた場合、刃部部分が大きく広がるもの(4)と、そうでないものがある。刃部形状は全て緩やかに外彎するもの



第106図　出土石器(3)(1/3)

で、細かな刃こぼれ状の痕跡がみられる。特に5はその傾向が著しく潰れたような様相を呈する。また、2は製作時より刃付けが行われていないようで潰れた状態である。基部については、上部に研磨後に生じたダメージを有するものが2点(6・10)ある。使用痕は条線状のものが刃部を主体に観察でき、4のようにその部分が光沢を帯びるものもある。この他器面が何らかの物理的要因により黒っぽく変色しているものがある(2・4・10)。

Ⅲ類のものはⅡ類などと比べるとその研磨のし方等は雑で、整形剥離の全てにまでは及んでいない。刃部形状は緩やかな丸味を帯びるものである。平面形状は短冊形に近い形を呈し、側面形は薄い板状をなす。

これらの磨製石斧について、特にⅡ類の定角のものについては、土壙・埋甕内より出土しており、このように刃付けが行われていないものもあり、ある種の意味を有していた石器として捉えられようか。

3　石匙・横刃形石器

総数5点(第106図12～16)で完形3点、刃部先端欠損1点、基部欠損1点の内訳である。一応摘み部をもつものを石匙、もたないものを横刃形石器とした。刃部形状は内彎するものと、外彎するものがあり、内彎するものが主体である。素材は全て横剝ぎの剝片を用いており、13のように礫面を有するものもある。刃部調整は丹念に行われているものと、単に剝片の縁辺を利用したものとがある。背部は刃部に比べ厚味をもち、潰すような調整が行われている。断面形は楔形に近い形を呈するものが主体をなす。

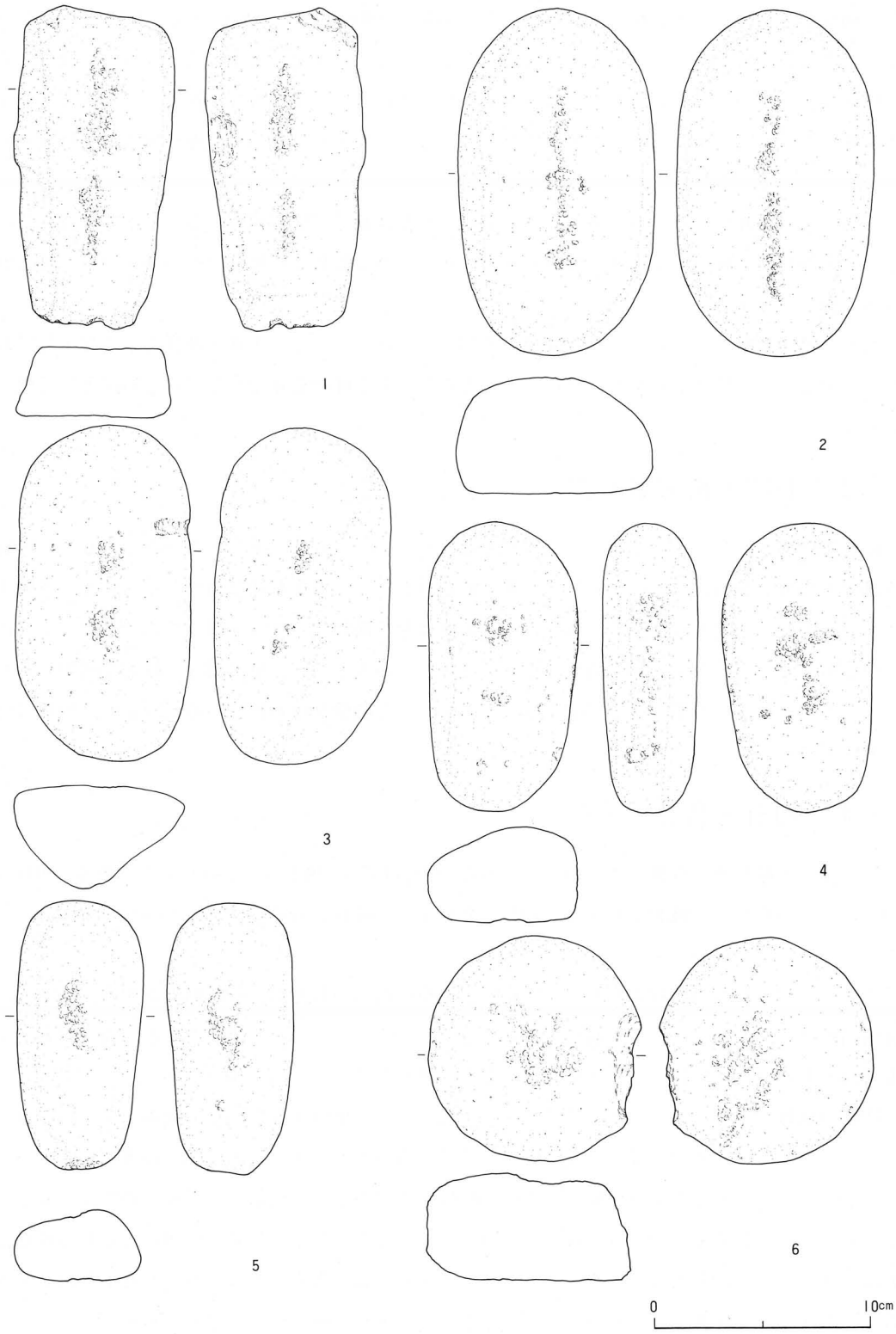
4　凹石・磨石・敲石

凹石は出土量が多く石器全体の30%を占める。凹石は47点、磨石3点、敲石1点である。凹石の場合は単に凹石だけの機能を有するものと、磨石または敲石、あるいは三様の機能を有するものとがある。

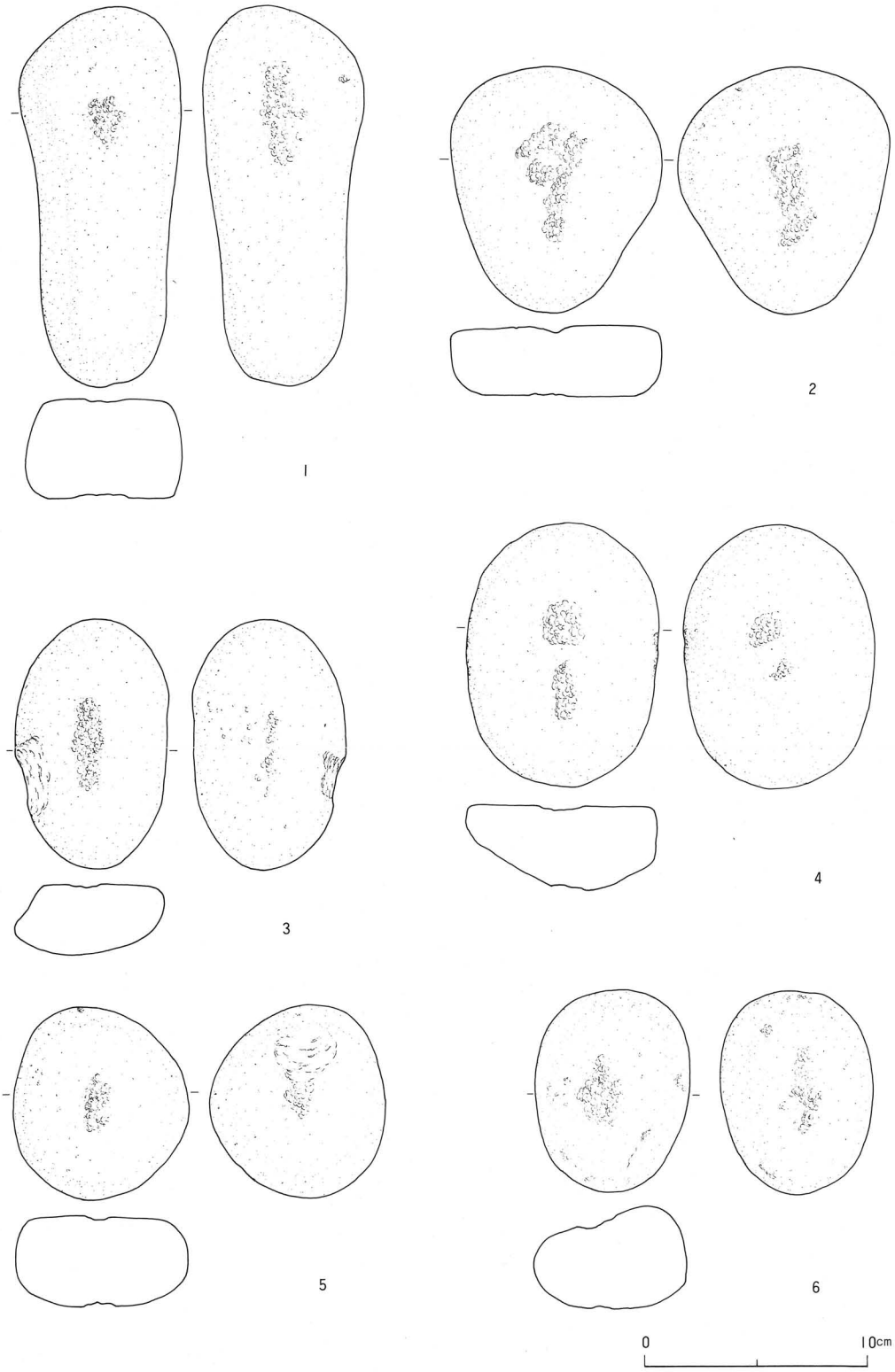
これらの凹石を平面形状よりみると楕円形、不整楕円形、長方形、石鹸形等がある。基本的には楕円形のバリエーションで、長楕円のものと、そうでないものが主流を占める。尚、石鹸形のものは、あらかじめ敲打等により整形しており、磨石と併用している場合が多い。

凹孔の状態をみると、敲打によるアバタ状の浅い小孔が集中するものと、凹みが深い断面漏斗状を呈するものとがある。量的にみた場合、前者の方が24点と多い。尚、この両者を合せもったものもみられる。凹孔の位置は縦にいくつも配列するものと、中央部に丸い形の範囲にあるものとに分かれ、前者のものが主流を占める。凹孔は両面にあるものが38点、片面にあるもの8点、側面を加えた3面にあるもの1点である。凹孔が深く両面にあるものは、凹孔を有する面が平坦若しくは緩やかな彎曲を示すもので、そうでないものは割合断面形が不整形である。

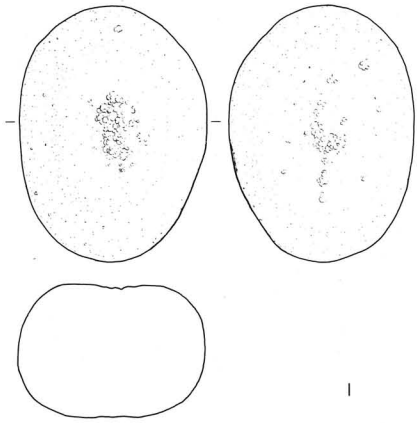
磨石は3点(第112図2・3・4)である。磨り方は全面を磨るもの(2)、片面を磨るもの(4)、一部

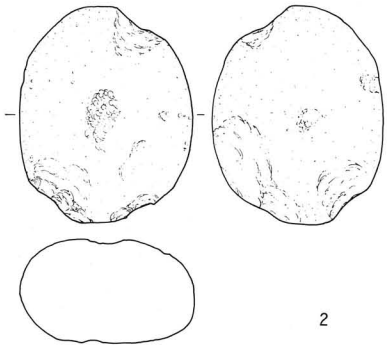


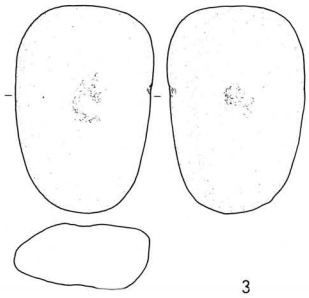
第107図　出土石器(4)(1/3)

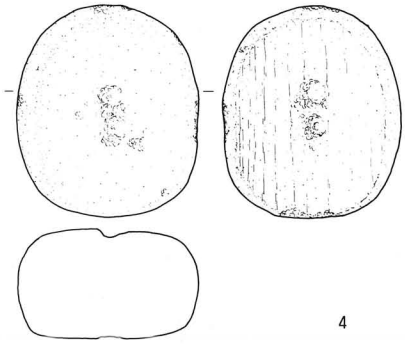


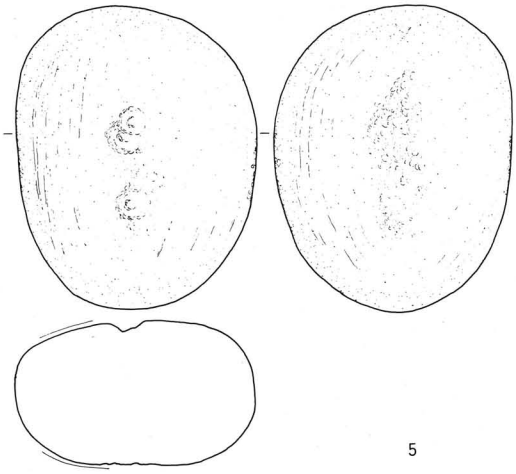
第108図　出土石器(5)(1/3)

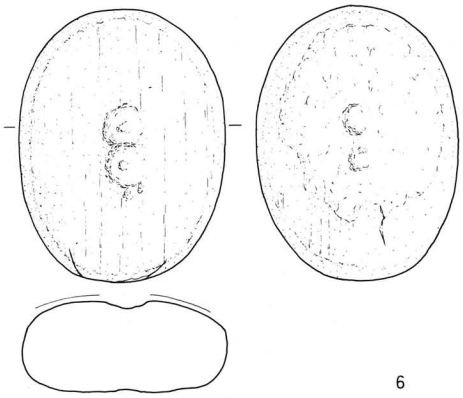


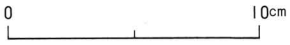




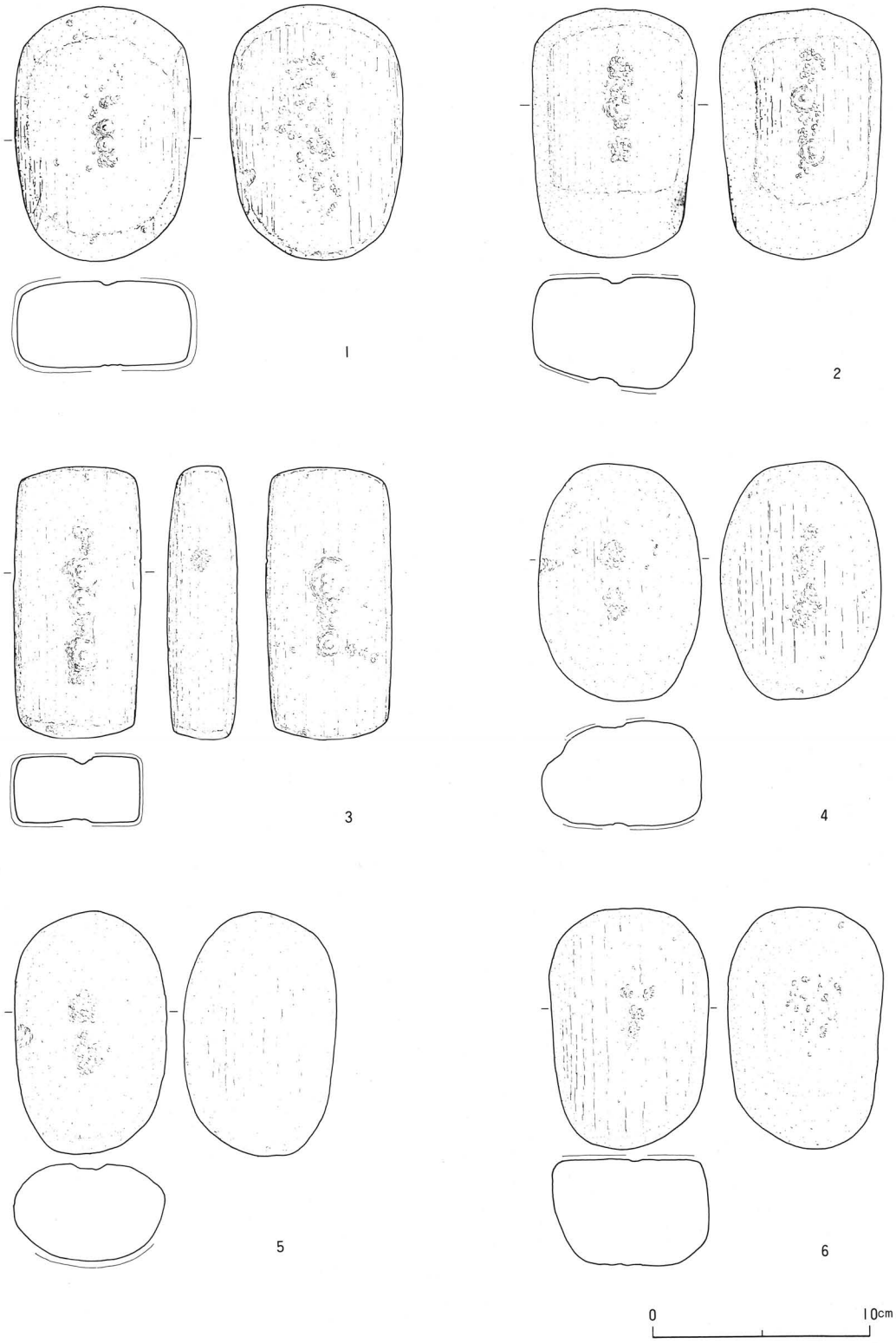




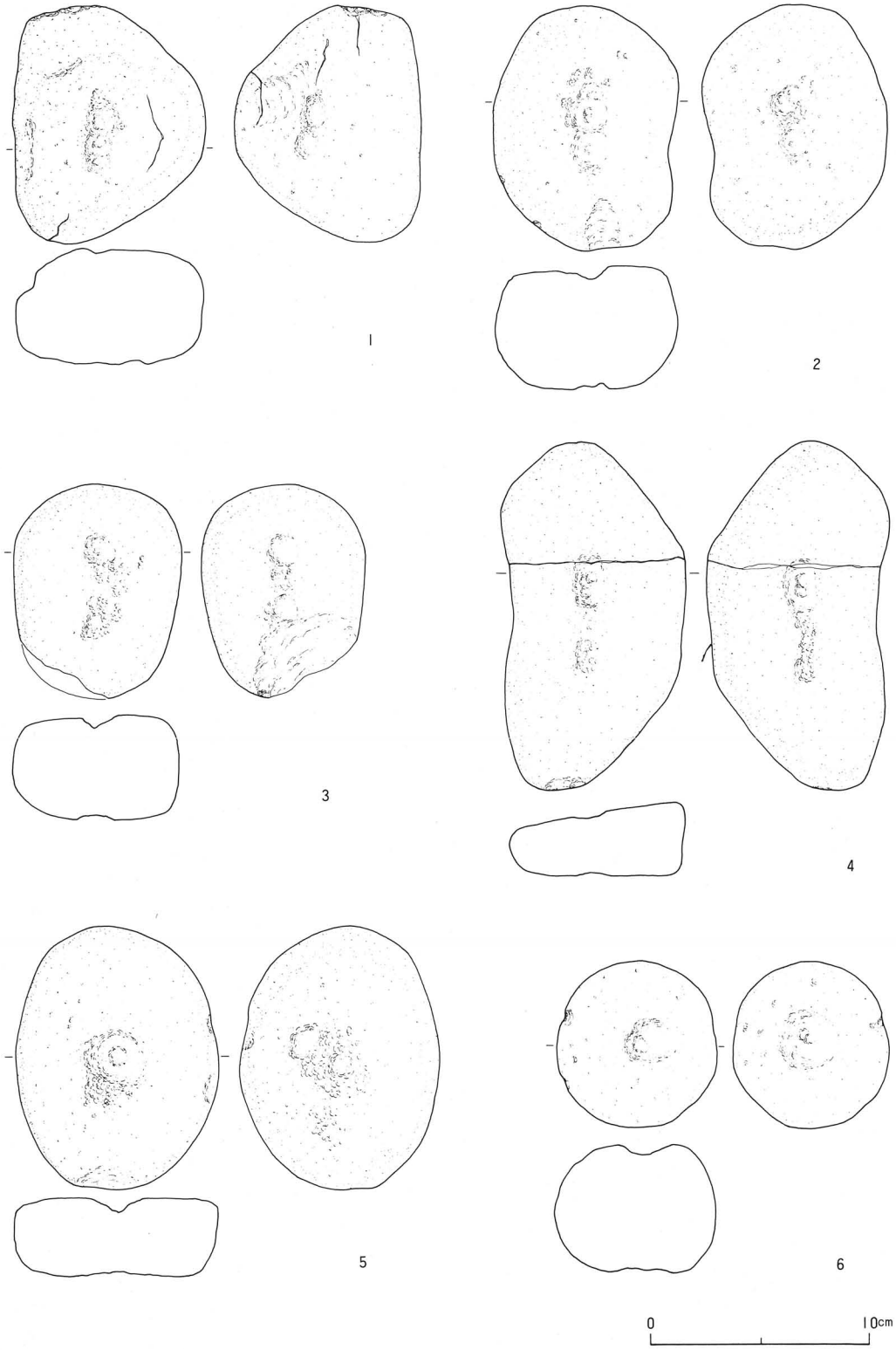




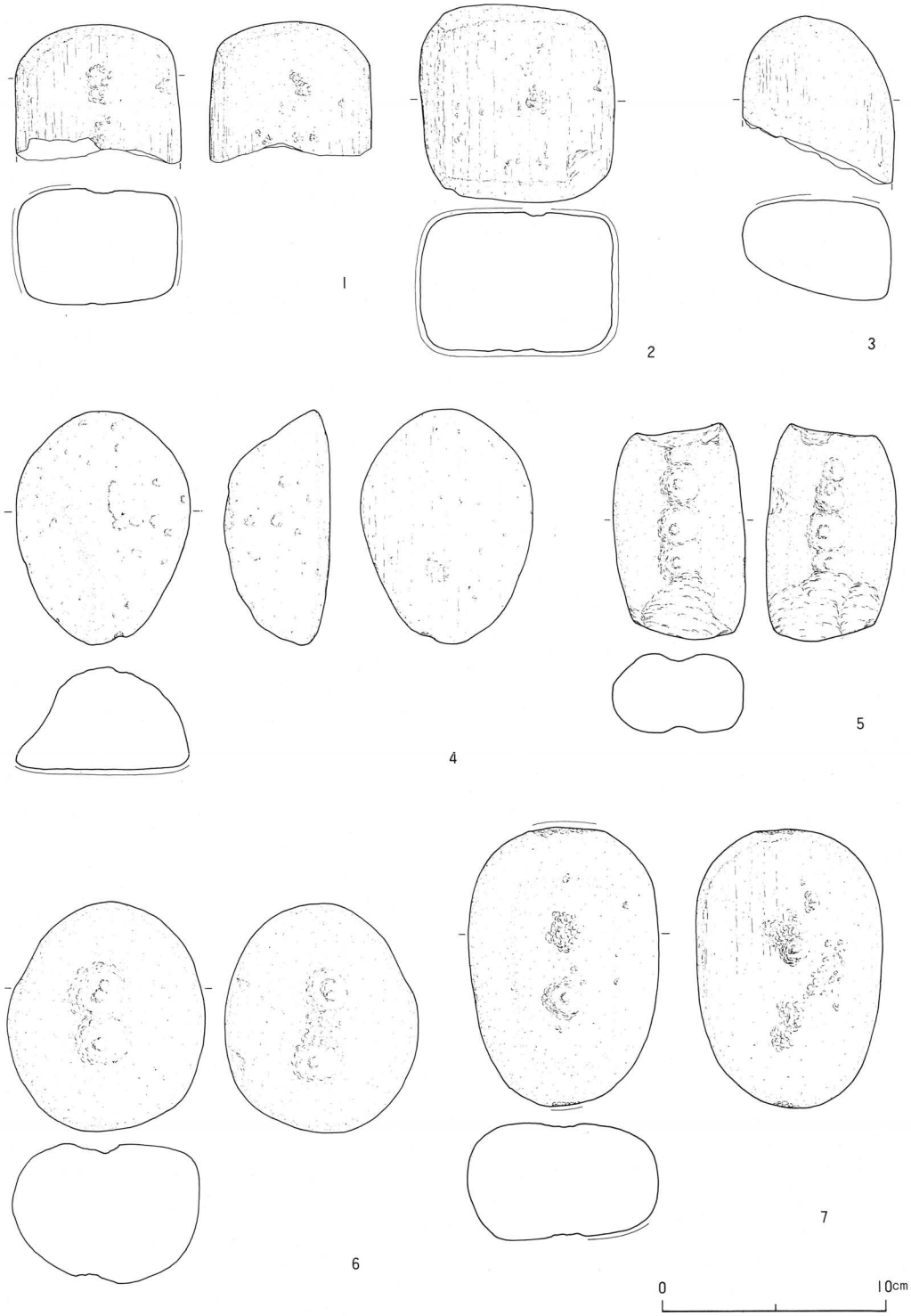
第109図　出土石器(6)(⅓)



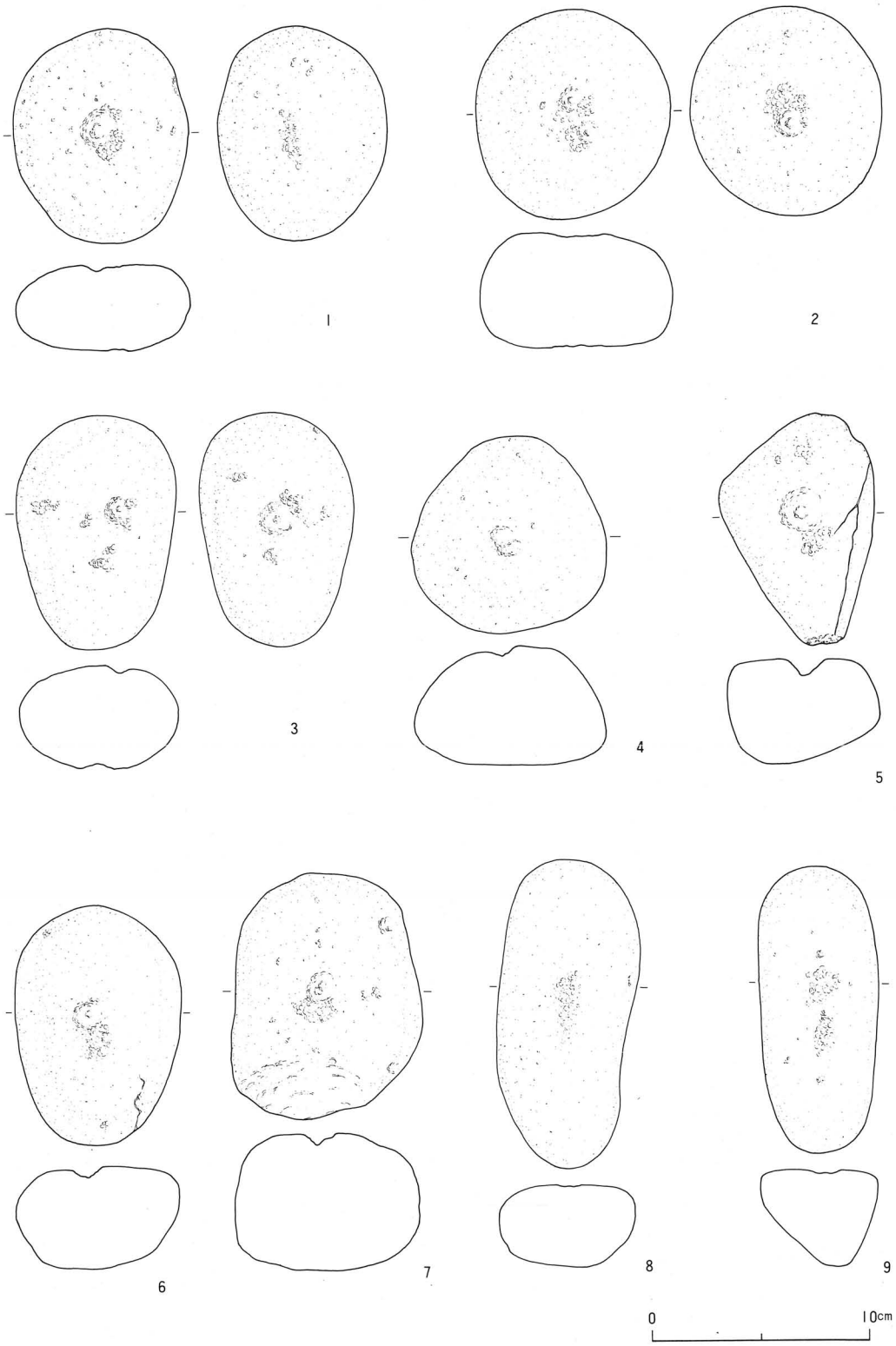
第110図　出土石器(7)(1/3)



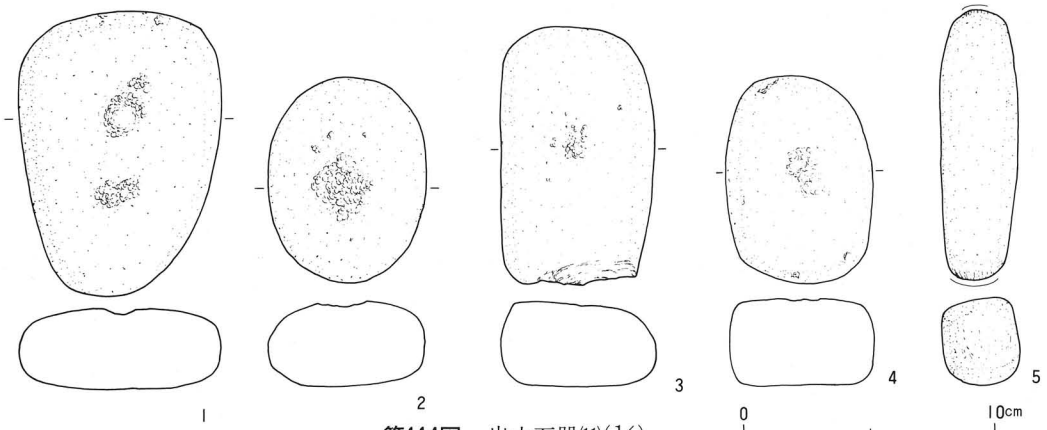
第111図　出土石器(8)(1/3)



第112図　出土石器(9)(1/3)



第113図　出土石器(10)(1/3)



第114図　出土石器(11)(1/3)

分を磨るもの(3)がある。4については他の磨石とは異なり軽石を素材としており、機能が異なっていたと思われる。敲石は1点(第114図5)で棒状の礫を素材としており、その両端に敲打によるスレ状の痕跡が見られる。尚、凹石の中にも磨石・敲石と併用のものがある。磨石として使用されたと推定される磨り痕を残すものは11点である。この内片面だけのものは4点で、残る7点は両面若しくは側面にも磨り痕を残している。敲打痕をもつものは8点で、素材の両端若しくは側面に敲打痕が残る。このように凹孔をもち、磨石または敲石と併用するものは21点あり、全体の45%を占める。これらのことより凹孔・磨り・敲打は密接な関係をもち凹石は単に単一的な機能を有する石器としてよりも、複合した機能を得られていたように思える。また、スス状炭化物が付着するものが3点みられた。このような凹石は与助尾根南遺跡※、居沢尾根遺跡※※で報告されており、凹石の機能等とどのような関わりがあったであろうか。

5　石　錘

石錘は10点出土していた。全て打ち欠きによるもので、その位置によりⅠ類とⅡ類とに分類できうる。

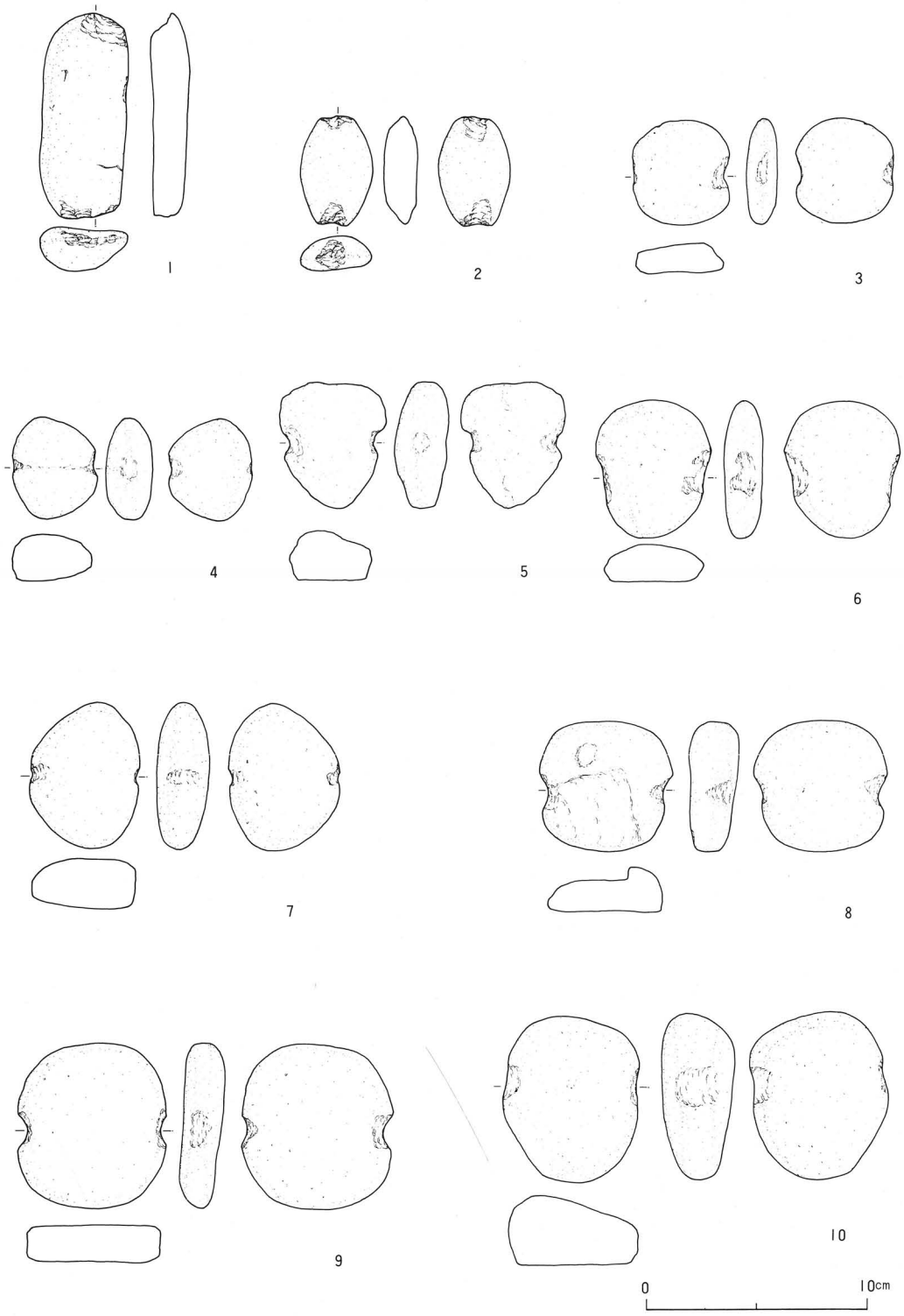
Ⅰ類：素材の長軸方向両端に打ち欠きをもつもの。

Ⅱ類：素材の短軸方向両端に打ち欠きをもつもの。

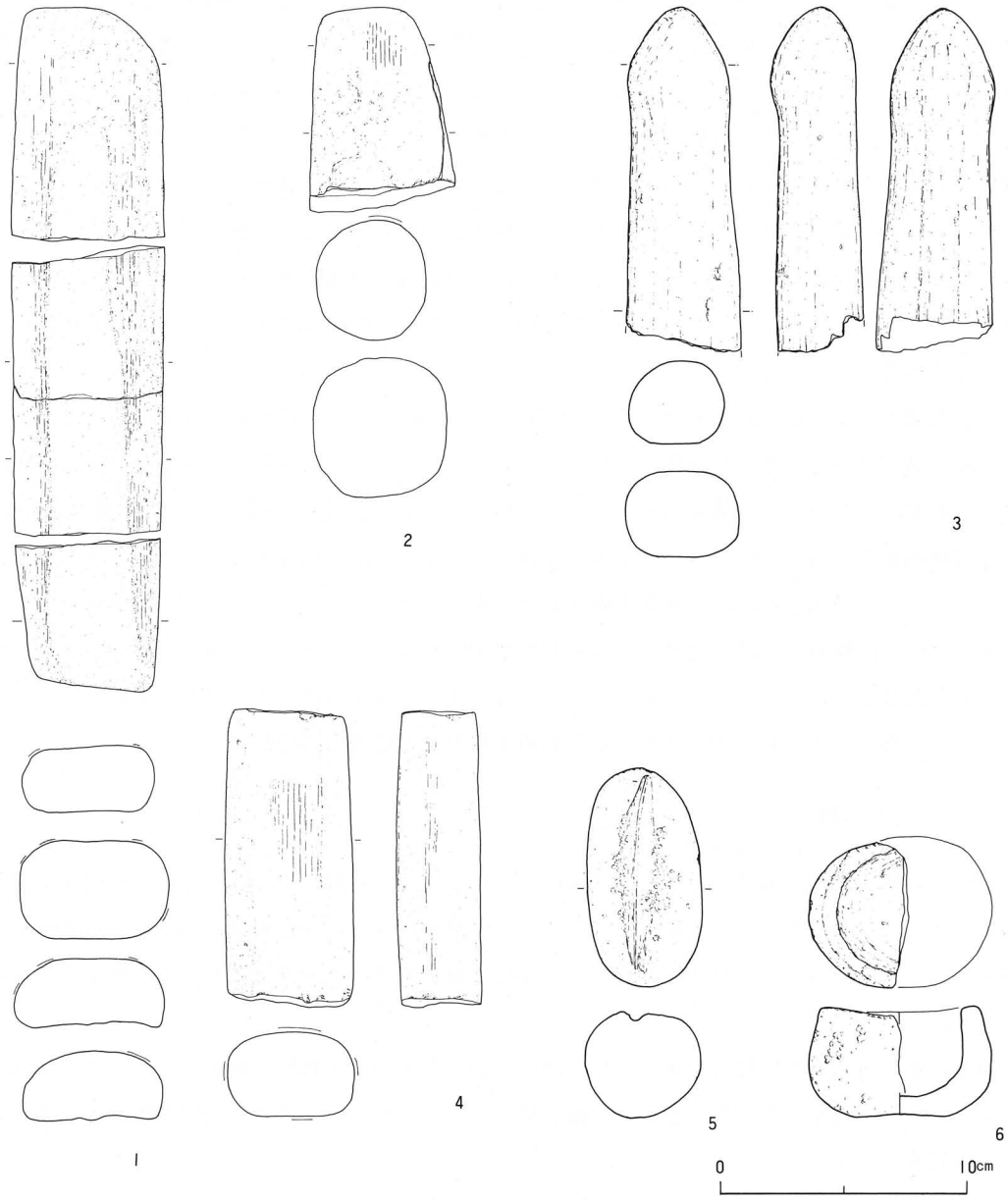
第115図1・2はⅠ類に属するものである。両端よりの打ち欠きは1と2は異なり、1は簡単な調整を加えているだけのものに対し、2は抉入部を作り出している。Ⅱ類に属するものは8点でその主体を占める。打ち欠きは側面または裏面より行われており、全てのものに抉入部が見られる。抉入部の幅は1.0～2.1cmと余りばらつきが見られず、ある程度一定である。素材に用いている礫は主体が安山岩の扁平礫で、素材を選択しているような傾向を示す。

※　鵜飼幸雄　1980　「石器」『与助尾根南遺跡』　茅野市教育委員会

※※　高桑俊雄　1981　「縄文時代の石器」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―原村その4―昭和51・52年度』　長野県教育委員会



第115図　出土石器(12)(1/3)



第116図　出土石器⒀(1は½、2・4は⅙、3・5・6は⅓)

6　石製品

石製品とした内には石棒、軽石製小形碗等がある。

石棒は4点出土している。これを従来通りの分類である無頭と有頭に分類すると、無頭石棒は3点(第116図1・2・4)で有頭石棒は1点(第116図3)である。1は安山岩を素材とするもので最大長110.4cm、最大幅24.0cmと大きなものである。先端部½ほどより基部にかけて素材の礫面を残

すが、その他の部分は敲打整形が行われている。また、礫面と敲打面との境部分は磨かれている。断面形は四角ばった楕円形を呈する。尚、基部に剝落箇所がみられるが、敲打等の切り合いより見ると当初より剝落していたものと思われる。2は1、4などと異なり断面が円形を呈するものである。全面が敲打により整形され、その一部が磨かれている。基部は破損している。4は1と同様な断面形を呈するものである。頭部と基部は平坦になるように調整を加えており、平面形状は長方形を呈する。全体整形は側面を中心に敲打により整形した後軽い磨きをかけている。3は他の石棒とは異なる有頭石棒で大きさも小形のものである。全体に磨きがかけられており、裏面は平坦になるように磨かれている。基部が欠損しているが、欠損状態等よりみてかなり古いもののようである。

5は有溝を有する石製品である。溝部は幅0.9cm、長さ8.3cmで、卵形を呈する礫のほぼ中央部にある。溝は敲打がなされた後擦り切り状につけているもので、断面形はU字形を呈する。このような石製品については有溝砥石[※]として取り扱われているが、一応石製品として取り扱っておく。

6は軽石製小形碗である。残存は全体の½ほどであるが、図上復原すると口径6.4cm、器高4.2cm、底径3.7cmである。器形は体部が丸味をおび、底部が丸底状に近いもので所謂碗状を呈する。製作法は円礫の軽石のほぼ中央部に窪み部を作り調整を加え、内面を作り出している。外面は底部を除き調整が加えられていないようである。このような石製品は、中原遺跡の第2号住居址[※※]より出土しており、その形状等より考えると小形土器などと密接な関係があろうか。

7　石　鏃

石鏃は27点出土しており、その中には未製品も含まれる。石器に用いられている石材は第117図10のチャートを除き、全て不純物の混入の少ない黒曜石である。石鏃は基本的には無茎凹基・無茎平基・無茎円基の三分類ができ、各類の点数は無茎凹基19点、無茎平基2点、無茎円基6点である。

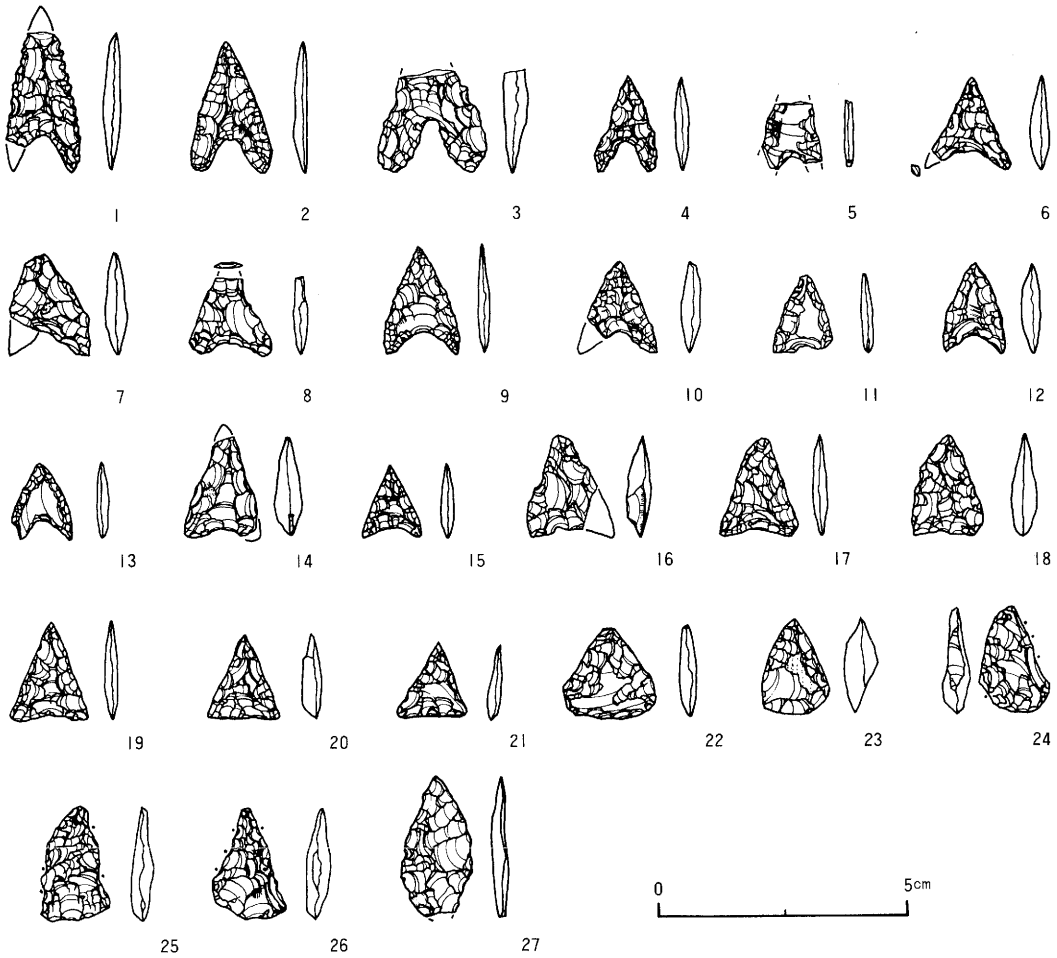
無茎凹基Ⅰ類：基部に対して深く丹念な調整を加えたもので逆刺部が顕著なものである（第117図1～4）。これらは身部が長いもので、幅が狭くスマートな感を受ける。調整剝離は丹念で左右がほぼ対象をなす。

無茎凹基Ⅱ類：基部への抉り込みはⅠ類に比べ浅く内彎する（第117図6～19）。これらは抉り込みの状態により2分できるようである。鏃形は身部がⅠ類に比べ短かく、最大幅は脚部の最末端にある。

無茎平基：最大長と最大幅が比較的近いもので平面形が正三角形に近い形を呈する（第117図20・21）。

無茎円基Ⅰ類：基部への抉りはみられず外彎するもので、平面形が無茎平基のものと同様に正

※　宮下健司　1983　「有溝砥石」『縄文文化の研究』　7
※※　宮坂英弐　1976　『福沢村の古代史』　茅野市教育委員会



第117図　出土石器(14)（1/1.5）

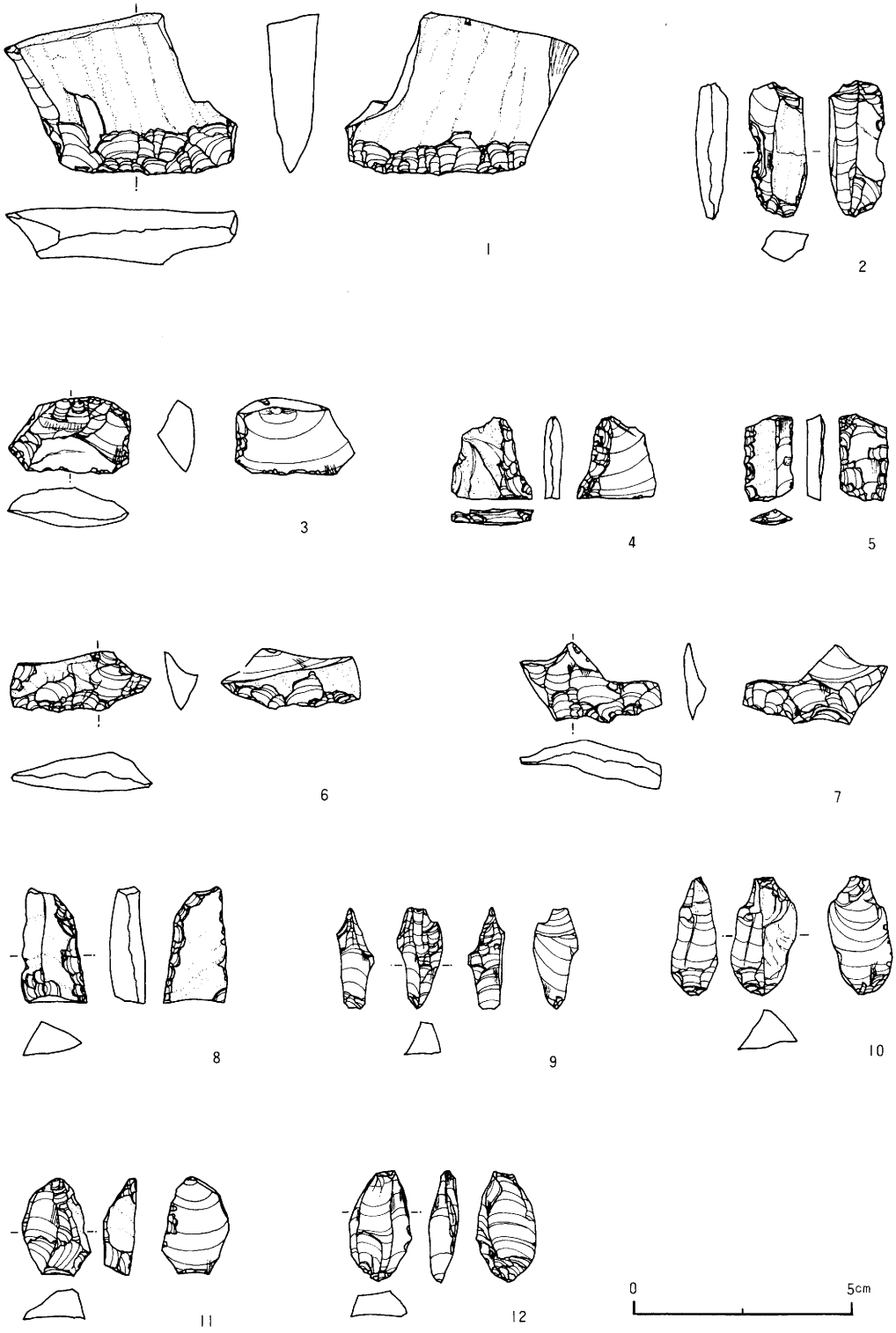
三角形に近い形を呈する（第117図22・23）。

無茎円基Ⅱ類：Ⅰ類に比べ身部が長いものである（第117図24～27）。24～26は調整等より考えると他の石鏃等とは異なる様相を呈している。特に平面形状に於いては不整形であり、未製品に近いものである。

8　剥片石器

剥片石器は８点出土している。この他にも剥片縁辺部に細かな刃こぼれ状の痕跡をもつものが数点あったが、ここでは明らかに石器として用いられたと思われるもの（刃部調整等が行われているもの）について取り扱った。

Ⅰ類：刃部が素材剥片の一辺にあるもの（１～４）で、素材剥片には２のように両極打法による剥片を用いるもの、３のように横剥ぎによるもの、４のように縦剥ぎによるものがあるが、いずれも一部に自然面を残す第一次剥片である。尚、４は剥片末端に折断したような痕跡が残る。刃



第118図　出土石器(15)（1/1.5）

部形状は直刃をなすものが主体で、2・4のように内彎する刃部をもつものも見られる。

II類：刃部が素材剥片の相対する辺にあるもの（5・8）で、素材剥片には縦長状の剥片中央部に稜をもつものを用いている。刃部は直刃をなす。5は剥片末端に調整が加えられている。

III類：この群（6・7）は刃部よりみるとI類の範疇に入れるべきものであるが、調整の状態が刃部調整と云うよりも整形調整に近いものである。この群の特徴は、背面にポジティブなバルブを残すことである。この剥離は加工段階で最終に行われたと思われるもので、これらより考えるとこの群はある種の石器製作の際に生じたものと思われ、石器としての機能を有しているものとは取り扱えない。

9　両極打法による石器群

この石器についてはピエス＝エスキーユ[※]・曽根型彫刻器[※※]・曽根型石核[※※※]などと呼ばれているものであるが、ここではこの石器の特徴であるその製作法によるものを一括した。本遺跡からは19点出土しており全て黒曜石を素材としている。

I類：平面形状が上下両縁が先細り、紡錘形を呈するもので（第118図10～12）、背面に主要剥離面状のものを有する。上下両縁は両極打法の特徴的な階段状の剥離痕が観察でき、潰れたような状態を示す。

II類：平面形状が縦長状を呈するもので（第118図9・第119図9）、一面に主要剥離面状のものを有する。形状等よりみた場合スポール的な感を有する。

III類：平面形状が四角形を呈するもので（第119図8・10～14）、断面形が楔状である。

IV類：平面形状が四角形を呈するもの（第119図1～7・15）で、断面形が凸レンズ状である。このIV類、III類は形状が等しく、一つのグループとして把握しても妥当であろう。断面形の相異については、剥離の段階が進むにつれ凸レンズ状を呈してくるものと思われ、基本的にはIV類がこの種の最終形態と考えられないか。これらの石器で所謂截断面をもつものは11点でIII類・IV類の73％を占める。

今回出土した19点につき平面・側面形状より4つの類に分類したが、I・II類は、III・IV類と比べ形状にばらつきがあり、主要剥離面状の面を残存すること等や、聖山遺跡の接合例[※※※※]などより考えると、このようなものは両極打法による剥離が進む過程内で生じた剥片・スポール等として理解できるのではないか。また、III・IV類を分類した基準である側面形状については、単に形状的分類の基準に過ぎず機能差などを示しているとは思えない。なぜなら、側面形状は加撃法と密接な関係を有すると思われるからである。つまり、凸レンズ状を呈するものは剥離が進行したも

※　岡村道雄　1976「ピエス・エスキーユについて」『東北考古学の諸問題』

※※　森嶋　稔　1975「曽根型彫刻器考」『長野県考古学会誌』第21号

※※※　藤森栄一　1960「諏訪湖底曽根の遺跡」『信濃』第12巻第7号

※※※※　阿部朝衛　1978「ピエス・エスキーユ（楔形石器）」『聖山』東北大学文学部考古学研究会

第119図　出土石器(16)(1/1.5)

の、楔形を呈するものは剝離途中であり打面部を残すものと捉えたい。尚、側面を凸レンズ状にすることが最終目的であったのかは把握できなかったが、道具として機能させることにより結果的に生じたものであるとする捉え方もあり今後の問題である。この他に、この石器は截断面の有無により素材・製品と分類されているが※、截断面の有無はこの石器に必然的な構造ではないように思われる。むしろ製作時に於いて截断面が生じたものは、截断面と縁辺部より構成される凵形のワーキング＝エッヂをもつもの、ないものは二形のワーキング＝エッヂをもつものとして使い分けがされていたのではないか。

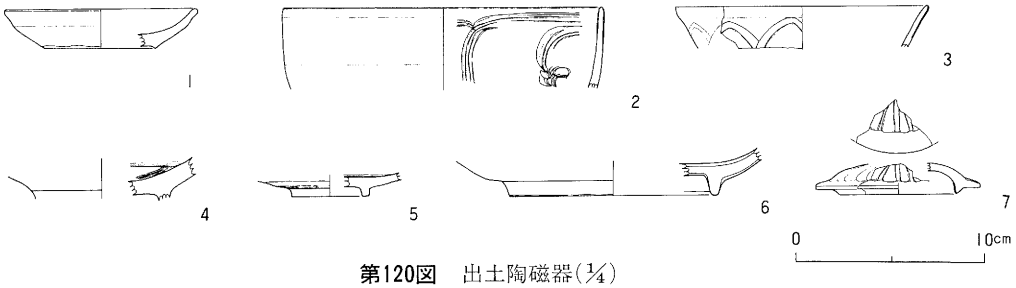
この石器については従来の石器とは異なり、製作法がどちらかというと雑なもので、石器としての認識が薄かったものである。しかし、新たな研究により石器の構造が明らかになりつつあり、今後石器組成内での位置等の把握により、より一層この石器のもつ性格が明確になってくるであろう。また、両極打法についてもハンマーと台石による簡単な打撃法で、この打撃により製作された石器は単にピエス＝エスキーユだけではないはずである。石核・剝片等の分折が進むにつれ、この打撃法によるものが数多く見い出されるものかと思われ、今後そうした剝片・砕片等に対する詳細なみかたが必要となってくるであろう。（守矢昌文）

第11節　陶　磁　器

陶磁器（第120図）はほとんどが遺構外からの出土で細片が多い。

1は第17号住居址からの出土であるが混入品と考えられる。瀬戸系の皿で断面三角形の小さな高台をもつ。口縁部は凹線状にロクロ成形されており、全体に黄色の釉が比較的厚くかけられている。高台部と底部のみ露胎である。2は口径の大きい碗形の青磁であり、内面は櫛状工具により施文されている。胎土はやや黒味のかかった灰白色で微気泡がみられる。釉は薄く黄味の強い青黄色を呈す。3は口縁が直線的に開く青磁の碗で蓮弁文を配している。胎土はやや黒味のかかった灰白色で、釉は青白色を呈す。4・5は白磁の底部である。4は見込部に櫛状工具による施文がみられ、5は沈線がめぐる。4の胎土は微気泡を含む黄白色を呈し、釉は高台部までかけられている。5の胎土は灰白色を呈し、釉は腰部までかけられている。6は大形の碗状の器形となる青磁の底部である。胎土は微気泡を含む灰白色で、釉は厚く底部から高台部まで全面にかけられており、鮮やかな緑色を呈す。7は青白磁小壺蓋である。受部径は推定6.2cm、最大径は推定8.7cmあり、現存高は1.6cmである。内面受部のみ露胎で、蓋上面には菊花状の文様が陽刻されている。胎土はよく精製されたもので白色を呈す。釉は黒色微粒子を含んだ水色を呈し、透明度は高い。（鵜飼幸雄）

※　柳田俊雄　1974「截断面ある石器」『ふたがみ』同志社大学旧石器文化談話会

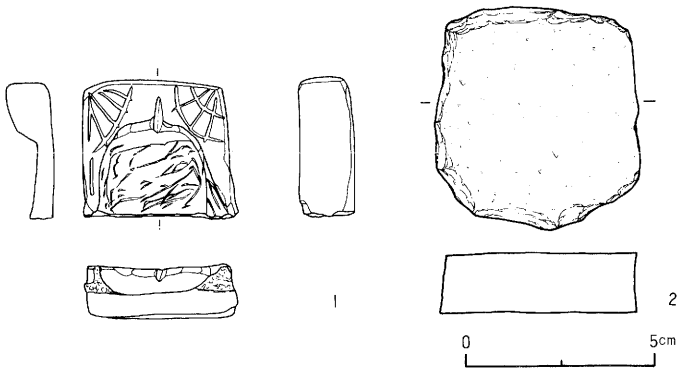


第120図　出土陶磁器(¼)

第12節　古代の石製品

1　滑石製模造品（第121図１）

黒青色の滑石を用いている。下面には中央部まで切り込んだ後折り取った痕跡が明瞭に残っており、その後ノミ状の刃物で造作をしている。造作は中央部を略半円形に掘り込み、その頂部に突出する形に刻みを入れている。掘り込んだ部分の底面はほぼ水平であるが、下面側の先端部のみ高くしている特徴がある。また、頂部の刻みを挟んだ左右上端部には放射状沈線と弧線からなる文様が彫られている。4.0cm×3.5cm・最大厚1.3cm・重さ34.7ｇを測る。Ｉ区Ｄ－４出土。



第121図　古代の石製品(½)

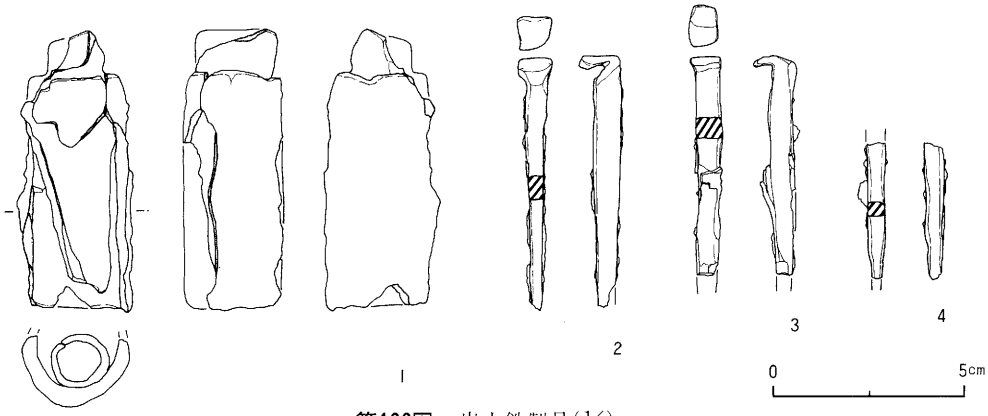
2　石製円板（第121図２）

板状の扁平な安山岩を用いたもので、周縁を打ち欠いて隅丸方形状に仕上げている。5.9cm×5.4cm・厚さ1.6cm・重さ99.7ｇ。第６号土壙から出土した。　（鵜飼幸雄）

第13節　鉄　製　品

1　口金状鉄製品（第122図１）

口径2.6cm・長さ6.3cmの円筒形を呈する口金状の部分に、長さ6.7cmの円錐形を呈した茎らしき部分が食い込んで噛み合った状態にあるもの。口金状の部分も茎状の部分も共に鉄板を丸く合わ



第122図　出土鉄製品(½)

せたもので、断面形は円形を呈している。しかし茎状のものは、口金状のものと嚙み合う部分から先端側の部分は、一辺が1.2cmほどとなる断面形が方形につくられている。全長7.5cm・幅3.0cm・重さ51.6ｇ。Ⅱ区Ｃ－２出土。

2　釘（第122図２・３）

２・３共に断面形が方形を呈する角釘であるが、２はやや扁平である。２の頭部は端部を叩いて平らにした後折り曲げている。３は端部を叩いて平らにした後、２とは逆方向に折り曲げて頭部をつくっている。２は脚部先端を欠く。現存長6.6cm・幅0.5cm・厚さ0.7cm・重さ8.6ｇ。Ⅰ区Ａ－８出土。３も脚部を欠損する。現存長5.8cm・幅0.6cm・厚さ0.5cm・重さ8.3ｇ。Ⅰ区Ｄ－33出土。

3　鉄鏃（第122図３）

鉄鏃の茎の破片である。現存長3.6cm。Ⅰ区Ｂ－０出土。　（鵜飼幸雄）

第14節　古　　銭

今回の調査に於いて古銭は開元通寶・寛永通寶の２種類２枚が出土した（第123図）。出土層位は第２層中よりで遺構に伴なうものではない。

１は唐銭の開元通寶である。鋳造は割合良好で書体もしっかりしている。

２は寛永通寶である。銅銭で鋳造は良好である。書体はしっかりしており、太字で「寶」字が貝とならない点などよりみて「古寛永」の部類に属すると思われる。

第123図　出土古銭(1/1.5)

１は中世貨銭、２は近世貨銭である。遺構・遺物が伴なわず散発的な出土であった。（守矢昌文）

第一表　土　壙　一　覧　表

〔規模・深さcm、(　)内は推定値〕

No.	分類	平面形規模	底面形規模	断面形深さ	土壙内の状態	出土遺物	重複関係	時期	備考
1	Ⅰ－a	不整円形 124×104	円形 102×96	方形・東側袋状 66	中央部に拳大から人頭大ほどの角・円・扁平礫を底部から開口部まで積み上げている。礫間の土層はローム粒を含む褐色土。	前期・中期・後期初頭土器片 黒曜石	2号に切られる。	後期初頭	
2		不整方形 (84)×74	不整形 (68)×50	皿状 14	東西の壁際から底部にかけて集石。		1号を切る。	古代以降？	
3		円形 102×90	円形 (86×80)	長方形 28	東壁下、底面に地山礫。土層は自然堆積を思わせない。 土層説明 1. ロームブロック。 2. 褐色土で小礫をあまり含まない。 3. 黒褐色で小礫を多く含む。	中期土器片 黒曜石	5号を切る。	中期後半 (曽利Ⅲ？)	
4		円形 74×67	円形 60×53	長方形 16	中央上面に一括土器と礫。 土層説明 1. 砂質黒褐色土。 2. 黄褐色土。	一括土器 土器片		中期初頭	
5		長楕円形 182×104	長楕円形 164×86	長方形 44	覆土中央から下部にかけての拳大の礫2個と土師器坏。 土層説明 1. ロームの小粒子褐色土。 2. ロームの小粒子を1層よりも多く含み、1層よりも黄色味の強い褐色土。 3. 黒褐色土。	土師器坏（第88図1）・土師・須恵・灰釉細片	3号住に切られる。	平安後期	
6		円形 220×(220)	円形 162×158	台形 72	中央西側覆土（第6層）中に拳大と人頭大の扁平礫からなる集石。	土師・須恵・灰釉・カワラケ・手捏ね坏・石製円板	4号住Aを切る。	平安後期	
7	Ⅰ－b	楕円形 80×64	楕円形 68×52	不整長方形 26	北壁際に角柱礫と小さな集石。 土層説明 1. 炭・ローム粒含褐色土。 2. 炭・ローム粒含黄褐色土。			後期初頭	
8	Ⅰ－b	円形 86×82	円形 70×64	長方形 36	覆土中に拳大の礫からなる小さな集石。	中期・後期初頭土器片		後期初頭	
9	Ⅰ－b	円形 80×76	円形 60×58	不整台形 44	覆土中に人頭大から拳大の礫による集石。				
10	Ⅱ	円形 64×60	円形 52×44	方形 42	覆土は自然堆積を思わせない。 土層説明 1. ローム粒少量混黒褐色土。 2. ローム粒混黄褐色土。		西側のピットを切る。		
11	Ⅱ	不整形 100×(100)	不整形 90×(92)	長方形 20	覆土に切り合い関係が認められる。 土層説明 1. ローム粒混入褐色土。 2. ローム多量混入黄褐色土。	後期初頭土器片	数基の重複	後期初頭	

No.	分類	平面形規模	底面形規模	断面形深さ	土壙内の状態	出土遺物	重複関係	時期	備考
12	II	楕円形 82×60	楕円形 60×44	台形 66	覆土はローム塊混りの黒褐色土1層、自然堆積を思わせない。	後期初頭土器片	北側ピットを切る。	後期初頭	
13	II	円形 62×56	円形 50×42	台形 48	覆土は自然堆積を思わせない。 土層説明 1. 黒褐色土。 2. ローム粒混入褐色土。 3. ローム多量混入褐色土。	中期末、後期初頭土器片		後時初頭	
14	I－f	円形 46×42	不整円形 30×28	不整方形 20	上面に人頭大の礫、覆土は自然堆積を思わせない。 土層説明 1. ローム粒混入褐色土。 2. ローム塊。	後期初頭土器片		後期初頭	
15	I－g	円形 62×60	円形 44×38	長台形 68	底面にB_4大の扁平な礫、覆土は1層（炭化物混入黒褐色土）で、自然堆積を思わせない。	中期末、後期初頭土器片		中期終末～後期初頭	
16	I－e	(楕円形) ?	(円形) (88)×62	(半円形) 40	拳大から人頭大の礫をぎっしりと詰めた状態。		8住に切られる。		
17	I－b	円形 58×56	円形 48×46	台形 38	中央上部に拳大の礫からなる小さな集石、覆土は1層（ローム塊混入褐色土）で、自然堆積を思わせる。	前期・中期末・後期初頭土器片		後期初頭	
18	I－g	隅丸方形 78×58	隅丸方形 64×44	台形 50	覆土中に拳大とA4大の扁平な礫。	中期末・後期初頭土器片・黒曜石		後期初頭	
19		円形 68×62	不整円形 40×38	半円形 28		中期初頭土器片		中期初頭(?)	
20	II	不整形 96×84	不整形 90×74	長方形 30		黒曜石			
21	I－b	円形 116×106	円形 90×80	長方形 42	覆土中に拳大の集石からなる小さな集石が2箇所。 土層説明 1. 黒褐色土(ローム粒・小礫の混入)。 2. ローム小ブロック、ローム粒含む黄黒褐色土。 3. ローム粒、小ブロック含む黄褐色土。			後期初頭	
22	II	円形 58×50	円形 42×34	台形 48			西側のピットを切る。		
23	I－g	円形 66×60	円形 56×48	方形 38	底面にB4大の扁平な礫2枚重ねる、礫下より骨片出土。	骨片	11号を切る。		
24	I－b	円形 112×112	円形 92×86	台形 60	覆土中に拳大・人頭大礫による集石、中央南側に一括土器。 土層説明 1. ローム小粒子混入黒褐色土。 2. ローム塊混入黒褐色土。 3. ローム多量混入黄褐色土。 4. 風化ロームに近い黄黒色土。	中期末・後期初頭土器片 中期末一括土器 黒曜石・石鏃	北側のピットを切る。	中期末～後期初	
25	I－a	円形 94×80	円形 66×60	台形 72	北壁側の覆土上部に人頭大の礫を積み、さらに大きな石を積み上げた大きな集石、底面より骨片出土、覆土は自然堆積を思わせない。 土層説明 1. ロームブロック含む黄褐色土。(粘性が強い) 2. 親指大のロームブロックや炭化物を含む黒褐色土。 3. ロームブロックを含まない黒褐色土。	中期末・後期初頭土器片	26号を切る。	後期初頭	

No.	分類	平面形規模	底面形規模	断面形深さ	土壙内の状態	出土遺物	重複関係	時期	備考
26	II	円形 84×72	円形 66×66	台形 64	覆土は自然堆積を思わせない 土層説明 4. 親指大以上のロームブロック、粒子を含み、2層よりも黄味の強い黄褐色土。 5. 2層とほぼ同質、同色の層。 6. 1層とほぼ同質、同様の層。	中期後半末・後期初頭土期片	25号に切られる。	後期初頭	
27	I－g	円形 82×68	円形 58×48	方形 40	覆土は自然堆積を思わせない。 土層説明 1. ロームブロック・ローム粒を含む黄色土。 2. 1層よりもロームブロックが少なく、黄味の弱い黄色土。 3. ローム粒・炭化物を含む黒褐色土。	中期末・後期初頭土器片		後期初頭	
28		隅丸方形 100×80	隅丸方形 82×64	台形 94	西壁際に坏と甕胴下部一括出土、一括土器際に炭化物。覆土は自然堆積を思わせない。	坏、甕(第88図2・3)	4号住A床下。	古墳後斯	
29 30 31 32	欠番								
33	I－b	楕円形 86×82	楕円形 68×46	台形 42	北壁際に人頭大の礫による集石、覆土中に人頭大の礫、覆土は自然堆積を思わせない。	中期末・後期初頭・中葉土器	10号住に切られる。	後期中葉	加曽利BI
34 A	I－b	円形 80×78	不整円形 60×50	台台形形 62	覆土中に拳大の礫7個からなる集石、覆土は一層（粘性のある黄褐色土）で自然堆積を思わせない。	中期末・後期初頭土器片 黒曜石	34号Bに切られる。	後期初頭	
34 B	I－f	楕円形 84×(70)	楕円形 70×(46)	長方形 34	覆土は一層(黒褐色)で、人頭大の礫を配す。		34号Aを切る。 37号に切られる。		
35	I－b	円形 100×90	円形 66×58	台形 50	東壁から南壁にかけての覆土中位に拳大礫の集石、覆土は1層で自然堆積を思わせない。		37号に切られる。		
36	I－g	楕円形 82×62	楕円形 60×42	長方形 32	覆土下部A3大の扁平な礫、礫下より骨片と土器片出土。	骨片、後期初頭・中葉土器片		後期初頭～後期中葉	加曽利BI
37	I－d	不整円形 92×72	楕円形 70×52	長方形 36	覆土下部に拳大の扁平な礫からなる集石、覆土は自然堆積を思わせない。		34号Bに切られる。		
38	II	円形 56×50	円形 34×32	方形 38		後期土器片			
39 A	II	楕円形 90×(70)	楕円形 76×(52)	長方形 30	覆土は自然堆積を思わせない、下部にピットが重なる。		39号Bに切られる。		
39 B	II	円形 98×96	円形 44×42	長台形 90	覆土は1層で自然堆積を思わせない。	中期末・後期初頭土器片	39号Aを切る。	後期初頭	
40	I－b	楕円形 110×(60)	楕円形 84×(44)	長方形 22	覆土は自然堆積を思わせない、覆土より骨片出土、北壁際に小さな集石。 土層説明 1. 炭化物、ロームブロックを含む、粘性のある黄褐色土。 2. 炭化物、ロームの小ブロック、ローム粒を含む黒褐色土。 3. 1層と同様であるが粘性がなくボソボソし	骨片、打石斧1、黒曜石片2、中期末・後期初頭土器片	溝2に切られる。	後期初頭	

No.		分類	平面形規模	底面形規模	断面形深さ	土壙内の状態	出土遺物	重複関係	時期	備考
						た層。 4　2層とほぼ似た層、内に含むロームの小ブロックが2層のものより若干大きく親指大を呈す。 5　硬い黄褐色土。				
41	A	Ⅰ－e	円形 74×64	円形 60×48	台集 76	拳大・人頭大の礫が底部から上面にかけてぎっしり詰っている。 土層説明 3　2層と同質であるが黄味が強い層。 4　小指大～親指大のロームブロックを多く含む	骨片・後期初頭・中葉土器片	41号B・Cを切る。	後期中葉	
	B	Ⅱ	円形 66×(60)	円形 44×(40)	台形 30	底部に土器。 土層説明 1　ローム粒を含む粘性のある黄褐色土。 2　ローム粒を含む褐色土。	後期土器片	41号A・溝2に切られる。	後期初頭～中葉	
	C	Ⅰ－b	円形 80×(68)	円形 46×(46)	台形 50	東壁際に集石、覆土より骨片出土。	骨片	41号Aに切られる。		
42		Ⅰ－b	円形 80×62	円形 46×46	長方形 34	覆土中央部に拳大の扁平な小礫による集石、覆土は自然堆積を思わせない、西側に小ピット。 土層説明 1　ローム粒・ロームブロックを含む黄褐色土。 2　ロームブロック粒・炭化物を含む黒褐色土。 3　ロームブロックを多く含む黄褐色土。	打石斧1、黒曜石中期末土器片	43号・44号に切られる。	中期末	出土土器に接合関係がみられ、ほぼ同時に設けられた可能性もある。
43		Ⅲ	円形 104×94	円形 90×90	長方形＋半円形 12　26	中央部に焼土を有する落ち込み（62×60）。焼土上面に集石、一段低い底部の1層より骨片出土。 土層説明 1　暗黄褐色土で焼土含有、炭化物を含む。 2　焼土。 3　加熱ローム。	骨片・中期末土器片	42号を切る。	中期末	
44		Ⅰ－g	円形 70×64	円形 54×52	台形 44	上面に扁平礫と角柱礫の集石。	黒曜石・中期末土器片、打石斧	42号・45号を切る。	中期末	
45		Ⅱ	（楕円形）	（円形）	（台形） 60	覆土上面にロームブロックが厚く堆積する、覆土は自然堆積を思わせない。	中期末土器片	44号・46号に切られる。	中期末	
46		Ⅰ－a	不整円形 106×100	不整円形 70×58	台形 92	東壁際から南壁際に人頭大の礫による集石、覆土は自然堆積を思わせない。	黒曜石、打石斧片中期末～後期初頭土器片	45号を切る。	中期末	
47		Ⅰ－b	円形 78×72	円形 54×54	台形 44	覆土中央部に人頭大の礫8個からなる集石、集石下から骨片出土。	骨片、後期初・中葉土器片		後期中葉	加曽利BⅠ
48		Ⅰ－b	円形 128×112	円形 118×100	長方形 20	東壁際に集石、底部中央に礫。				
49		Ⅰ－e	楕円形 98×80	楕円形 84×60	台形 40	拳大・人頭大の礫を詰める、上面にA4大の扁平礫、覆土より骨片出土。			後期中葉	加曽利BⅠ
50	A	Ⅰ－b	楕円形 66×52	楕円形 56×42	台形 60	中央部に拳大・人頭大礫からなる集石、第2層中より骨片出土。	骨片、中期末・後期初頭土器片	50号Bを切る。 東側ピットを切る。	後期初頭	
	B	Ⅱ	楕円形 82×(62)	楕円形 72×(42)	長方形 48		後期初頭土器片	50号Aに切られる。	後期初頭	

No.		分類	平面形規模	底面形規模	断面形深さ	土壙内の状態	出土遺物	重複関係	時期	備考
51		I－e	円形 80×78	円形 72×70	台形 94	拳大の礫を詰めた状態の集石、集石部の中程より腐食の進んだ石棒出土、2層はロームをブロック状に貼り付けた感のする層、3層には多量の栗の炭化物と木炭が底面まで遺存、また壁に接して骨片出土。 土層説明：2. ハリローム。 3. 炭化物混入黒色土。	石棒、栗炭化物、骨片、石鏃 後期初頭土器片		後期初頭	
52	A	I－e	円形 86×76	円形 68×58	長台形 104	プランの東側½ほどの6層を中心に5層まで、拳大から人頭大の礫を詰め込んだ状態に積み上げた集石。 土層説明：1. 黄褐色土。	後期初頭土器片	52号Bを切る。	後期初頭	
	B	I－b	円形 70×68	円形 54×48	台形 80	覆土中程に拳大から人頭大礫による集石、覆土は自然堆積を思わせない。	後期初頭土器片	52号Aに切られる。	後期初頭	
53		II	楕円形 50×42	楕円形 42×30	半円形 12	西壁寄りで底面から＋10cmで石錘出土。	石錘・後期初頭土器片		後期初頭	
54		I－g	円形 60×50	円形 38×36	台形 28	底面にA4大の扁平な礫、覆土は1層で自然堆積を思わせない、覆土より骨片出土。	骨片、石鏃2、後期初頭土器片		後期初頭	
55	A	II	楕円形 (120)×96	楕円形 (106)×80	台形 52	覆土は自然堆積を思わせない。	中期末～後期初頭土器片	55号B・Cに切られる。	中期末～後期初頭	
	B	I－b	円形 98×84	円形 80×66	台形 90	覆土下部に人頭大礫の集石、上面には人頭大礫とさらに大きな礫を配す、覆土は自然堆積を思わせない。	軽石製品、磨石斧 中期末～後期初頭土器片、黒曜石、凹石	55号A・Cを切る。	中期末～後期初頭	
	C	I－b	円形 60×50	円形 38×28	長台形 68	西壁際の覆土下部に拳大礫の小集石、覆土は自然堆積を思わせない。	中期末～後期初頭土器片	55号Bに切られる。 55号Aを切る。	中期末～後期初頭	
56		I－c	円形 132×124	円形 102×84	台形 60	中央部を取り囲む様に人頭大以下の50個程の礫を積み上げた集石が壁際をめぐる、集石下より炭化物が比較的多く出土。	後期初頭土器片、黒曜石	62号を切る。	後期初頭	
57		I－b	円形 54×52	円形 34×32	台形形 42	覆土中央部に拳大礫による集石、覆土は1層（ロームブロック・ローム粒を含む褐色土）で自然堆積を思わせない。	後期初頭土器片、黒曜石		後期初頭	
58	A	II	楕円形 54×40	楕円形 44×22	長台形 48	1層より骨片出土。 土層説明：1. 粘性のある褐色土。 2. 粘性のあるロームブロックを多量に含む黄褐色土。	骨片、後期初頭土器片、黒曜石	Bに切られる。	後期初頭	接近した時間関係
	B	II	不整円形 72×68	不整円形 62×60	長方形 30	覆土より栗炭化物と骨片出土。 土層説明：3. 粘性のあるロームブロックを多量に含む黄褐色土。	骨片、石錘、後期初頭土器片、土製円板	A・Cを切る。	後期初頭	
	C	II	円形 72×62	円形 56×54	長方形 40	覆土は自然堆積を思わせない、骨片出土。 土層説明：4 2層と似た層であり、ロームブロックが小さい。 5 ロームブロックを含まない黒褐色土。	骨片、石鏃 後期初頭土器片	Bと12住に切られる。	後期初頭	

No.		分類	平面形規模	底面形規模	断面形深さ	土壙内の状態	出土遺物	重複関係	時期	備考
59	A	II	円形 (70)×70	円形 46×42	台形 50	覆土は自然堆積を思わせない。	後期初頭土器片	重複関係明確に把握できない。	後期初頭	接近した時間関係
	B	I－f	円形 56×(50)	円形 46×(42)	台形 50	覆土は自然堆積を思わせない、底部に拳大の礫、覆土より比較的多くまとまって骨片出土。	骨片、後期初頭土器片、黒曜石、凹石		後期初頭	
	C	I－f	円形 (68)×62	円形 (46)×46	台形 32	覆土は自然堆積を思わせない、中央部に角柱礫、覆土より骨片比較的多く出土。	骨片			
60	A	II	楕円形 (92)×66	楕円形 68×50	台形 80	覆土は自然堆積を思わせない、骨片出土。	骨片、石鏃2、後期初頭土器片		後期初頭	
	B	II	楕円形 54×(40)	楕円形 42×(32)	長台形 98	覆土は自然堆積を思わせない。	後期初頭、中葉土器片		後期初頭～中葉	
61		I－c	円形 98×98	円形 86×68	長方形 40	中央部を取り囲む様に人頭大以下の礫による集石が壁際をめぐる、1層上位より骨片出土。 土層説明 1. 炭化物とローム粒を含む褐色土。 2. ローム粒とロームの小ブロックを含んだ黄褐色土。	骨片、後期初頭土器片、黒曜石	12住床下	後期初頭	
62		II	円形 80×64	円形 50×46	半円形 48	覆土は自然堆積を思わせない、2層より骨片出土。 土層説明 1. ロームブロックを多量に含む黄褐色土。 2. ロームブロック・ローム粒を含む褐色土。	骨片、後期初頭土器片、黒曜石	56号に切られる。	後期初頭	
63		I－d	円形	円形	台形	底部に人頭大の扁平礫による集石、覆土中にも扁平礫。 土層説明 1. ロームブロック・炭化物を含む褐色土。 2. 黄色土。	後期初頭土器片、黒曜石	12住床下	後期初頭	
64		II	円形 66×(66)	円形 58×54	長方形 22			10住旧柱穴に切られる。		
65	A	II	円形 106×(94)	円形 86×80	台形 56	覆土は自然堆積を思わせない。		10住床下、Bに切られる。		
	B	II	円形	円形 (80)×70	台形 74	覆土は自然堆積を思わせない。		10住床下、Bを切る。		
66		II	楕円形 70×60	楕円形 50×30	台形 36		打石斧片			小土壙3個の重複か？
67	A	I－g	楕円形 80×58	楕円形 62×42	台形 56	上面に拳大礫の集石、底部にA4大・B5大の扁平礫、礫間に石製品、覆土はローム粒混入黄褐色土で炭化物骨片出土、底部より骨片の出土多い。	骨片・石製品 後期初頭土器片	Bと68号を切る。	後期初頭	接近した時間関係
	B	II	楕円形 (80)×66	楕円形 (60)×54	長方形 30	覆土は自然堆積を思わせない。	後期初頭土器片	Cを切る。 Aに切られる。	後期初頭	
	C	II	楕円形 100×(80)	楕円形 90×(70)	長方形 20		後期初頭土器片	Bと66号に切られる。	後期初頭	
68		I－b	円形 90×86	円形 68×62	長台形 76	上面に人頭大以下の礫による集石、覆土中に礫を積み上げた状態の集石、覆土中程の集石部より磨石斧と焼土塊出土、覆土には炭化物が比較的多く、栗の炭化物もわずかに含む、骨片は1層に多い。	磨石斧、打石斧、石鏃、骨片、後器初頭土器片、栗炭化物、黒曜石（焼土	67号Aに切られる。	後期初頭	

No.		分類	平面形規模	底面形規模	断面形深さ	土壙内の状態	出土遺物	重複関係	時期	備考
						土層説明 1. ローム粒・炭・炭・混入褐色土。 2. 炭・骨片含黄褐色土。	塊)			
69			円形 104×102	円形 92×88	長方形 24	上面には一括完形土器、底面に人頭大扁平礫、覆土は自然堆積を思わせない。 土層説明 1. 炭混入黒褐色土。 2. ローム粒混入黒褐色土。 3. ローム塊混入黄黒色土 4. 黄黒色土。	一括完形土器（第94図)・中期初期土器片・黒曜石		中期初頭	
70	A	II	?	?	台形 42	覆土は自然堆積を思わせない。	石錘、後期初頭土器片、打石斧片、黒曜石	Bに切られる。	後期初頭	接近した時間関係
	B	I－b	円形 82×68	円形 56×50	台形 58	覆土上部に角柱礫、覆土中には人頭大以下の礫を積み上げた様な集石、覆土は自然堆積を思わせない。	後期初頭土器片、石鏃、凹石、磨石	A・Cを切る。	後期初頭	
	C	II	円形 (64)×58	円形 (44)×36	台形 60	覆土は自然堆積を思わせない。		Bに切られる。		
71	A	I－g	円形 80×70	円形 64×50	台形 80	覆土は自然堆積を思わせない。 土層説明 1. ローム粒子混入黄褐色土（ローム粒子を多量に含む褐色土で粘性強)。 2. ローム粒子混入褐色土（1層に比べロームの混入は少ない、内部に炭化物を含有する)。 3. 褐色土（1・2層に比べ、ローム粒子の混入が多い)。 4. 黄褐色（1層に比べ、ロームの混入は著しく色調は黄味をおび粘性が強い)。 5. 暗褐色土（全体的に黒っぽい色調で粘性が有る。内部に骨片を含む)。	骨片、後期初頭土器片	Bを切る。	後期初頭	接近した時間関係
	B	II	円形 (64)×60	円形 50×(50)	台形 60	覆土は自然堆積を思わせない。		Aに切られる。 Cを切る。		
	C	II	円形 (80)×(70)	円形 (60)×(50)	長方形 26			Bに切られる。		
72		II	円形 60×58	円形 46×38	長方形 28					
73		II	楕円形 78×60	楕円形 62×46	台形 36	底面と壁に地山石、1層底部より骨片出土。	中期末土器片		中期末(?)	
74			円形 142×118	円形 106×98	台形 41	覆土は3×6cm大のロームブロックに5～7cm大の礫を含む黒褐色土層。		19号住居址貼り床下。		II区1号土壙
75			円形 116×112	円形 84×81	台形 46	覆土は自然堆積を思わせる。 土層説明 1. ロームの小ブロック・ローム粒を含む黄褐色土。 2. ローム粒・炭化物を含む暗褐色土。 3. 黒色土。		31号住居址貼り床下。		II区2号土壙

No.	分類	平面形規模	底面形規模	断面形深さ	土壙内の状態	出土遺物	重複関係	時期	備考
76		円形 152×136	円形 102×94	台形 48	覆土はロームブロックをほとんど含まない、覆土は自然堆積と思われる。 土層説明 1. ローム粒を多く含む黄褐色土。 2. 褐色土。 3. 黒褐色土。		33号住居址を切る。		II区3号土壙
77		楕円形 128×104	楕円形 108×86	台形 44	覆土は自然堆積を思わせない。 土層説明 1. ロームブロックを多量に含む黄褐色土。 2. ローム粒を含み、ロームブロックをわずかに含む褐色土。 3. 2層と同質だが、2層よりも明るい褐色土。		33号住居址を切る。		II区4号土壙
78		楕円形 96×62	楕円形 48×42	台形 34	覆土は自然堆積を思わせない、下部に扁平な礫の一部。 土層説明 1. ロームブロック・ローム粒混りの褐色土。 2. 1と同質の内容だが、色調が黒色を呈す。		32号住居址を切る。		II区5号土壙
79		不整円形 94×88	不整円形 72×70	長方形 30	覆土は自然堆積を思わせない。 土層説明 1. ロームブロック片、焼土粒子混入褐色土。 2. ロームブロック混入褐色土。 3. 焼土ブロック。 1−A 1層に比べ焼土粒の含有率が高い。 4. 炭化物混入焼土。		36号住居址貼り床下。		II区6号土壙

第二表　古墳・平安時代土器法量一覧表

〔単位cm、(　)内は現存値〕

遺構	図版番号		種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
2住	第27図	1	土師器	坏	14.1	10.0	3.9)	口縁部1/6
		2	須恵器	〃	11.8	—	(3.7)	1/8
		3	土師器	鉢	16.6	—	(6.5)	口縁部1/3
		4	〃	甕	22.3	—	(5.8)	口縁部1/6
		5	〃	〃	19.4	—	(25.5)	胴上部
3住	第33図	1	土師器	皿	10.2	4.5	2.7	2/3
		2	〃	坏	11.8	4.6	4.2	3/4
		3	〃	〃	11.2	5.1	4.0	1/6
		4	〃	〃	—	4.3	(2.9)	口縁部欠損
		5	〃	〃	11.4	—	(3.1)	口縁部1/8
		6	〃	〃	11.3	5.7	3.0	2/3
		7	〃	〃	12.2	4.9	3.2	1/3
		8	〃	〃	13.2	—	(3.3)	口縁部1/6
		9	〃	〃	12.9	—	(3.6)	〃 1/8
		10	〃	〃	13.1	—	(3.6)	〃 1/6
		11	〃	〃	13.9	—	(4.0)	〃 1/6
		12	〃	〃	14.1	—	(3.7)	〃 1/8
		13	〃	〃	15.2	—	(4.0)	〃 1/4
		14	〃	高台坏	12.2	7.5	5.5	3/4
		15	〃	〃	—	5.1	(1.6)	底部のみ
		16	灰釉陶器	碗	13.1	—	(4.0)	口縁部1/8
		17	〃	〃	—	7.3	(2.7)	底部1/2
		18	土師器	甕	31.9	—	(15.5)	胴上部
4住	第36図	1	土師器	坏	14.4	7.1	4.7	完形
		2	〃	〃	12.8	6.3	4.5	1/3
		3	〃	〃	—	—	—	
		4	〃	〃	16.2	6.0	5.3	2/3
		5	須恵器	高台坏	12.8	9.2	3.8	1/3
		6	〃	〃	12.5	9.6	3.8	完形
		7	灰釉陶器	蓋	15.8	—	4.0	略完形
		8	須恵器	〃	20.4	—	(3.1)	1/4
		9	土師器	小形甕	11.0	8.5	9.5	完形
		10	〃	〃	13.4	—	(11.0)	胴部1/3
		11	〃	〃	12.5	—	(8.3)	〃 1/2
		12	〃	甕	23.5	—	(8.0)	口縁部1/2
		13	〃	〃	19.2	—	(17.8)	胴部1/2
5住	第40図	1	土師器	坏	10.2	4.2	3.8	略完形
		2	〃	〃	10.9	4.4	4.4	2/3
		3	〃	〃	11.6	6.2	3.5	3/4
		4	〃	〃	12.0	6.8	3.3	1/2
		5	〃	〃	11.6	5.2	4.0	2/3
		6	〃	高台坏	—	7.2	(2.0)	底部2/3
		7	〃	〃	11.6	6.8	5.7	3/4
		8	〃	〃	12.8	7.0	6.1	2/3
		9	〃	〃	—	6.9	(4.5)	口縁部欠損

遺　構	図版番号	種　別	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　考
	第40図 10	土師器	高台坏	12.6	5.9	4.9	⅔
	11	〃	〃	16.1	—	(5.2)	⅔
	12	〃	高台皿	13.2	—	(3.0)	¾
	13	〃	甑	—	5.9	2.9	底部½
	第42図 1	土師器	皿	9.7	3.9	2.3	½
6	2	〃	坏	10.6	—	(2.9)	⅕
	3	〃	〃	11.5	4.4	4.0	¼
	4	〃	高台坏	—	8.0	(2.3)	底部のみ
	5	〃	〃	—	7.7	(1.8)	〃
住	6	須恵器	蓋	13.8	—	(2.1)	⅔
	7	〃	〃	—	—	(2.3)	⅕
	8	灰釉陶器	碗	—	8.7	(4.3)	⅛
7	第45図 1	土師器	皿	—	—	1.8	底部のみ
住	2	〃	坏	14.3	—	3.5	⅛
	3	〃	〃	—	6.1	2.2	¼
	第48図 1	土師器	皿	8.9	4.3	2.7	⅔
	2	〃	高台皿	9.3	—	(3.4)	高台部欠損
8	3	〃	坏	12.5	5.2	4.4	⅔
	4	〃	〃	12.8	5.8	4.2	⅓
	5	〃	〃	13.1	6.1	4.9	完形
	6	〃	〃	—	5.7	(4.1)	½
	7	〃	〃	—	5.5	(2.8)	底部のみ
住	8	〃	〃	—	5.1	(1.9)	〃
	9	白磁	皿	12.4	—	(1.9)	口縁部⅓
	10	須恵器	甕	—	17.1	(12.5)	⅓
9	第49図 1	須恵器	坏	13.1	—	(3.9)	口縁部⅙
	2	土師器	〃	—	6.1	(2.2)	底部½
住	3	須恵器	蓋	12.0	—	(3.1)	¼
	第53図 1	土師器	坏	14.6	8.2	5.8	完形
	2	〃	〃	15.3	—	(4.8)	⅛
	3	〃	〃	—	7.6	(2.4)	底部¼
	4	〃	〃	13.0	8.8	(3.0)	完形
	5	須恵器	〃	12.5	6.8	4.0	〃
	6	〃	〃	12.6	6.7	3.7	½
10	7	〃	〃	12.6	6.9	4.0	⅓
	8	〃	〃	12.6	6.8	3.9	略完形
	9	〃	〃	13.0	7.0	3.8	¼
	10	〃	高台坏	11.6	8.5	3.9	⅓
	11	〃	〃	8.9	12.5	3.9	¼
	12	〃	〃	11.9	9.9	(2.7)	口縁部⅙
	13	〃	〃	15.9	8.8	5.7	⅛
	14	〃	〃	—	9.9	(3.1)	底部⅓
住	15	〃	〃	16.9	—	(4.9)	口縁部¼
	16	〃	蓋	17.6	—	4.1	略完形
	17	〃	〃	16.0	—	(3.2)	⅛
	18	〃	〃	16.3	—	(1.7)	口縁部⅙
	19	〃	〃	14.3	—	2.7	½
	20	〃	〃	13.8	—	1.6	口縁部⅙
	21	〃	〃	14.2	天井径7.5	2.3	¼

遺　構	図版番号	種　別	器　種種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　考
	第53図　22	須恵器	甕	17.9	—	(9.9)	胴部¼
	23	〃	小形甕	7.1	—	(6.6)	〃 ¼
	24	〃	甕	15.0	—	(13.3)	〃 ½
11　住	第29図	土師器	坏	14.4	4.8	3.6	完形
12　住	第55図	土師器	甕	23.1	—	(9.6)	口縁部⅓
14	第56図　1	土師器	坏	13.1	4.8	3.8	⅓
	2	須恵器	〃	13.4	—	(3.0)	口縁部⅙
	3	〃	〃	—	6.6	(1.9)	底部½
	4	〃	蓋	14.5	—	(2.4)	口縁部⅓
住	5	土師器	小形甕	11.9	—	(4.9)	〃 ⅙
	6	〃	甕	19.5	—	(5.0)	〃 ⅙
16	第58図　1	土師器	坏	9.8	5.6	(2.6)	⅓
	2	〃	〃	10.2	5.3	4.3	½
住	3	〃	〃	12.1	6.0	2.8	¾
23	第64図　1	土師器	皿	8.2	4.4	2.7	½
	2	〃	〃	8.3	2.9	2.1	略完形
住	3	〃	〃	8.4	3.9	2.2	½
	4	〃	〃	9.0	4.9	3.2	口縁部欠損
(II	5	〃	〃	8.8	4.4	2.2	½
区	6	〃	〃	9.3	4.6	2.3	½
7	7	〃	〃	8.4	5.3	1.4	¼
住)	8	〃	坏	12.3	5.5	3.8	¼
	9	〃	〃	13.1	6.1	3.9	⅔
	第66図　1	土師器	皿	8.1	4.1	2.4	⅔
	2	〃	〃	7.9	4.0	1.8	口縁部欠損
25	3	〃	〃	8.2	3.9	2.1	¼
	4	〃	〃	8.5	4.2	2.5	口縁部欠損
住	5	〃	〃	—	4.1	2.4	底部のみ
	6	〃	〃	—	4.3	(3.1)	〃
(II	7	〃	〃	—	5.2	(2.5)	〃
区	8	〃	高台皿	9.6	5.2	3.1	口縁部欠損
9	9	〃	〃	9.7	5.1	1.7	⅛
住)	10	〃	坏	14.0	5.9	5.2	½
	11	〃	坏	14.9	—	(3.8)	¼
	12	灰釉陶器	碗	—	8.0	(5.0)	底部のみ
	第67図　1	土師器	皿	10.0	4.9	2.6	⅓
	2	〃	〃	10.2	5.3	2.8	略完形
26	3	〃	〃	8.1	4.1	2.6	〃
	4	〃	〃	8.4	4.3	1.9	完形
住	5	〃	〃	9.4	4.7	1.8	略完形
	6	〃	〃	9.2	4.5	2.1	完形
(II	7	〃	高台皿	10.4	6.0	2.6	完形
区	8	〃	坏	14.1	5.4	3.8	¼
10	9	〃	高台坏	11.9	—	(5.1)	⅔
住)	10	〃	〃	—	8.3	(4.0)	底部⅔
	11	灰釉陶器	鉢	33.0	—	(8.6)	⅕
	12	土師器	〃	22.6	9.5	7.5	⅓

遺構	図版番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
II11区住27住	第69図 1	須恵器	坏	13.7	—	2.2	口縁部¼
	2	〃	〃	—	8.8	(1.5)	底部のみ
	3	〃	蓋	15.3	—	(2.3)	口縁部⅛
II13区住29住	第71図 1	土師器	坏	17.2	7.6	5.3	完形
	2	須恵器	〃	12.5	7.0	4.0	完形
	3	土師器	小形甕	14.7	—	15.2	胴部¼
II14区住30住	第73図 1	土師器	皿	8.9	4.3	2.1	¼
	2	〃	坏	14.4	6.0	4.3	⅓
31住(II区15住)	第75図 1	土師器	皿	8.7	3.6	2.5	略完形
	2	〃	〃	—	6.7	(3.4)	高台部のみ
	3	〃	〃	8.6	3.9	2.2	略完形
	4	〃	〃	7.7	4.5	1.2	完形
	5	〃	坏	14.2	5.6	5.1	⅓
	6	〃	〃	12.6	5.3	4.9	½
34住(II区18住)	第78図	須恵器	坏	11.4	6.9	3.7	完形
35住(II区19住)	第80図 1	土師器	皿	10.8	4.2	2.4	¾
	2	〃	〃	10.3	5.0	2.3	略完形
	3	〃	〃	10.6	5.3	2.1	¾
	4	〃	〃	10.3	4.6	2.1	⅓
	5	〃	〃	10.5	5.2	2.0	⅔
	6	〃	〃	8.0	3.0	1.8	¼
	7	〃	〃	9.9	4.9	1.8	⅙
	8	〃	〃	9.6	4.7	1.6	略完形
	9	〃	〃	8.7	2.7	1.4	⅙
	10	〃	高台皿	—	4.4	(2.4)	底部¾
	11	〃	〃	—	4.8	(2.7)	口縁部欠損
	12	〃	〃	11.5	5.6	2.7	⅙
	13	〃	坏	7.3	5.4	4.2	¼
	14	〃	〃	—	6.7	(2.7)	口縁部欠損
	15	〃	高台坏	—	6.7	(2.8)	〃
	16	〃	〃	13.5	—	(3.4)	口縁部⅓
	17	灰釉陶器	碗	12.0	5.7	4.2	⅙
	18	〃	〃	15.0	7.0	5.8	½
I区土壙 5号	第88図 1	土師器	坏	—	6.6	3.7	口縁部欠損
28号	2	〃	〃	14.6	4.8	3.5	完形
〃	3	〃	甕	—	7.8	9.9	½

第三表　出　土　石　器　一　覧　表

〔単位cmおよびg，(　)内は現存値〕

挿図番号	自然面	出土区	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	形状	刃部形状	欠損	側縁・刃部	備考
第104図							108.3						
1	節理	32住	打製石斧	11.4	5.1	1.5	(91.0)	粘板岩	I	円刃		スレ	
2	節理	II区　A-26	〃	11.1	(5.1)	1.1	(70.5)	〃	I	直刃	刃部欠		
3		1住	〃	(11.2)	4.9	0.9	149.7	石墨滑石片岩	I	〃	基部欠		
4		I区　B-4	〃	10.1	5.3	1.9	(123.0)	緑泥片岩	I	円刃	刃部欠	ツブレ・スレ	
5	節理	5住カマド	〃	13.0	(5.0)	1.3	164.5	含緑泥石石墨片岩	I	直刃	〃	ツブレ	
6	礫面	I区　C-42	〃	10.5	4.4	2.4	105.2	緑簾片岩	I	円刃		ツブレ	
7		I区　C-7	〃	9.4	4.3	1.9	34.5	御荷鉾緑色岩	I	偏刃		ツブレ	
8	礫面	40土壙	〃	8.7	3.3	0.7	63.6	〃	I	〃		スレ	
9	〃	42土壙	〃	9.2	3.3	1.1	63.6	滑石石墨片岩	I	直刃		ツブレ	
10	節理	I区　D-35	〃	15.3	6.7	1.3	192.8	緑簾片岩	III	円刃		ツブレ・スレ	
11	礫面	44土壙	〃	11.9	6.7	2.6	218.6	硬砂岩	II	直刃		ツブレ	
12	節理	5住カマド	〃	14.4	6.4	2.1	195.2	石墨緑泥片岩	II	円刃		ツブレ・スレ	
13	礫面	I区　C-5	〃	10.4	3.8	1.0	50.7	緑簾片岩	I	〃			
14	節理	I区　D-32	〃	8.4	4.9	2.4	110.9	石墨片岩	II	〃		ツブレ	
15	〃	1住	〃	8.3	4.4	0.9	37.0	滑石片岩	II	〃			
16		I区　C-34	〃	7.9	4.5	1.1	47.2	緑簾片岩	II	偏刃	側縁欠	スレ	
17		II区　D-21	〃	8.7	4.0	0.9	41.7	〃	II	円刃			
第105図													
1	礫面	I区　B-25	打製石斧	10.3	5.4	1.1	119.5	御荷鉾緑色岩	II	円刃		スレ	
2	〃	I区　C-8	〃	9.6	4.8	2.1	103.8	緑簾滑石片岩	II	〃			
3		10住	〃	7.6	6.6	1.6	117.0	硬砂岩					
4	節理	22住	〃	9.0	6.2	1.2	115.9	緑簾片岩				ツブレ	
5	〃	I区　D-3	〃	(10.5)	(5.3)	2.1	(158.8)	御荷鉾緑色岩	I	円刃	基部欠	ツブレ	
6	礫面	68土壙	〃	(8.2)	5.9	1.7	(149.5)	緑簾片岩	II	〃	〃	ツブレ・スレ	
7	〃	I区　C-10	〃	(10.0)	(3.8)	(0.7)	(36.6)	〃	I		側縁裏欠		
8		I区　C-6	〃	(5.1)	(3.2)	(1.1)	(25.7)	〃			基部欠		
9		I区　C-1	〃	(7.8)	(4.0)	(1.1)	(41.7)	御荷鉾緑色岩	III		刃部・基部欠		

挿図番号	自然面	出土区	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	形状	刃部形状	欠損	側縁・刃部	備考
10	節理	I区 ア-40	打製石斧	(8.0)	(5.3)	(1.4)	(73.8)	砂質粘板岩	II		刃部欠		
11		II区 A-27	〃	(5.2)	(5.5)	(0.7)	(26.2)	石墨滑石岩	I		〃		
12	礫面	I区454 D-3	〃	(6.3)	(4.6)	(1.3)	(56.0)	粘板岩	II		〃		
13	〃	I区 B-6	〃	(5.6)	(4.2)	(1.0)	(26.7)	硬砂岩	I		刃部・基部・裏欠		
14	節理	46土壙	〃	(7.0)	(3.8)	(0.6)	(25.8)	石墨片岩	II		刃部欠		
15	〃	I区 B-9	〃	(5.6)	(4.3)	(0.7)	(43.8)	〃	I		〃		
16	〃	I区B-D27-29	〃	(6.1)	(4.0)	(0.9)	(28.9)	緑簾片岩	II		〃		
17	礫面	I区 A-5	〃	(7.7)	(4.2)	(1.7)	(67.7)	石墨片岩	II		〃	ツブレ・スレ	
18	節理	II区 B-27	〃	(6.5)	(4.3)	0.5	(32.3)	含緑簾石石墨片岩	I		〃	ツブレ	
19	礫面	I区 C-4	〃	(5.6)	(4.4)	(0.9)	(33.2)	石墨片岩	I		刃部・基部欠		
20	節理	I区 A-7	〃	(8.3)	(5.5)	(1.4)	(84.5)	御荷鉾緑色岩	II		刃部欠	ツブレ	
21	〃	I区 C-7	〃	(6.5)	(5.5)	(0.8)	(37.3)	緑簾片岩	II		刃部・基部欠		
22	〃	3住	〃	(7.2)	(5.2)	(0.5)	(28.2)	緑簾片岩	II		〃		
第106図													
1		33住	乳棒状磨製石斧	(13.5)	(4.8)	(3.4)	(345.5)	御荷鉾緑色岩			刃部欠		
2		68土壙	定角磨製石斧	8.6	5.1	2.7	207.5	石英安山岩			〃	ツブレ	スス付着
3		36住	〃	7.9	(4.1)	1.5	(90.2)	緑泥石石英片山岩			〃		
4		55土壙 55土	〃	(6.3)	5.2	1.2	(74.0)	石英片岩			基部欠		
5		24住	〃	(11.1)	(6.0)	2.2	(302.9)	緑泥石緑簾片岩			〃		埋蔵No.3
6		24住	〃	7.0	3.5	1.4	74.6	御荷鉾緑色岩			〃		〃 No.1
7		6住	〃	(5.5)	(3.0)	(1.3)	(36.2)	〃			刃部欠		
8		I区 C-34	磨製石器	(8.3)	4.0	(0.8)	(45.0)	〃			側縁欠		
9		I区 C-5	定角磨製石斧	(4.3)	(4.4)	(1.7)	(55.8)	石墨片岩			〃		
10		I区 A-5	〃	6.1	3.5	1.0	38.7	輝緑疑灰岩？					
11		24住	磨製石器	(3.8)	(2.2)	0.5	((8.0)	粘板岩					
12		32住	石匙	5.7	8.4	1.1	62.0	滑石片岩					
13		II区 D-18	〃	5.0	10.7	1.7	88.2	硬砂岩					
14		32住	横刃石器	(3.9)	(8.7)	(0.7)	(27.0)	滑石片岩					
15		4住	〃	5.0	10.6	1.2	18.9	御荷鉾緑色岩					
16		13住	〃	2.5	11.7	0.9	39.0	緑泥片岩					

挿図番号	凹部	出土区	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	形状	備考	
第107図											
1	両	59土壙	凹石	15.0	7.5	3.3	638.0	含角閃石複輝石安山岩	I		
2	両	32住	〃	16.0	9.1	5.4	1158.8	〃	I		
3	両	55土壙	〃	15.6	8.1	4.8	901.0	〃	I		
4		27住	〃	13.4	6.9	4.4	541.2	〃	I	側タタキ(片)	
5	両	22住	〃	12.5	5.8	3.3	375.0	〃	I	末端タタキ	
6		I区B-D27-29	〃	10.4	9.9	5.0	689.0	〃	I	片側欠	
第108図											
1	両	24住	凹石	.1	7.2	4.5	820.0	含角閃石複輝石安山岩	I		
2		I区 C-34	〃	17.1	9.4	3.2	432.0	〃	I		
3		〃	〃	11.2	6.8	3.2	344.0	〃	I		欠
4		36住	〃	11.8	8.5	3.8	486.7	〃	I	側タタキ	
5		I区 D-32	〃	11.7	7.8	4.1	331.2	〃	I		
6		11住	〃	8.1	6.9	4.6	348.7	〃	II		
第109図				9.							
1		24住	凹石	10.2	7.4	5.3	549.7	含角閃石複輝石安山岩	I	側スス	両端欠
2		I区 A-3	〃	8.6	6.8	4.1	100.0	〃	I		両端欠
3		I区 D-34	〃	8.3	5.4	2.6	174.2	〃	II		
4		16住	〃	8.4	7.1	4.4	357.0	〃	II	片スリ	両端側縁タタキ
5		I区 C-42	〃	12.1	9.5	5.7	898.6	〃	II	全スリ	側タタキ
6		II区 C-22	〃	10.8	8.1	3.6	474.5	〃	II	全スリ	
第110図											
1	両	18住	凹石	11.8	7.9	3.9	534.5	含角閃石複輝石安山岩	I	全スリ	側縁にスス状炭化物附着
2		70土壙B	〃	11.4	7.4	5.1	677.5	〃	II	両面スリ	側・裏にスス状炭化物附着
3		31土壙	〃	12.5	5.8	3.1	313.6	〃	II	全スリ	
4	両	I区 A-41	〃	10.9	7.4	4.8	615.5	〃	I	両面スリ	
5		I区 C-34	〃	11.2	6.9	4.5	534.0	〃	I	片スリ	
6		I区 C-5	〃	11.0	7.2	4.9	580.2	〃	I	片スリ	
第111図											
1	両	13住No.5	凹石	10.8	8.5	5.3	633.0	石英粗面岩	II		端にタタキあり

挿図番号	凹部	出土区	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	形状	備考
2		13住	凹石	11.1	8.5	5.6	575.5	含角閃石複輝石安山岩	II	
3	両	I区 C-34	〃	9.8	7.5	4.8	447.2	〃	II	欠
4		I区 B-35	〃	15.8	7.7	3.4	600.5	〃	II	
5		I区 D-33	〃	12.0	9.1	3.6	420.5	〃	II	
6	両	〃	〃	7.6	7.1	5.9	327.5	〃	II	
第112図									I	全スリ
1		4住Pit3	凹石	(6.0)	7.2	5.1	(346.9)	含角閃石複輝石安山岩	II	全スリ 1/2欠
2		13住	〃	8.8	8.6	6.2	701.2	〃		全スリ
3		70土壙B	〃	7.4	6.7	5.4	269.4	〃		片スリ 1/2欠
4		I区 C-42	〃	10.5	7.6	4.6	138.5	〃		片スリ
5		18住	〃	9.7	5.8	3.5	254.8	〃	II	両端欠
6		I区 A-1	〃	10.2	8.7	6.2	643.0	〃	II	
7		13住	〃	12.4	8.4	5.3	708.9	〃	II	片スリ 両端側縁タタキ
第113図										
1		13住	凹石	9.9	7.8	4.0	318.7	含角閃石複輝石安山岩	II	
2		11住	〃	9.6	8.8	5.2	582.8	〃	II	
3		4住	〃	10.7	7.1	4.7	407.5	〃	II	
4	片	22住	〃	9.0	8.8	5.4	480.0	〃	II	
5	片	I区 C-42	〃	10.6	7.2	4.8	443.5	〃	II	末端タタキ
6	片	1住	〃	11.0	7.5	4.8	469.2	〃	II	
7	片	32土壙	〃	11.2	8.7	6.3	675.0	〃	II	
8	片	8住	〃	14.1	6.2	3.8	505.7	〃	I	
9	片	I区 C-2	〃	13.1	5.5	4.4	480.7	〃	I	
第114図										
1	片	4住	凹石	11.3	8.0	3.2	455.0	含角閃石複輝石安山岩	II	
2		4住	〃	8.2	6.3	3.3	186.9	〃	I	
3	片	I区 C-34	〃	(10.3)	6.1	3.4	(414.5)	〃	I	
4		I区 C-5	〃	8.3	5.8	3.5	286.0	〃	I	
5		I区 A-10	〃	10.7	3.1	3.5	187.6	〃		両端にタタキによるスレ

挿図番号	凹部	出土区	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
第115図									
1		Ⅰ区 C-34	石錘	9.2	3.8	2.0	111.8	御荷鉾緑色岩	縦長で両端より欠
2		4住覆土	〃	5.0	3.2	1.5	31.0	細粒砂岩	〃
3		Ⅰ区 C-4	〃	4.8	4.4	1.4	42.7	輝石岩	片面より打欠
4		70土壙A	〃	4.6	3.8	2.1	49.5	輝石安山岩	両面より打欠
5		58土壙B	〃	5.7	4.8	2.3	83.2	〃	〃
6		4住	〃	6.3	5.2	1.7	73.7	輝石	〃
7		Ⅰ区 C-37	〃	6.6	5.0	2.4	102.8	輝石安山岩	片面より打欠
8		Ⅰ区 A-1	〃	5.9	6.1	2.0	94.3	〃	〃
9		Ⅰ区 B-1	〃	7.5	6.7	1.7	141.2	輝石	両面より打欠
10		4住	〃	7.6	5.2	3.1	183.5	〃	片面より打欠
第116図									
1		24住	石棒	110.4	24.0	15.6	69200.0	角閃石複輝石安山岩	
2		1住	〃	32.4	12.6	22.4	10400.0	〃	支脚に再利用
3		Ⅰ区 C-32	〃	13.8	4.6	3.5	382.0	石墨片岩	
4		Ⅰ区 C-32	〃	23.8	5.1	6.7	4600.0	複輝石安山岩	
5		23住	石製品	8.9	4.6	4.3	173.2	輝石安山岩	
6		67土壙A	〃				31.7	安山岩質浮石	
第117図									
1		Ⅱ区 E-9	石鏃	(3.4)	(1.4)	0.4	(1.2)	黒曜石	
2		24土壙	〃	2.6	1.6	0.3	1.0	〃	
3		21住	〃	(2.1)	2.1	0.5	(1.5)	〃	
4		70土壙B	〃	1.9	1.2	0.3	0.5	〃	
5		Ⅰ区 D-6	〃	(1.3)	(1.2)	0.2	(0.5)	〃	
6		Ⅰ区454 D-4	〃	1.8	(1.7)	0.4	(0.7)	〃	
7		Ⅰ区 A-10	〃	2.1	(1.5)	0.4	(1.2)	〃	
8		33土壙	〃	(1.6)	1.6	0.3	(0.7)	〃	
9		24住	〃	2.2	1.5	0.2	0.7	〃	
10		51土壙	〃	1.9	(1.5)	0.4	(0.6)	〃	
11		Ⅰ区 CD-1	〃	1.5	1.2	0.2	0.7	〃	

挿図番号	凹部	出土区	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
12		24住	石鏃	1.8	1.2	0.4	0.7	黒曜石	
13		Ⅰ区 C-5	〃	1.5	1.2	0.2	0.3	〃	
14		32住	〃	(2.1)	(1.6)	0.6	(1.5)	〃	
15		Ⅰ区 C-37	〃	1.4	1.2	0.3	0.4	〃	
16		Ⅰ区 ア-1	〃	2.0	(1.7)	0.5	(1.3)	〃	
17		Ⅰ区 B-35	〃	2.0	1.6	0.3	0.8	〃	
18		68土壙	〃	2.0	1.4	0.5	1.8	〃	
19		60土壙	〃	2.0	1.5	0.2	0.8	〃	
20		Ⅰ区 C-8	〃	1.7	1.5	0.4	0.5	〃	
21		49土壙	〃	1.5	1.5	0.3	0.6	〃	
22		33土壙	〃	1.8	1.9	0.3	1.8	〃	
23		49土壙	〃	1.9	1.4	0.7	1.7	〃	
24		55土壙	〃	2.1	1.4	0.5	1.6	〃	
25		Ⅰ区 C-5	〃	2.3	1.3	0.4	1.4	〃	
26		24住	〃	2.2	1.5	0.5	1.2	〃	
27		Ⅰ区454 D-2	〃	2.8	1.4	0.3	1.4	〃	
第118図									
1		10住	剥片石器	3.6	5.3	1.1	22.0	黒曜石	自然面両面残
2		Ⅰ区 454 C-4	〃	3.1	1.2	0.7	3.5	〃	両極打法による
3		24住	〃	1.7	2.6	0.9	4.0	〃	
4		11住	〃	1.9	1.8	0.4	1.5	〃	基部を折断
5		Ⅰ区 A-42	〃	2.0	1.1	0.4	1.2	〃	自然面残、打面調整
6		Ⅱ区 B-29	〃	1.3	3.2	0.7	3.3	〃	
7		Ⅰ区454 D-3	〃	1.9	3.2	0.7	3.8	〃	
8		Ⅰ区 C-6	〃	2.7	1.4	0.8	3.0	〃	自然面両残
9		Ⅰ区 C-5	両極打法による石器群	2.3	1.0	0.8	0.8	〃	剥片状(スポール)
10		Ⅰ区454 D-3	〃	2.7	1.4	0.9	3.2	〃	〃 自然面残
11		Ⅰ区 C-34	〃	2.2	1.4	0.7	2.3	〃	〃 〃
12		Ⅰ区 C-1 454	〃	2.5	1.4	0.6	2.2	〃	〃

挿図番号	自然面	出　土　区	種　　別	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　　材	備　　考
第119図		Ⅰ区　　C							
1		Ⅰ区　　C-5	両極打法による石器群	2.0	1.6	0.5	2.3	黒曜石	楔　状
2		10住覆土	〃	1.4	0.9	0.3	0.5	〃	〃　　自然面有
3		Ⅰ区　　Z	〃	1.9	2.4	0.4	2.5	〃	〃
4		Ⅰ区　　C-3	〃	2.0	2.0	0.8	2.8	〃	〃
5		3住覆土	〃	2.1	1.5	0.7	2.7	〃	〃
6		Ⅰ区　　A-10	〃	1.8	1.5	0.4	1.8	〃	〃　　自然面有、裁断面有
7		Ⅰ区　　C-42	〃	2.0	3.0	0.1	3.9	〃	〃　　〃　　〃　？
8		10住	〃	2.6	1.6	1.2	5.8	〃	〃　　〃　　〃
9		Ⅰ区　　D-35	〃	2.3	1.0	1.0	2.5	〃	片　刃　　〃
10		Ⅰ区　　B-34	〃	7.8	1.2	0.7	2.0	〃	〃　　自然面有　　〃
11		Ⅰ区454　　D-2	〃	1.8	1.7	0.5	1.9	〃	〃　　〃　　裁断面有
12		10住覆土	〃	2.5	1.8	0.7	4.2	〃	〃　　〃
13		4住覆土	〃	1.9	2.1	0.7	4.3	〃	〃　　〃　　裁断面有
14		Ⅰ区　　A-0	〃	2.8	1.3	0.8	4.7	〃	〃　　〃
15		Ⅰ区　　11住	〃	1.5	1.3	0.4	1.3	〃	〃
第82図		35住	ス　リ　石	20.7	6.0	4.3	999.7	御荷鉾緑色岩	片スリ、末端タタキ
第30図		11住	〃	15.4	10.3	3.6	2900.0		
第43図		6住	〃	53.0	35.0	23.8	4500.0		
第37図		4住覆土	〃	10.7	9.2	8.3	921.3	輝石安山岩	片端にタタキ、全体スリ

第Ⅴ章　調査の成果と課題

第１節　石鏃について

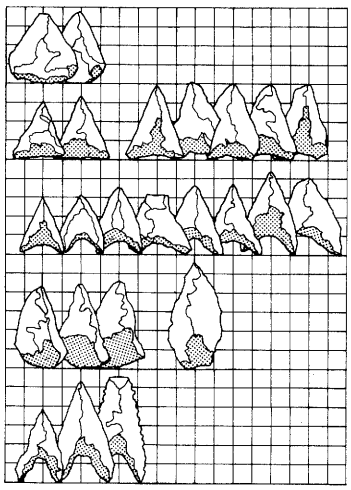
今回の調査に於いて出土した黒曜石による石器・剥片・砕片は536点であった。この内石器は53点で、90％以上が石器製作に関わる剥片・砕片類である。石器で主体をなすものは石鏃であり、これについて若干の分析を加えてみたい。

出土した石鏃はチャート製のものも含めて27点が出土している。これらは第Ⅳ章第10節でも述べたように基本的には３分類が可能である。この分類した形と機能が如何に関連をもつものか考えてみたい。

１　平面形状と基部の関係について

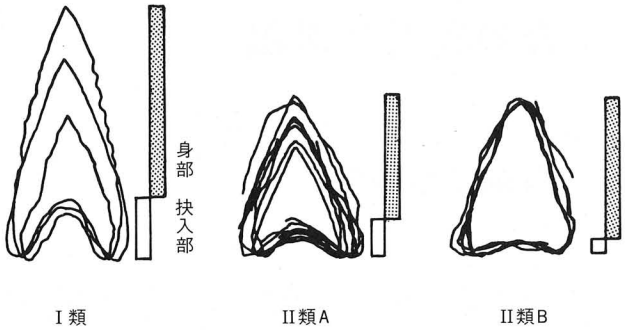
石鏃を分類する際に基本となるものは、従来より平面形状によるものである。その際に基部の形状が重要な意味をもち、基本的には凸基・凹基・平基などの分類がなされている。この分類に従うと今回の調査に於いては凸基のものはみられず、凹基・平基が基本となった。尚、主体を占めるものは凹基で、Ⅰ類、Ⅱ類に分けられた。この凹基について、まずその有り方を考えてみたい。

凹基の石鏃に着柄した場合、所謂脚の部分は逆刺としての機能を果すものである。この逆刺が鋭く彎曲して長いほど、逆刺としての機能は増大したものと思われ、Ⅰ類のものがこの部類に属する。この類の基部に施されている調整は、他のものと比較すると丹念で細かなものであり、全長の約３分の１まで抉り込んでいる。この抉り込みの角度は鋭角を呈する。平面形状は身部の長いもので、全体形はスマートな感を受け、二等辺三角形を基本とする。また、先端部の形状も鋭利であり、抉り込みの最も深い位置と先端部はほぼ直線をなす。



第124図　平面形状と基部の関係

Ⅱ類の場合はⅠ類に比べ抉り込みが顕著でないもので、Ⅰ類がＶ字形の抉り込みであるのに対し、Ⅱ類はＵ字形のものである。抉り込みの調整はⅠ類に比べ雑で、第１次の抉り込みを作り出す大きな調整剥離を残すものが多く、第117図9のように成形剥離を残すものもある。平面形状はⅠ類に比べ身部の短かいもので全体形が正三角形を基本とする。先端部の形状はⅠ類に比べ鈍角を呈しており、抉り込みの最深部と先



第125図　平面形状と抉り込みの関係

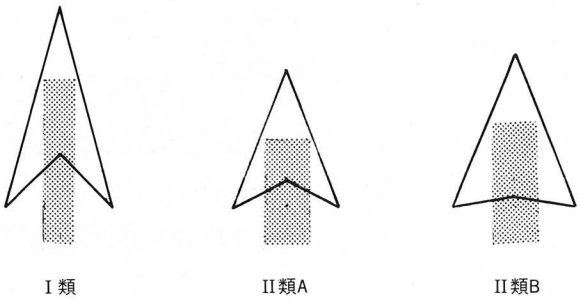
端部は若干のずれがあり、ばらつきが見られる。

Ⅱ類は抉り込みが浅いもので一括したわけであるが、抉り込みの状態には2種類のものがありA・Bに分類が可能である。AはⅡ類内でも抉り込みの深いもので、脚部の先端が割合鋭利なものである。BはAに比べ抉り込みが発達しないものである。これらを平面形状よりみると、Aは割合整った三角形を呈するが、Bは不整形で左右が対称でないものが多い。また、調整もAに比べ雑で、特に先端部に於ける調整はその傾向を示す。以上のことより考えるとBはAの調整段階の進んでいないものとして捉えられようか。

2　平面形状と着柄の関係について

石鏃は従来矢の先端部に装着され機能したものである。石鏃の矢柄への装着については、無茎の場合基本的には柄部に石鏃を挟む形をとる。この着柄がどのように平面形状と関係があったかについて考えてみたい。まず、石鏃で着柄に関わる部分について考えると、柄が付いた位置は石鏃のほぼ中央である。この部分をみた場合自然面及び素材剥片の主要剥離面を残しているものが数点あり、意識的にそうした部分を残しているものもみられた。このような石鏃の場合その断面は中央部が扁平になる。

装着と抉りの関係は前項でも述べたが逆刺としての機能との関わりにより重要である。前項に於いて分類したⅠ類・Ⅱ類についての着柄について考えると、Ⅰ類の場合身部の幅が狭く長いために着柄の部分もそのように限定されてくる。着柄部は第126図の示すように身部の3分の2ほどがその範囲に当たる。Ⅱ類の場合は身部の幅がⅠ類に比べ広いが長さは短い。着柄部はやはり身部の3分の2ほどがその範囲に当たる。これらのことより考えるとⅠ類のように身部が長いものは、その身部を折れより保護すべく着柄も考慮されていたのではないかと考えられる。欠損部と着柄は密接な関係をもっているように思われ、欠損部が先端部・脚部に集中するのは着柄によって保護されていない部分、つまり機能部に欠損部が集中するものと捉えることができる。



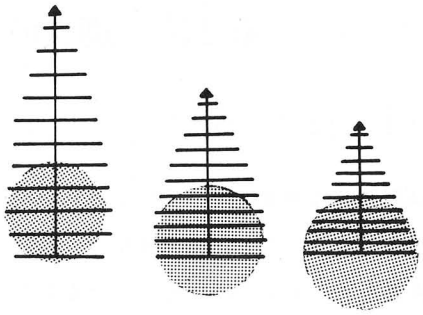
第126図　平面形状と着柄の関係

平面形状と着柄の関係は、平面形の差が直接的に着柄のし方等とは関わりを有するものでない

が、逆刺に想定される脚部とは密接な関係をもっていたと考えられる。

3　石鏃の機能について

石鏃は矢として機能を有する狩猟用具である。矢が回転しながら貫入するとその平面形状差により、どのように貫入孔の大きさに変化が生じるかについて示すために第127図を作成した。尚、この際に各種より１点ずつ（第117図１・９・20）を任意に抽出した。仮りに無茎凹基Ⅰ類をＡ、無茎凹基Ⅱ類をＢ、無茎平茎をＣとする。



第127図　平面形状別による貫入孔の差

Ａは貫入孔がしだいに開くもので、先端部より５分の４に達して最大径となる。先端部は鋭利で長さは最も長い。ＢはＡに比べ最大径をもつ位置が先端部に近く、目的物に貫入すると割合大きめの貫入孔があき、最大径となる過程が早い。ＣはＢと同じ様相を示すが、貫入孔の最大径をもつ位置は先端部と最も近い。この貫入孔のあき方については、先端部と側縁部形状に最も近密な関係をもつ。この結果よりみると、Ａの貫入孔のなす頂角は鋭角のもので、Ｂ・Ｃの貫入孔のなす頂角はＡに比べ鈍角であり、この二通りに分類できた。そうするとＡは深く鋭く目的物にささるもの、Ｂ・Ｃは目的物への貫入は深くはないが穴は大きなものである。形状と空気抵抗との関連を考えると、Ａはみるからにスマートで空気抵抗の少なそうなもので、Ｂ・ＣはＡに比べ基部が張る傾向を示し空気抵抗はＡに比べ大きいと思われる。尚、空気抵抗と直接関わるものとして先端部角度が重要であり、石鏃基部の開き方が空気抵抗を左右すると思われる。これらのことより考えると、Ａは所謂遠矢的な性格を有していたのではないかと思われ、Ｂ・Ｃなどは近距離用に用いたと思われる。このようにある程度平面形と機能とは密接な関係をもち、目的対象物により矢は使いわけされていたとも考えられる。

4　ま　と　め

以上石鏃について各属性より機能を窺ったが、今回資料として用いたものは点数も少なく所属時期も不確定なもので、良好な資料ではない。しかし、形状分類を行いある程度の群の把握とそれに関わる機能差を窺えた。今回は触れなかったが、石鏃の完成品が消費されず遺跡内に残されている問題等、この石器については数多くの問題を内在しているように思える。今後単に形状分類だけに止まらず実験、製作法の検討等を通じ、当時の狩猟活動の一端でも把握できればと思っている。

（守矢昌文）

第２節　縄文時代中期の高部遺跡の様相

１　はじめに

高部遺跡は湖盆に向って広がる長軸規模の比較的大きい扇状地に位置する。扇状地内の地形は河川の氾濫等により一様ではなく、部分的に小規模な台地地形等が形成されている。今回は調査の性格上、この扇状地全面にわたるものでなく、集落全体におよぶ把握には至らなかった。

今回の調査により縄文中期全般の遺物が検出され、遺構も住居址10軒、屋外埋甕２基を検出した。尚、平安時代の遺構の重複により、多くの縄文時代の遺構は攪乱されており、構造が適確に把握し得たものは少ない。遺構の内訳は、住居址では中期初頭２軒、中期中葉前半２軒、中期末葉５軒、不明１軒で、中期末葉のものが主体を占める。その他の遺構では屋外埋甕が中期中葉後半と中期末葉のものである。各住居址等の所属時については、埋設されている土器（埋甕炉・埋甕）をもって判断し、このようなものをもたないものについては、覆土中及び、床面出土の土器によった。

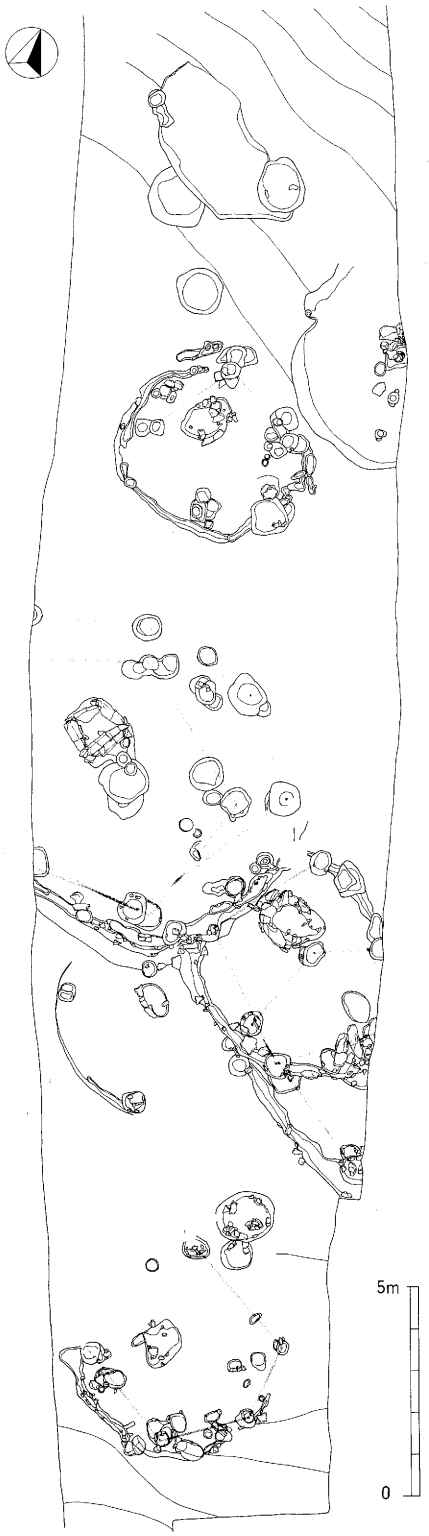
２　中期初頭の集落

中期初頭の住居址は２軒確認されており、埋甕炉に用いられていた土器より考えると何れも九兵衛尾根Ⅱ式期に相当する時期のものである。これら２軒の住居址はⅠ区より検出されたものである。この住居址の他に同時期のものと思われる土壙が３基検出されている。これらの遺構は扇状地の斜面部に位置しており、中期末葉の住居址が割合平坦な部分に立地するのと対照的である。２軒の住居址は集中する傾向を示さず、１号、13号は距離にして約80ｍ、比高差は約75ｍも離れており点在する。遺構範囲だけではなく、中期初頭の土器片出土範囲などをみると、遺物の集中する箇所は１号・13号住居址の周辺に限定される。

調査区外に遺構等の存在する可能性は強く住居址配置については今後の課題であるが、今回の調査結果より、住居はほぼ地形に沿って作られていた可能性が強く、１号住居を中心とした群と、13号住居址を中心とした群の２群により構成されていたと思われる。尚、土壙等の位置も、住居址周辺に集中するようである。

３　中期中葉の集落

中期中葉に属する遺構は住居址２軒と屋外埋甕として扱った単独土器１である。住居址と単独土器には時間差があり、住居址が中期中葉前半のものである。これらの時期については、埋甕炉・覆土中等の土器より見ると、住居址２軒は新道期、単独土器は井戸尻期に属する。まず、新道期の住居址配置について考えてみたい。この時期の住居址である32号・33号住居址が検出されたのは、調査区で最も下に当たる位置よりである。ちょうどこの付近より扇状地は傾斜が急になり、



第128図　II区の住居址分布

小規模な台地末端となる。住居址はこの台地際に、地形に沿い横に並ぶ形で位置する。用地外にも住居址の存在が予測され、住居址の配置はちょうど小規模な台地末端の地形に沿い弧状に並列するものかと思われる。

井戸尻期に於いての遺構は単独土器のみである。このような単独土器は、集落の広場と想定される位置より検出されることが多く、八ヶ岳西山麓よりは数例の報告がある。今回この時期の住居址等の検出はできなかったが、単独土器を中心とした範囲に住居址が構成されていたと考えることが可能であり、用地外に住居址が遺存するものと思われる。また、単独土器の東側には大石があり何らかの関係が想定されようか。

4　中期末葉の集落について

今回の調査に於いて縄文中期の遺構で主体をなすものは中期末葉のもので、全体の50%を占める。これらの住居址はII区に集中している。これらを埋甕・覆土中の土器よりみると、曽利II期2軒、曽利III期2軒、曽利IV期1軒であった。この他に曽利III期頃の屋外埋甕が1基検出されている。

住居址は東西方向に帯状を呈し分布し、その分布のし方は中期中葉の集落と同様に、小規模な台地の縁辺に位置している。広場とみられる位置の確認はできなかったが、地形や21・22・24号住居址の配置より考えると、住居址に囲まれる西南側用地外の範囲が相当するのではないか。また住居址の配置には曽利II期～IV期まである程度の規範があり、広場を避けた位置に住居址が構築されたために重複関係の激しい帯状の配置になったものと推測し得る。

これら中期末葉の住居址を詳細にみると、曽利II期の住居址は18号・22号住居址である。これらの住居址には埋甕はみられなかった。炉址については、18号住居址は炉址石囲いを全て抜き取っている。22号住居址は炉址奥壁側に石壇を有していたと思われる住居址で、

石棒を有していた。この住居址配置をみると、炉址等の位置より推定できる南東側の入口、長軸方向がほぼ等しいこと等より、住居址はある程度の規模内に納まっていたものと捉えられる。これら住居址の他に、屋外埋甕と思われるものが1箇所検出されている。埋設位置より考えると、18号住居址に余りに接近し過ぎる事等問題があるものである。

曽利Ⅲ期の住居址は24号・36号住居址である。24号住居址は竪穴構成員の増加分か、または他要因によるものか、一回の北側への拡張が行われている。拡張の規模は旧住居址の1.5倍ほどのものである。新・旧の住居址に埋甕が埋設されており、旧住居址は建て替えに際しても埋甕の埋設が行われ合計3箇所の埋甕が確認されている。尚この埋甕の内部より定角式磨製石斧が出土しており、この問題については後述する。また、3分割された石棒が炉址の石囲いとして出土している。この石棒の接合は記述した通り実に問題となるあり方を示し、住居址構築・炉址等との関連が考えられるものである。このような分割された石棒が炉址内より出土している例として、よせの台遺跡（宮坂・他1978）があり、石棒の分割と炉石の抜き取りに何らかの関係があったのではないかとしている。また、長峯遺跡（宮坂・1964）、曽利遺跡第28号住居址（武藤・他1978）などには炉の隅に石棒が据えられており、炉と石棒の間には何らかの儀礼が存在していたのではないかと考えられている（桐原・1969）。内容物をもつ埋甕の存在、石棒の出土、住居址の規模等を考えると、この住居址は若干他の住居址とは異なる様相を呈している。この住居址に関しては祭址的要素の強い家屋として捉えることができないか。また、この住居址は拡張が行われており、竪穴構成員の増加に伴なうものとしにが、単にそうした要素だけでなく、住居址の性格上若干異なる意味が存在するように思える。36号住居址は奥壁内に石壇状の集石・石壇ピット、入口部には埋甕を設けている住居址である。この住居址は屋内での石柱祭址（長崎・1973）が行われていた住居址と思われ、24号住居址との関わりを考える上でも問題がある。

曽利Ⅳ期の住居址は21号住居址の一軒が検出されただけである。住居址施設等は炉址が検出されただけで、入口部と思われる位置は用地外に当たり埋甕の有無は確認できなかった。住居址の主軸方向と思われる位置は曽利Ⅱ～Ⅲ期と同様である。この時期を境に縄文中期の遺構は検出されていない。

広い範囲にわたる調査でなく集落形の把握には至らず、前記した集落形については推測の域を脱しないものである。中期後半に於いては、曽利Ⅱ～Ⅲ期のものが主体となるようである。

5　磨製石斧出土の埋甕について

今回埋甕は屋内・屋外のものを合せて5箇所検出されている。これらの埋甕は曽利Ⅲ期のものが主体である。特に、24号住居址では3箇所の埋甕が検出されている。これらの中に内容物をもつものがあり、これについて若干考えてみたいと思う。

今回検出された内容物をもつ埋甕は24号住居址から発見されたものである。埋甕は住居址の建て替え、あるいは拡張に伴ない埋設されたものとで、貼り床等との関係より把握できた。埋設さ

れた土器等よりみると、拡張以前のものは曽利II期後半、曽利III期になり拡張が行われたと理解できる。内容物をもつものはこの内、曽利II期1点、曽利III期1点で、拡張前と拡張後の埋甕両方より検出された。埋甕内の土層状態は人為的に埋めた感のするもので、磨製石斧は埋甕土器の底部に近い位置にほぼ水平に埋納されていた。埋納されていた磨製石斧は定角式のもので、整形、形状等は一般的なもので、刃部等には刃こぼれ、線条痕が観察できた。

このように埋甕内に内容物、特に石器類が入っているものは数十例あるようで、種類は黒曜石剥片・磨石等が主体を占めるようである（神村・1973）。今回のような磨製石斧を埋納している例は尖石遺跡第1号住居址にみられる。尚、この際の埋甕は今回の場合と異なり、「頂上にのせてあった扁平の石を除くと、大きな土器の下部を赤土20糎の深さに埋め、粘土でかため直立させ、周囲に石塊を積み重ねてあった。土器には、亀裂が入り内部に黒土がつまり底から七分目の所に小形磨石斧一点が蔵められてあった。」（宮坂・1957）という状況を示すもので、若干性格的には異なるかと思われるが、甕内への磨石斧の埋納という行為は同じものとして捉えることができよう。埋甕の内容物の有無について、南信地方の埋甕の分析を通して神村氏は、磨石の多いのが注意されるとしながら、全体的に埋納物の検出例が少ないことより「全体から見ると異物を入れるということは数少ない例であって入れなければならないという規制はなかったと思う。」（神村・1973）としている。さて、埋納された石器をみた場合、埋納するためだけに製作されたものではなく、機能していたものを用いている。このことは、埋甕が設けられる以前に道具として使用され、埋甕埋設時に使用していたものを埋納したことになる。このようなことよりある種の副葬品的な性格も仮定し得る。埋納物をもつ埋甕の性格が如何なるものか今後の課題である。

6　ま　と　め

高部遺跡の縄文中期の集落等について述べてきたが、今回は限定された範囲の調査であり集落形の把握には至らなかったが、ある程度の傾向を看取し得た。まず、中期初頭から中期末葉の集落立地を比較してみると、調査範囲に限っては、中期初頭の住居址が構築されている位置は中期末葉のものに比べ、調査区でも扇頂部に近い範囲にある。これが中期中葉以降になると、扇状地のほぼ中央部にみられる小規模な台地を中心に住居址が構築されている。このような同扇状地内に於いて時期により住居址の構築される位置が異なるのは、どのような原因によるものであろうか今後の課題である。また、集落の問題についてだけでなく、住居址内の施設についても石棒と炉址の関係、埋甕と埋納物との関係等多くの問題が内在していた。これらについても今後の課題として提示したい。

（守矢昌文）

参　考　文　献

宮坂虎次・他　1978 『よせの台遺跡』 茅野市教育委員会

神村　透　1973 「南信地方の埋甕について」『長野県考古学会誌』 第15号

桐原　健　1969 「縄文中期にみられる屋内祭祀の一姿相」『古代文化』 第21巻第３・４号
長崎元廣　1973 「八ヶ岳西南麓の縄文中期集落における共同祭式のありかたとその意義 （上）（下）」
『信濃』 第25巻第４・５号
宮坂英弐　1957 『尖石』 茅野町教育委員会
宮坂英弐　1964 「長野県茅野市長峯遺跡」『日本考古学年報　昭和34年度』 日本考古学協会
武藤雄六・他　1978 『曽利』 富士見町教育委員会

第３節　縄文時代後期の土壙について

1　はじめに

発見された縄文時代中期末から後期中葉の土壙群の中では、後期初頭の堀ノ内Ⅰ式期に属すると思われるものが比較的多い。これらの土壙は、単純に堀ノ内Ⅰ式土器のみを伴う場合と、これに中期終末の土器を伴うもの、あるいは称名寺式土器を伴うもの、さらにはこれら三者を合わせ伴うものの４態が認められ、堀ノ内Ⅰ式土器のみを単純に出土する土壙は比較的少ない。一方、堀ノ内Ⅱ式土器を出土する土壙は、そのほとんどが堀ノ内Ⅰ式土器を伴出している。

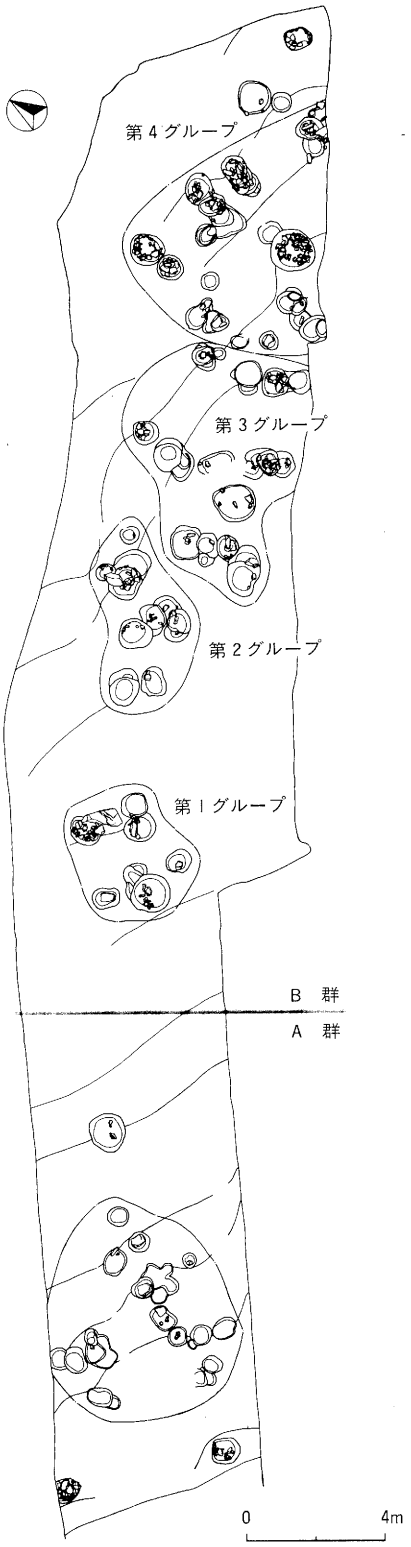
これらの発見された土壙は、以下に記すごとくある一定の群としてのまとまりをもっている。また、この群の中での土壙間には切り合い関係があまり認められないことや、逆に同地点でのみ切り合っているという現象を指摘できる。こうしたあり方と、前記した時間的な問題を考慮すると、これらの土壙は中期終末から後期中葉にかけて、ある特定な繋がりある社会的背景のもとに、同時点で継続して営まれたと考えられないであろうか。しかも骨片を出土している土壙が22基も存在することや、これに特殊な遺物が伴っている例があること等々、これらの土壙は墓として営まれたものと考えられるのである。

2　分布のあり方

発見された土壙は調査区から東側にかけて弧状に展開する様相をみせ、調査区内においては大きく２つの分布上のまとまりをもっている。１つは26・27・28列を中心とするＡ群であり、もう一方は33列以下44列までに設けられているもののＢ群である。

Ａ群の土壙は底面規模が比較的小さいものでまとまっている。そしてこれらの土壙はほとんどがお互いを避け合うように切り合うことなく設けられている。

一方、Ｂ群の土壙は底面規模の大小にバラツキがあり、重複関係にあるものが多い。しかしその重複関係にも一定の規則性を看取できる。それは、Ａ群での個々の土壙がそうであったように、他の土壙を避けて同地点で重複し、ある一定のまとまりをつくっているという現象である。これら同地点で重複する土壙は底面規模が同程度のものであり、平均して３基ほど連続して重複して



第129図　土壙の分布

いる。また、これらの土壙は出土土器からみても土壙間にそれほど時間差を感じさせないから、土壙は比較的短期間の内に連続して重複し、営まれたことを意味しているものと思われる。そうした重複を繰り返した方向、言い換えれば新たに土壙が設けられて行った方向にも、また一定の規則性を認めることができる。これらの重複関係と分布上のあり方からみると、B群はさらに1～4の4小群に分けられそうである。1つはA群寄りの位置に一定のまとまりをもって設けられている第1グループ。第2グループは切り合い関係の主軸方向を東西方向にとるものを中心としたグループ。第3グループは切り合い関係の主軸方向が略北西から南東方向にとるものを中心とするグループ。第4グループは切り合い関係の主軸方向を南北方向にとるものを中心とするグループであり、このうち第2～第4グループには共通する事象の存在を想定することができないだろうか。

3　土壙の分類

発見された土壙は底面規模を基準とした場合、大・中・小と3分類される。このうち量的には中規模のものが多い。土壙は平面形も全体的に類似しており、規模も中程度のものが多く、その他の形態面を基準としてもそれほど細かな分類は期待されそうもない。そこで、これら中規模のものを中心に、なんらかの形で覆土中に設けられている集石等覆土中の状態、換言すれば埋設のあり方に基準をおき、分類を行うこととする（第1表）。

Ⅰ－上面から底部にかけてなんらかの形で集石をもつもの。

a　覆土中央部や壁際に大きな石積状の集石をもつもの。

b　覆土中央部や壁際にそれほど大きくない集石をもつもの。

c　中央部を取り囲むように壁際に集石をもつもの。

d　底面に集石をもつもの。

e　礫を詰め込んだように覆土のほぼ全体に礫をもつもの。

f　土壙の上面や覆土中に、集石ではなく拳大から人頭大の礫を有するもの。

g　土壙上面や土壙中に厚い扁平礫を有するもの。

II－土壙中に集石をもたないもの。

III－底部に焼土を有するもの。

以上のような大雑把な分類が可能かと思われる。このうちA・B両群に共通して多いのはＩｂ類とII類であり、少数ながらもＩｅ・Ｉｆ・Ｉｇ類も認められる。A群にはＩｂ・Ｉｆ・Ｉｇが認められるが、いずれもごく小規模なものであり、B群に認められる同類のものとは基本的部分で異なるようである。これらはむしろII類とすべきか、II類により近い性格のものとみてよいのではなかろうか。また、Ｉａ・Ｉｃ・Ｉｄ・III類はB群にのみ存在しており、しかも例数の少ない点が注意される。ただしIII類とした第43号土壙は他の土壙とはやや性格の異なるものである可能性が強い。

ところで出土遺物についてはどうであろうか。

発見された土壙のうち、22基から骨片が出土していることは上に記した。この他の土壙からの出土遺物は土器片や黒曜石片が一般的であり、こうした遺物は混入とも考えられる。しかしこれらの遺物とは異なり、混入とは考えられない遺物もある。例えば、第67号A土壙の石製品とした有溝砥石は明らかに副葬した遺物と考えられ、また、副葬を示すような出土状態にあった。このように、第67号A土壙は別にしても、一般的な土器片や黒曜石片以外に意図的に扱われたと思われる遺物もある。こうした土壙については第１表を参照されたいが、第24号A土壙の一括土器と第58号B土壙の１点の土製円板以外はすべて石製品であることも注意される。加えて、こうした遺物を伴う土壙がA群にはみられず、B群に特徴的であることも重要な現象であろう。さらに、こうした遺物を出土したB群の土壙のうち、石錘を出土した土壙３例がいずれも第II類に限られていることも偶然の現象ではあるまい。また、B群からは土壙外ではあったものの、小型石棒が出土していることも注意されるべき１点である。

4　ま　と　め

土壙はB群のものがA群のものに比べ規模にバラツキが認められる。また、やや異なった埋設方法をとるものも存在するが、基本的には同様な埋設方法をとるものの複数が主体となって構成されていることが知られる。こうした複数の埋設方法の存在や伴出遺物の異なり方は、基本的には性別差によるものであるのか、あるいは一定の年令階梯を示すものであるのか、さらには死亡の原因に関わるものであるのかその背景が問題となる。しかしここではそれらの問題に立ち入ることはできない。想像をたくましくすれば、分類による例数の少なかったものや副葬されたと考

えられる遺物を伴出したものは、特異な死亡原因の被葬者と関わっているとも思われる。

以上のようにA・B２つの群は、基本的に同様な埋設方法をとる土壙の複数の継続的な集合であることが理解される。この２つの群の分布上の異なりは、覆土中に特徴的な集石等を有しない土壙によって構成されるA群と、特徴的な集石等を有する土壙の多くによって構成されるB群の異なりでもある。また、土壙埋設時に意図的に伴わせたと考えられる遺物を有する土壙を多く含む群と、遺物を伴わない土壙の群の異なりでもあった。このようにみてくると、A・B２つの群は、なんらかの２つの大きな集団の反映として捉えられないであろうか。B群ではそうした集団関係の中においても、ある一定の規則性をもつ重複関係や分布上のあり方から、さらにレベルの異なる４つの小さな集団関係の存在を推定できるのであり、それらがどのような概念で認識される集団であるのかは興味のもたれるところである。

中部山岳地帯の縄文時代中期末葉から後期中葉に及ぶ時代状況の一端は、八ヶ岳西南麓の遺跡数の激減という歴史的現象によってもある程度推測しえる。高部遺跡の位置する諏訪湖周辺地域も同様な時代のうねりの中にあった事に変わりない。遺跡数の少なさは、人口数の寡多と関わるものであろうから、同時代は相対的に人口減の状況が進行していたと考えられはしないだろうか。それは人口の移動によるものとも考えられるが、また一方では環境悪化の進行に伴う生産力の低下がもたらした死亡数の多さをも示しているとも思われる。高部遺跡の土壙群はそうした時代状況を示す集団墓と考えられないであろうか。この集団墓を営んだ人々がどのような集団であったかは明らかでないが、こうした厳しい時代状況におかれていた小さなレベルの集団が複数集まって１つの集団を構成しており、そうした構造にある大きな集団が、未調査区のあり方も考慮すると、２グループ以上存在したものと考えられる。下ノ原遺跡（宮坂・他1980）や梨久保遺跡（岡谷市教育委員会1978）の土壙群の中にも、高部遺跡の土壙に特徴的な上面や覆土・底面に集石や礫を有するものが発見されている。各々遺跡の土壙のあり方には違いも認められるけれども、また一方では上記の点や副葬されたと考えられる遺物を出土している共通した現象も指摘できる。このため各々遺跡の土壙群は、高部遺跡の土壙群からも窺われ、また想定されるように、中期末葉から後期に及ぶ厳しい時代状況を物語っているものと言えよう。

ところで、こうした土壙群の発見された遺跡は、土壙群のみではなく周辺に数基の敷石住居址を伴っている例が多いようである。このような例からみると、今回の調査では敷石住居址の発見はなかったものの、土壙群の周辺には敷石住居址が存在している可能性が強い。したがって上述した時代状況を的確に捉えて行くには、敷石住居址とそれに伴う土壙群や配石址等からなる遺跡全体の評価にまつべきであろうが、それにしても高部遺跡の土壙群のあり方は、こうした周辺遺跡のあり方と共に、同時代の中部山岳地帯の歴史状況を物語っているものと思われるのである。

（鵜飼幸雄）

参　考　文　献

岡谷市教育委員会　1978　『梨久保遺跡』　岡谷市教育委員会
宮坂虎次・他　1980　『下ノ原遺跡』　茅野市教育委員会

第４節　高部遺跡出土の平安時代後期の土器様相

１　はじめに

今回の調査では平安時代後期の竪穴住居址が比較的多く発見された。なかでもその末葉期とみられる住居址は９軒あり、出土した土器群もセット関係等がある程度窺える状態にある。県内では同期の資料が比較的少なく、同期の編年観は提示されていても資料的裏付けはかならずしも十分だとは言えないようにも思われる。そのため、ここでは比較的資料が整っている後期末葉とみられる土器群を中心に後期の土器群の全体を検討し、これらの土器群の編年的位置等について、先学の編年観を基礎に据えて私見を述べてみたいと思う。

２　編年観についての研究小史

県内の平安時代土器編年の研究経過については岡田氏に詳しい（岡田1977）。岡田氏以降のものとしては、氏の論考も含め、川上氏（川上1978）と笹沢氏（笹沢1976）の編年観が提示されており、この３者の編年観は今後の長野県内の平安時代土器編年を確立して行く上での基礎となるものである。このため、小論で問題とする平安時代後期、年代的には11世紀後半以降の各氏の編年観について検討しておこうと思う。

岡田正彦氏は中南信地方の住居址出土資料を中心に検討した結果、11世紀後半以降を平安時代後期とし、後期をⅣ期・Ⅴ期と二分し、さらにⅣ期を前半と後半に細区分した（岡田1977）。それによるとⅣ期は須恵器の供膳形態用土器が皆無となり、それに変わって急増した折戸53号窯期の灰釉陶器と土師器が供膳形態用土器セットを占有する時期とし、さらに土師器黒色土器の有無によってⅣ期を前半と後半とに区分している。また、Ⅳ期後半では小形甕Ｂ類と坏Ｃ類がなくなり、Ⅳ期後半はⅤ期への前期として捉えられるとしている。次期のⅤ期は純粋に灰釉陶器と土師器Ａ類のみが残存する時期であると同時に、灰釉陶器の周落に伴い中世陶器の源流をなす各地方窯産の製器が出現する時期でもあるとし、平安時代最後の１時期としてⅤ期を設定している。Ⅴ期の土器群は土師器・灰釉陶器・山茶碗・山皿・地方窯産の日常雑器・貿易陶磁等々で構成されると考えられており、灰釉陶器の供膳形態が減少することと、土師器は鍔釜・小形坏（カワラケ）を中心に小形のＡ類の高台坏と高台皿が主流を占めるが、小形化したものが多いことを指摘している。こうした土器セットのあり方を灰釉陶器の編年と古銭出土住居址の土器群のあり方から検討し、Ⅳ期前半を11世紀後半に、Ⅳ期後半をほぼ12世紀前半にあてている。またⅤ期については資料不足で将来の検討を期すことを前提とし、一応12世紀後半代を想定されている。

川上元氏は千曲川水系の各種土器相互の展開から、11世紀中葉から12世紀中葉までを第Ⅳ期とし、それ以降12世紀後葉を第Ⅴ期として編年付けた（川上1978）。それによると第Ⅳ期は須恵器

がほぼ完全に消失し、土器組成は土師器と灰釉陶器のみとなる時期としている。第Ⅴ期は土師器と灰釉陶器で構成されるが灰釉陶器はわずかに伴なう程度となり、そして第Ⅴ期の後半には土師器との共存がまれになり、やがて全く消滅してしまうという。一方土師器の供膳形態は小形化するが、この中で足高高台付坏・皿が特徴的な存在となるとされた。

笹沢浩氏は十二の后遺跡出土土器群を分析した結果、11世紀後半以降をⅨ期・Ⅹ期の二期区分で編年づけた（笹沢1976)。このうちⅨ期は供膳形態に須恵器がみられず、土師器・黒色土器・灰釉陶器が主体となり、黒色土器が一層粗雑化するという。また、伴出する灰釉陶器は折戸53号窯(古)期のものであり、土師器甕が量的に少なくなるとし、Ⅸ期を11世紀後半代としている。Ⅹ期になると供膳形態では土師器と灰釉陶器が主流を占め、黒色土器の占める位置が軽くなるという。灰釉陶器は折戸53号窯(新)期のものであり、その多量な搬入は土師器皿Ｂの出現を促すと考えられている。また中世のカワラケの祖源と考えられる皿Ａの存在も指摘されている。そしてⅩ期には灰釉陶器の編年と共に、同期と並行すると考えられる住居址出土の土器群と古銭のあり方から12世紀代の年代をあたえている。

以上、岡田・川上・笹沢３氏の平安時代後期の編年観をみてきた。それによると３氏の編年観は、12世紀代を二分して考える岡田・川上両氏と、Ⅹ期で一括理解する笹沢氏とでは異なる。また土器群を詳細に分析している岡田氏と笹沢氏とでは土器群の捉え方にもやや異なりがあるようである。例えば、12世紀前半代に位置する岡田氏のⅣ期後半は黒色土器が存在しなくなるとされる時期でもあるが、笹沢氏の場合は黒色土器の占める位置が軽くなったと表現するとはいえ、その存在も１つの指標とされている。しかしながら同一住居址の出土資料を扱いながらも理解に異なりがあるとはいえ、一応12世紀代の開始を１つの編年的目安とする点については一致している。ともかく笹沢氏の編年では12世紀代をⅩ期としてⅠ期区分で理解している。これは岡田氏がⅤ期とした12世紀中葉から末期までについては、岡田氏自身が言うように確たる資料が乏しく不確定な要素が大きかったこと、そしてこのことに加えて十二の后遺跡からは岡田氏の見通しを裏付けるに足る資料が得られなかったことにもよるものと思われ、この時点ではあえて区分することなく１期で一括理解したものと考えられる。

ところで岡田氏の平安末期の編年についての見通しは、その後岡谷市橋原遺跡の報告を通して具体化されてきている（岡田1981)。それによると住居址内火処の施設がカマドから地焼炉へ、さらに焼土のみという３段階の変遷を遂げるものと想定され、これに３類型存在するとされるカワラケの変化とそれに伴なう内耳土器のあり方を大きな拠り所とし、橋原では平安末から中世初頭を３段階で理解している。これは氏のⅣ期後半・Ⅴ期・中世初頭という編年図式を再度確認したものであった。

しかし岡田氏が３区分の根拠としたカワラケの捉え方には統一性が欠けている。遺物編でⅡ類としたカワラケの「薄く内耳土器を伴出する場合が多い」という内容がまとめの項ではⅢ類の内容に変わり、Ⅱ類はⅣ期後半に相当するⅠ類と中世以降とされるⅢ類の「中間型」とされている。

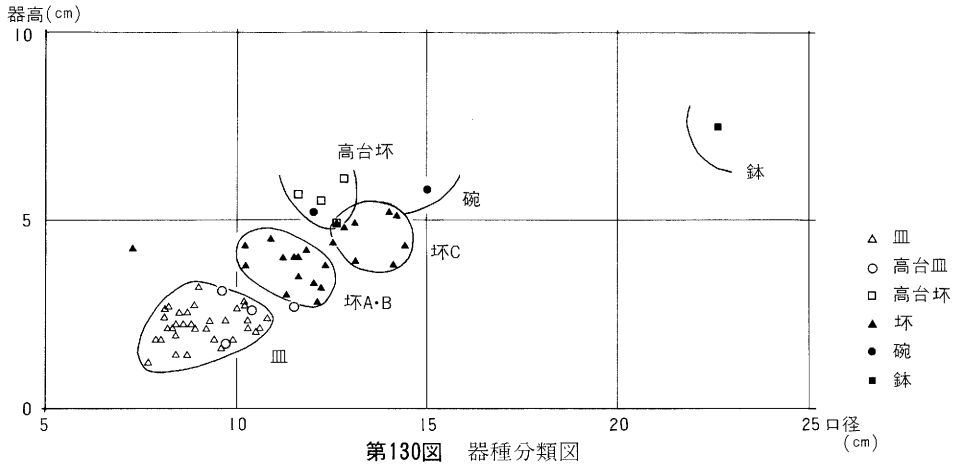
また、この提示された土器の変遷からみる限りでは第２段階のＶ期と想定されている第18号・52号住居址からはII類とされたカワラケの出土はない。したがって橋原遺跡での平安末から中世初頭にかけての編年把握の主軸は、結局のところ住居址の火処のあり方によっていたことが知られるのであり、カワラケの捉え方もそれに合わせた感を受ける。岡田氏が言うように、氏のＶ期について「土師器はカワラケとも言うべき小形坏が多量に出まわることを示唆したのであるが、その資料を本遺跡で補うことができた」という総括は、前記したとおり資料的に乏しいこともあり、氏の先行する理論に資料的な裏付けが不十分なものとなってしまい、今一つ説得性に欠けたとの感を拭えない。

以上、岡田・川上・笹沢各氏の平安時代後期の編年観をみてきた。このうち岡田・川上両氏は12世紀代を二分して理解しようとしている。岡田氏のＶ期については土器類の資料的裏付けが不十分であったが、氏の理論そのものはおそらく正確を得ている部分があると思われ、12世紀代も氏の見通しの基に細分される可能性が強いものと言える。またこのこととも関係し、川上氏も第Ｖ期とした12世紀後葉が、灰釉陶器の動向から細分される可能性のあることを暗に示されている。それ故、諏訪地方の平安時代末期と考えられる土器群の編年的位置を問題とする場合、諏訪地方の資料を比較的多く用いて論じた岡田氏の編年案を基礎として検討して行くことも１つの方法だと言えるだろう。以下、12世紀代と考えられる土器群の相対的な編年関係を、竪穴単位の土器群のあり方から窺ってみよう。

3　土器群の分類

各期の様相をみる前に土器群を一括して分類することとする。供膳形態用土器群は法量からみるとそれぞれセット関係にあることが窺えるため、これを基に分類することとする（第130図）。なお供膳形態用土器群は高台を付すもの以外はすべてロクロ成形糸切り底のものである。

ⅢＡ　底部から立ち上がる部分がわずかにくびれ、腰部がやや丸く張り、口縁が外反気味に開くもので、底部は内面側へ厚くつくられている。



第130図　器種分類図

Ⅲ B　底部が張り出すように厚く切ったⅢで口縁が直線的に開くが、中には口縁がやや外反気味に開くものもある。口径が比較的大きく10.2cm前後あるもの。

Ⅲ C　口径が7.7cm～8.4cm、器高2.1cm～2.7cm、底径3.0cm～4.2cmと中形の法量をもつもの。底部は張り出すように厚く切っており、口縁が内彎気味に立ち上がって開くもので、中には直線的に開くものもある。

Ⅲ D　ⅢCと同様な器形であるが、口径が2.0cm以下と小形なもの。

Ⅲ E　底部が張り出すように比較的厚く切られており、口縁部がわずかに内彎気味に立ち上がるもので、中には直線的に開くものもある。Ⅲ部は平坦で浅く、器高が低く、口径に対する底径比が比較的大きいもの。口径8.1cm～9.0cm、器高1.8cm～2.0cm、底径4.4cm～4.7cm。

Ⅲ F　底部が厚く擬似高台状を呈すもので、ⅢCよりも器高の高いもの。

Ⅲ G　底部が高台状となるもの。高台状の底部はⅢB・C・Fよりも高く外側へ強く張り出しており、C・Fよりも胎土・焼成の良いもの。

Ⅲ H　全体に器肉が厚く、口縁部が内彎気味に立ち上がる。内底面は平坦であり、底部は厚いが張り出さないもの。

Ⅲ I　底部が比較的薄く、口縁が内彎気味に大きく開く器形のもの。

Ⅲ J　短い口縁が直線的に開くもので、口径に対する底径比が大きく、器高の低いもの。底部は薄く上底状を呈すものもある。

Ⅲ K　Jと同様な器形であるが、Jよりも口径が9cm以下と小形のもの。

坏A　口縁が直線的に開くもので、中には口縁が外反気味に開くものもある。器肉がやや厚く、底部から立ち上がる部分がわずかにくびれる。器高が3.8cm～4.5cmとやや高く、口径に対する底径比が小さいもの。

坏B　口縁部が底部から直線的に開く器形で器肉は比較的薄い。口径11.3cm～12.3cm、器高2.8cm～3.8cmとAに比べ低く、口径に対する底径比はAよりも大きい。

坏C　口縁部が底部から直線的か内彎気味に大きく開く器形。口径が12.5cm以上、器高が3.8cm以上ある大形の坏。

坏D　擬似高台状の小さな底部から口縁が外反気味に大きく開いた器形で、口径が12.5cmと大きいもの。

坏F　口縁が内折するもの。底部は小さくⅢと同規模で、底部のつくりもⅢと同様に厚い。Ⅲとして扱うべきであるかも知れない。

高台ⅢA　口径が大きく口縁が大きく開いたⅢで、灰釉陶器を模倣したと思われるもの。

高台ⅢB　ⅢCの器形に高台を付したもので器高が4cm以上と高いもの。

高台ⅢC　口縁が直線的かやや外反気味に開くもの。口径は10cm～12cmで、器高が3cm以下のもの。

高台坏A　坏Bに比較的高い高台を付したもの。

高台坏B　坏Cに比較的短い高台のついたもので、灰釉陶器を模倣したと思われるもの。

黒色土器A　坏A・Bと同形で、内面が黒色処理されたもの。

黒色土器B　高台坏Bと同形で内面が黒色処理されたもの。

碗　灰釉陶器をあてる。灰釉陶器はほとんどが折戸53号窯期の東濃産であり、碗形が多い。口縁や底部の状態からみると大小の形態があるが、個体数が少なく資料的制約から細分は行わないでおく。

白磁皿　日宋貿易によりもたらされた貿易陶磁。

甑　坏Aに底部穿孔したもの。

鉢A　土師器の鉢。

鉢B　灰釉陶器の鉢。

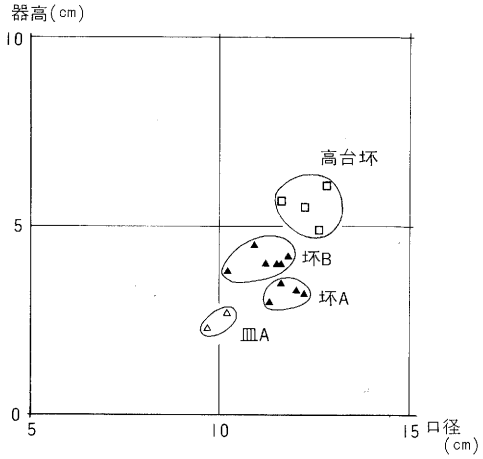
甕A　土師器の甕。口縁に最大径をもち、口縁端部が短く外反し屈曲部内側にやや軽い稜をもつもの。折り返しによるやや肥厚した口縁をもち、端部はわずかに面取りされている。

甕B　須恵器の甕。

4　各期の様相

後期第Ⅰ期　竪穴住居址は第3号・5号・6号の3軒が相当する。

土器は土師器が主体である。供膳形態では須恵器が認められず、皿A・坏A・B・C・高台皿A・高台坏A・B・黒色土器A・B・碗がある。このうち量的に多いものは坏A・B・C・高台坏A・Bである。皿Aは口径が比較的大きく底部のつくりも内側へ厚みをもっているのが特徴である。坏Bは比較的薄手で底部が上底状に糸切りされたものが認められる。また坏Bの中にもわずかに認められるが、坏Bとは対象的に坏Aが比較的厚手につくられており、底部をやや厚めで水平に糸切りするものが認められる点、注意される。特に第40図1は口径が小さく器高も低くなっており、皿B・Cへ連なる要素が認められ、皿B・Cが出現する前段階に位置していることが理解される。坏Aは八ヶ岳山麓では坏Cとして分類されており(白田1979)、判の木山東遺跡では土師器坏類の中では量的に安定した存在(百瀬1979)のようであることから、彼我の時間的関係を窺うことができる。高台坏Bは第5号住居址にまとまっている。全体に灰釉陶器の少ないことと関連し、器形からみて灰釉陶器を模倣したものと思われる。同期の八ヶ岳山麓の諸遺跡と比較した場合の灰釉陶器の出土数は少なく、そのあり方が注意される。第Ⅰ期と第Ⅱ期を区分する指標となる黒色土器は量的に少ないが存在する。第3号住居址では図示できないが破片で10数点あり、第5号住居址でも少数認められる。煮沸形態では甑と甕Aがある。甕Aは

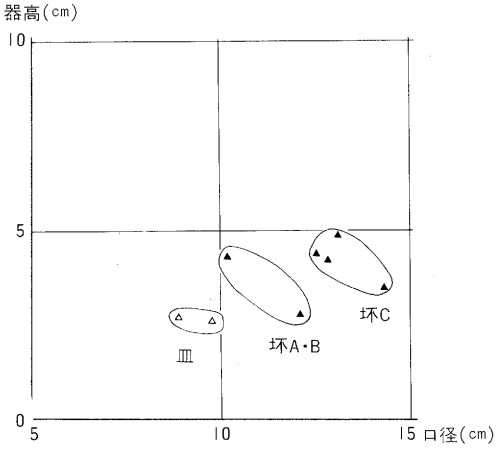


第131図　後期第Ⅰ期の器種構成

八ヶ岳山麓で甕Cとして分類されたもので（臼田1979）、山梨県にみられる甕と関連が予測される（百瀬1979）と指摘されたものに似ている。八ヶ岳山麓のものに比べればだいぶ雑でくずれた形態ではあるが、これらの系譜に連なる土器であることを指摘できる。

後期第II期　竪穴住居址は第７号・８号・16号の３軒が相当する。

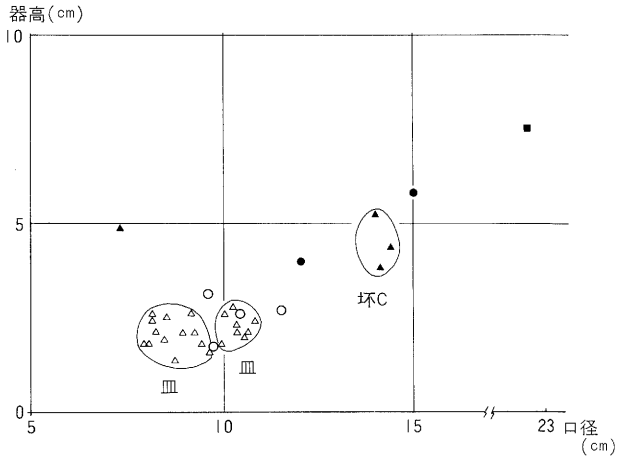
土器は土師器が主体であり、第８号住居址では東濃産の灰釉陶器が伴出しているものの量的には少ない。供膳形態ではⅢC・B・坏A・B・C・D・高台ⅢB・白磁Ⅲがあり、貯蔵形態では甕Bがある。Ⅲはつくりが厚手になり、ⅢBとCにみられるように比較的口径の大きいものと小さいものとに分化する傾向をみせる。底部は糸切りだが第Ⅰ期にみられた底部の立ち上がり部にくびれをもたせて底部を厚く切る傾向がさらに強まり、ⅢCに特徴的となる。こうした底部のあり方は坏Dとした第48図３に最も良く現れており、法量は本例よりも大きいが、諏訪市荒神山遺跡第５号住居址出土の本例と同形態のⅢから、こうした底部は擬似高台的な高台（岡田1977）として認識されている。また、Ⅲ・坏共に底部糸切りは水平となり、上底状の底部を有するものがみられなくなる。黒色土器は認められない。白磁Ⅲは同期の竪穴住居址出土としては他に例を知らない資料である。甕Bは「この時期では使用されていたか否か疑わしい」（岡田1977）存在であったが、第８号住居址からの出土により、第II期まで存在することが明らかとなった。



第132図　後期第II期の器種構成

後期第III期　竪穴住居址は第25号・26号・30号・35号の４軒が相当する。

土器は土師器が主体であり、灰釉陶器が少量伴なう。煮沸形態と貯蔵形態は認められず、供膳形態ではⅢA・B・C・D・E・F・G・I・坏C・F・高台ⅢC・高台坏A・B・碗・鉢A・Bがある。Ⅲは底部を厚く切り、特にⅢB・F・Gの底部は擬似高台状を呈す。底面は水平に糸切りされているが、中には底部の糸切りの出口を中心にナデを施こしたり削り取ることで水平な底面とするものがあり、糸切り痕の消えているものがある。こうした技法は第III期のⅢを特徴付ける技法で

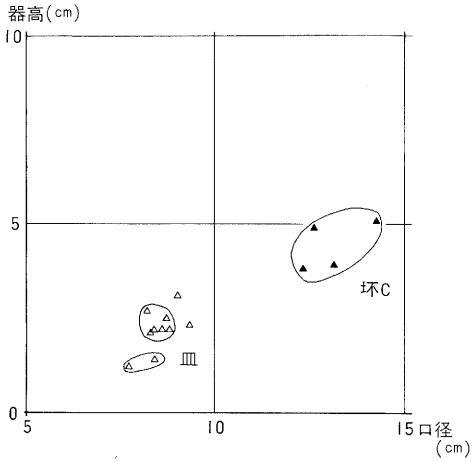


第133図　後期第III期の器種構成

あるようだ。また、皿Ｊは皿Ｋと親縁関係にあると思われるやや新しい様相をもつものであるが、口径が大きい点、次期にみられる皿Ｋとはやや異なる。高台皿Ｃは法量的に皿Ａ・Ｂと競合関係にあるものもある。皿Ａ・Ｂ・高台皿Ｃ共に胎土は良好で丁寧なつくりであることから、性格的にも類似するものであることが予測される。これらと同様な内容をもつと考えられる皿Ｇが第Ⅲ期に出現することも関連し、次期では高台部貼付けの省略化による擬似高台の非常な発達へと変わって行くものと思われる。坏はＡ・Ｂが消えてＣのみとなり、次期に定着する皿と坏Ｃのセット化の傾向がみられる。坏Ｆは特異な器形であり、他に類例を知らない土器である。

後期第Ⅳ期　竪穴住居址は第23号・31号の２軒が相当する。このうち第31号住居址は第Ⅲ期の第25号住居址を切っており、時間的に後出することは明らかである。

土器は土師器が主体であり、皿と坏が供膳形態の中心となる。灰釉陶器はみられなくなる。また、平安時代後期を特徴付けるとされた足高高台付坏・皿（川上1978）等、高台坏や高台皿もみられなくなる。高台皿は高台部を貼り付けたものではなく、皿部と共に粘土塊から引き出したものへと変わるようである。発見された土器群はすべて供膳形態であり、皿Ｃ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・坏Ｃがある。皿は口径８cm代の皿Ｃを中心とした小形のもの一色となるが、新たに皿Ｈ・Ｉ・Ｋが出現し、小形化の中での形態分化の傾向が窺える。皿Ｈ・Ｉ・Ｋは量的に少ないものの、口径に対する底径比が大きくなっており、また器高が低い点からも新しい要素を備えた皿と言えるだろう。第75図３は法量がやや大きいが皿Ｇとしたものである。第23号住居址出土のものと接合関係にあるため、両者の時間的関係を推察できる資料でもある。ところでこの土器の底部には乾燥時に残されたと考えられる板状圧痕が認められる。板状圧痕は他の資料には認められないことから、この土器は他地域からの搬入品か、あるいは新しい技法の存在を示す土器のいずれかであると考えられる。坏は口径の大きい坏Ｃのみである。



第134図　後期第Ⅳ期の器種構成

5　各期の編年的位置

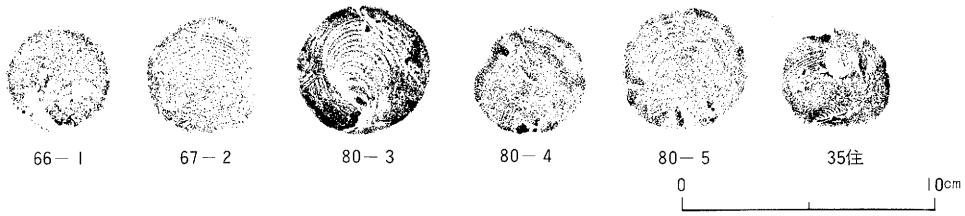
以上、出土した平安時代後期の土器群を４期区分して理解してきた。そこでここでは各期がどのような編年的位置にあるかを検討してみよう。なおその場合、第２節で検討したように平安時代後期を細区分している岡田編年を準拠とし、その大筋の中で各期の編年的位置を検討することとする。

第Ｉ期は供膳形態に須恵器が認められず土師器が主体となり、これに灰釉陶器が伴なう。灰釉陶器は折戸53号窯期のものであり、灰釉陶器を模倣した高台坏もつくられている。この灰釉陶器

を模倣したと考えられる高台坏も含め、内面を黒色処理した黒色土器が量的には少ないけれども存在することから、第Ⅰ期は岡田編年のⅣ期前半に相当する。

第Ⅱ期は黒色土器が認められなくなる段階である。また、器肉の厚い小形の皿が現われ、皿の底部を意識的に厚く切るようになる。ところでこれらの皿類と共伴した第８号住居址出土の白磁皿は北宋代のものとみられ、年代的には11世紀末葉が想定される。伴出した土器類には岡田氏が古銭出土住居址の土器群を目安に設定した12世紀前半代の第Ⅳ期後半とした土器群が認められる。それ故に両者の相対的関係からみて、白磁皿は12世紀前半まで下げて考えてもさしつかえないと思われる。このことからも第Ⅱ期は岡田氏編年の第Ⅳ期後半に相当するであろう。

第Ⅲ期は皿類に特徴的である。皿類は第Ⅰ期以来の口径が10cm大と比較的大きいものと、８cm代を中心にした小形のものとが共存する。底部は第Ⅱ期の皿に現われた底部を厚く切り離す方法がさらに肥大化し、糸の掛け口を再度下げて切り離す等し、擬似高台状の底部をもつようになる。また、第135図に示すように底部を水平にするため糸切りの出口を削る場合や、ナデを施して糸切

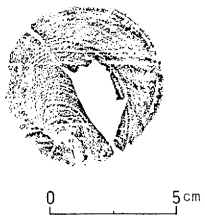


第135図　後期第Ⅳ期皿類底部

り痕を消す技法が認められる。これらの土器群を出土した第25号住居址は埋没後に第31号住居址によって切られていることからも、第Ⅲ期とした土器群は第Ⅳ期の土器群よりも古期の内容をもつものと言えるだろう。第Ⅲ期は岡田氏編年の第Ⅴ期に相当する。

第Ⅳ期は灰釉陶器がみられなくなる時期である。皿類は小形化の傾向が著しいと共に底径が大きくなる。底部も第Ⅲ期のものほど厚く切り離すものは少なくなり、また薄い底部のものが現われ始める。また皿Ｇとした第75図３の底部には板状圧痕が認められた（第136図）。

関東地方の中世土師質土器皿に認められる技法痕を検討した大江正行氏によると（大江1980）、この板状圧痕は九州から東北地方に至るまで広域に分布しており、関東地方の場合もかなり広域に存在すると考えられている。そして関東地方の場合は神奈川県鎌倉市光明寺裏遺跡の報告でⅢ類とされた土師質土器皿（斎木1980）まで、年代的には12世紀から13世紀初期頃（斎木1980）までは現在のところ認められておらず、この技法は「平安時代末期の土師質土器との関連性が薄く、少なからず中世土師質土器皿の特徴を示す」ものであると考えられている（大江1980）。



第136図　板状圧痕

翻って本遺跡から５kmほど東に位置する市内の御社宮司遺跡（小林・他1982）出土の14世紀以降とされる中世土師器皿にも板状圧痕が認められる。このことから、関東地方同様に板状圧痕は諏

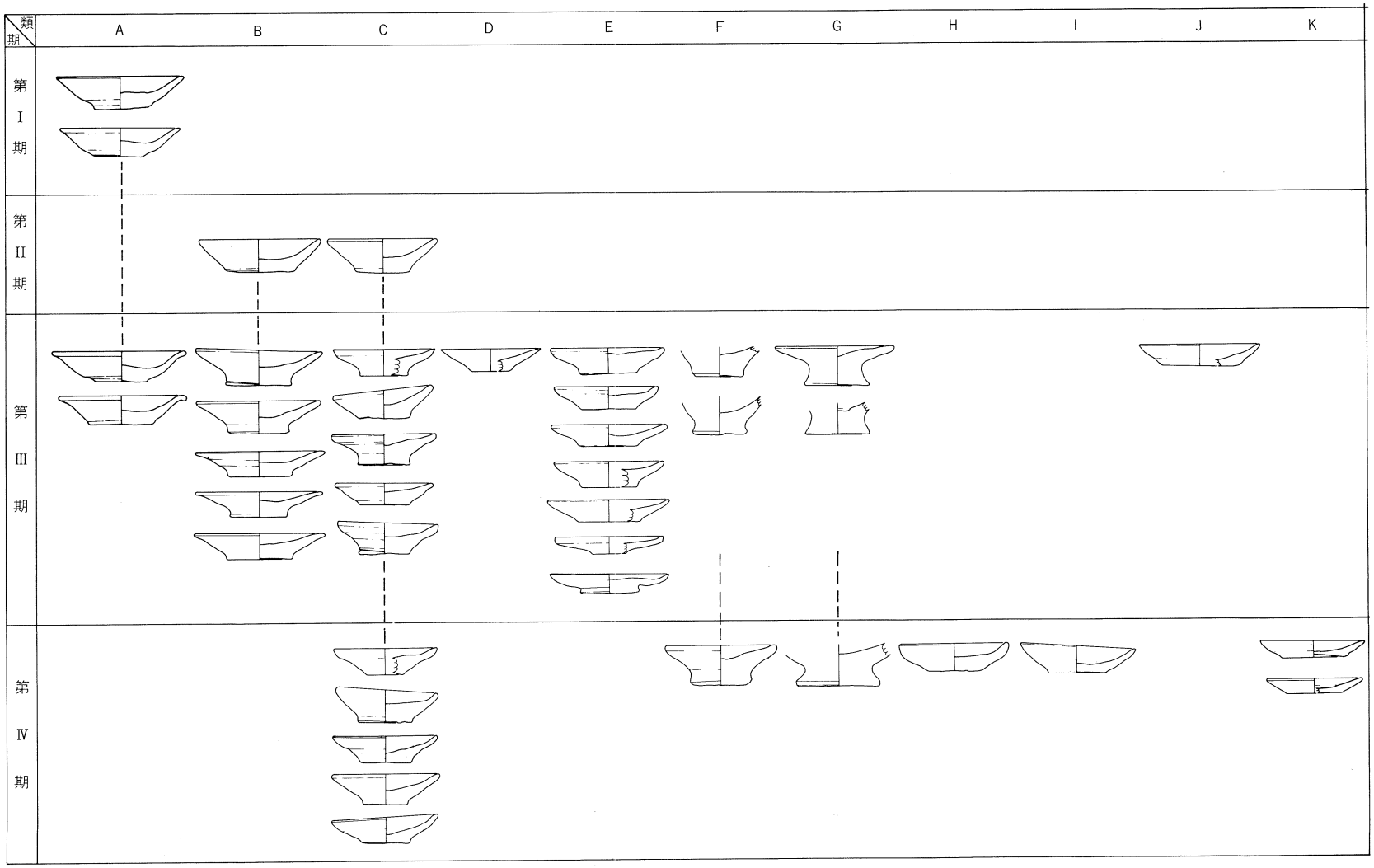
訪地方においても中世土師質土器皿の特徴を示す技法であると言えよう。したがって第75図３も同地域の中世土師器皿にみられるように中世的土師質土器生産技法によってつくられたものと見故せるだろう。しかし伴出土器群は型式的・様式的変遷の前後関係からみて平安時代後期の様相をもつものである。本例はこれら伴出した土器群より新しい様相をもつものであるから、両者の伴出関係を評価し、第Ⅳ期は平安時代最終末に位置付けるのが妥当であろう。

ところで、第Ⅳ期の土器群と様式的に類似する土器群が山梨県下に知られている(坂本・他1983)。特に本稿で皿Ｇとした擬似高台をもつものは「台付皿」・「台付坏」と表現されており、これらの土器群には甲斐地域Ⅴ期として12世紀前半(11世紀末～12世紀はじめ)の年代があたえられている。この年代観は灰釉陶器が伴出しないことと古常滑製品が伴出しないことから、灰釉陶器の終りから古常滑の生産の開始と供給の中間に位置するという考えに導かれたものである。本遺跡の場合も灰釉陶器がみられなくなり、また古常滑の製品が伴わない点では同様な内容をもち、また12世紀代の土器群としての理解でも一致している。しかし第Ⅰ期から第Ⅲ期の編年的関係と板状圧痕を有する土器の存在、それに第Ⅲ期とした第25号住居址の埋没後に第Ⅳ期の第31号住居址が新たに切った形で設けられていることから、実年代を想定できる資料はないけれど、ここでは前述したとおり一応12世紀末葉に編年的位置を求めておこうと思う。したがって第Ⅳ期は第Ⅲ期同様岡田編年の第Ⅴ期に相当することとなる。

6　擬似高台皿について

岡田正彦氏は氏の編年論を展開する際、第Ⅳ期後半に置いた諏訪市荒神山遺跡第５号住居址出土の高台皿の１つについて、「高台は擬似高台的に一息に水引き成形し底部糸切りをした」と説明し（岡田1977)、擬似高台なる用語が初めて登場した。この時点では擬似高台的という用語の内容については細かく説明されていないが、「カワラケに高台を付した」高台皿とは区別して説明されており、こうした高台皿とは内容の異なることを暗に考えておられたようである。また、この擬似高台的な高台皿と共伴した「カワラケとして扱った」皿についても擬似高台的な高台皿と「同様の性格を有し、場合によっては32(擬似高台的な高台皿－筆者)ともども蓋の役割をしたものかも知れない」と推察している。この擬似高台的な高台皿と「同様の性格を有す」と考えられた皿は、器形の説明がなされていないところからみれば、どうやら擬似高台的な高台状の底部を有しているところから推考されたものと思われる。したがってこの時点での岡田氏は、こうした擬似高台的な底部を有する皿類が、一括して他の皿類とは区別されるべき内容をもつものと理解されたものと推察されるのである。

このように、この時点では具体的な説明はなされなかったが、これらの皿類については岡田氏編年の続編ともなる岡谷市橋原遺跡の報告の中で小形高台坏形土器として具体的にふれられた(岡田1982)。それによると、その「高台部分は底部器肉を厚くしただけのもので、底部外面内側を削り高台したり、貼高台していないのが特徴」であり、「底部器肉を１～２cm厚くし、高台を簡



第137図　擬似高台皿類編年図

略化したものである」と定義された。そして「目下のところこの種の出土例はなく、この時期[註(1)]のみのものか、あるいはこの遺跡特有のものか、類例をまって今後検討しなければなるまい」と研究の方向を示し、結ばれている。

ただ橋原の報告の中で岡田氏は小形高台坏形土器として説明した土器群を法量等からかなり限定してカワラケと区別しているため、小形高台坏形土器として説明された土器を1977年編年のカワラケ(皿)等の擬似高台と同義に解釈してよいのか、あるいはまったく別個の存在として理解したらよいのか躊躇する。しかし氏のⅤ期について、「土師器はカワラケとも言うべき小形坏が多量に出まわることを示唆したのであるが、その資料を本遺跡で補うことができた」という橋原の総括から窺えば、小形高台坏形土器も擬似高台皿に拡大解釈してもよさそうにも思われる。氏の意に沿っていないことを恐れるが、ここでは取り敢えず小形高台坏も擬似高台皿として扱い、これらの皿類の系譜等を探ってみようと思う。

岡田氏が説明するような底部をもつものは皿B・C・E・F・Gと坏Dにみられ、殊に皿F・Gに特徴的である。底部の状態は、底部がほぼ直線をなして立ち上がる皿B・C・E・坏Dやわずかに外側へ張る皿F、それにかなり強く外側へ張り出す皿Gとがある。

このように底部を意識的に厚く切り離す方法は第Ⅰ期の皿Aや、底部から立ち上がる部分にくびれをもつようになる坏Aに初源をたどれ、第Ⅱ期に至ってこうした傾向が強く現れ始める。なかでも第Ⅲ・Ⅳ期は特徴的である。ところで第Ⅲ期の高台皿Cと皿Bは法量的に競合する関係にあり、また皿Gとも同様な関係をとるものと予測されることから、第Ⅲ期にセット内で両者の交替が行われているものと考えられる。このことは両者の製作技法上の異なりにも現れており、足高高台坏が第Ⅲ期にまで認められ、第Ⅳ期には認められなくなる足高高台坏に窺われる動向（川上1978）ともまったく無縁ではないように思われる。

こうした擬似高台的な底部をもつ皿類は現在のところ諏訪盆地を中心に発見されている。諏訪盆地以外で管見に触れた例は諏訪郡富士見町手洗沢遺跡第1号住居址（細川1974）、長野市大室村北遺跡（森島1978）山梨県東新居遺跡第2号住居址（坂本・他1983）、同勝沼バイパス338地点第1号住居址（坂本・他1983）、同319地点第4号住居址（坂本・他1983）、同274地点第3号住居址（坂本・他1983）、東京都東久留米市新山遺跡第53号土壙（井口・山崎1981）例であり、この他孫引きになるが、神奈川県横浜市藪根不動原遺跡第21号住居址からも1点出土しているようである（河野1983）。このうち量的には山梨県例が安定した存在である。坂本氏等はこれらの土器群を「台付皿」・「台付坏」として高台付のものとは区別して理解しており、年代的には12世紀前半を想定している。また、服部敬史氏は新山遺跡第53号土壙出土の皿をやはり12世紀前半代に想定している（服部1982）。森島稔氏は村北遺跡出土土器群を12世紀初頭から終末期にかけてのものと位置づけている。なかでも、ここで問題としている擬似高台皿を「木器の写しと把握してよいもので、とりわけ8（ここで擬似高台皿として扱っている土器—筆者）は特異なものである。」と注目すべき視点を示しておられる。

ところで、本遺跡出土の擬似高台皿・坏はほぼ12世紀全期間を通して認められる存在であり、なかでも12世紀後半期に特徴的な存在になるものと言える。前節でも検討してきたように、擬似高台皿そのものは単一時期のものではなく、型式的変遷を遂げているものと考えられるため、その特殊な分布域のあり方と共に、その編年についてもさらに深められて行くべき問題を含んでいるものと言えよう。小稿はそのための問題提起にすぎない。

7　ま　と　め

以上第Ⅰ期から第Ⅳ期の様相と編年的位置を中心に検討してきた。それによると高部遺跡出土の平安時代後期の土器群は、岡田氏編年の第Ⅳ期からⅤ期にかけて編年されるものであることが理解された。ただそうしたなかにおいて、岡田氏がⅤ期として設定した平安時代最終段階については、高部遺跡の土器群をみる限りでは、遺構の切り合いを考慮した上からもⅤ期をさらに二分して理解するのが無理がないように思われる。しかし実年代を想定し得る資料が伴出していないため、ここでは第Ⅲ期と第Ⅳ期については年代関係を明らかにし得ず、相対的関係を認め得るのみである。また灰釉陶器の伴出や灰釉陶器以降の中世陶器が伴出していない事実もあり、本遺跡での試案も含め、平安時代最終末の編年にはまだ不明な問題とすべき内容が多い。筆者浅学の故、また時間的にも制約があり十分論を展開できなかった。改めて稿を起こす所存である。

（鵜飼幸雄）

註

(1)　小形高台坏が出土したとされる住居址の編年的位置付けからみて、岡田氏編年のⅣ期後半・Ⅴ期・中世初頭にあたると考えられる。

参考文献

井口直司・山崎　丈　1981　「土壙とその遺物」『新山』　東久留米市教育委員会

臼田武正　1979　「遺物の分類　平安時代後期の土器」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野・原村その２－』　長野県教育委員会

大江正行　1980　「群馬県と周辺地域の中世土師質土器皿」『群馬県考古通信』　第７号

岡田正彦　1977　「平安時代土師器等の編年試論」『信濃』　第29巻第９号

岡田正彦　1981　「平安時代以降の遺物」「橋原遺跡における古代以降の様相」『橋原』　岡谷市教育委員会

川上　元　1978　「土師系什器の展開と終焉」『中部高地の考古学』　長野県考古学会

河野喜映　1983　「奈良・平安時代の鶴見川流域」『神奈川考古』　第14号

小林秀夫・他　1982　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市その５－』　長野県教育委員会

斎木秀雄　1980　「かわらけ」『光明寺裏遺跡』　東京都北区教育委員会

坂本美夫・他　1983　「甲斐地域」『神奈川考古』　第14号

笹沢　浩　1976「奈良・平安時代土器の器種分類」「奈良・平安時代の土器について」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－諏訪市その４－』長野県教育委員会
服部敬史　1982「南武蔵における古代末期の土器様相」『東京考古』1
細川光貞　1974「手洗沢遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－諏訪郡富士見町その１－』長野県教育委員会
百瀬長秀　1974「判の木山西遺跡　平安時代の遺構と遺物」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野・原村その２－』長野県教育委員会
森嶋　稔　1978「第５様式期の生活遺跡」『更級埴科地方誌第２巻』

第５節　高部遺跡の古代の様相

1　はじめに

高部遺跡は守屋山山麓の扇状台地に立地し、高部古墳群が造営された場所としても知られ、また古墳以外に周辺の畑地一帯から遺物が採集されることで早くから注目されていた。殊に諏訪大社とゆかりの深い場所でもあり、また古代東山道の杖突峠直下の遺跡でもあることから、特に諏訪の古代史を解明して行く上に重要な遺跡だと考えられてきた。今回の調査は高部遺跡に対する本格的発掘調査の嚆矢となったため、重要な遺跡であるだけに多くの成果が期待されていた。調査は遺跡の一部にトレンチを入れた格好であり、かならずしも遺跡の全体像を把握するまでには至っていないが、以下に発見された遺構・遺物から高部遺跡の性格等について若干のまとめをし、後日の研究に資したいと思う。

2　各期の様相

発見された古墳時代以降の竪穴住居址は26軒である。このうち出土遺物のあり方や遺構の切り合い関係からおおよその年代把握が可能な21軒を中心に集落構成のあり方を推察しておこう。

Ⅰ期　第２号・11号住居址が相当する。土師器有稜坏・鉢・須恵器蓋坏・土師器甕がある。土師器坏は内面黒色手法をとる稜の弱いものであり、第11号住居址出土のものは内外面を紅彩している。住居址の構造は第２号住居址からみて壁中央部にカマドをもつものである。住居址は第Ⅰ区から発見されたのみであるが、遺物は第Ⅱ区からも散発的に出土している。このため同期の住居址はかなり広範囲に分布していることが予測される。

ところで、遺跡内やその周辺に分布する古墳についてはその年代の詳細は明らかでない。しかし諏訪地方の古墳のあり方からみて、おそらくⅠ期と同時代の古墳が存在することは疑いないであろう。集落のあり方が明らかでない現在、集落と古墳の位置関係については多くを語れないが、限られた地形内での遺跡と古墳のあり方からみて、古墳は集落のごく近い位置に近接して造営さ

れたものと予測され、両者の関係のあり方は今後の調査・研究に待つ大きな課題であると言えよう。その場合土壙墓として扱った第28号土壙についても、今後の調査の成果と共に再評価される内容をもつものであると言える。

II期　第10号・27号住居址が相当する。土師器坏・須恵器坏・高台坏・蓋・灰釉陶器蓋・須恵器鉢・壺があり、供膳形態では須恵器が主体である。灰釉陶器は少量認められ、第10号住居址からは折戸10号窯期の蓋が出土している。住居址は北壁中央部に粘土カマドをもつ規模の大きな住居址であり、共に拡張建て替えといった注意すべき事象を有している。住居址はI区・II区共に発見されていることから、II期の住居址はかなり広範囲に分布していることが予想される。

III期　第4号・9号・14号・29号・34号住居址が相当する。土師器坏・須恵器坏・高台坏・須恵器蓋・灰釉陶器蓋・土師器小形甕・甕がある。供膳形態では須恵器が減少し、土師器との比率がほぼ半々となる。また煮沸形態ではロクロ成形による小形甕と共に武蔵型の甕がみられる。住居址は壁中央から若干左右寄りの位置にカマドをもつものであり、建て替えはII期と同様な方法で行う第4号・18号住居址と、部分的に建て替えたとみられる第9号住居址、建て替えを行っていない第14号・29号住居址とがあり、その異なり方が注意される。殊に第4号住居址は旧住居址床下から折戸10号窯期の灰釉陶器蓋を出土しており、住居の構築がII期までさかのぼるものである。また、第4号住居址は今回の調査で唯一墨書土器を出土した住居址である。住居址は掘り方も深く規模も大きな立派なつくりのものであり、石製模造品の出土と共に特異な存在の住居址と言えよう。住居址はI区・II区共に発見されていることから、III期の住居址もかなり広範囲に分布していることが予測される。

IV期　第3号・5号・6号住居址が相当する。土師器皿・坏・高台坏・高台皿・甕・灰釉陶器碗がある。供膳形態は土師器が主体であり、須恵器はみられず灰釉陶器が少量伴なう。伴出する灰釉陶器は折戸53号窯期のものである。住居址はII期・III期に比べると全体に規模が小さくなっており、この傾向はVII期まで続く。カマドは石組カマドで壁の隅に位置するものと中央部に位置するものとがある。第3号住居址は立派な石組カマドをもつ住居址であり、性格不明の金銅製品が刀子と共に出土しており注意される。住居址はI区でも比較的高位の位置にまとまって分布しており、同位置で建て替えをしているものがあるが住居の拡張は認められない。

V期　第7号・8号・16号住居址が相当する。土師器皿・高台皿・坏・白磁皿・須恵器甕・灰釉陶器がある。供膳形態は土師器が主体であり、黒色土器はみられない。灰釉陶器は折戸53号窯期のものが少量伴なう。また第8号住居址出土の白磁皿は特筆される。カマドは石組粘土カマドで、壁の左右寄りの位置と隅に設けられるものとがある。特に第8号住居址のカマドは実に立派なつくりのものである。住居址は部分的に建て替えをしたものは認められるが拡張したものは認められない。住居址はI区にのみ発見されており、IV期以来住居址の分布に片寄りが認められる。

VI期　第25号・26号・30号・35号住居址が相当する。土師器皿・坏・高台皿・高台坏・灰釉陶器碗・土師器鉢・灰釉陶器鉢がある。供膳形態は土師器が主体となり、折戸53号窯期の灰釉陶器

が少量伴なう。住居址に拡張や建て替えは認められない。住居址はⅠ区には認められず、遺跡内でも下方のⅡ区にのみ発見されている。Ⅰ区からはⅥ期の遺物が発見されていないことから、12世紀後半には入ると集落は比較的下方の位置を中心に展開したものと思われる。中でも第35号住居址は他の住居址とはやや離れた微高地に位置している。住居址の規模も小形化している中では大きく、また皿・坏類の出土が非常に多い。皿・坏類の中にはやや特異な器形のものもあり、1点ではあるが鉄滓も出土している。さらに住居址の構造も他のものとは異なるようであり、他の住居址とは性格を異にする住居址としてそのあり方が注目される。

Ⅶ期　第27号・31号住居址が相当する。土師器皿・坏があり、灰釉陶器はみられない。住居址には石組カマドをもつものがあり、拡張や建て替えは行われていない。Ⅱ区にのみ発見されており、Ⅵ期以来の住居分布域が継承されているようである。

以上各期のあり方をごく大雑把に概観してきた。それによると古墳時代と平安時代前期には住居址は遺跡のほぼ全体に広く分布しているようである。平安時代中期のあり方については明らかでないが、11世紀後半から12世紀前半頃には遺跡の比較的上部を中心に展開するようである。ところが平安時代末期の12世紀後半頃には一転して遺跡の下方に分布の中心が変わるようであり、これは注目すべき現象として指摘できる。

3　住居址の規模と主軸について

住居址は部分的調査のものが多いため、ここでは住居址の主軸方向や規模等についてすべてを具体的に提示することができない。しかし平安時代の住居址の規模についてはⅣ期の11世紀後半以降小形化する傾向を認めることができる。またⅡ期・Ⅲ期に認められた住居の拡張がⅣ期以降は行われなくなり、その社会的背景が問題となるところである。

住居址の主軸方向についても不明な部分が多い。しかし主軸・長軸を不問とした場合の住居址の方向は、第23号住居址を除きすべての住居址がなんらかの形で北東方向に向いている。これは北東方向に傾斜する地形のあり方とも関係しているとも思われるが、はたしてそうした地形的、気象的関係のみを反映した結果であるのかは疑問の残るところである。

4　灰釉陶器について

灰釉陶器はⅡ期からⅥ期まで認められた。各期とも量的には少ない存在である。Ⅱ期・Ⅲ期は蓋がみられ、これらは折戸10号窯期の猿投産の製品である。Ⅳ期以降は折戸53号窯期のものとなり、碗・皿・段皿・輪花皿・長頸壺がみられ、碗が量的に多い。産地はほとんどが東濃であり、この傾向は諏訪市十二の后遺跡（笹沢1976）と同様である。しかし十二の后遺跡第Ⅹ期と比較した場合、供膳形態に占める灰釉陶器の量的割合いは大幅に下まわるものと予測される。

5　ま　と　め

高部遺跡は古代の諏訪を解明して行く上に重要な遺跡だと考えられてきた。今回の調査により、そうした従来からの想定の正しさを裏付ける多くの事実を得ることができたばかりでなく、かなり具体的に古代の高部遺跡のあり方を窺うことができた。そこでここでは古代の高部遺跡とその周辺についてふれ、簡単なまとめとしたい。

古代律令制下の諏訪郡には7つの郷が建置されており、このうち現在の諏訪地方には4つの郷があったと考えられている（伊藤1953）。その中の1郷である神戸の郷は諏訪神社の神領であり、現在の茅野周辺から諏訪市の田辺・真志野にかけて、さらに岡谷市の鮎沢・駒沢辺に至る所謂西山一帯にその所在があてられている（伊藤1953）。このうち上社周辺地は平安時代中頃には武居庄へ変質して行くものと考えられており（伊藤1963）、高部遺跡は丁度この神戸の郷・武居庄内に位置している。

高部遺跡はこの神戸の郷内に所在する遺跡としては諏訪市有賀の十二の后遺跡と並ぶ最も規模の大きな遺跡であろう。遺跡は諏訪大社上社前宮と本宮の中間に位置しており、殊に諏訪信仰の発祥地として、また後の中世には諏訪大祝の居館ともなった前宮に隣接する位置にある。また、古代東山道の杖突峠直下の遺跡でもあることから、高部遺跡は神戸の郷内でも相当重要な位置にある集落であったことが予測される。一方、十二の后遺跡は前宮・本宮からは比較的離れた位置に所在するものの、やはり古代東山道の有賀峠沿いという、諏訪では重要な位置に占処する集落遺跡である。この十二の后遺跡と一体の遺跡と考えられる千賀頭社遺跡からは円面硯が出土しており、このことを主要な根拠とすれば、同じ神戸の郷内に所在する主要な遺跡ではあっても、その性格については同等にみなし得ないものがある。また、十二の后遺跡からは石銙帯と、やや時代はさかのぼるが子持勾玉も出土していることも注視する必要があるだろう。

ところで諏訪大社上社の勢力は鎌倉時代に入ると非常な高まりをみせる。こうした下地は既に平安時代により強く形成されていたものと考えられ、平安時代前期頃に上社が正一位の階位を受けた（宮坂1980）ことにも、その経済力や勢力の高まりを窺うことができよう。また平安時代後期に至っては、在地領主である大祝による荘園開発はさらに大きく経済力を進展させたものと考えられる。このことは、平安時代の後半に入ると八ヶ岳山麓に集落が急増して展開することとも関連していよう。前九年・後三年の両役に大祝為仲が従軍したことは、荘園の開発過程での経済力の高まりに関わる動向を物語っているものと言えるだろう（松永1978）。

しかし12世紀代には入ると八ヶ岳山麓には集落があまり営まれなくなるようであり、こうした状況は中世まで続くものとみられる。またこうした遺跡の減少等の状況は湖盆地域でも認められる。これは住居様式の異なりや、あるいは同時代の集落が現在の集落と重複している結果によるものであろうか。しかし前九年・後三年の役以降、保元・平治の乱に諏訪武士が活躍したことにも窺われるように、上社の勢力が中世に向って高まって行く中で、こうした状況を支えた地元の12世紀後半代の集落はあまりにも少ないと言える。今回の高部遺跡の調査では、平安時代末期と考えられる住居址も数基発見されたものの、残念ながら集落としては捉えられなかった。しかし

以後の調査のあり方次第によっては、古代末から中世初頭の集落を把握することも可能であり、実体が明らかでない武居庄内の1集落のあり方が明らかにされる可能性は強い。今後の調査に期待される所以である。

（鵜飼幸雄）

参考文献

伊藤富雄　1953　「上代史」『川岸村史』

伊藤富雄　1963　「上代の下諏訪」『下諏訪町誌』

笹沢　浩　1976　「奈良・平安時代の土器について」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵他発掘調査報告書 ―諏訪市その4 ―』　長野県教育委員会

松永満夫　1978　「足場遺跡に住んだ人々」『山麓考古』　第10号

宮坂光昭　1980　「形態と発生」『諏訪大社』　信濃毎日新聞社

第Ⅵ章　結　　語

今回の高部遺跡の発掘調査により発見された遺構は、縄文時代中期住居址10基、屋外埋甕２、縄文後期の土壙、古墳時代から平安時代末期までの住居址26基等で、これらの成果については前章の考察において詳細に検討記述されているところである。また、遺物についてみると、僅か２片ではあるが楕円押型文が検出されて、早期中葉にはこの台地が生活の場として利用されていたことが裏付けられた。前期に入り少量ではあるが各型式の土器が出土し、中期・後期を通じて人々が定着し集落が営まれた。遺跡は、急峻な西山山系の主峯守屋山直下の、山脚にはさまれた下馬沢川の形成した扇状台地に立地し、日照時間も短く勾配も急で、八ヶ岳山麓台地の遺跡に比して必らずしも環境に恵まれているとは云えない。諏訪市における中央道用地内遺跡には、荒神山遺跡をはじめとして、同様地形のいくつかの前期・中期の規模の大きい遺跡が発見されて諏訪における従来の遺跡立地観が改められた。部分的の発掘の結果ではあるが、当遺跡もまたそれらと同性格の遺跡ということができよう。

弥生時代については、予想に反して土器片が１片検出されたのみである。発掘区は宮川の沖積地から一段上った台地上にあり、その比高差は約50ｍあるから、仮りに弥生時代の集落が営まれたものとすれば、台地裾の沖積地畔に立地したものであろうか。ちなみに、大正13年の神長官裏古墳の調査の際に、石室内の堆土中から弥生式土器が検出されている。（諏訪史第一巻）

遺跡一帯にはかつて６基の古墳（乞食塚・神袋塚・疱瘡神塚・神長官裏・塚屋・風無塚）があり高部古墳群として知られている。これらのうち現存するものは３基で、塚屋古墳は発掘区の上方に、神長官裏古墳は下段に、そして疱瘡神塚は西側下の武居城寄りに位置し、他の古墳を含めてすべて遺跡扇状台地の縁辺に分布する。これらと今回発掘された住居址との関係については必ずしも明確にされ得ないが、諏訪史第１巻に「高部神長官裏から疱瘡神古墳に掛った丘陵腹には相当に広範囲に亘って祝部土器片が多量に散布する」と記述されて集落の埋蔵が示唆されているが、今回の調査によりこれが裏付けられた。現在神長官守矢家の邸がこの地にあり、かつて権祝・擬祝も居を構えたといわれ、諏訪大社との関わりが極めて密接で、諏訪の古代史究明の上に重要な意義をもつ遺跡であることが改めて実証された。今後の学術的な発掘調査や、その保存活用には充分な配慮がなされなければならない。

４月21日に開始された今回の発掘は、当初５月一杯には終了する予定であったが、遺跡の現況が殆んど古い桑株の畑で、遺構上の堆積土層が深くかつ礫石を介在し、加えて勾配のある道路敷であるため作業は極めて難渋した。また全面に遺構が重複し切り合い、人手不足と相まって予定をはるかにオーバーして７月末に漸く現場の作業を終了することができた。この間、担当課であ

る清掃課・清香苑建設の行政事務組合、そして工事を担当した五味建設の五味国雄氏の文化財行政に対するご理解とご協力に対し、あらためてお礼申し上げる次第である。そしてまた炎暑をおして発掘作業に従事していただいた調査員・作業員の皆様に心から感謝申し上げる。

発掘に引き続き尖石考古館において遺物整理が行われ、矢嶋恵美子・関喜子両氏のご協力をいただき、土器の復元については宮坂篤夫・柳平嘉彦氏の手をわずらわせた。報告書の作製については鵜飼幸雄・守矢昌文氏が専らこれに当ったが、尖石考古館職員の異動等もあり一時中断して、刊行の延引したことをお詫びする次第である。

現在茅野市史の刊行事業が進行中であるが、この報告書が茅野市の古代史の空間を埋める重要な資料となり得たことは望外の成果であった。そして高部遺跡の今後の調査や遺跡保護に生かされることを心から希うものである。

（宮坂虎次）

発掘調査関係者名簿（敬称略）

1　高部遺跡調査委員会

委 員 長　茅野慶次（文化財審議委員長）

副委員長　浜　孝治（教育委員長）

委　　員　大久保善立（文化財審議委員）　小川由加里（文化財審議委員）　北原　昭（文化財審議委員）　小平重紀（文化財審議委員）　長田太郎（文化財審議委員）　宮沢　伝（文化財審議委員）　矢崎孟伯（文化財審議委員）　矢嶋　斉（文化財審議委員）　宮坂栄次郎（市議会社会文教委員長）　小島与四男（教育長）　小松　力（清掃課長）　牛尼忠幸（財政課長）　河西保明（社会教育課長）

2　調査団

調 査 団 長　宮坂虎次（茅野市尖石考古館長・日本考古学協会員）

調　査　員　鵜飼幸雄（茅野市尖石考古館学芸員・日本考古学協会員）　守矢昌文（現・茅野市尖石考古館学芸員）

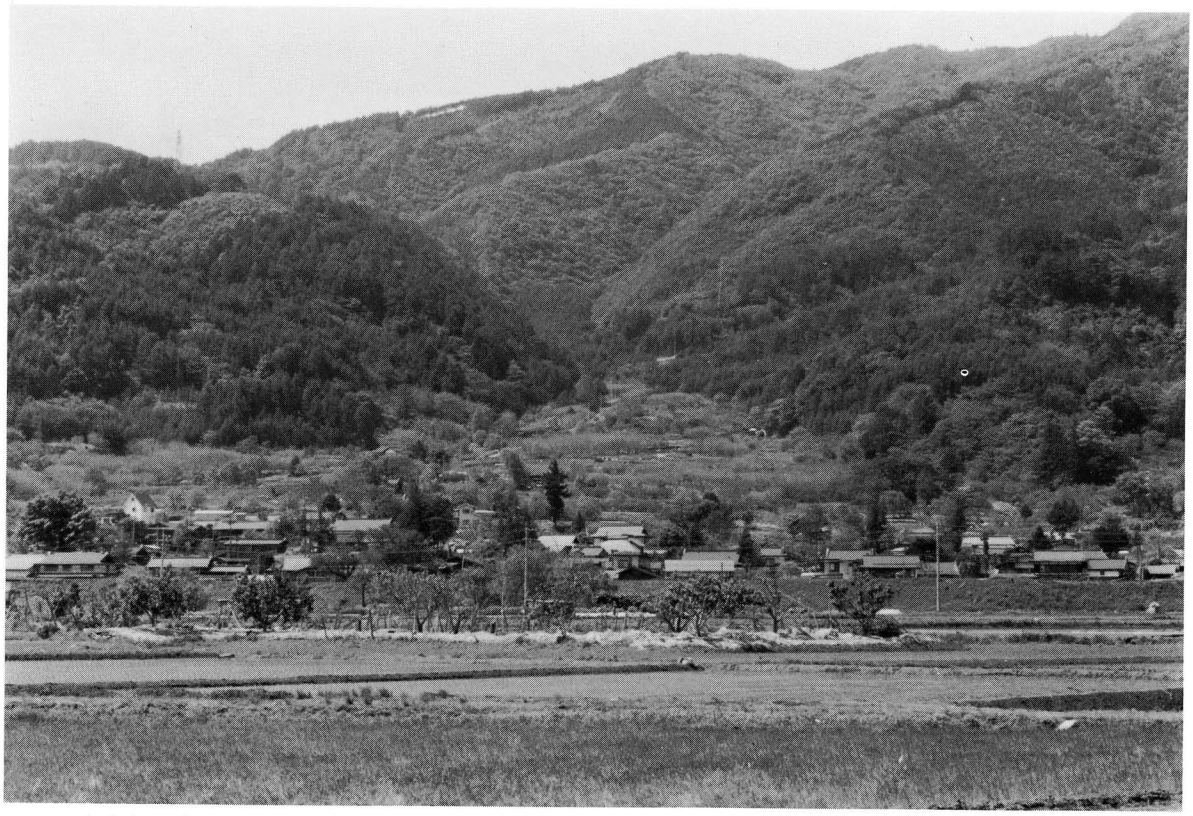
調査補助員　関　喜子（長野県考古学会員）　矢嶋恵美子（長野県考古学会員）　渡井利彦（青山学院大学学生）　関　克徳（信州大学学生）　河西克造（立正大学学生）

発掘協力者　上原節子、柿沢美佐子、小平重郎、小松尊雄、小山荒男、五味芳江、高木安江、田中文六、原　とめ、藤森はな子、藤森正文、藤森和助、細田みや子、守矢芳夫、両角菊子、両角きよえ、両角由吉、矢崎つな子

3　事務局

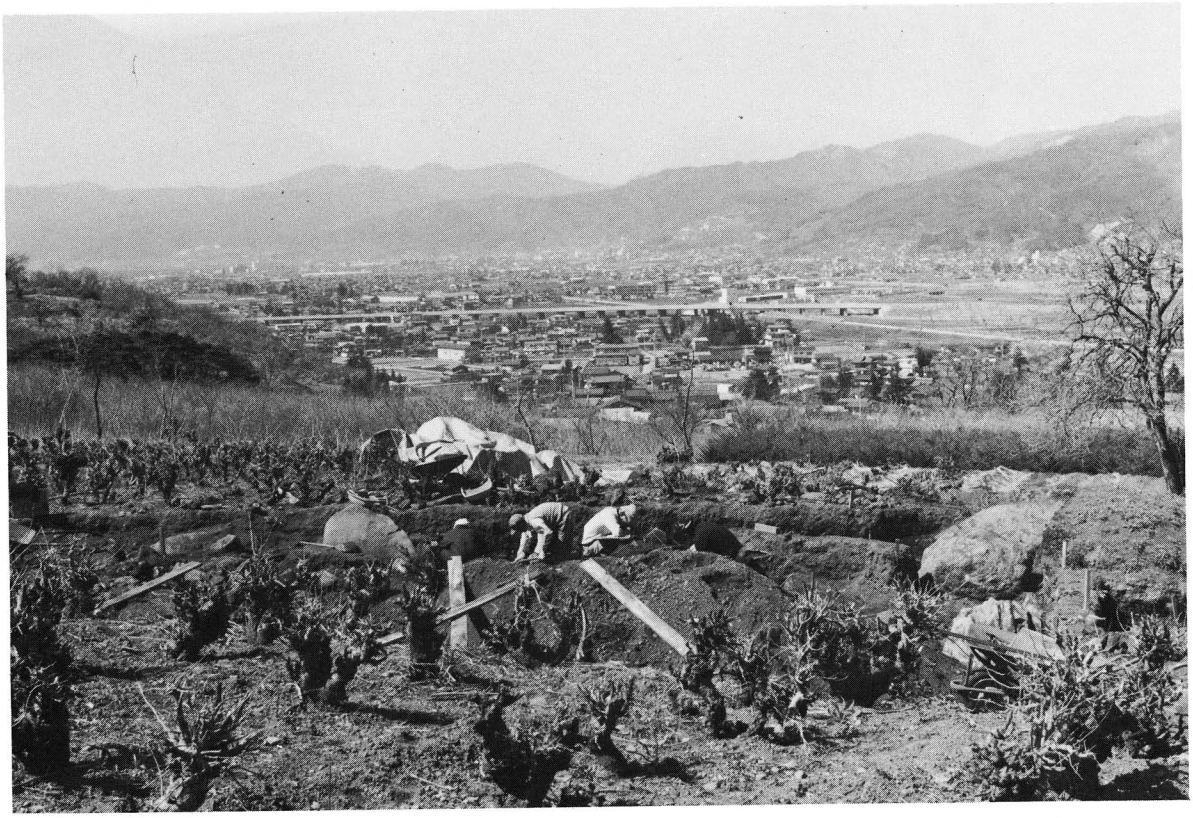
事務局長　小島与四男（教育長）　事務局次長　河西保明（社会教育課長）　事務局係長　竹村　弘（社会教育・文化財係長）・局員　樋口公男（文化財係）・柳沢士郎・両角千代子（社会教育係）

図　　版



1　遺跡遠景（北東方から）

2　遺跡遠景（東方から）



1　大石周辺の調査

2　大石周辺

1　II区全景

2　第1号住居址

1　第2号住居址

2　第3号住居址

1　第4・16号住居址

2　第5号住居址

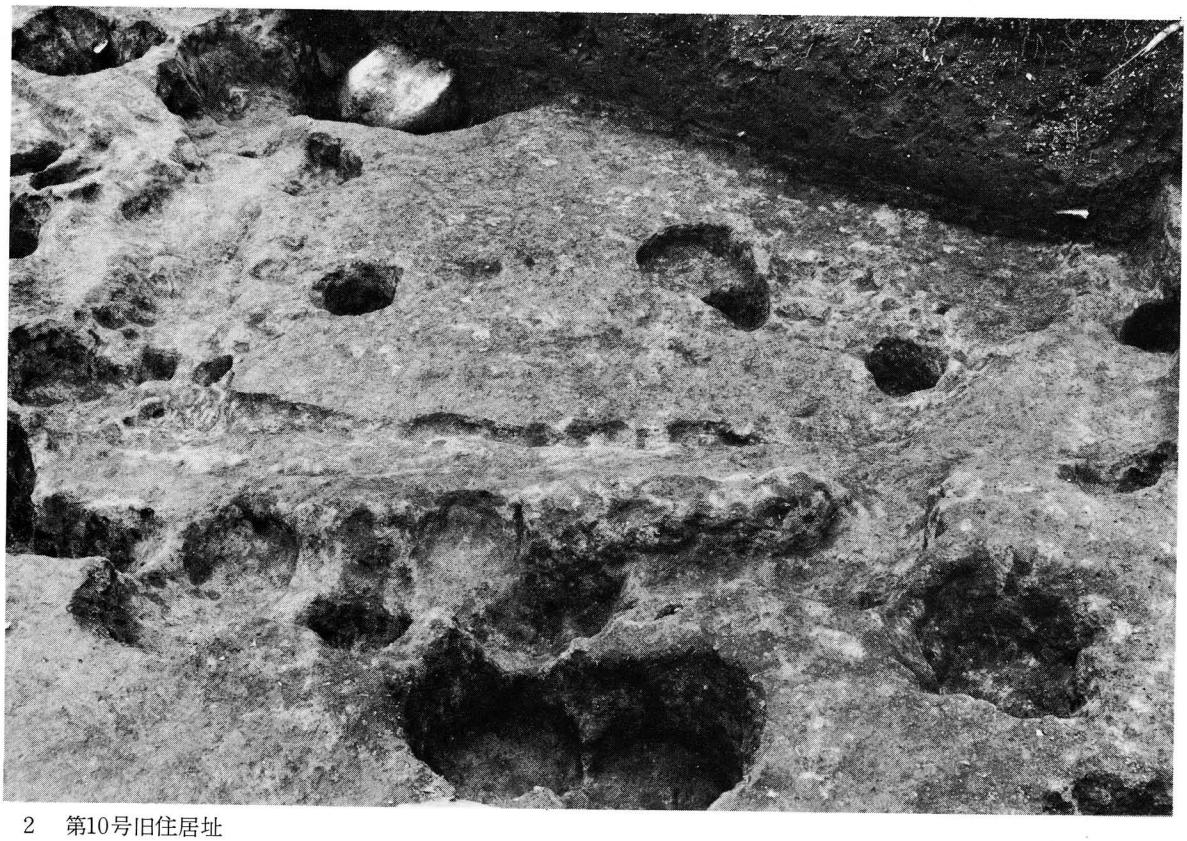
1　第6号住居址

2　第7号住居址

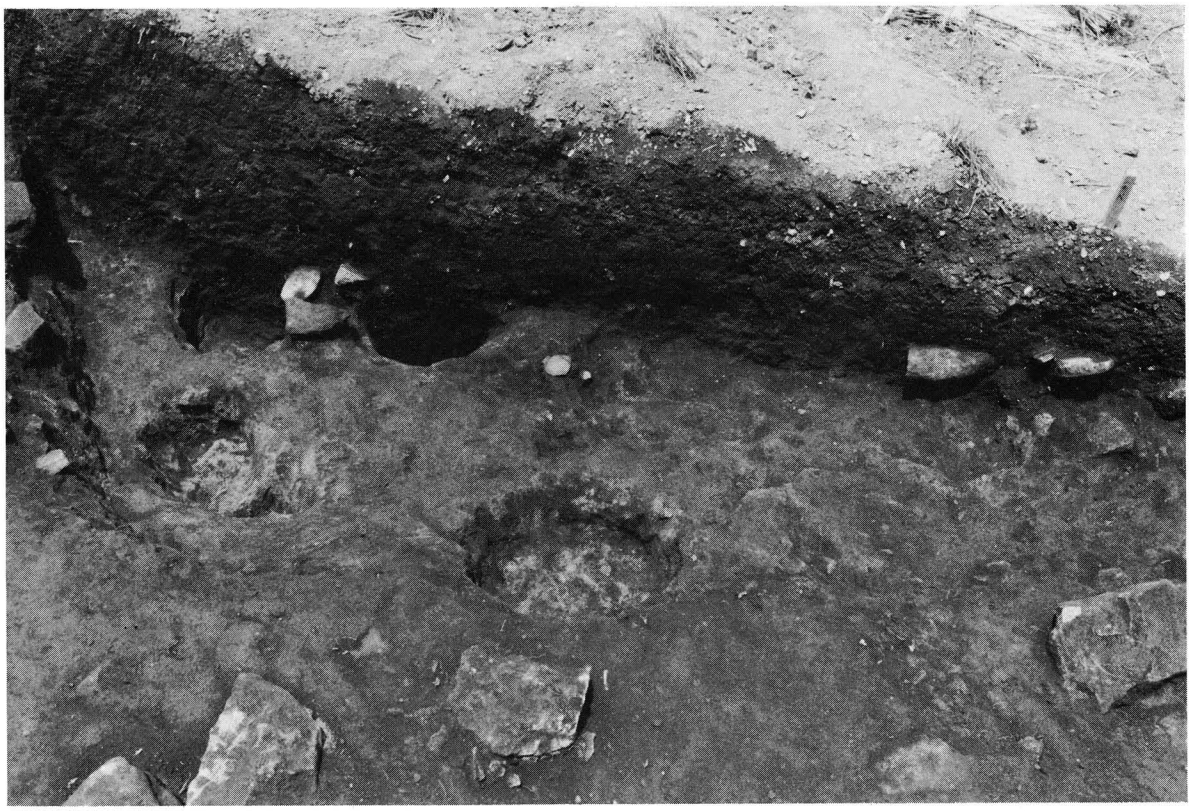
1　第8号住居址

2　第9号住居址

1　第10号新住居址



2　第10号旧住居址



1　第11号住居址

2　第12号住居址

1　第13・14号住居址

2　第15号住居址

1　第17号住居址

2　第18号住居址

1　第19号住居址

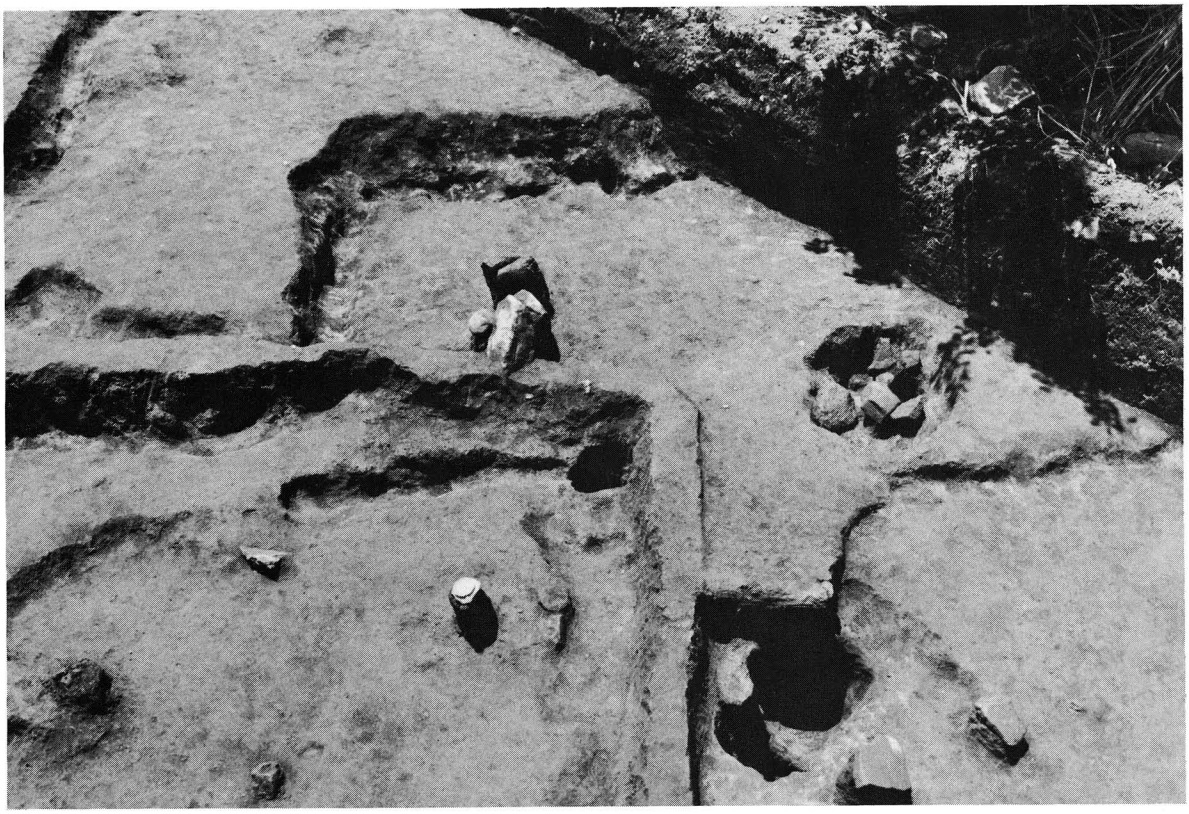
2　第20号住居址

1　第21号住居址

2　第22号住居址

1　第23号住居址

2　第24号住居址

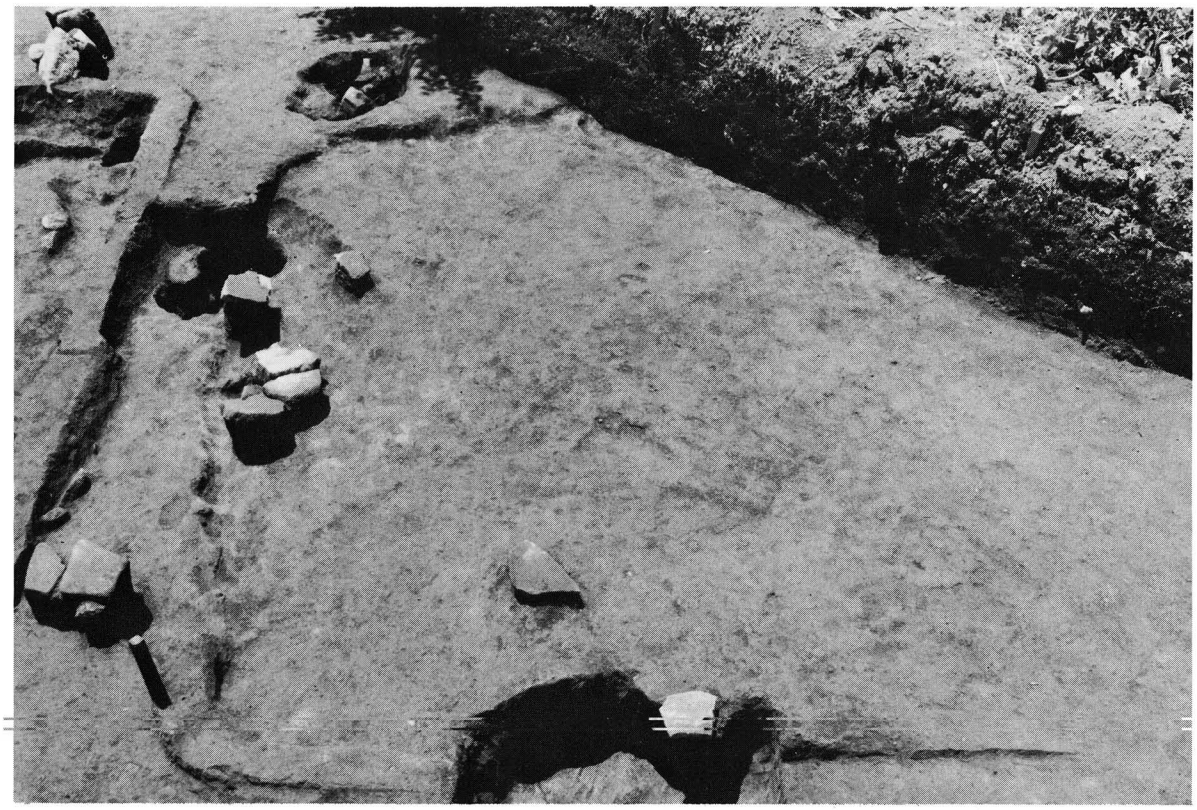


1　第25号住居址

2　第27・28号住居址

1　第29号住居址

2　第30・25号住居址



1　第31号住居址

2　第32号住居址

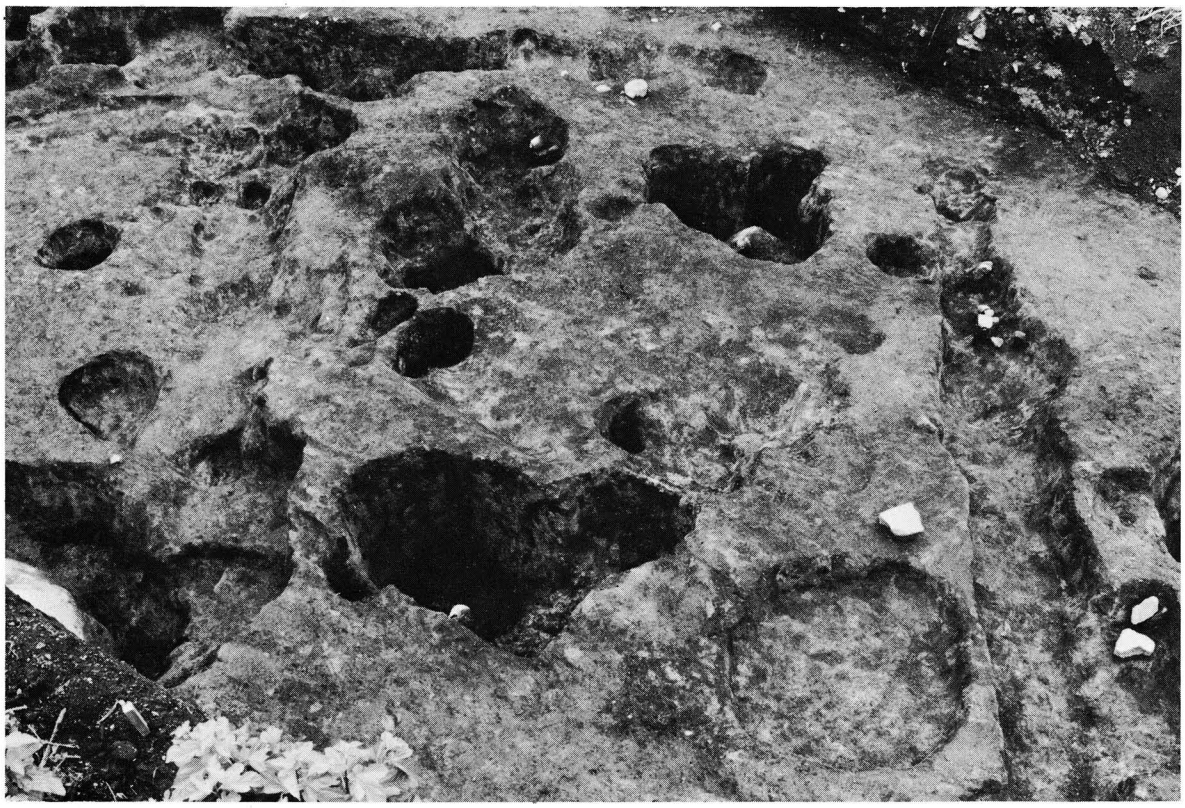
1　第33号住居址

2　第34号住居址

1　第35号住居址

2　第36号住居址

1　第1号溝址



2　第2・3号溝址・土壙群

1　第2号溝址

2　第3号溝址

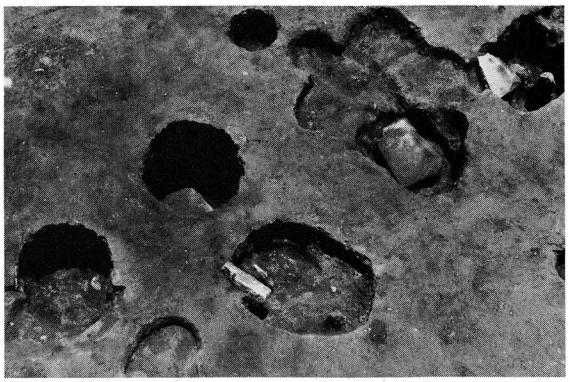
1　第1号柱穴址

2　Ⅰ区全景

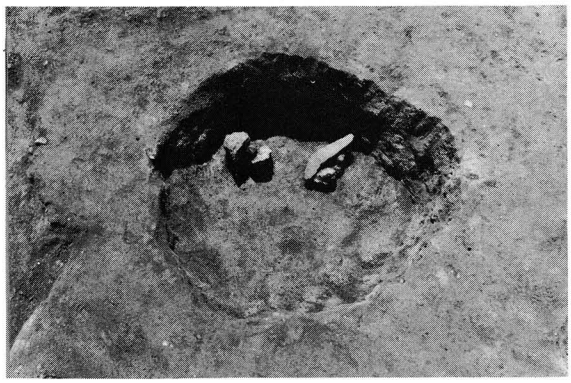
1　第3・1・2号土壙

2　第5号土壙

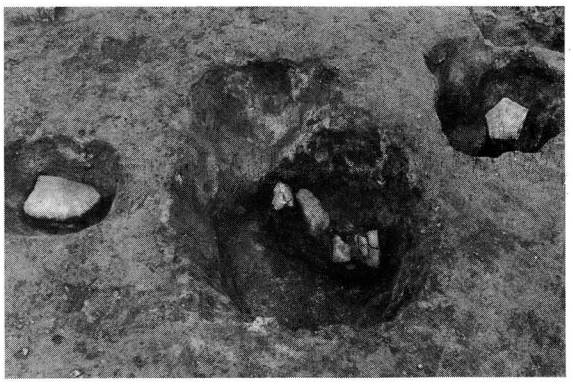
3　第6号土壙



4　第13・15・7・11・23・18号土壙



5　第21号土壙



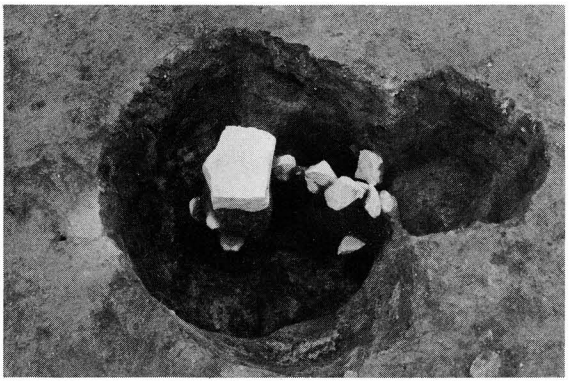
6　第36・24・27号土壙

7　第25・26号土壙

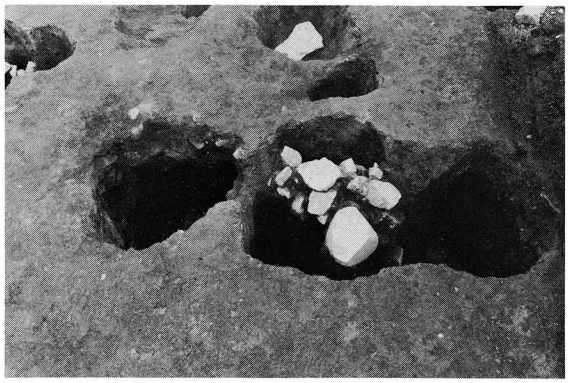
8　第35・37・34A・B号土壙

1　第43・42・44・45・46号土壙

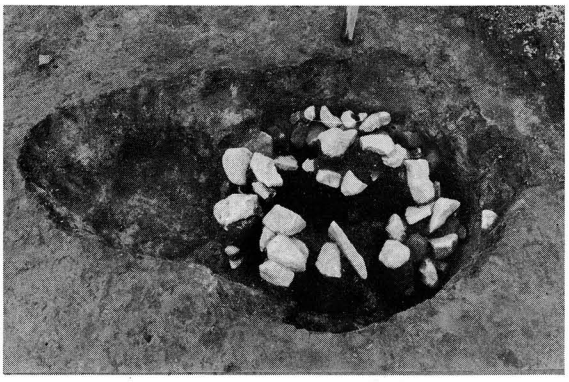
2　第41C・A・B号土壙



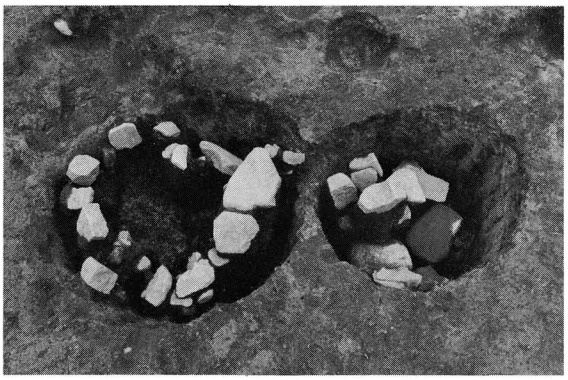
3　第50号土壙



4　第51・52A・B号土壙



5　第62・56号土壙



6　第61・63号土壙

7　第66・67・68・71号土壙

8　第72・69号土壙

1　第１号住居址　埋甕炉

2　第22号住居址　石壇と石棒

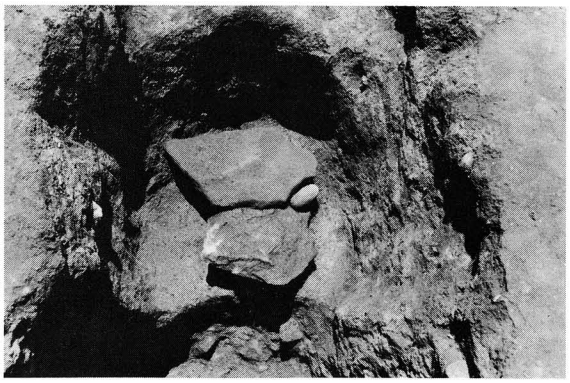
3　第24号住居址　炉址

4　第32号住居址　埋甕炉

5　第36号住居址　埋甕

6　第１号屋外埋甕

7　第２号屋外埋甕



8　第67A号土壙　石製品出土状態

1　第2号住居址　カマド

2　第3号住居址　カマド

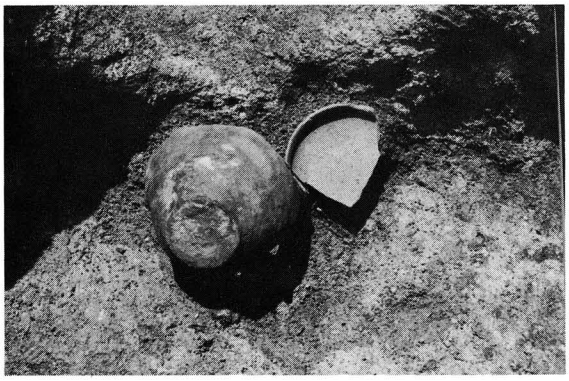
3　第5号住居址　カマドと周辺の遺物

4　第8号住居址　カマド

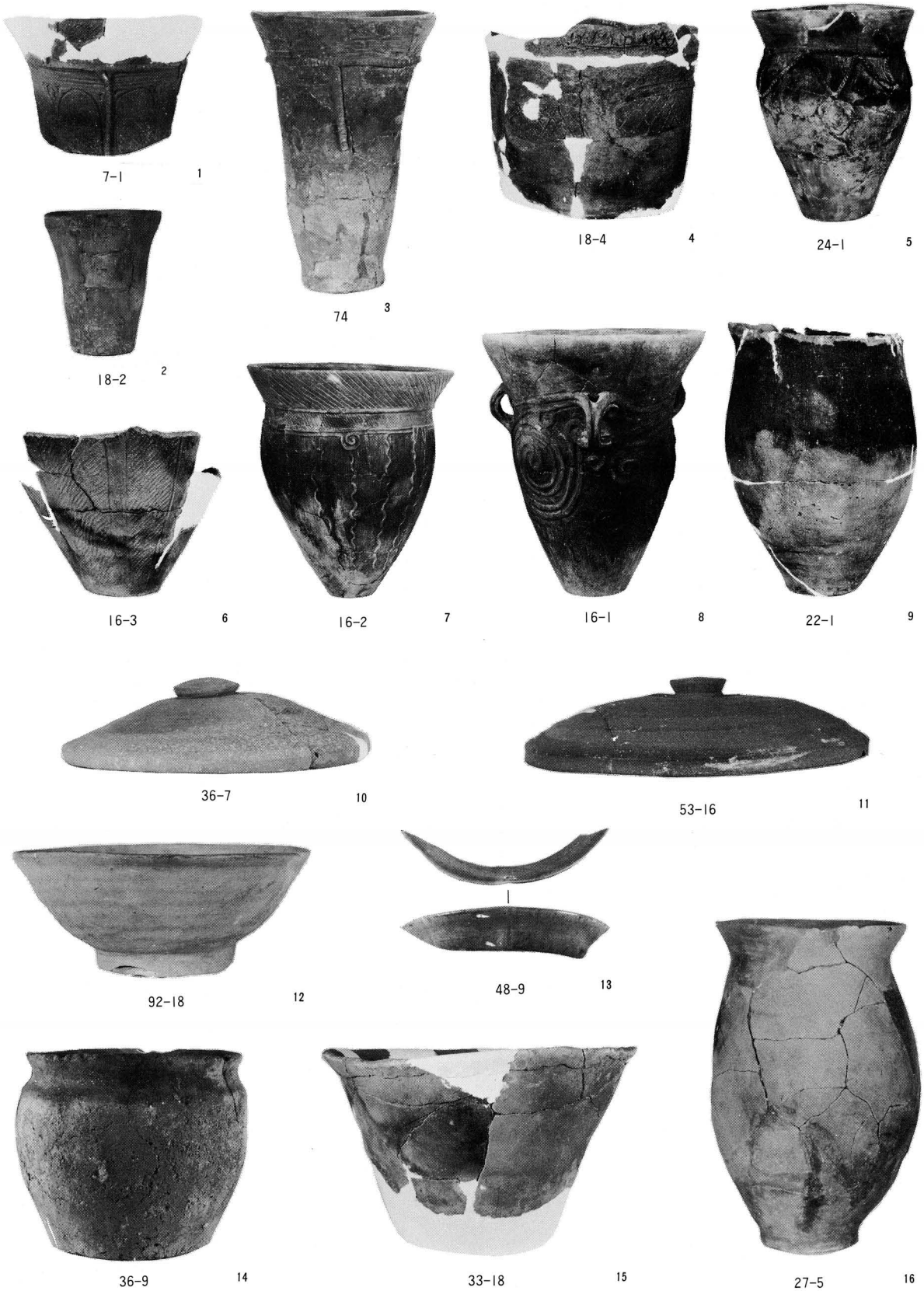
5　第8号住居址　カマド左脇ピット内の遺物

6　第23号住居址　カマド

7　第25号住居址　床面の石組



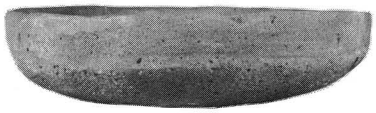
8　第28号土壙　遺物出土状態

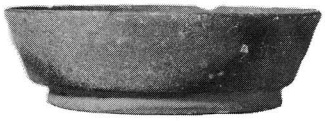


出土土器（1）　1～4・6・15・16（約$\frac{1}{6}$）　5・7～9（約$\frac{1}{12}$）　10～14（約$\frac{1}{3}$）

27-1

29


88-2


36-6

71-2

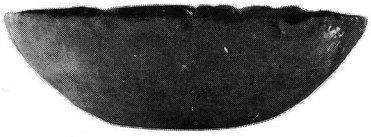
53-5

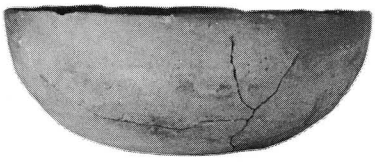
53-6

78

53-8

53-4


36-1


53-1

40-1

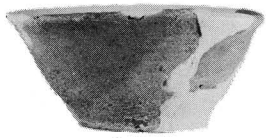
40-2

40-3

40-4

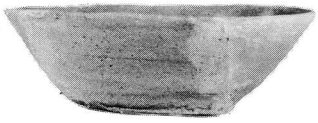
40-5

33-2


58-2

66-10

66-11

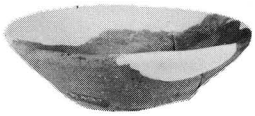

64-8

64-9

48-5

出土土器（2）　（約$\frac{1}{3}$）

33-1


58-1

48-1

64-1

66-3

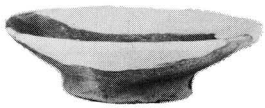
64-6

66-1

66-4

66-8

67-6


67-2

67-3

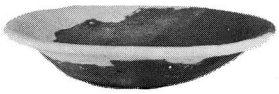
67-4

75-1

75-2

75-3

75-4


80-1

80-2

80-4

80-3

80-5

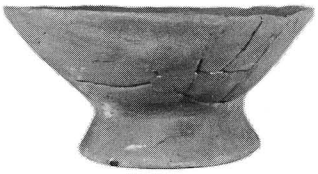
80-8

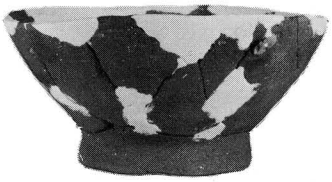
48-2

67-7

80-12

40-12

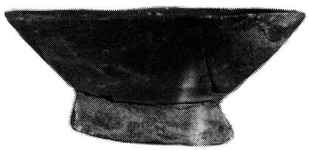

33-14


40-8

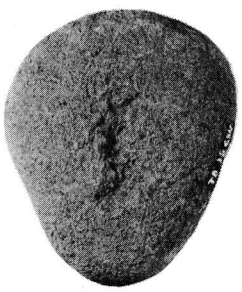
40-7

40-10

40-11


67-9

出土土器（3）　（約$\frac{1}{3}$）


108-2

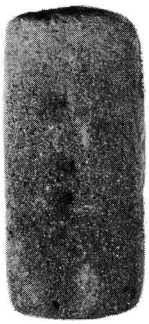
108-4

109-4

109-6

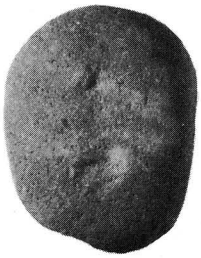
110-1

110-2


110-3

110-4

110-6


111-3

111-5

112-2

112-5

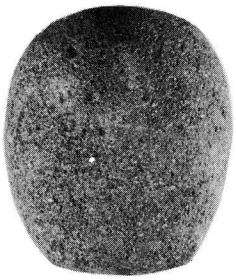
112-6

112-7

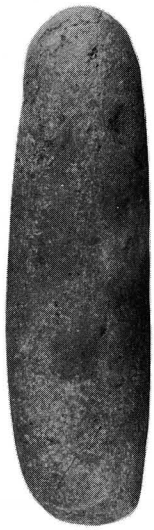
113-5

114-5

116-5

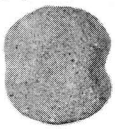

37

30


82

115-1

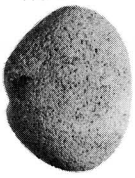
115-2


115-3

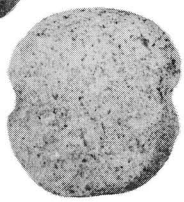
115-4

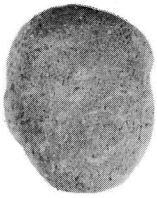
115-5

115-6

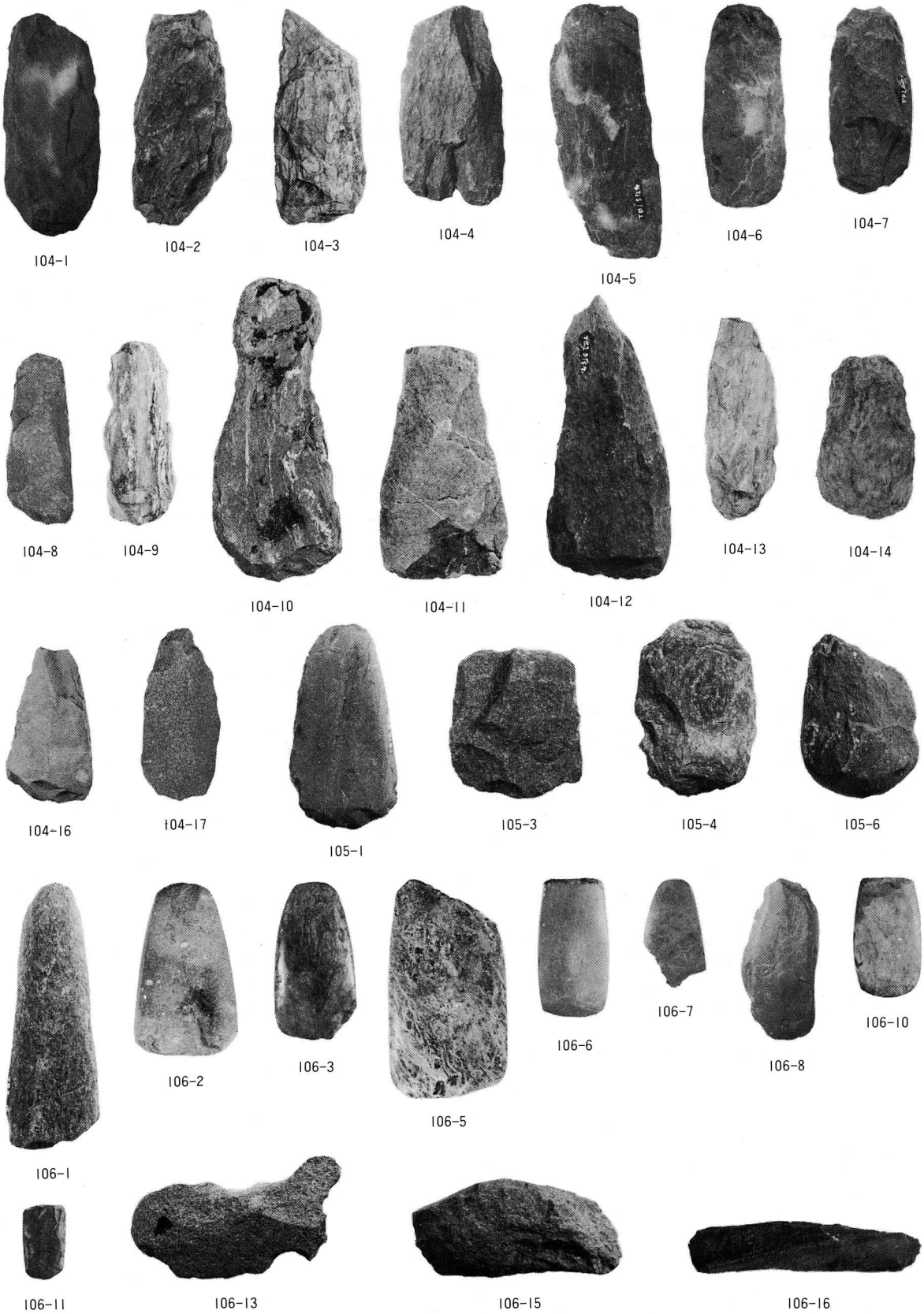

115-7

115-8

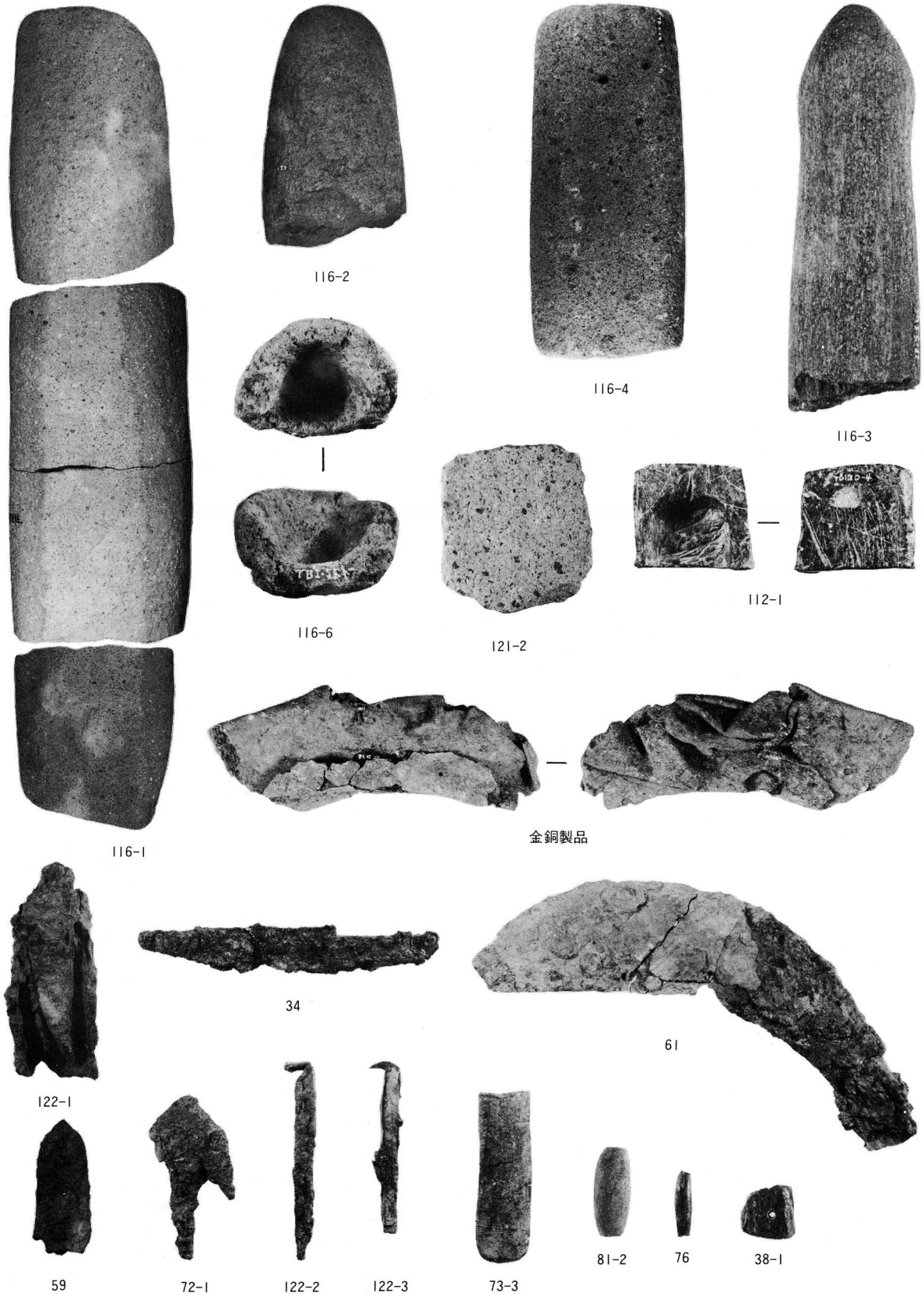

115-9


115-10

出土石器(1) （約$\frac{1}{3}$） 30（約$\frac{1}{6}$）



出土石器（3）　（約$\frac{1}{3}$）



出土石製品・金銅製品・鉄製品・木製品・土錘（約$\frac{1}{3}$）116－1・116－2（約$\frac{1}{8}$）116－4（約$\frac{1}{4}$）

高　部　遺　跡

——静香苑進入道路建設に伴なう
埋蔵文化財緊急発掘調査報告——

昭和58年３月25日　印刷
昭和58年３月31日　発行

編　集　長野県茅野市塚原２丁目６番地１
発　行　ＴＥＬ　02667(2)2101
茅野市教育委員会

印　刷　長野県長野市中越２９３番地
ＴＥＬ　0262(44)0277
ほおずき書籍株式会社